

平安京左京八條三坊二町

平安京跡研究調査報告

第6輯

財團法人 古代學協會

昭和58年

序 文

財團法人古代學協会・平安博物館は永年にわたって平安京の発掘調査を続行し、平安京の歴史・文化の解明にいささかの役割を果してきた。

近年、幸いにも、平安京左京八条三坊二町の地で発掘調査を行う機会に恵まれ、多くの成果を得た。この地は9~15世紀間を主要な内容とする遺跡であるが、ことに12~13世紀間の「町」の出現に関する多くの遺構・遺物を含んでいる。なかんづく、各種刀装具鋳型、鷹羽口、埴堀の出土は、官営の東市から「七条町の鉄物師」などに見られる商工業者の出現を発掘によって示したものである。

調査終了後、3年弱をもって、以上の成果を『平安京跡研究調査報告』第6輯として、ここに諸賢の前に公けにすることができるに到了。

平安京の歴史の解明にいささかでも寄与するところがあれば幸いである。

なお、文末ではあるが、本調査から報告書完成にいたる間、援助を寄せられた諸方面に深く感謝する次第である。

昭和58年3月

財團法人 古代學協会専務理事
平安博物館館長兼教授

角 田 文 衛

目 次

序 文	i
例 言	iii
第1章 はじめに	1
第1節 調査の発端	(1)	
第2節 調査の組織	(1)	
第2章 調査の概要	3
第1節 遺跡の位置と立地	(3)	
第2節 調査の経過と遺跡の概要	(5)	
第3節 土層	(11)	
第3章 溝の調査	17
第1節 溝造構	(17)	
第2節 溝上層出土品	(20)	
第3節 溝下層出土品	(26)	
第4節 溝最下層直上出土品	(30)	
第5節 溝最下層出土品	(31)	
第4章 井戸の調査	37
第1節 素掘曲物式井戸と出土品	(37)	
第2節 方形横板式井戸と出土品	(40)	
第3節 方形木組式井戸と出土品	(41)	
第4節 方形隅柱横桟式井戸と出土品	(43)	
第5節 方形横桟式井戸	(45)	
第6節 多角形堅板側式井戸と出土品	(47)	
第7節 円形桶側式井戸	(50)	
第8節 円形瓦側式井戸	(50)	
第9節 石組側式井戸	(50)	

第5章 ピットの調査	51
第1節 G10P6の調査と出土品	(51)
第2節 G3P4の調査と出土品	(52)
第3節 G16B P1の調査と出土品	(52)
第4節 G21P11の調査と出土品	(53)
第5節 G7P11の調査と出土品	(55)
第6節 G4P19の調査と出土品	(56)
第7節 G40P4の調査と出土品	(60)
第8節 G8P2の調査と出土品	(64)
第9節 G2P1の調査と出土品	(66)
第10節 G3P1の調査と出土品	(68)
第11節 G15P1の調査と出土品	(69)
第12節 その他の出土品	(73)
第6章 遺物各説	79
第1節 銅鏡関係遺物	(79)
第2節 磚および瓦	(85)
第3節 錢貨	(96)
第7章 後論	101
第1節 土器の年代および土師皿の法量変化	(101)
第2節 輸入陶磁について	(109)
第3節 瓦について	(112)
第4節 刀装具について	(113)
第5節 文獻にみる遺跡周辺の様相	(114)
第6節 出土中国ガラスのICP分析	(124)
第8章 まとめ	129

図版目次

- 図版1 上：発掘前の遺跡全景
下：北区表土除去後の鉄造構
- 図版2 上：北区発掘後全景
下：北区の構造構全景
- 図版3 上：北区の構造構
下：北区西岸遺構
- 図版4 上：中区発掘後全景
下：中区土留め遺構
- 図版5 上：南区発掘後全景
下左：南区東部遺構
下右：南区中央部遺構
- 図版6 素掘り曲物式井戸
上：G11W1 下：G17W3
- 図版7 方形横板式井戸
上：G45W9 下：G18W1
- 図版8 方形木組み式井戸
上：G35W1 下：G18W2
- 図版9 上：方形木組み式井戸 G29W2
下：方形隅柱横棟式井戸 G27W1
- 図版10 方形隅柱横棟式井戸
上：G10W4 下：G17BW6
- 図版11 上：方形隅柱横棟式井戸 G2W1
下：方形横棟式井戸 G18BW1
- 図版12 方形横棟式井戸
上：G30W2 下：G45W1
- 図版13 多角形堅板側式井戸
上：G37W1 下：G51W1
- 図版14 上：円形桶側式井戸 G1W2
下：円形瓦側式井戸 G52W1
- 図版15 上：石組側式井戸 G37W3
下：G17BW3 上部
- 図版16 上：G3P4 下：G7P11
- 図版17 上：G4P19 下：G40P4
- 図版18 上：G3P1 下：G15P1
- 図版19 滝上層，G3P4出土土器
- 図版20 滝上層出土土器
- 図版21 滝上層，下層出土土器および土製品
- 図版22 滝下層出土土器
- 図版23 滝下層，最下層直上出土土器
- 図版24 滝最下層出土土器
- 図版25 滝最下層出土土器および土製品
- 図版26 G10P6, G17BW3, G16BW1,
G29W1出土土器
- 図版27 G21P11, G7P11, G27W1出土
土器
- 図版28 G27W1, G17BW6, G4P19出
出土器
- 図版29 G4P19出土土器
- 図版30 G4P19, G40P4出土土器
- 図版31 G40P4, G8P2出土土器
- 図版32 G2P1出土土器
- 図版33 G3P1, G51W1, G15P1出土
土器
- 図版34 G15P1出土土器
- 図版35 その他の出土品
- 図版36 その他の出土品
- 図版37 その他の出土品
- 図版38 出土瓦
- 図版39 出土瓦
- 図版40 刀装具鉄型
- 図版41 刀装具粘土型
- 図版42 鉄型および粘土型
- 図版43 鉄型および鉄鋳具
- 図版44 銭貨
- 図版45 銭貨

挿 図 目 次

第1図	遺跡近傍市街地図	3	第29図	方形隅柱横桟式井戸図	44
第2図	平安京条坊復原図	4	第30図	G 17 BW 6 出土土器	45
第3図	八条三坊二町付近の条坊復原図	4	第31図	方形横桟式井戸図	46
第4図	調査地のグリッド設定図	5	第32図	多角形堅板側式井戸図	48
第5図	北区の畝造構図	6	第33図	円形桶側式、円形瓦側式、 石組側式の各井戸図	49
第6図	遺構全体図（折込）	9	第34図	G 3 P 4 遺構図	52
第7図	北区北・東壁層位図	12	第35図	G 21 P 11 出土土器、G 7 P 11 出土土器	54
第8図	中区北・東壁層位図	14	第36図	G 7 P 11 遺構図	55
第9図	南区北壁層位図	15	第37図	G 4 P 19 遺構図	56
第10図	南区東壁層位図	16	第38図	G 4 P 19 出土の土師器、瓦器、 国産陶器	58
第11図	北区溝平面図および層位図	18	第39図	G 4 P 19 出土の中国陶磁、 陶碗、石碗、火鉢	59
第12図	北区溝層位図	19	第40図	G 40 P 4 遺構図	61
第13図	北区溝上層出土の土師器	21	第41図	G 40 P 4 出土の土師器、 国産陶器、中国陶磁	62
第14図	北区溝上層出土の土師器	22	第42図	G 40 P 4 出土の中国陶器	63
第15図	北区溝上層出土の須恵器、 綠釉陶器、灰釉陶器、 中国青磁	24	第43図	G 8 P 2 出土の土器、罐口、 G 3 P 1 出土土器、 G 51 W 1 出土土器	65
第16図	北区溝上層出土の須恵器	25	第44図	G 2 P 1 出土の土師器、 瓦器、国産陶器、火鉢	67
第17図	北区溝下層出土の土師器、 土製品	27	第45図	G 3 P 1 遺構図	69
第18図	北区溝下層出土の須恵器、 綠釉陶器、灰釉陶器	28	第46図	G 15 P 1 出土の土師器	71
第19図	溝最下層直上出土の土師器、 須恵器、綠釉陶器	31	第47図	G 15 P 1 出土の土師器	72
第20図	北区溝最下層出土の土師器	33	第48図	G 15 P 1 出土の国産陶器、 中国陶磁	73
第21図	北区溝最下層出土の土師器、 土製品	34	第49図	その他の出土品 墨書き土器、 土製品、製塙土器、不明品	75
第22図	北区溝最下層出土の須恵器、 綠釉陶器、灰釉陶器	35	第50図	その他の出土品 中国陶磁、 綠釉陶器、灰釉陶器、須恵 器、瓦器、石製品、金銅製品	76
第23図	素掘曲物式井戸図	38	第51図	三鶴文兵庫鏡太刀	80
第24図	G 16 B P 1 出土土器、G 29 W 1 出土土器	38	第52図	同太刀の細部	80
第25図	G 10 P 6 出土土器、G 17 BW 3 出土土器、G 3 P 4 出土土器	39	第53図	太刀装具などの鉄型	81
第26図	方形横板式井戸図	40	第54図	鉄型	83
第27図	G 18 W 1 出土土器、G 27 W 1 出土土器	42			
第28図	方形木組式井戸図	43			

第55図 仏具鉄型	84	第69図 白色碗の法量図	106
第56図 鉄型および鉄鋳具	85	第70図 同 前	106
第57図 北区溝出土の瓦	86	第71図 褐色大皿の法量図	108
第58図 遺構出土の瓦	88	第72図 出土中國陶磁の変遷図	110
第59図 その他の瓦	90	第73図 慶長古活字本『拾芥抄』	
第60図 出土磚	92	京程図にみる発掘地近傍図	116
第61図 出土磚	93	第74図 『年中行事絵巻』卷12推定	
第62図 出土磚	94	縮荷祭行列図	118
第63図 出土磚	95	第75図 職人尽職などにみる職人図	123
第64図 G34出土瓦の刻印拓影	96	第76図 北区G5溝最下層出土の	
第65図 出土の皇朝十二錢拓影	97	土製円盤	129
第66図 出土の中國錢貨拓影	99	第77図 ピット数の変遷図	130
第67図 出土の中國錢貨拓影	100	第78図 井戸数の変遷図	131
第68図 出土錢貨の分布図	100		

付 表 目 次

第1表 素掘曲物式井戸一覧表	37	第10表 鋼銅関係品出土遺構一覧表	82
第2表 方形横板式井戸一覧表	40	第11表 出土皇朝十二錢一覧表	96
第3表 方形木組式井戸一覧表	43	第12表 出土中國錢一覧表	97
第4表 方形隅柱横棟式井戸一覧表	44	第13表 白色碗の法量一覧表	105
第5表 方形横棟式井戸一覧表	47	第14表 褐色大皿の法量一覧表	107
第6表 多角形堅板側式井戸一覧表	47	第15表 出土ガラスの成分表	126
第7表 円形桶側式井戸一覧表	50	第16表 立岩・須玖・長沙出土の	
第8表 円形瓦側式井戸一覧表	50	ガラス成分表	127
第9表 石組側式井戸一覧表	50	第17表 正倉院のガラスの組成	128

凡　　例

1. 本書は昭和54年11月から翌年5月にかけて実施した、平安京左京八条三坊二町の発掘報告書である。
2. 本書の執筆・図版の分担は以下の通りである。
 - ・第1章、第2章、第3章第1節、第5章第2・5・10節、
第6章第3節、第7章第2節、第8章……下條 健行
 - ・第3章第2・3・4・5節、第4章、第5章、第6章第1節、
第7章第1節……………川西 宏幸
 - ・第6章第2節……………植山 茂
 - ・第5章第6・9節……………芝野 康之
 - ・第7章第5節……………龍谷 寿
 - ・第6章第1節、第7章第4節……………原田 一敏
(東京国立博物館)
 - ・第7章第6節……………望月 明彦
(沼津高専)
 - ・写真図版……………水口 薫
3. 本書の編集には下條・川西があたった。

第1章 はじめに

第1節 調査の発端

昭和54年、関西電力より、財團法人古代學協會・平安博物館に発掘調査依頼についての打診があった。それは同電力京都支店新町倉庫（土蔵造、鉄骨造）を取り壊し、新たに地下1階、地上9階の新京都センタービル（調査当時は新町総合ビルと称されていた）を建設するにあたってそれによって生じる、埋蔵文化財の損壊を事前に記録保存しようとするものである。

財團法人古代學協會・平安博物館は、検討の結果、その必要性を認め、1979年10月に関西電力株式会社・関電産業株式会社と委託発掘調査契約をとりかわし、同年11月より、発掘調査にとりかかった。

第2節 調査の組織

財團法人古代學協會・平安博物館では、この調査を円滑に遂行するために、平安博物館研究部考古学第3研究室と古代學協會平安京調査本部が合同でこの任にあたった。

調査主任は調査の前半期を飯島武次（現駒沢大学助教授）、後半期を下條信行（現平安博物館助教授）が担当した。

調査メンバーは以下のとおりである（肩書きは調査時のものである）。

角田文衛（平安博物館館長・教授）

飯島武次（平安京調査本部主任・平安博物館講師）

下條信行（平安博物館講師）

寺島孝一（平安博物館講師）

佐々木英夫（平安博物館助手）

川西宏幸（平安博物館助手）

植山茂（平安博物館助手）

発掘・整理の調査補助員として、下記の諸氏の参加を得た。

芝野康之・由良真利子・渡辺美栄子・丹原由美子・村山ちぐさ・吉田たづ子・浜田美智子
・保坂雅美・三谷洋子・三宮昌弘・津田美貴子・布川百合子

また、調査期間中、下記の諸氏の来訪を受け、種々の指導、助言を得た。記して謝意を表する次第である。

泉拓良・五十川伸夫・宇野隆夫・江谷寛・小田富士雄・岡崎敬・岡内三真・亀井明徳・
木村捷三郎・小林行雄・鈴木重治・平良泰久・中山修一・永田信一・橋本久和・丸川義広

・森田 勉・森田 稔・矢部良明・山崎純男・柳田純孝・辻村純代・横山浩一・渡辺正氣
(敬称略)

なお調査にあたっては、関西電力株式会社・関電産業株式会社の全面的援助を受けたが、これとに関西電力社屋建設室の福井 豊・決得州彦・藤原 保氏には細部にわたってのお世話をいただいた。

最後になるが、報告書作製にあたって、稻田和彦（京都国立博物館）・荻野繁春（福井高専）・亀井明徳（九州歴史資料館）・狐塚省三・戸津圭之介（東京芸術大学）・中野政樹（東京芸術大学）・原田一敏（東京国立博物館）・望月明彦（沼津高専）・森田 稔（神戸市教育委員会）・橋本久和（高槻市教育委員会）の諸氏より有益な助言を賜わった。ことに、原田一敏、望月明彦の両氏には、それぞれの立場からの原稿の執筆をいただき、本書の内容を一層豊かにすることことができた。合わせて感謝する次第である。

第2章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と立地

遺跡は京都市下京区塩小路烏丸西入東小路 614 に所在する。京都駅前を東西に走る塩小路通りと南北に通る新町通りとが交差するその西北隅にあたるが、北は木津屋橋通りに限られ、西は京都市交通局三哲営業所に接している。遺跡の北には木津屋橋通りをへてて、京都第3タワーホテル、東には新町通りを挟んで、関西電力京都支店などビルが聳立する京都駅前のビル街の一角である（第1図）。

遺跡地は東西 51.4m、南北 72.6m と南北に長い長方形をなしている（図版1上）。

平安京条坊復元では北の木津屋橋通りが塩小路に相当すると考えられ、新町通りはほぼ町尻小路にあたるとされているので、遺跡地は平安時代には北に塩小路、東に町尻小路が走る平安京左京八条三坊二町の地に位置する（第2図）。

この地はさらに細かくみれば、二町地の中においても、東北部にあたり、おおよそ西四行北一・二・三・四・五門と西三行北一・二・三・四・五門の東半に相当することになる（第3図）。

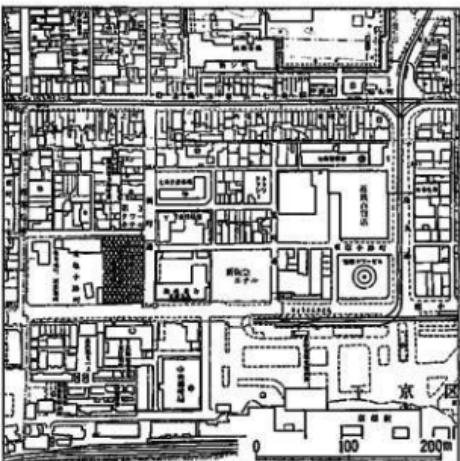
遺跡の緯度、経度は発掘地を北、中、南に分けた北区の東南角付近で以下のようないきを得ている。

緯度 $34^{\circ} 59' 4''$ 181

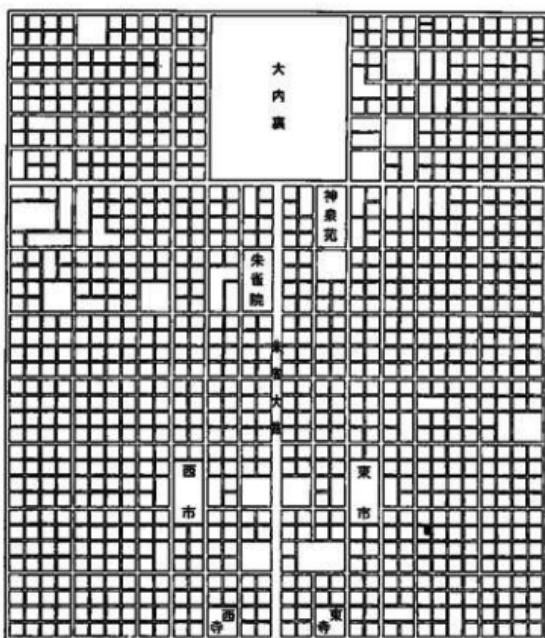
経度 $135^{\circ} 45' 32''$ 383

大正11年の3,000分1の地形図（昭和28年修正）によれば、標高 28m の等高線は西本願寺から遺跡のすぐ北を経て、京都駅前のステーションホテル方向の西北—東南方向に走り、26m 等高線も平安高校の南から、駅南側に抜ける同方向をとり、また、30m や 24m 等高線も同方位に走っているので、全体の地勢は東北に高く、西南に低い勾配を示している。

この傾斜方位は旧高野川流路と同一方向をなすもので、この付近の地盤が旧高野川流路の土



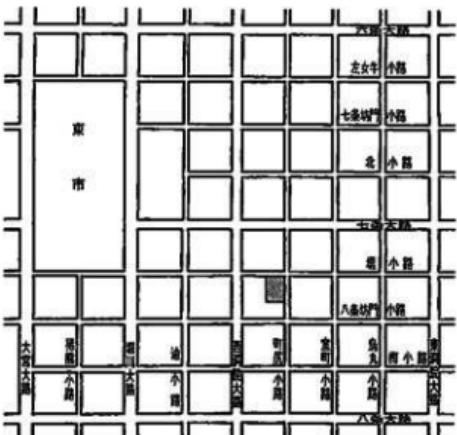
第1図 遺跡近傍市街地図（斜格子が遺跡地）



第2圖 平安京跡地復原圖

砂の運搬推移によって形成されたものであることが判る。そのことは、後述するように遺跡の基盤が花崗岩を含む砂礫質土のような河川堆積物によって成立していることからも推察することができる。

遺跡は同上地形図の28m等高線のすぐ南に位置し、先の緯度・経度設置点の地表面で、27.761mの高さを示している。現在は、ほぼ平坦面であるが、それでも南側に向かうに従い、若干の地高の低下が認められる。



第3図 八条三坊二町付近の条坊復原図

第2節 調査の経過と遺跡の概要

発掘調査は昭和54年11月15日より昭和55年5月10日まで、約6ヶ月弱にわたって行なった。調査員の下條、寺島、佐々木、川西は全期間参加し、飯島は55年3月下旬まで、植山は臨時に応じて加わった。

調査補助員のうち、芝野、由良、渡辺、丹原、村山、吉田、浜田、保坂、三谷は現地調査に参加し、遺構の実測、撮影、遺物の分類等の補助業務に携わった。このほか、橋本庄次氏はじめとする15~20名の人々に作業員として當時発掘に従事してもらった。

11月上旬、事前準備として京都市埋蔵文化財研究所より、遺跡東方の日本生命ビル用地（現新阪急ホテル）で行なわれた発掘調査の成果について教えを受けた。

また同じころ、木津屋根通りを挟んで、遺跡に北接する京都第3タワーホテル屋上より、調査前の現場撮影を行なった。

遺跡は南北72.629m、東西51m前後の南北に長い長方形状で、面積は2,714m²の広さである。

調査にさきだち、北、東の境界沿いに幅2mのスペースをとり、その内側に磁北を軸とした一辺8mのグリッドを組んだ（第4図）。

グリッドには北東角を起点として西向きにグリッド（G）1, 2, 3…の番号を並列式に与えた。一列6区画となり、6区画は6列まで続く。7列目からは西側がやや広がっているため、7区画となり、これが3列。すなわち第9列までつづき、最終区画はG57となる。

発掘にあたっては、廃土の搬出、各種車両の出入を考慮して、全体を3区に分け、その間に4mの空白地を残し北より、北区、中区、南区と名付けた。

北区は鉤形をなしグリッド1~12、14~18を発掘した。もっとも、グリッド6, 12, 18は東半分、グリッド7, 14~18は北半分だけの調査なので、発掘面積は816m²になる。

中区はグリッド21~24, 27~30, 33~36を調査した。グリッド24, 30, 36

6	5	4	3	2	1	
12	11	10	9	8		7
18	17	16	15	14		

24	23	22	21			
30	29	28	27			
36	35	34	33			

上…北区
中…中区
下…南区

42	41	40	39	38	37	
49	48	47	46	45		44
56	55	54	53	52	51	

第4図 調査地のグリッド設定図

の西半分、グリッド33～36の南半分は道路帯、防壁帶として調査は断念した。この区は、南北20mの長方形で発掘面積は560m²である。三区の中で最も狭い。

南区はグリッド37～42、44～49、51～56にあたるが、グリッド42、49、56の西半分、グリッド51～56の南半分およびグリッド37の東半分は、調査されていない。面積840m²で最も広い。

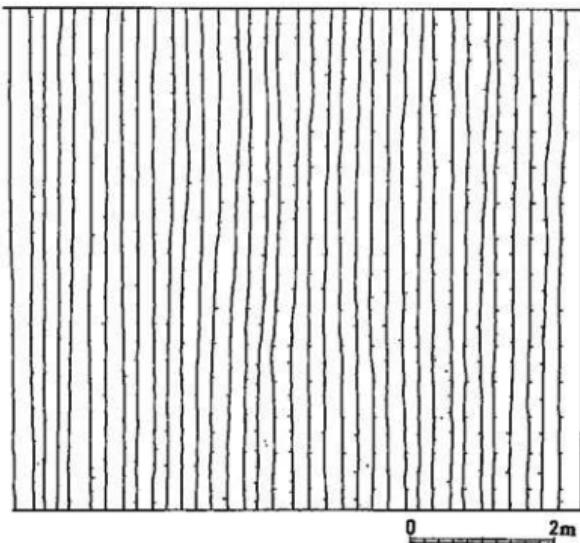
発掘は、耕土の搬出を考慮して、北区から始め、次いで南区に着手し、最後に中区にとりかかった。

北 区

北区では、盛土は重機によって排除し、一気に近世層に達した。近世層までは地表より約0.8～1.2mである。近世層は1層で、礎遺構よりなっている(第5図・図版1下)。幅25cm、高さ7cmの歓と溝がほぼ南北方面に交互につらなり、削平されている個所も部分的にはあるが、全区にわたって広がっている。北端のG3の西と南端のG16の東側を結ぶ南北の線で段落があり、西側が35cmほど低くなっている。この後に沿って杭および杭跡が南北に走り、礎遺構を東西に分けている。この遺構の上下面是東西ともに水平であり、この期に一度整地が行なわれていることが判る。歓や溝には近世の染付が多数出土している。

礎遺構をとり去ると、下層に褐色土層があらわれる。褐色土層中には各所にブロック状に小礫や砂層が含まれている。この層は人為的に上下層に分け、分層発掘を行なった。

上層にはG14、G17を除いて、全グリッドに無数の大小の掘込みが認められる。形状、法量とも種々雑多で、性格やまとまった組合せを明らかにしうるものは確認できなかった。



第5図 北区の礎遺構図

しかし、この他に若干の遺構も存在する。その一つは、直径80cmの円形または100cm程の梢円形壙中に無数の大小の土師皿を意識的に集積した遺構である。この層のG3のP1, 6, G8のP4, 7, 8, G9のP31としたものがそれで、G3の北壁中にも見られるが、遺跡の東半に偏って分布している。これらのうち、G3P1は、測図をして取り上げたが、直径80cmの円形で、深さ12cmの断面逆台形をなし、その内部には約50個以上の土師皿を多くは正位置に積み上げていた。しかし、その性格はいまひとつ明らかでない。

その二つは疊の集石遺構である。拡大から人頭大の河原石を集積し、面的に一つのまとまりを示している。積みあげたものではなく、散漫な敷石状をなすが、顕著な遺物は伴わない。G8P1ではその下部を掘ったが、壙の痕跡などは明確でなかった。形状は円形もあるが、不整形のものが多く、G2, G8, G10, G11に出土している。敷密には、遺構と称してよいかどうか疑問が残る。

同じ集石状態を示す遺構の中でG15P1とした集石遺構は上例とは様子を異にし、環状にまわる集石の外縁に羽釜が多數伴っていた。

この層はこのG15P1をもって下限となし、15世紀にその時間的位置を置くことができる。上限は、G3P1の土師皿集積壙からすれば14世紀後半に相当する。

褐色土層下層には井戸とピット群がある。ピットは、上層と同様に大小、形態ともに不定形で、個別の性格や組合せを明らかにするものではない。井戸はこの層に急激に現われ、後述のように各種のものがある（第6図）。

これらの遺構はG9～12, G14～18, G1, 2に多く集中する。すなわち、この区の東端と南半に限られていることを示しているが、この広がりは、因果関係は明確でないけれども、最下層の溝の分布範囲を避けたものようである。下層の時期はほぼ鎌倉時代に相当する。

褐色土層の下層は、灰色砂質土層となる。北区の東南部分を除いて、ほぼ全域に広がっている。この層に伴う遺構として、褐色土層下層と同様に、井戸とピットがある。ピットはほぼ全区に及んでいるが、南半分に多い。井戸は南半分に限られていて、褐色土層下層の井戸と同様の分布状態を示し、大溝中には及ばない。遺物の示すところによれば、平安前期から後期にかけてのものが多く、鎌倉時代前葉に及んでいる。

灰色砂色土層の下部に北区中央を東から西に流れる溝を検出した（図版2・3）。東に広く、西に狭く、傾斜も西に向かっている。溝幅の広い東側には溝の中央に東から西への張り出しが見られ、あたかも洲のような状態にある。溝中には土器の堆積層が見られ、溝の流下沈殿層である黒色粘質土層を境として、これを含む下層とその上層に分離して遺物をとりあげた。遺物は溝中各所に見られるが、G11やG12など、西側により顕著に出土している。遺物は溝最下層で平安前期、最下層直上でほぼ平安中期を示していた。

中 区

この区も褐色土層直上まで重機によって廃土した。

褐色土層上面には、北側のG22の東端と南側のG34の東端を結ぶほぼ南北に走る2列の杭列

が認められる(図版4下)。この2列の杭は西列がやや小さく、東列が大きい。東列杭の東側根元には、杭列に沿って(G28~G34)、「摺谷傳兵衛」、「界下田又三郎」などの印刻を持つ瓦が敷かれていた。杭の根縛をなすものであろう。この杭列は北区のG3の西側とG16の東側を結んで打ち込まれていた杭列に繋結するもので、杭列を境に西側に段落ちする境界上に設けられたものである。

褐色土層中には、北・南区と同様に、井戸、ピットの遺構がある(図版4上)。井戸は全区に満遍なく分布し、鎌倉前期に属するものを主体とし、末期に及ぶ(G27W3)。ピットも大小不定形のものが同様の分布を示し、時期も鎌倉前期を主体とし、中頃から後半にまで及ぶ(G29P10)。13世紀前半頃の土師皿集落(G27P18)もこの区の東南に1基出土している。

この層の下層には、全区に認められるわけではないが、ブロック状に灰色砂質土層が広がり、平安時代の遺構と遺物が伴っている。

井戸は11世紀の1基(G29W1)を最古とし、平安末期のもの(G21W3, G22W1, G27W1など)が中央より東に分布し、平安末から鎌倉初のものが後続している。

G30北端の集石中の遺物はこの区中でも最も古く、平安前期・中期にさかのぼるものであり、前期・中期の分布の南限にあたる。

各種のピットは所によって濃淡を示しながら、全区に広がっているが、G21, 22など北区に近い地点に集中し、北区からの連続性を示している。その時期も前期から末期まであり、北区の動向に応じた展開をみせている。

ピットはこれより南にも広がっているが、小形のものが多い。その時期は平安後期から末期にかけて広がり始め、末期から鎌倉前半期がピークとなり、以後漸減していく。なお、中区東端で建物の礎石らしい平石を検出した。

南 区

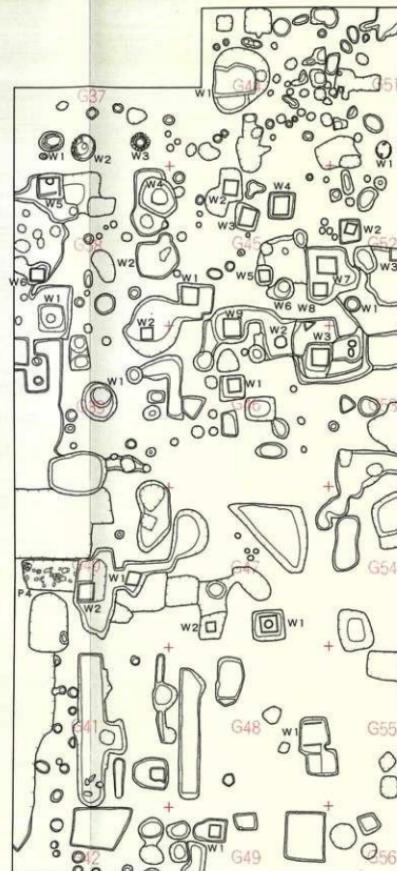
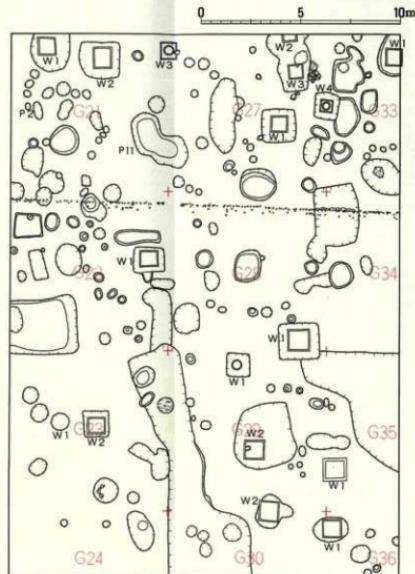
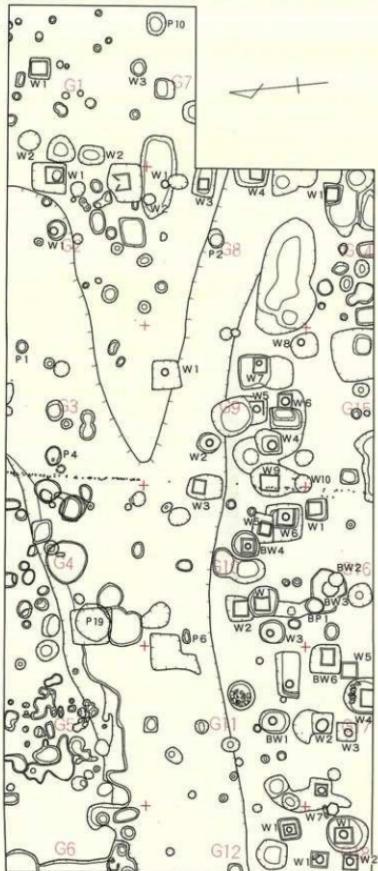
盛土および畝遺構までを重機によって一挙に掘りあげた。その下層は北区と同様の褐色土層で、この区の全域に及んでいる。

褐色土層中あるいはこの層中から掘り込まれた遺構には、ピット、井戸、墓状遺構がある(図版5)。

ピットは全域に及ぶが、大小、形状様々で、その性格を特定できるものはない。井戸も多数出土しているが、G37~39, G44~46, G51~53など、中央より東側に集中している。墓状遺構はG40の中央北壁沿いに出土し、井戸など生活地と離れた地点に出土している。

北区では、この下層に灰色砂質土層が現われるが、この区にはわずかに認められるだけである。

地山面よりの掘り込み遺構は平安後期の不整形ピット2(G40P1), 平安末期~鎌倉初期の井戸5基(P38, 40, 47, 48, 49), 小ピット10余個(G39, 50など)が認められるだけで、灰色砂質土層の時代の活動はその終末期に顔をのぞかせる。



第6図 造構全体図

第3節 土層

土層は上部より、盛土層、耕土層(鉄造構)、褐色土層、灰色砂質土層の順になり、灰色砂質土層は北区に顕著にあらわれる(第7~10図)。

地表面は標高27.70m前後で、ほぼ平坦面をなしているが、南区にいたると27.45~27.50mとなり、南側に低くなっている。

盛土層は80~110cmで、中央より東側に薄く(80cm)、西側に厚い(110cm)。これは次に述べるように、下層の在り方に起因している。層中には近世の陶磁器、瓦を含む。

耕土層は厚さ10~15cmで、上下面ともほぼ水平である。鉄と磚を規則的に残していることから、耕作の用に供されていたと考えられるが、その下端がみごとなまでに水平であることから考えて、この段階に整地されたものとみてよい。

整地に際して、G3の西端とG40の東端を結んで、ほぼ遺跡中央の南北の線で、東西に分け、東に高く、西に一段低い段違いに整地している。その比高差は約30~40cmで、段落ちの地点に杭を2列に打ち、両区の境界をなしている。

一段高い東側区の下面是標高26.80m前後で南区では30cmほど低くなる。西側区の北端では26.50mを測るが南に向かうに従い26.35~26.40mとやや低くなる。一見平坦にはみえるが、北から南西側に傾斜している。この傾斜方向は、前述の地形全体の傾斜方向に符合するものである。

褐色土層は、北区では、その東端で下面が26.52mを測り、中央で26.44m、西端で同じく26.44mを測るので、わずかに西に向いて傾斜している。

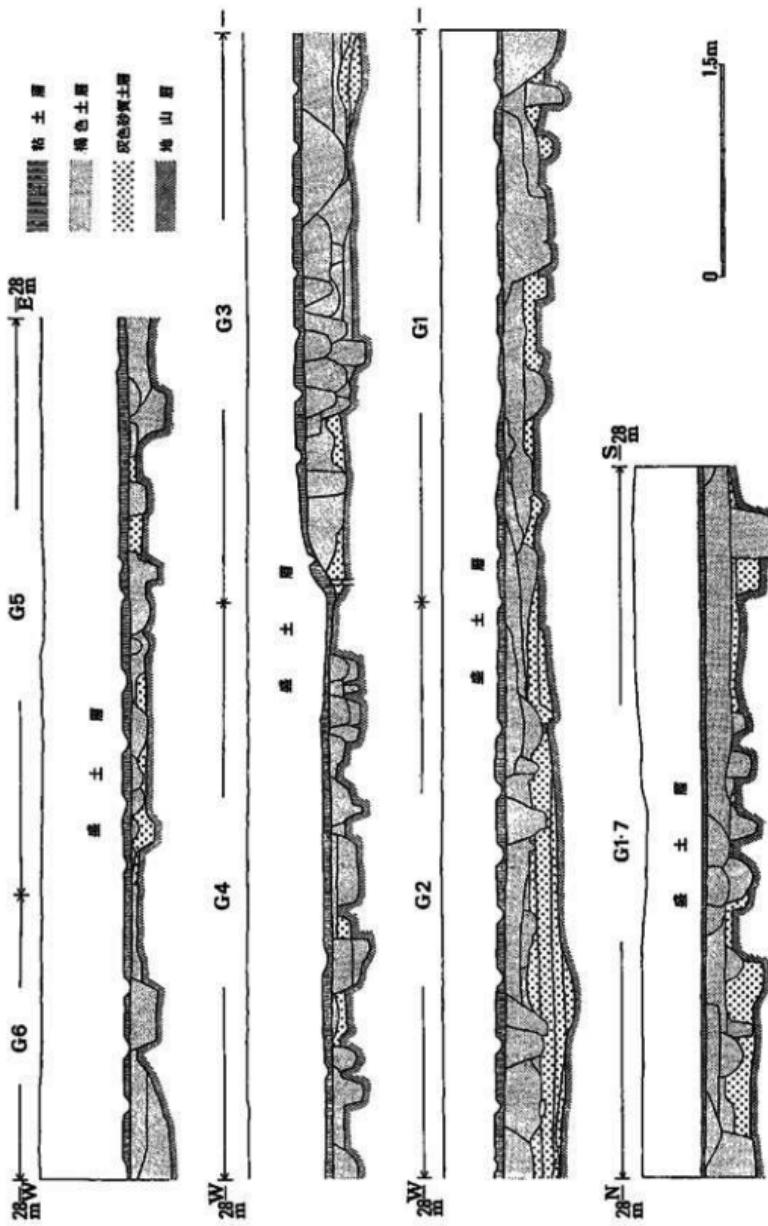
中区では、同じく下面が東側で26.35~26.40m、西側で26.25~26.30mを測るので、やはり西傾斜を示すことになるが、北区よりもやや深い傾斜にある。

南区では、東北端で26.24~26.40mであり、西端で26.20mであるから、北、中区と同様に西に傾いている。

一方、南北の傾斜をみてみると、東側では北区26.52m、中区26.35~26.40m、南区26.24~26.40mとなり、南側に傾斜があることを示している。西側も、北区26.44m、中区26.25m~26.30m、南区26.20mで、やはり南側に傾斜があることを示している。

すなわち、東北が高く、そこより、西、南に傾斜しているわけであるから、全体として、東北より西南への傾きを示していることになる。

上面は耕土層の下面になるが、堆積土の厚さは、東西によって違っている。耕土層整地によって南北に区切られた境界の東側に厚く、西側に薄くなっている。地点によってその厚さを異にしているが、東側で40cmを中において前後10cm、西側で15~20cmで、東側が2倍強の厚さを示している。褐色土層下面の自然堆積のレベルは、東西で10~20cmの差異しかないのであるから、これだけの差は、上面が耕作土層整地の際に、すなわち人為的な作為によって生じたことを物語るのである。すなわち、西側がより深く削平されたのであり、北区の西側では、そのた



め、褐色土層がほとんど消滅する程の状態になっている。

堆積層の差は、南北においても現われ、北側の高度が高い方に薄く、南側に厚くなっている。褐色土層の上面は東側で北、中、南とも 26.80m と同じレベルであるが、その厚さは北区では厚さ 28~36cm、中区で 40~45cm、南区で 40~56cm と徐々に厚さを増している。これは、南に傾斜があることに起因していることはいうまでもない。

褐色土層の上半は南北朝から室町時代に相当し、下半は平安時代末から鎌倉時代にはほぼ併行するものであるが、それよりややさかのぼる可能性もある。

灰色砂質土層は、それが面としての広がりを示すのは北区である。それも、ほとんど褐色土層、耕土層に削平されているため、本来的な層厚は認めない。ただし、溝中には比較的よく残存している。

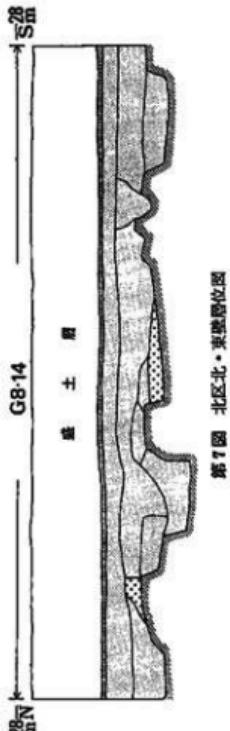
溝中のぞけば、これが最下層の包含層となり、残存状況のよいところでは、約 15cm の厚さを示している。

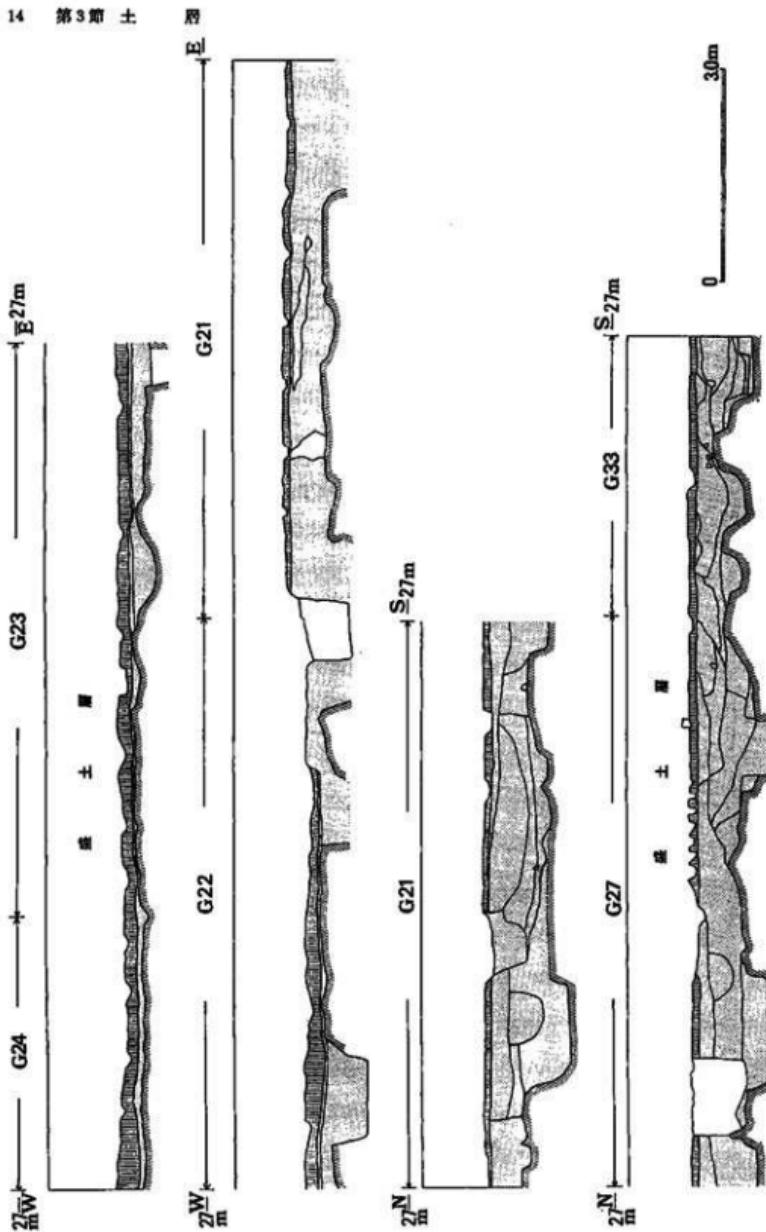
中区、南区にも土層図にあらわれていないが、部分的に存在する。主要には 10 世紀から 11 世紀にかかる平安中期の層である。

溝中では、この下層に黄色砂質土層が出現するが、これについても溝の項で触れる。

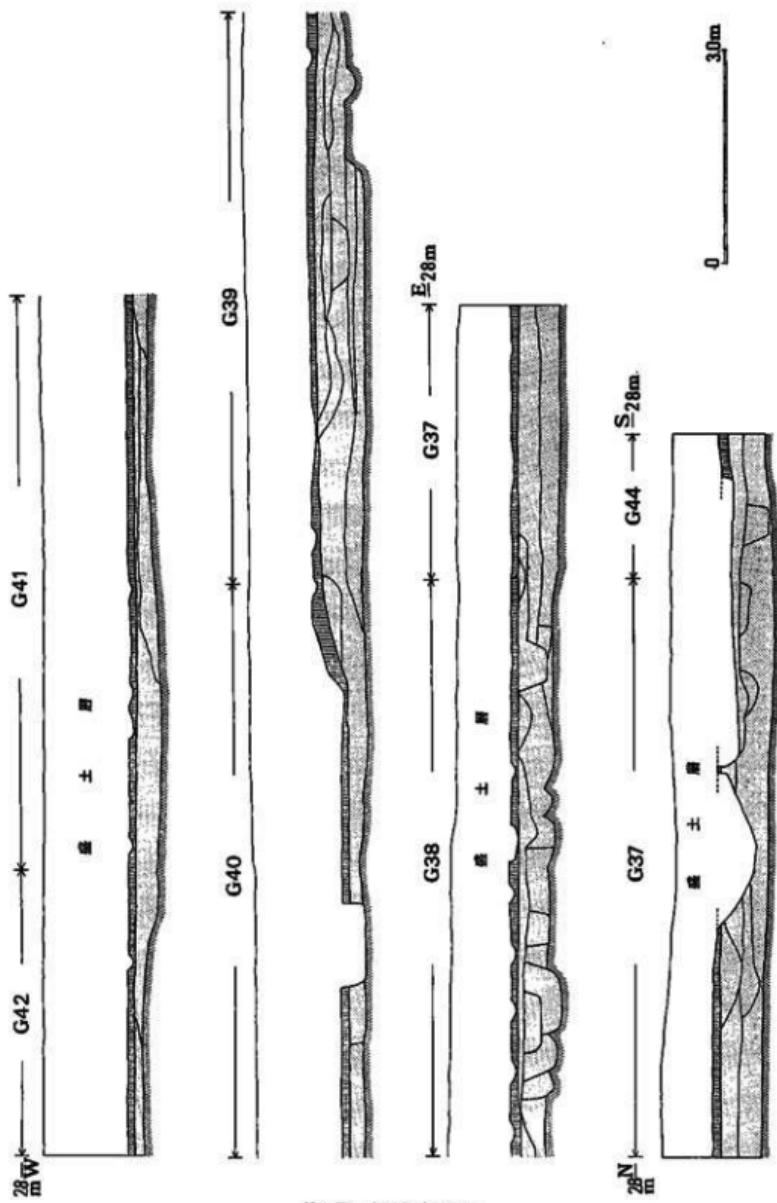
地山もほぼ同様の傾斜傾向をもっている。26.40~26.50m のコンターが北区の G4 北端から G17 の北側を通って南区の G33 を通り、G31 で再び東北方向にむかっている。これに併行して、26.25m 前後のコンターが G17 の西端から G34 を通って G37 方向に抜け、その外側を 26.20m コンターが G36 南から G44 東側を同心円状に走っている。その傾斜方向は東北から西南への走行を示している。この傾斜は、前述した旧高野川流路の走行に符合するものであり、この上に載る、褐色土層、耕土層、盛土層とともに、若干の変異をもちつつも、こうした傾斜を基本走行にとっており、それは今日にも及んでいる。

地山は薄黄茶色の砂礫層で、1~10cm の小礫を含み、中に 15cm 大の礫も含んでいる。土質調査柱状図によれば、地表より 15~20m 下までは、砂礫層とシルト質砂層あるいは砂質シルト層の互層となり、厚い砂礫層の間に 30~40cm の薄いシルト質層が挟まる形となっていて、地山の堆積が流量・流速の緩急のくりかえしによって形成されたことを物語っている。もっとも、シルト層の間隔、レベルは地点によって多様であり、齊一的とはいえない複雑な堆積過程をくりかえしたものである。砂礫層は花崗岩の開析によって生じたもので



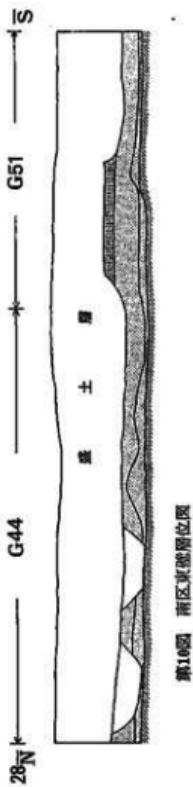


第8図 中区北・東壁層位図

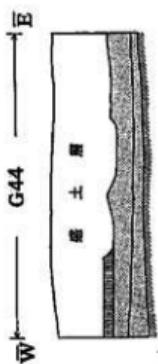


第9図 南区北壁層位図

あり、雲母なども混入しているが、これらは、高野川左岸に分布する花崗岩が旧高野川の作用によって流下堆積したものであることを示している。



第10図 南区東部剖面図



第3章 溝 の 調 査

第1節 溝 遺 構

北区の最下層には、大略東から西に流れる溝が走っている(第11・12図、図版2・3)。この溝は、北区の東北方面からと、東南方向から流れて来た小溝がG 3とG 9の境界の西端で合し、一段と大溝となって西に向かうのであるが、小溝のうち東北方面のそれが溝幅が広く本流をなし、東南方面のが支流をなしていたものと思われる。この小溝の間は東から西へ張り出す舌状の砂洲になっている。

北側溝の右岸はG 3の西端で北に消え、左岸はG 3、G 2の中位を東進し、G 2の東寄りで急速に北進し、そのまま北方に抜けているので、このまま北進すれば、ただちに平安京塩小路通りにぶつかるようになる。平安京塩小路通りの原位置は発掘によって確認されていないが、ほぼ現木津屋橋通りに相当すると考えられるので、北に抜けるこの溝は平安京塩小路通り沿いに東に廻るだけの余裕はなく、平安京塩小路通りを北～東北につきっていた可能性が高い。この溝と木津屋橋通りを挟んで北面する京都第3タワーホテル用地の発掘で、河川に関連する砂層が検出されているのは、この流路と関連する可能性が高い。

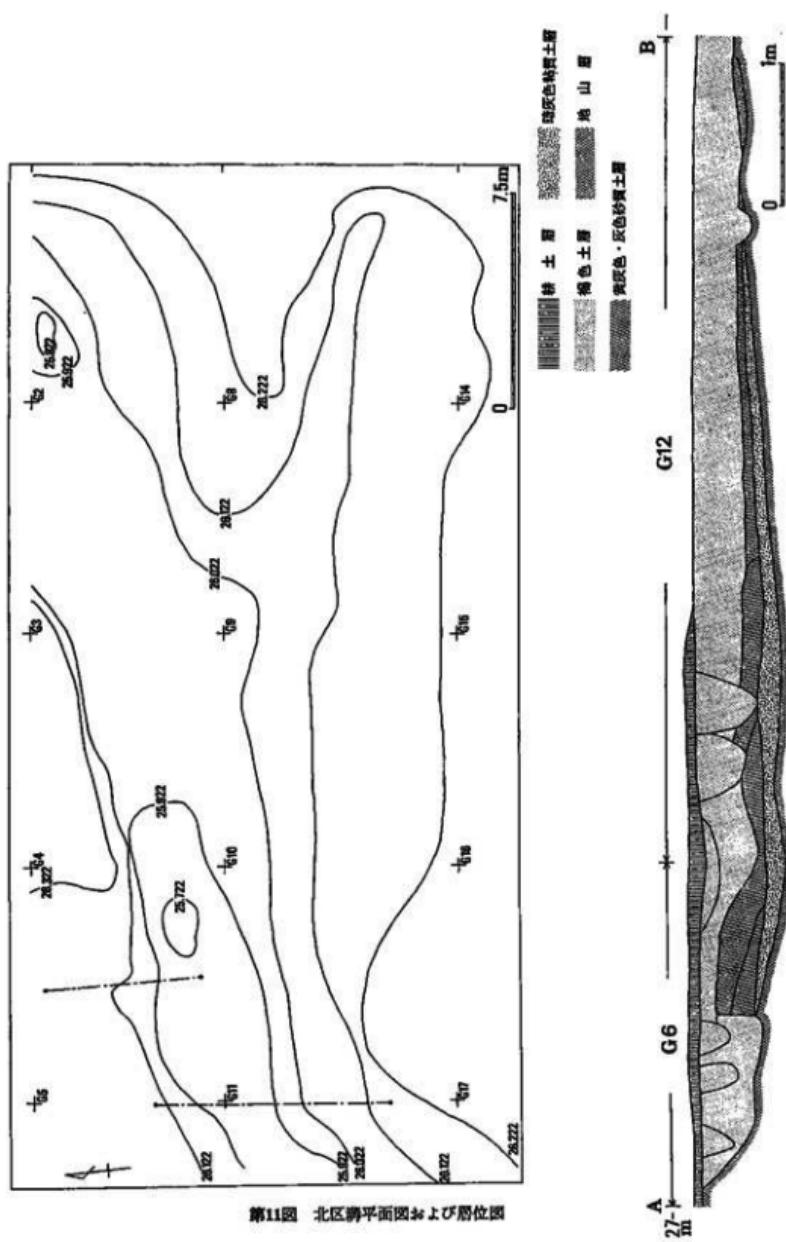
南側小溝は、合流点で幅4mと北側溝に比べて狭く、そのまま暫時、細流となって、東南に続いているが、流水時の堆積粘質土層は薄く、流量は多くなかったものと推定される。

南北の2流路を合わせて、幅11mとなった溝は、西に流れるに従い7～8mと狭くなり、そのまま北区西端のG 12に抜けている。

これを標高でみると、溝の肩が26.122mとなり、それより40cm低い25.922mは、東側(G 2)では点とし、西側では広い面としてあらわれ、東より西に地高を低くし、水流が東から西に流れていたことが判る。しかし、溝の最下底は溝の東西において10～15cmの違いしかなく、その傾斜は緩慢といえ、その流速も穏やかなものであったと思われる。

次に溝の堆積状況と堆積過程をみてみよう。溝の最下部は部分的には砂層となっているところもあるが、多くは無遺物層の砂疊層である。この基盤に載るのが暗灰色粘質土層である(最下層、下層)。炭を含み、溝の全域に広がっているが、厚さは15～20cmである。当然のことながら、溝の最深部に厚く、両端に薄くなっているが、最深部は溝の中央部ではなく、右岸に寄っている。最深部は北壁断面では、右岸の東1mにあり、G 4～G 10(東側)断面では右岸の直下にあり、G 6～G 17(東側)では右岸より南2mの地点にあるので、この流路は溝の右岸を洗って流れていたことが判る。

したがって、溝の断面は、上流では、右岸肩より比較的急傾斜で溝底に及び、反対の左岸には、なだらかな傾斜で起ち上がって行くことになる。



第11図 北区構平面図および層位図

この断面は、人工掘削溝に多い、左右対称のU字状やV字状ではなく、自然流路であることを示している。これは流路の方向や溝肩のラインが直線的でなく、軒丸曲折していることからも追証できる。したがって、この流れは溝というより、小河川といった方が適正である。

この溝の流速が遅流のものであったことは、溝の上下流の傾斜が緩慢であることと、下部堆積が散粒の砂質土であることから推察できるが、これが河川として認識利用されていたことは、最下層から人面墨書き器、土馬などの出土がみられたことより説明が可能である。

遺物としては、この外、ミニチュア土製窓、土製円盤、須恵器、土師器、灰胎陶器などが出土している。9世紀～10世紀。

この層の上層には黄灰色砂質土層が覆っているが、その堆積状況は地区によって異なっている。



G 4～G10（東側）では、溝中堆積層は、下部より暗灰色粘質土層（厚10～20cm）、黄灰色砂質土層（厚10～25cm）、灰色砂質土層（厚10～13cm）の三層からなり、最下層の暗灰色粘質土層は、先例と同様、溝全域に及んでいる。その上層の黄灰色砂質土層は溝の右岸より、溝底にかけて約2.7m間に及ぶだけで、溝底より南には及んでいない。この上部に載る灰色砂質土層は、溝全幅に堆積し溝の上層のようにみえるが、これを北壁との関連で考えると、北壁の溝に比べて、この付近に至ると溝深が50cm強と深くなり、そこに北壁と同厚で堆積しているので、黄灰色砂質土層が堆積して水流が停止した時、溝深が深くなつた分だけ、溝上部に凹地ができ、そこに灰色砂質土砂が堆積している。

こうした堆積状況は、溝西端に近いG 6～G17でも認められ、溝全幅に及ぶ暗灰色粘質土層の上部に北より厚15cmの黄灰色砂質土層が溝底にまで被り、その上部は灰色砂質土層が溝全幅を覆っている。ここにいたると、溝深が60cmと一層深くなるので、それだけ凹地も深くななり、したがって灰色砂質土層も最厚25cmと溝中に厚く堆積している。

最下層の暗灰色粘質土層は溝中全域に及んでいるが、溝が深い下流に厚く、上流に薄い。

暗灰色粘質土層（溝最下層）は9～10世紀、灰色砂質土層（溝最下

層直上)は10~11世紀に相当するものである。

第2節 溝上層出土品

土師器(第13・14図、図版19)

壺(第13図1~11, 29~31, 40~43)1~11は、表面の調整技法の相違によって、4群に大別できる。すなわち、1・5・6・8・9・11は、口縁部外面及び内面にナデ、底面にオサエなどの粗い調整を加える。2・7は、口縁部外面及び内面にナデ、底面にケズリを加える。10は、外面全体にケズリ、内面にナデを加える。4は内外両面ともナデで調整している。なお、3は内黒土器であり、外面にケズリ、内面にナデをみる。

29~31は、高台付の大型品である。内黒土器。内面にミガキを加えて丁寧に調整し、30・31は内面に暗文を施す。内面の丁寧さに較べ、外面の調整は粗いナデ・ケズリでとどめる。

40~43は、無高台の大型品である。堅敏な焼成の内黒土器で、佐波理鉢をしのばせる。内面にナデを加えて器壁を整え、40は暗文を施している。外面の技法には、ケズリ・ナデ・ミガキの各種がある。

皿(同12~28, 32~39)12~28には、口縁部が斜上方に単純に開くもの(12~24)と、口縁部が外反して弯曲するもの(25~28)とがある。12~24のうち、口縁端部が内面に肥厚するものは、大型品に多い。表面の調整技法によって、3群に大別できる。12・13・14・16・19・20・22・24~28は、口縁部外面及び内面にナデを加え、底面を粗い調整でとどめる。15・17は、底面をケズリで調整し、21・23は外面全体にケズリを加える。

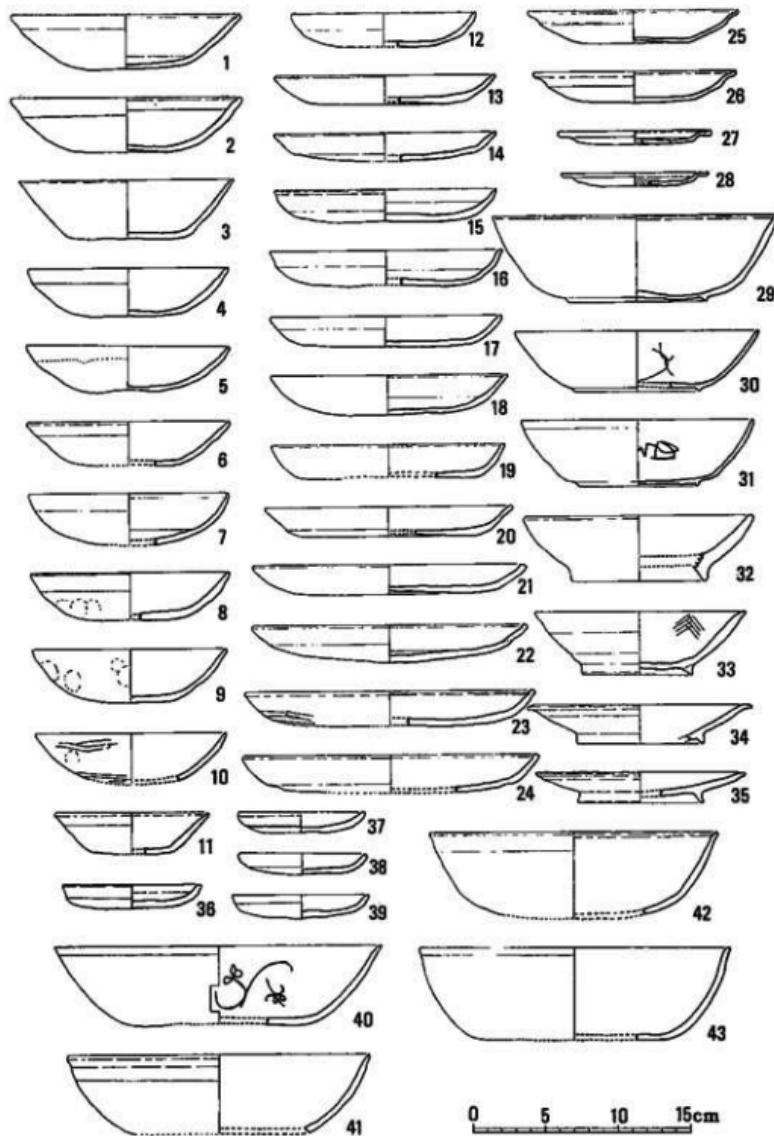
29~35は、高台付皿で、うち33・34は内黒土器である。34・35は綠釉または灰釉陶器の形態に似る。内面にはいずれもミガキを加え、30・31に暗文をみる。外面調整の技法は一様でなく、29~31・34は、ナデまたは軽いケズリにとどめ、33・35は、さらにミガキを加えて丁寧に仕上げている。

36~39は、豊明皿様の小型品である。

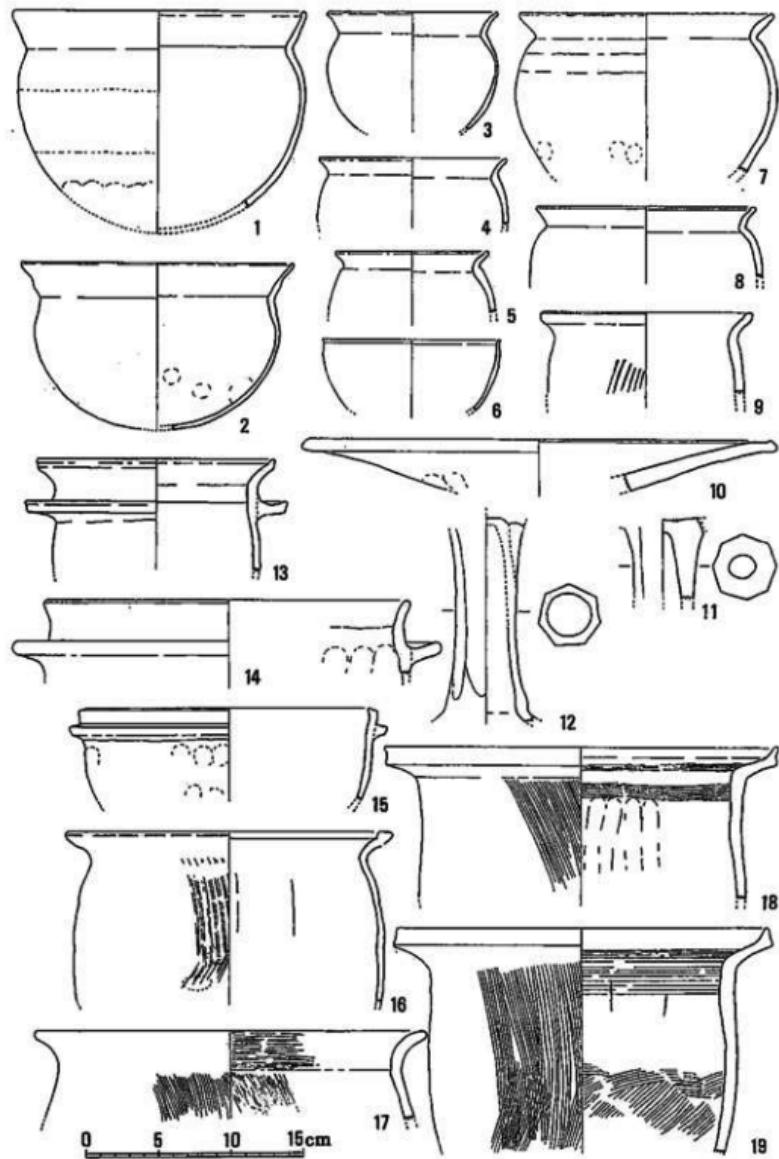
なお、第14図6は、碗形の内黒土器であり、外面をナデ、内面にミガキを施している。

壺(第14図1~5, 7~9, 13~19)1~5は、いずれも口縁部が単純に屈曲する内黒土器である。大小の2態がある。1・2は、内外両面にヘラ状工具によるナデまたは軽いケズリをみる。1は外面下半に煮沸時の赤変が残り、2は胴部下半に煤が付着する。ともに器壁は薄く、ウンモ状の細片が多く混入する。3~5の小型品は、調整技法に若干の相違があり、3は内外面ともナデ、4は胴部外面をケズリ、内面をミガキ、5は外面をナデ、胴部内面をヨコハケで、それぞれ最終の調整をしている。いずれも胎土中にウンモ状細片の混入がめだつ。

7~9は、通常の土師器壺で、内黒土器の壺より厚手につくられる。7は、内外面ともナデ。とくに内面の調整は丁寧であるが、外面にはその配慮を欠き、粘土細痕が残る。8・9には、胴部外面にタタキがみえ、9の内面に青海波が遺存する。



第13図 北区溝上層出土の土器



第14図 北区溝上層出土の土器部品

13～15は、羽釜である。13・14は、外反する口縁部に張りの乏しい胴部がつく。胎土中に砂粒の混入が著しい。13の口縁端部は、面取りをもって上方に尖る。この特長は、鉢部先端にもみられ、長甕18・19の口縁端部とも共通する。14の口縁端部は丸く終る。この特長は鉢部先端および長甕17の口縁端部と共通する。15は瓦質で、鉢部の突出の小さい異形品である。他の要とは時期を異にする。

16は、口縁部が内面に肥厚する。外面に櫛目状の粗いハケ、内面に微細なヨコハケメをみる。砂の混入が少ない。

17～19は長甕である。17は口縁端部が丸く終る。胴部の外面にハケ、内面にケズリを施している。18・19は口縁端部が上方に突出する。18は、外面にハケ、内面にナデを残し、19は、内外面ともハケで仕上げている。いずれも胎土中に細砂粒の混入が著しい。

須恵器（第15・16図、図版20・21）

蓋（第15図1～5・30）1～5は坏蓋である。上面に粘土組状痕をほんんどどめない。4は多孔質で瓦質に近い。30は壺の蓋である。

坏（同6～15）高台付（6～10）と無高台（11～15）とがある。ともに底面に粘土組状痕を残す。無高台品は多孔質で、須恵器としての緻密さに欠ける。

壺（同32～36、第16図1～7・13）32・33は長頸壺で、胎土に黒色粒の混入が著しく、瓦質に近い。33は底面に糸切り痕を残す。

34～36は、胎土に精良さを欠き、白色砂粒の混入が多い。外面に凹凸があり、底面に糸切り痕を残す。

第16図1・2・13は、短頸壺である。1・2は、内外面ともヨコナデで仕上げ、13は外面にタタキメ、内面に青海波を残す。肩部に自然釉が付着し、明灰色を呈する。

4は肩部に紐状の面耳をそなえ、底面に糸切り痕を残す。暗灰色。

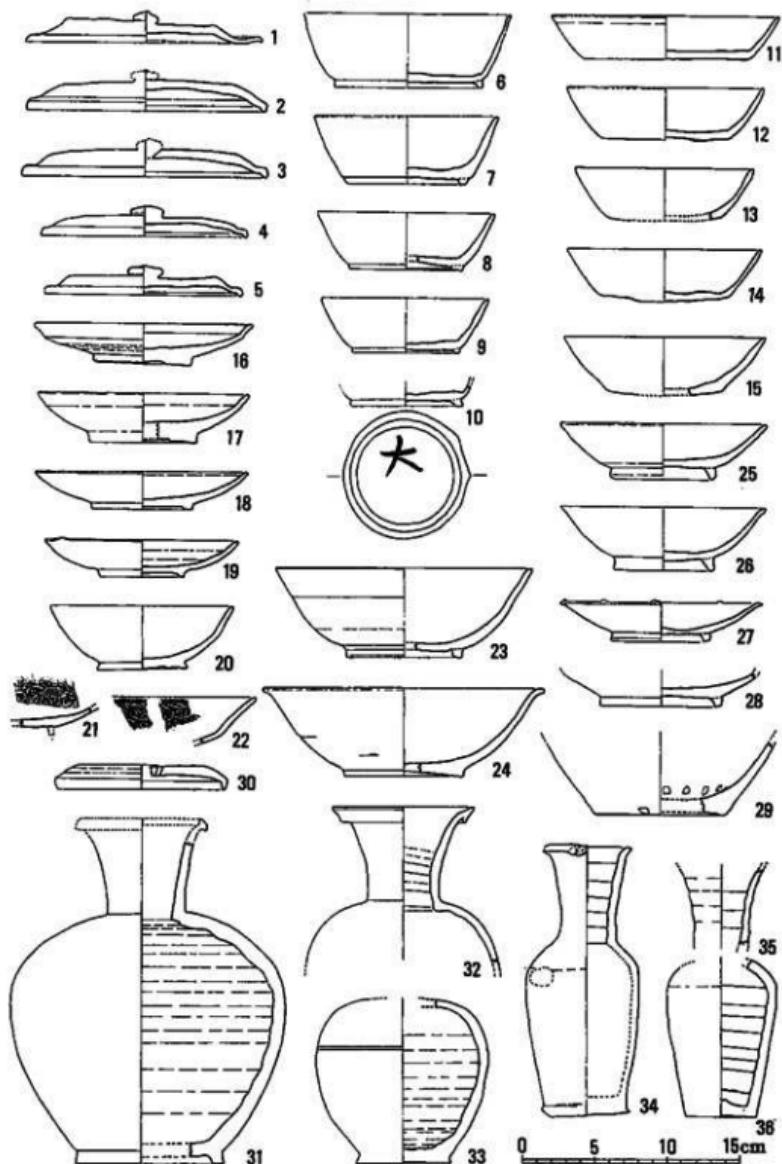
5～7は小型壺である。5・6は手づくね風で、底面に糸切り痕がある。暗灰色で、胎土に白色細砂粒を多く含む。7は、淡褐色の瓦質状の焼成で、前2者と相違をみせる。

鉢（第16図8・9）8はやや瓦質に近く、緻密さに乏しい。9は須恵質のねり鉢で、混入品とみられる。

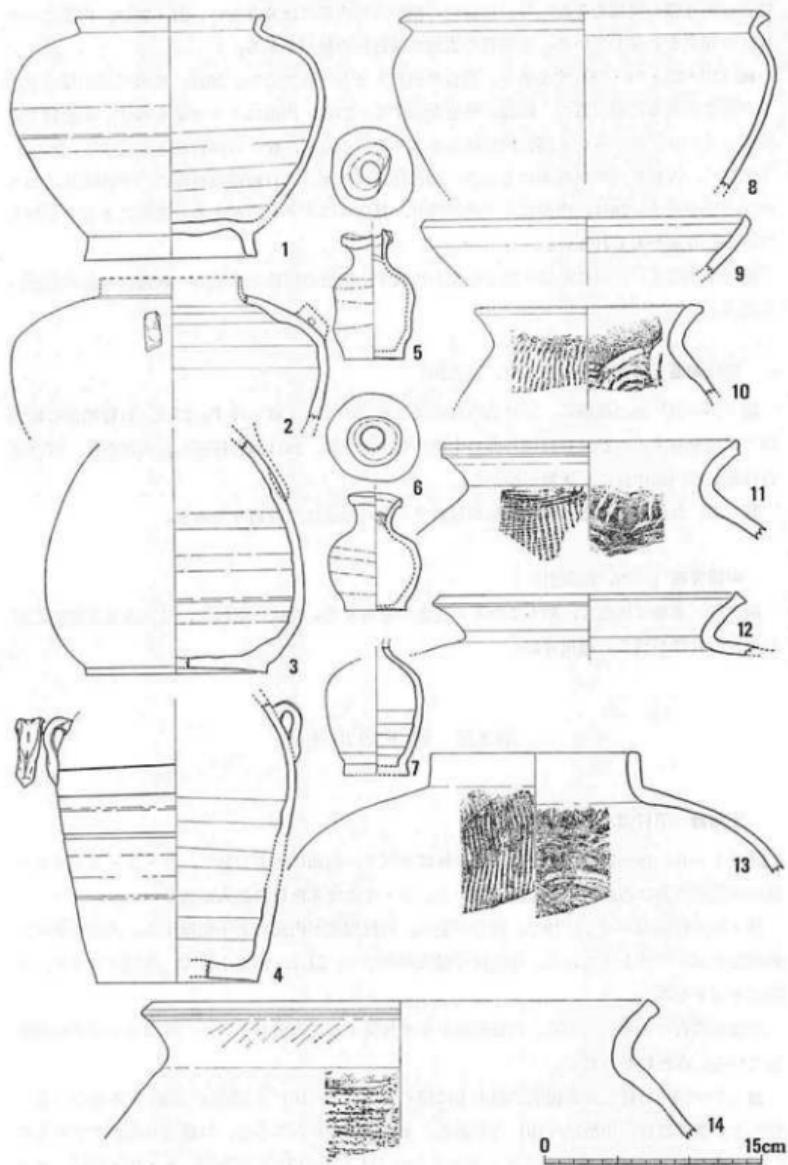
甕（同10～12・14）いずれもタタキが施されている。なお、14のはあい、内面の当て具が他とちがっていたらしく、青海波を欠く。また胎土もひとときわ粗い。

縄釉陶器（第15図16～24・28、第16図3、図版20）

皿（第15図16～19・21・22）皿には2種あり、蛇ノ目高台で、口縁部に棱を有するもの（16・17）と、輪高台で、口縁部が単純に斜上方に開くもの（18・19）とがある。16は、高台端部に糸切り痕を残し、須恵質の素地に淡緑色の釉がかかる。17は、高台端部にケズリ・ナデを加え、須恵質で、黄緑の釉色を呈する。18は、見込みに、高台径とほぼ等しい円形の圧痕をとどめる。須恵質の素地に淡緑色の釉がかかる。16～18のはあい、釉が高台まで全面に及ぶ。19は、口縁



第15図 北区満上層出土の須恵器（1～15, 30, 32～36）、縄文陶器
（16～24, 28）、灰釉陶器（25～27, 31）、中国青磁（29）



第16図 北区溝上層出土の須恵器

端部に輪花様の突起をそなえる。黄緑色の釉が高台内部には及ばない。21・22は、内面にヘラ描きの花文を表現している。土師質の素地に淡緑色の釉がかかる。

碗（20・23・24・28）大小あり、高台の形状もまた一様でない。20は、底面に窯印様の×のヘラ描きがある。須恵質で、暗緑の釉色を呈する。23は、内面にミガキ痕を残す。須恵質で素焼きに近いほど釉が薄い。高台内側にもケズリをみる点が、蛇ノ目高台品と共通する。24は、土師質で、浅緑色の釉が底面にも及ぶ。高台付近にケズリ、口縁部内外面にヘラ状工具によるナデの痕を残す。28は、内面にミガキが残り、見込みにトチン痕がある。底面にケズリを加えている。耳皿かもしれない。

壺（第16図3）底面に糸切り痕をわずかに残す。褐色の堅緻な素地に、黄緑色の釉が底面にも及ぶ。

灰釉陶器（第15図25～27・31、図版20）

皿（25～27）26は底面に、27は高台付近及び底面にケズリ痕を残す。27は、口縁端部に輪花様の突起を有する。25は口縁部外面の中位から内面全体、26は高台付近から内面全体、27は高台付近から内面中位に、灰釉がかかる。

壺（31）長頸壺である。肩部に釉が付着する。口頸部は二段造りである。

中国青磁（同29、図版21）

碗（29）素地は褐色で、釉もまた近い色あいをみせる。焼成は堅緻で、見込み及び底面に重ね焼きの目跡が残る。越州青磁。

第3節 溝下層出土品

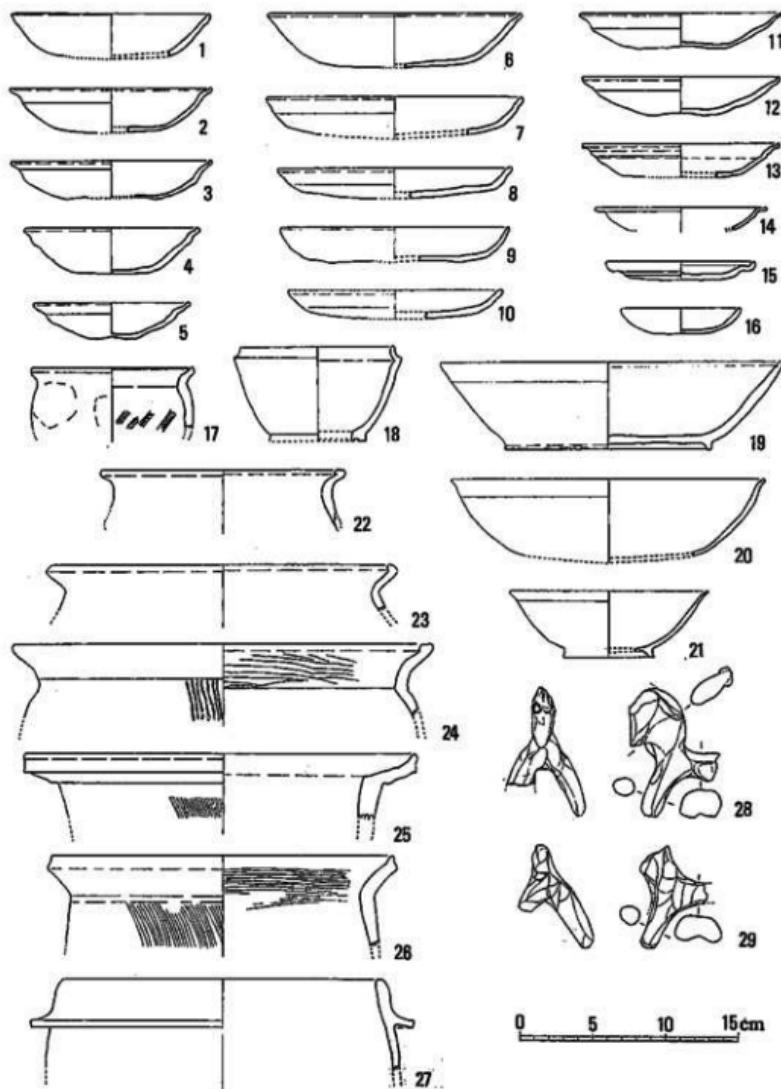
土師器（第17図、図版21）

壺（1～6、19～21）1・6は外面全体にケズリ、内面にナデを施し、2・3・4・5は外面の口縁端部及び内面にナデを施している。3・4には赤色粒の混入が著しい。

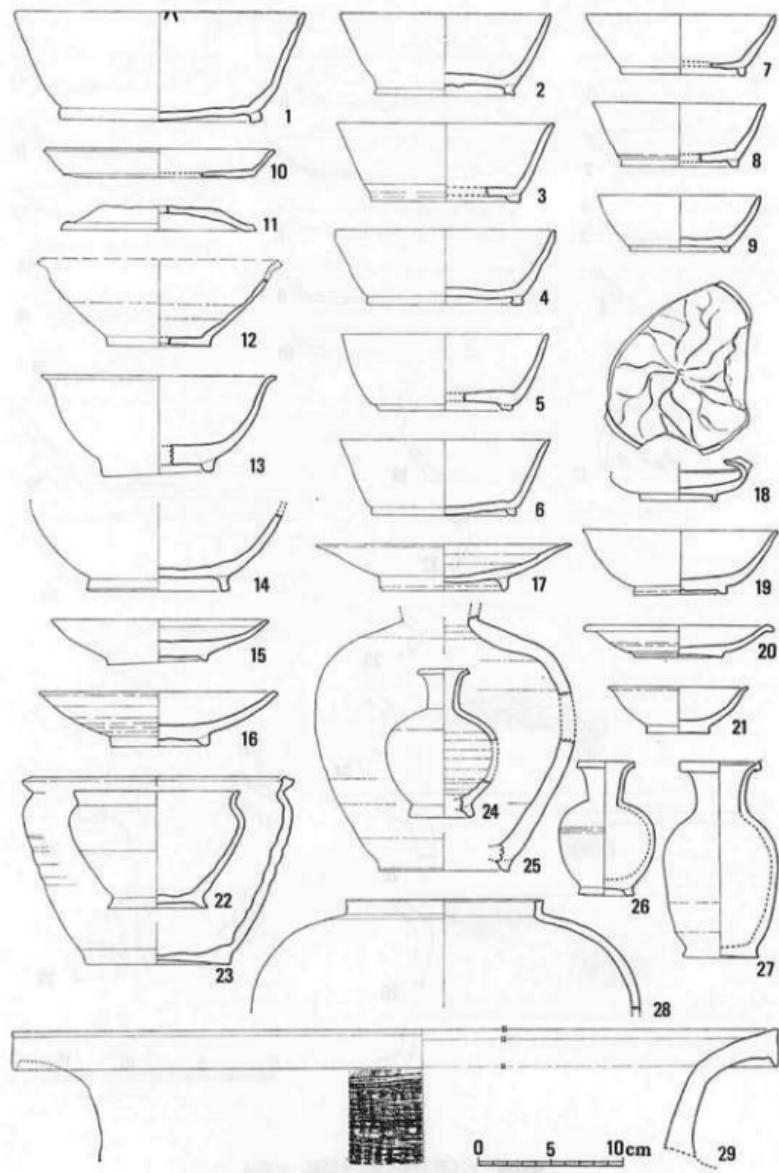
19・21には高台がつく。19は、高台が張り、口縁端部が内面に若干肥厚する。内面をナデ、外面をケズリで仕上げている。赤色粒の混入がめだつ。21は、内黒土器で、内面にミガキ、外面にケズリをみる。

20は無高台の大型壺である。口縁端部がやや外反する。内面をミガキ、外面をケズリで調整している。赤色粒がめだつ。

皿（7～16）口縁部が直線的に斜上方に開くもの（7～10）と端部が弯曲するもの（11～15）と、燈明皿様の小型品（16）とがある。また技法上からみると、口縁部外面がナデのもの（7・9）と、外面のナデが端部にとどまるもの（11、13～15）とがある。8・10・12は、ケズリの範囲が底面に限られる。16は赤色粒の混入がめだち、外面が粗いオサエにとどまり、ナデ



第17図 北区池下層出土の土器、土製品



第18図 北区溝下層出土の須恵器（1～12, 22～29）、
綠釉陶器（13～16, 18～21）、灰釉陶器（17）

を欠く。

鉢 (18) 須恵器の器形をうつしたもの。製作後の加熱によって、器壁が剥落している。

壺 (17・22~27) 17は、小型品で、内面が黒変し、ハケメを残す。22~24は口縁端部が内面に肥厚する。欠失する肩部は球形に近い。調整法の判明する24のはあい、胴部外面及び口縁部内面にクシ状工具によるハケメが残る。25・26は長壺で、口縁端部が上方に尖る。ハケ調整をみる。胎土中に細砂の混入が著しい点で、胎土の精良な22~24と対照的である。

土製品 (28・29) 土馬。28は手綱の表現を残す。

須恵器 (第18図、図版21・22)

壺 (1~9) 内外面をヨコナデで調整する。ただし細部にいくぶん相違があり、見込みをタテナデで調整したものがある。また底面の調整にも差があり、未調整のものと、ナデを加えたものとがある。小型品は總じて胎土中に砂粒がめだつ。1の口縁端部に墨書きを見る。

皿 (10) 口縁部内外面にヨコナデ、見込みに不揃いのナデを加える。底面は未調整。

壺 (11) 内面はヨコナデ。上面に粘土紐状痕を残す。白色砂粒の混入がめだつ。

鉢 (12・22・23) 12は、内外面にヨコナデ。底面に糸切り痕を残す。G10P 6出土鉢 (第25図7) のように、口縁端部は屈曲するのである。22は、内面をヨコナデ、外面上半をヨコナデ、下半をケズリで丁寧に調整する。外面に煤が付着する。23は、胴部に凹線がめぐる。内外面にヨコナデ、底面に糸切り痕がみえる。瓦質に近い多孔質の焼き上がりで、堅紙さに欠ける。重ね焼きの痕跡であろうか。外面上半全体が黒変する。

壺 (24~28) 25は、大型の長頸壺。24・26・27は小型の長頸壺。28は短頸壺である。25は灰釉陶器かもしれない。頸部は二段構成をなす。27は底面に糸切り痕を残す。多孔質で堅紙さに欠ける。28は肩部に自然釉が付着する。頸部周辺に環状に釉を欠く。

壺 (29) 外面にタタキメを残す。頸部に粘土紐の接合痕を見る。

綠釉陶器 (第18図・図版23)

碗 (13・14・19・21) 13は土師質で淡緑の釉色を呈する。内面にトテン痕をみる。底面に糸切り痕を残し、釉を欠く。近江系の製品であろう。14はやや堅い土師質で、浅緑の釉色を呈する。底面に釉が及ぶ。細身で大きい輪高台がつく。見込みにトテン痕を残し、環状の凹みがつく。19は須恵質で淡褐色の釉がかかる。底面及び高台部にケズリを加える。21は須恵質で、淡緑色の釉がかかる。底面に釉を欠き、鮮明に糸切り痕が残る。X形の窓印がある。

皿 (15・16・18・20) 15・16は土師質で淡褐色～黄褐色の釉が底面にも及ぶ。内面にミガキがかかり、底面及び高台にケズリが残る。削り出し高台であろう。20は土師質で緑色の釉がかかる。外面をケズリで調整し、内面にもケズリ痕を残す。高台の底面に焼成後の搔痕がある。18は須恵質で、淡い明緑の釉色を呈する。内面に蓮の葉脈を沈線で表現している。底面にも釉が及ぶ。

灰釉陶器（第18図、図版23）

皿（17）須恵質で、内面上半の一部に、白済した緑色の釉がつく。高台はやや尖る。

第4節 溝最下層直上出土品

土師器（第19図、図版23）

壺（7・8・10・11）7・8は口縁端部の内外面にヨコナデ、内面全体にヨコナデをみる。胎土中に赤色粒の混入がめだつ。10・11は内黒土器である。底面に低い高台がつく。内面全体にミガキを加える。口縁部はヨコ方向、見込みはタテ方向に、ミガキわけている。外面はミガキを欠き、オサエなど粗い調整にとどまる。

皿（1～6）1～5は口縁端部が弯曲する。弯曲部の内外面にヨコナデを加え、底面はオサエの粗調整にとどまる。6は直線的に開く口縁部をもつ。口縁端部の内外面及び内面全体にヨコナデを加える。1～5の皿と相違して、胎土中に赤色粒が多い。なお、13の底面に墨書きを見る。

壺（9・12・16・20～22）9・12は内黒土器である。外面に煤が付着し、煮沸に使ったことが知られる。内面の調整は丁寧で、9にはハケ及びミガキ、12にはナデを加えている。ウンモ様の微細片を多く含み、内黒の高台付壺の胎土に近い。16は小型の粗製土器である。20～22のうち、20・21は口縁端部が軽く上方に突出し、22は内面に肥厚する。20は口縁部内面にヨコハケが残り、21は胴部外面に粗い櫛状工具によるタテハケがみえる。22は外面に強いケズリを加え、凹凸が激しい。

製塙土器（第49図15・16）口縁部が内湾して開き、胴部がくびれる。器壁は厚く、砂粒の混入が著しい。胴部外面に粗いタテハケを加えている。外面が赤変し、強い二次加熱を受けたことが知られる。

須恵器（第19図、図版23）

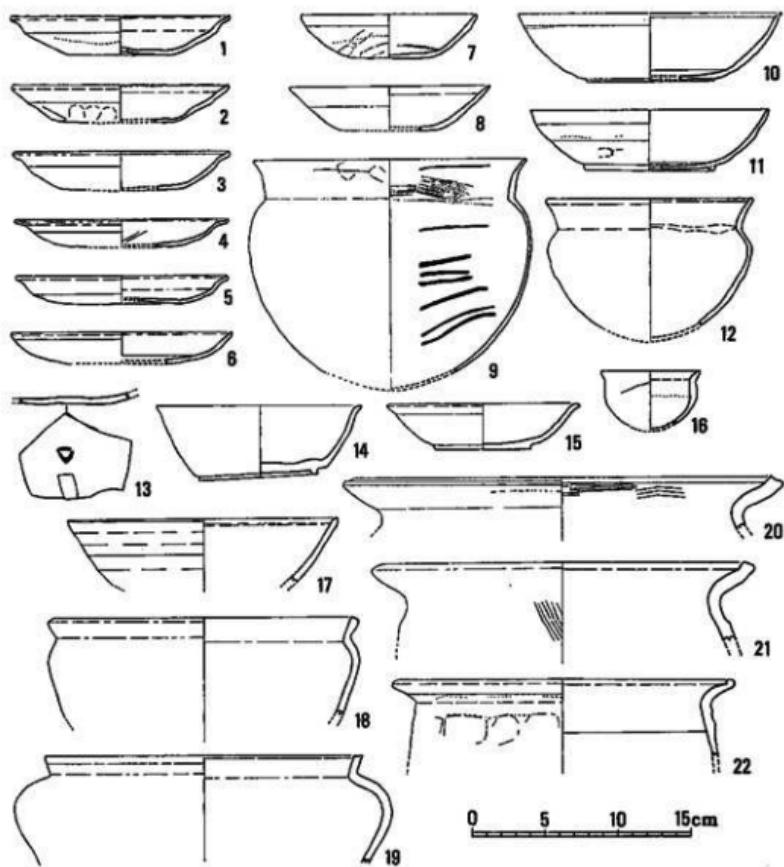
壺（14）底面のやや内側に高台がつく。内外面ともヨコナデ、底面に回転によるヘラキリ状の痕跡を残す。白色砂粒が混入する。

鉢（18・19）内外面ともヨコナデ。18は堅硬な須恵質で、19は堅硬さに欠け瓦質に近い。

綠釉陶器（第19図、図版23）

碗（15・17）15は土師質で明るい緑褐色の釉がかかる。底面に糸切り痕と、切り離し後のケズリ痕とをみる。17は淡褐色の硬質な素地に黄緑色の釉がかかる。口縁端部内面に浅い沈線がめぐる。

溝最下層直上の年代は、10世紀前葉に比定しうる。



第19図 溝最下層直上出土の土師器（1～13, 16, 20～22）,
須恵器（14, 18, 19）, 磁胎器（15, 17）

第5節 溝最下層出土品

土師器（第20・21図、図版24）

坏（第20図1～7, 29～31）深い厚手品（1～7）と、浅い薄手品（9～17）がある。1・16は、底面をのぞく内外面にナデが及ぶ。2～7・13・17は、外面のナデが口縁端部に限られる。9・11は口縁部下半にケズリを加えている。10～12・14・15は、外面全体にケズリを施し

ている。そのなかで、10・12・15は、口縁端部まで強いケズリがあり、また赤褐色を呈する点で相似品といえる。口縁端部が内面に肥厚する坏は、いずれも外面にケズリ技法をそなえる。胎土中に赤色粒を含む。

29~31のうち、29・31は内黒土器である。29は外面にミガキを加え、焼成も堅敏である。内面に暗文があり、外面に炭化物が付着する。31は内面にヨコナデ、外面にケズリを施している。内面に暗文をみる。30は大型の高台付坏で、外面全体にケズリ痕が著しい。内面はナデ。29・31の胎土には赤色粒がみえず、30はその混入が著しい。

皿（同前18~28）20・24・25は、口縁端部外面にヨコナデ、その下部にケズリを施す。22・23・26・28の外面には、オサエで粗く調整した一部にケズリを加える。21・27は、口縁部外面にヨコナデを加える。ヨコナデの範囲に差があり、21は底面との境まで及び、27は端部にとどまる。外面に右上りの粘土紐痕をみる。なお、口縁端部が屈曲して肥厚する27は、胎土に赤色粒を欠く点で、他と相違する。18・19は小型品である。18の口縁端部に黒変があり、燈明皿に使ったことが知られる。19は、外面にヨコナデを欠き、掌紋が残る。

鉢（第21図1~4・7）1~4は墨書き人面土器であり、7は墨書きを欠く同形態の鉢である。外面にはオサエによる押圧痕が著しく、口縁端部及び内面はナデで丁寧に整えている。脚部下方に粘土接合時の痕跡を残す。顔貌の表現はいずれも類似する。

壺（同5・6・8~13）5・6は小型の壺で、外面をハケ、内面をナデ・オサエで調整する。内外面に煤が付着し、煮沸に使ったことがわかる。8は内黒の黒色土器である。9・10・13は、口縁端部が内面に肥厚し、脚部が球形に近い壺である。10は粗いハケ、13はタタキとハケによる調整がみえる。胎土は緻密である。11・12は口縁端部が丸く終る長壺である。外面をタテハケ、内面をケズリで調整している。他の壺に較べ、砂の混入が著しく、胎土に精良さを欠く。

高台片（同14）壺の高台の破片であろう。

坏（同15・16）坏部の外面に斜行の暗文がみえる。16は、筒部をケズリで七角形にととのえ、脚部に重強の暗文を加えている。胎土中に赤色粒を多く含む。

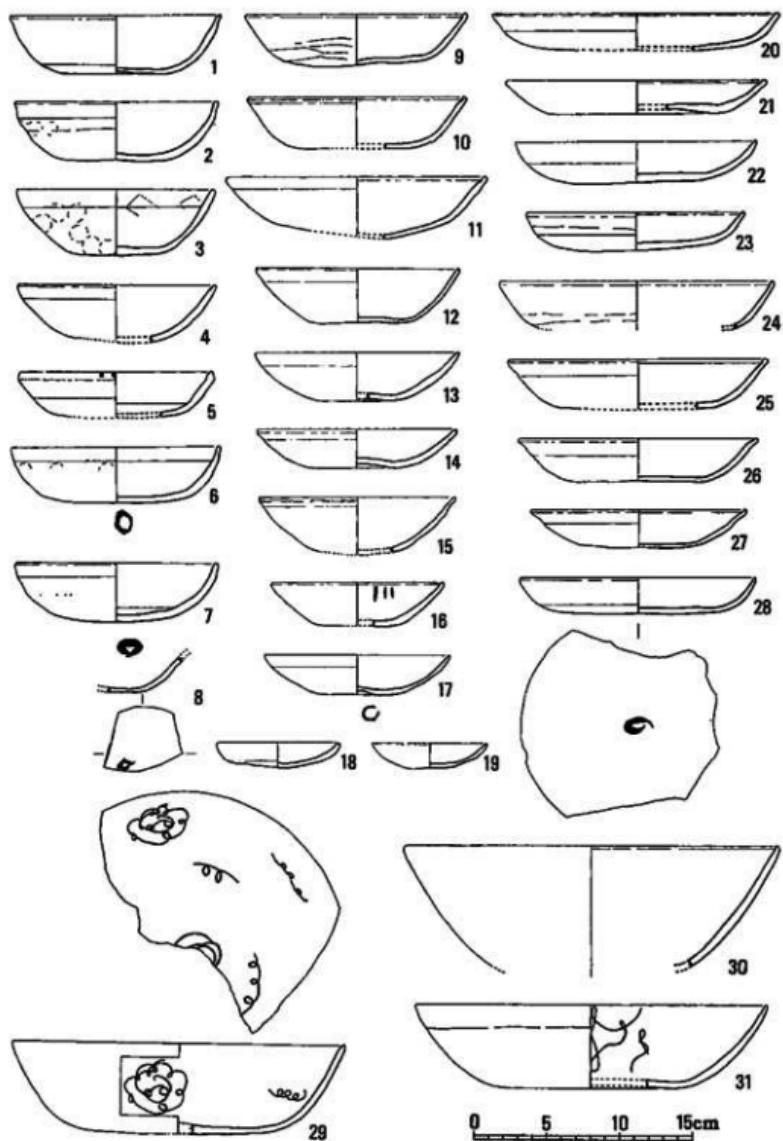
土製品（同17~19）17は手づくねの瘤形土製品で、炊き口及び底面にケズリを残す。18・19は土馬である。

須恵器（第22図、図版25）

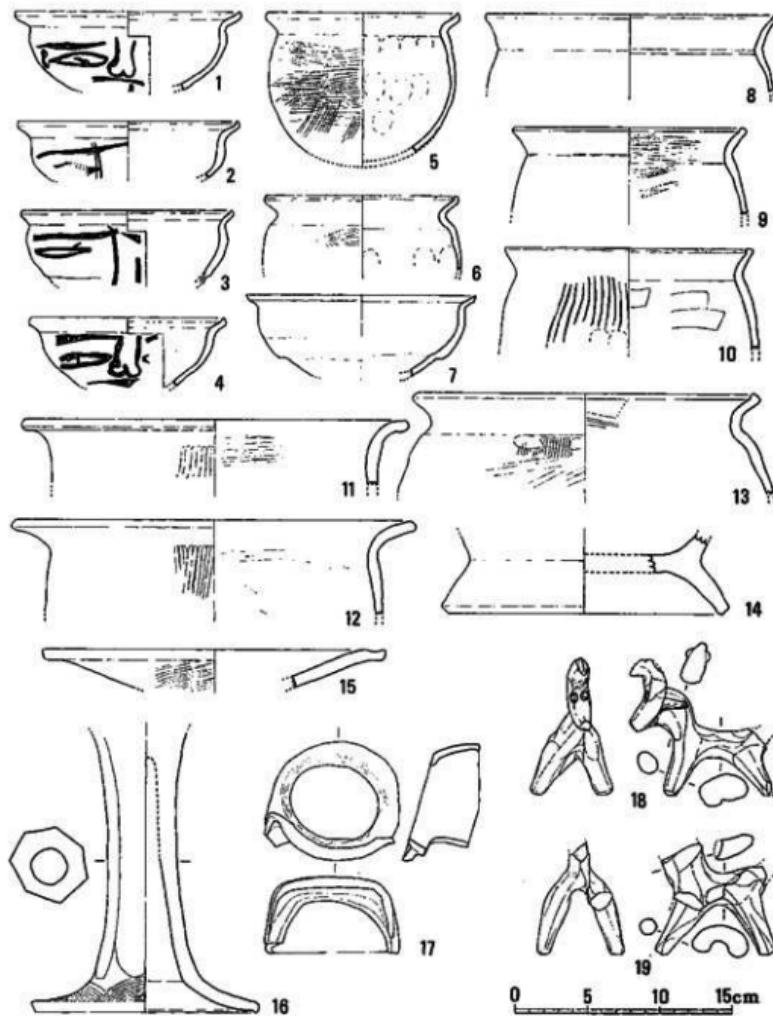
坏蓋（1~9）頂部に粘土紐状痕をとどめる。5~7は多孔質で堅敏さに欠ける。8は内面を硯に転用している。小型品の8・9は胎土に精良さを欠く。

坏（10~21）10~17は高台付で、18~21は高台を欠く。高台がいずれも底面の端部に位置し、外方にやや開く。その点で最下層出土の坏と相違する。底面はナデ調整のものが多い。無高台坏のうち、底面の残る18~20には、いずれも粘土紐状の痕跡が明瞭である。19・20は多孔質で堅敏さに欠ける。

皿（22）底面に粘土紐状痕を残す。



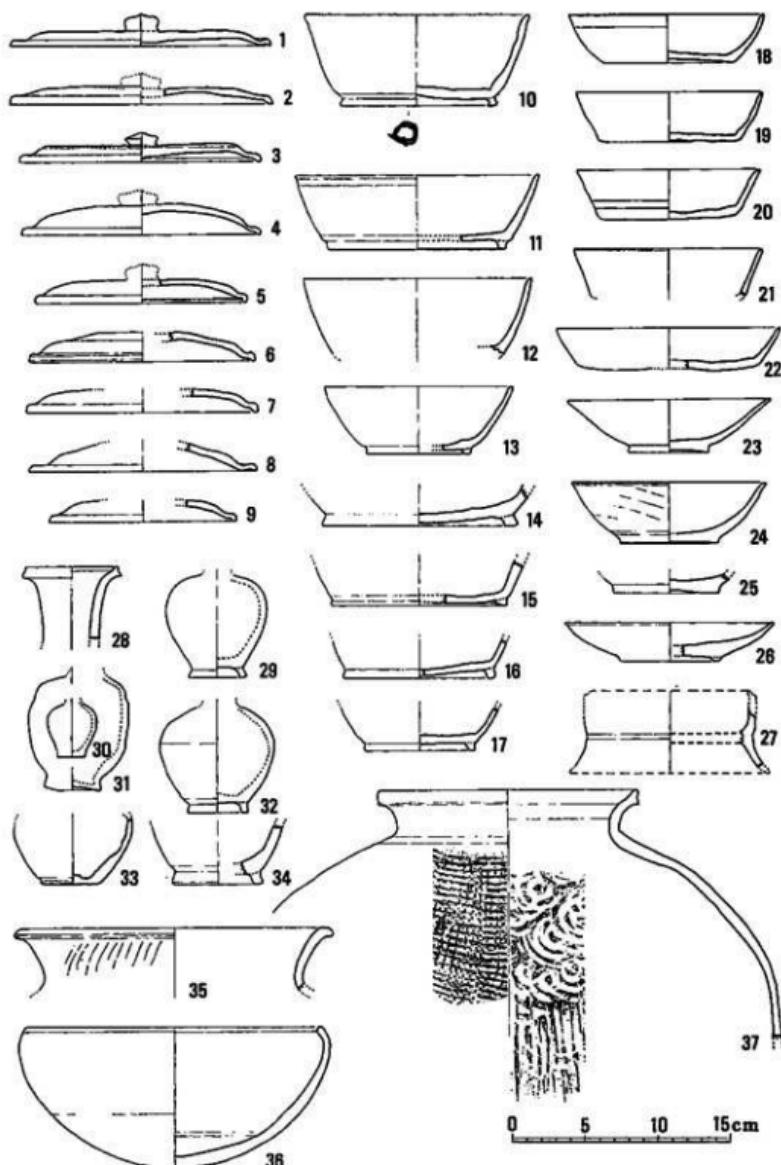
第28図 北区溝段下層出土の土器群



第21図 北区調査最下層出土の土器器、土製品

壺（28～34）いずれも小型壺である。有高台品（29・32・34）と、無高台品（30・31・33）とがある。有高台品は、ナデによって丁寧に器壁を整えており、いっぽう無高台品は、外面にオサエの凹凸、底面に糸切り痕を残す粗製品である。口頭部の28は、有高台品のものであろう。

鉢（36）内面をヨコナデ、外面をケズリで調整している。黒色粒の流れがめだつ。



第22図 北区溝塚下層出土の須恵器 (1~22, 28~37),
縹軸陶器 (23~25, 27), 斧軸陶器 (26)。

甕 (35・37) 35は口縁部外面にタタキメを残す。37は、肩部に格子状タタキ、腹部に平行タタキを見る。内面の当て具痕もまた、それに応じて変わっている。

綠釉陶器 (第22図、図版25)

碗 (23~25) 23~25は、堅緻な素地に、黄~黃緑色の釉が底面にも及ぶ。23は胎土がきわめて緻密な、磁器に近い優品であり、高台部にケズリがみえる。

合子 (27) 明褐色の須恵質の素地に浅緑色の釉がかかる。

灰釉陶器 (第22図、図版25)

皿 (26) 内面全体及び口縁部上半に浅緑色の灰釉がかかる。角形の高台がつく。

滝最下層の年代は、9世紀後葉に比定しうる。

第4章 井戸の調査

第1節 素掘曲物式井戸と出土品

井戸枠を欠き、曲物のみからなる井戸（第1表、第23図、図版6）。素掘曲物式とは、本来、井戸枠を設げず、底板を欠く曲物を土中に埋置した井戸の形式をいうが、第1表に示した諸井のうちには、造井時の枠が消失し井筒の曲物のみ遺存するものを含むかもしれない。しかし、双方を分離しがないので、一括しておくことにした。

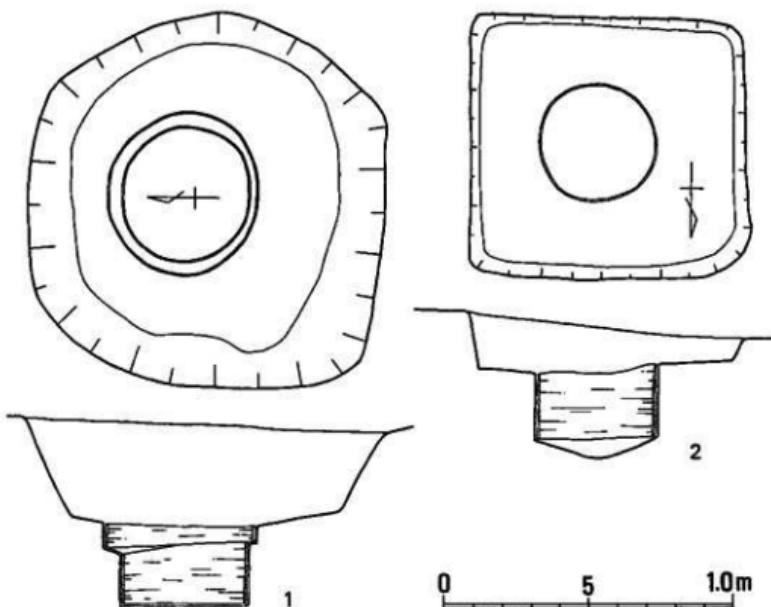
この種の井戸13基のうち11基が北区に集中し、そのことごとくが北区南域に位置する。また、時期の判明する9基のうち7基が平安時代にあたり、残る2基が鎌倉時代に入る。北区では西流する平安時代の小川を検出しており、したがって、素掘曲物式として一括した井戸の大半は、この小川の南岸沿いに位置することになる。井戸底部は、絶対高で25.60~25.90mの間にあり、他型式の井戸の場合と較べて浅い。したがって、井戸の涌水は、飲料用とともに、水辺の作業にも使われたと想像される。

ちなみに、底板を有する点で井戸とみなせない埋置曲物例として、石囲いをそなえたG11P7がある。これもまた川辺に位置する点で、水作業の施設とみられる。

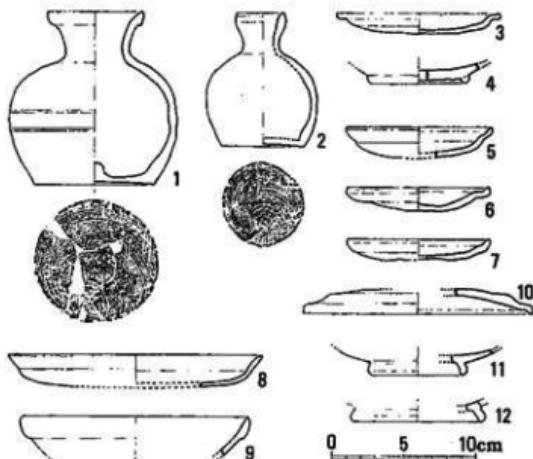
G 17 B W 3 出土品（第25図、図版26）

土器皿皿(10~15)いずれも口縁端部が弯曲する。先端がやや肥厚する。ほぼ同大で口径14.4cmをはかり、法量上の規格の存在を示唆する。口径15.0cm前後をはかるG10P6の同形皿よりも、いくぶん小さく、時期がやや新しいことをうかがわせる。胎土中に赤色粒をほとんどみない。なお、11のはあい、口縁端部内面に4ヶ所の黒変部があり、燈明皿に使われたことが

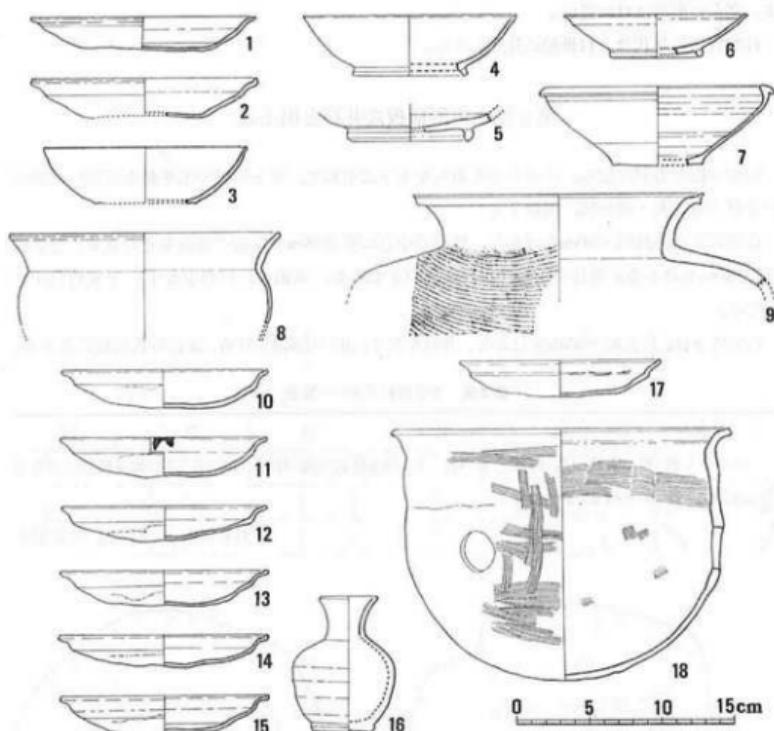
第1表 索掘曲物式井戸一覧表



第23図 素掘曲物式井戸図 (1;G11BW1 2;G17BW3)



第24図 G16BP1 出土土器 (1~4),
G29W1 出土土器 (5~12)



第25図 G10P 6出土土器（1～9）、G17BW 3出土土器
（10～16）、G3P 4出土土器（17、18）

わかる。

須恵器壺（16）小型壺、無高台で、底面に糸切り痕を残す。溝出土の無高台小型壺は、外面に凹凸を残す粗造品であるが、16のはあいは外面に丁寧なヨコナデを加えて器壁を整える。

G17BW 3の年代は、10世紀前葉～中葉に比定しうる。

G29W 1 出土品（第24図、図版26）

土師器皿（5～8）小型品の5～7は、口縁端部がわずかに彎曲をとどめる。口径10cm前後をはかる。粗製品で、端部にヨコナデを見る。5に赤色粒の混入が著しい。大型品の8は、口縁部に強いヨコナデを残す。赤色粒が混入する。

須恵器壺蓋（10）混入品であろう。

灰釉陶器碗・皿（11・12）11は、遺存部でみると、内面全体及び口縁部外面に、白渦色の灰釉をみる。外方に張り出した内窓気味の高台がつく。見込みに釉を欠き、口縁部全体にかか

る。高台の形態は11に近い。

G29W 1 の年代は、11世紀に比定しうる。

第2節 方形横板式井戸と出土品

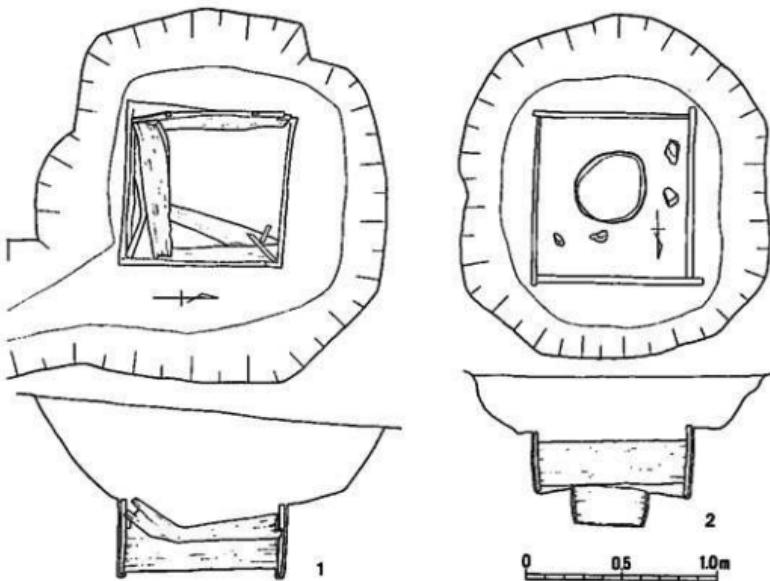
幅広の板を方形に組み、その方形木組みを上下に重ねて、やとい柄で水平筋を固定した形式の井戸（第2表・第26図、図版7）。

G18W 1 は枠長84×90cmをはかり、底部の中心に直径38cmの曲物の井筒をそなえる。井筒底高25.30mをはかる。外枠の板の仕口は3板つぎである。木組は、口形をなす。平安時代末にあたる。

G45W 9 は、枠長85×85cmをはかり、井筒を欠く。井戸底高25.37m。鎌倉時代前期にあたる。

第2表 方形横板式井戸一覧表

	北 区				中 区				南 区									
	井戸名	筒	規cm	模底cm	高	時期	井戸名	筒	規cm	模底cm	高	時期	井戸名	筒	規cm	模底cm	高	時期
筒有	G18W 1	曲	90	84	25.47	平末												
筒欠		/											G45W 9	/	85	85	25.37	鎌前



第26図 方形横板式井戸図 (1: G45W 9 2: G18W 1)

G18W1出土品（第27図）

土器皿（1～11）1～4は褐色大皿。口縁端部をつまみ上げ、上方に尖らせる。底面に板状压痕を残す。1～4の復原口径14.5～15.0cmをはかり、G7P11の同系品よりやや大きく、G21P11の同系品（第35図）に近い。5は褐色中皿。口径12.4cmをはかる。

6～11は褐色の小皿。7は外面に2段のナデ、他は1段のナデである。口縁端部は縦じて丸く終る。底面の内窪するものがある。口径8.5～9.7cmをはかる。

瓦器碗（12～14）12・13は、口縁端部内面に沈線が走る。また、両品とも内外面にミガキを残す。14は、小型品で内面及び口縁端部外側が黒色を呈する。内面に横走のミガキを見る。それぞれ、12・13は12.0cm、14は8.4cmの口径をはかる。

須恵器盤（16）外面全体に細かい平行タタキを加える。内面に当て具痕をみない。外面が黒色、内面が灰色で、芯は灰白色を呈する。胎土に砂粒を多く含む。瓦質に近く、堅致さを欠いている。

白磁碗（15・17・18）いずれも白磁碗で、やや褐色がかかった釉色を示す。15は口縁端部が外反し、16は玉縁状になる。16のばあい、G29W1の同系品（第24図）と較べ、玉縁が丸みをもち、外面に棱をつくる。18は、削り込みの深い輪高台がつく。釉が高台に一部及ぶ。見込み外周に段をもつ。

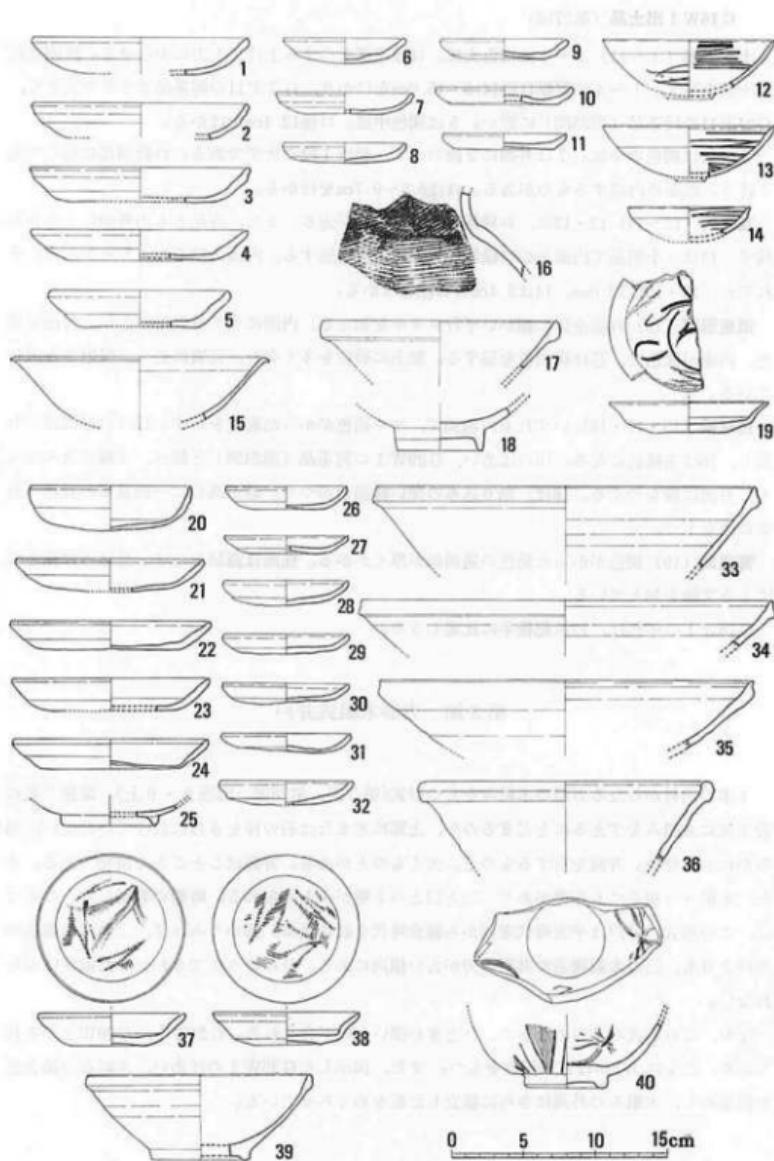
青磁皿（19）褐色がかかった鉛色の透明釉が厚くかかる。底面は露胎をなす。見込みに笠と櫛による文様を加えている。

G18W1の年代は、12世紀後半に比定しうる。

第3節 方形木組式井戸

4本の角材からなる方形の木組みをもつ形式（第3表、第28図、図版8・9上）。素掘り孔の最下部に木組みをえるにとどまるのか、上部に木または石の枠をさらに設けていたのか、明らかにしない。井筒を有するものと、欠くものとがある。井筒はことごとく曲物である。また、木組みの構造にも相違があり、□と口との2種がみとめられる。時期の判明したところでは、この形式の井戸は平安時代末期から鎌倉時代全般に及ぶ。細かくみれば、□の木組構造の井戸よりも、口の木組構造の井戸の方が古い傾向にある。分布のうえできわだった偏在はみられない。

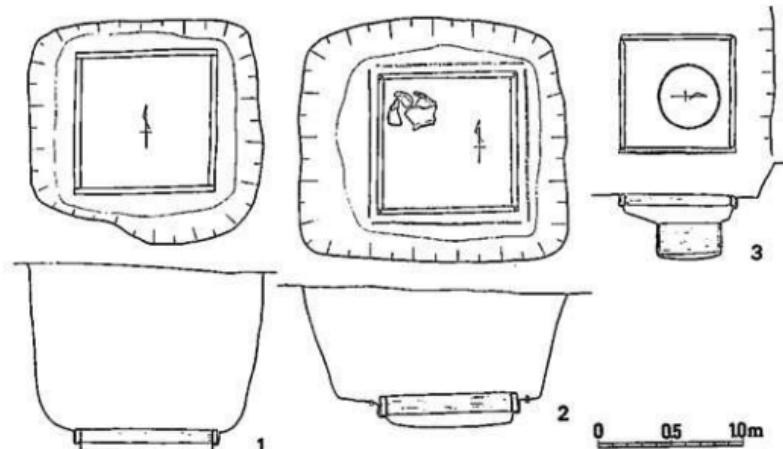
なお、この形式の井戸のなかに、ひときわ深いものが含まれる。G21W1、G29W2がそれであり、ともに1.3mほどの深さをもつ。また、図示したG35W1のばあい、木組みの結合部を釘留めし、木組みの外周にさらに横立した板をめぐらせていている。



第27図 G18W1 出土土器 (1~19),
G27W1 出土土器 (20~40)

第3表 方形木組式井戸一覧表

	北 区				中 区				南 区							
	井戸名	筒	規cm	模底cm	高	井戸名	筒	規cm	模底cm	高	井戸名	筒	規cm	模底cm	高	時期
筒 有	G 9 W 5	曲	80×80	25.56	鍛中	G 27 W 4	曲	54×53	25.60		G 38 W 5	曲	85×	25.31		平末
	G 12 W 1	曲	58×57	25.48							G 40 W 2	曲	102×95	25.38	～鏡物	
	G 17 W 1	曲	63×56	25.57	平末						G 45 W 4	曲	75×75	25.40		
	G 18 BW 2	曲	73×73	25.47	平末						G 47 W 2	曲	62×50	25.57		
筒 商 欠	G 8 W 3		67×52	25.80		G 21 W 1		80×66	23.90	鍛前	G 38 W 6		67×65	25.70	鍛初	
	G 9 W 9		80×80	25.32	鍛前		G 27 W 1			平末	G 40 W 1		72×69	25.67	平末	
	G 10 W 2				鍛		G 29 W 2		90×88	23.83	G 41 W 1					
	W 5		59×55	25.39			G 30 W 1		87×85	25.35	G 45 W 3					
	G 14 W 1		69×68	25.66	鍛	G 35 W 1		89×89	25.09	鍛前	W 7					
	G 16 W 1										W 8					
	G 17 W 4		78×	25.43	平・鍛						G 49 W 1		58×52	25.68		
											G 52 W 2		47×46	25.70	鍛前	
											W 3					鍛後



第28図 方形木組式井戸図 (1: G29W 2 2: G35W 1 3: G18BW 2)

第4節 方形隅柱横桟式井戸と出土品

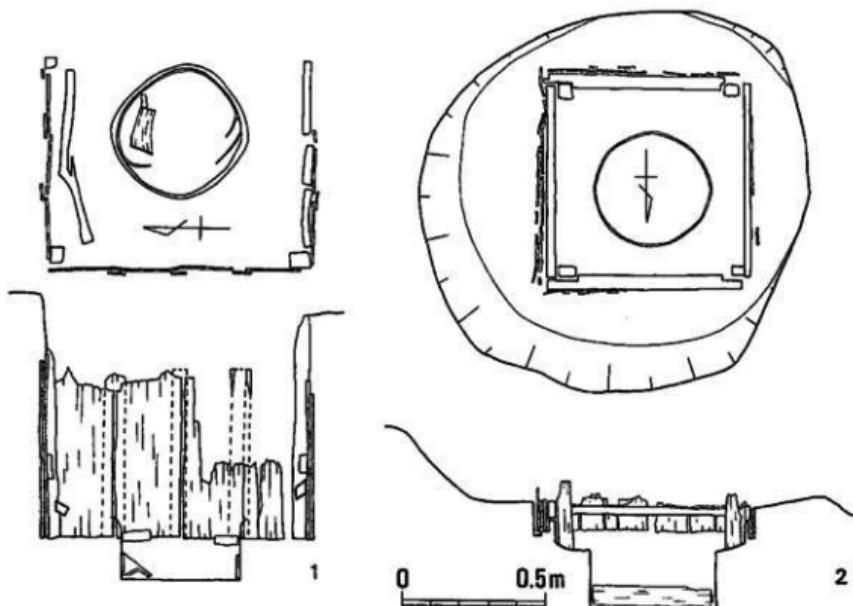
板を立てならべて側板とし、角材の隅柱をたて、柱に柄孔を穿って横桟をわたす形式（第4表、第29図、図版9下・10・11上）。漏水を防ぐために、側板の背後にさらに裏板を添えたものがある。井筒を有するものと、欠くものとがある。井筒はことごとく曲物である。時代の鎌倉時代にはほぼ限定できる。

G 27 W 1 出土品（第27図、図版27・28）

土師器皿（20～24・26～32）20件、白色の碗形品。口縁部が内湾する。口縁部に2段のココ

第4表 方形隅柱横枝式井戸一覧表

北 区				中 区				南 区												
井戸名	筒	規	模	底	高	時期	井戸名	筒	規	模	底	高	時期	井戸名	筒	規	模	底	高	時期
非 筒 有	G 2 W 1 G 10 W 4 W 6	曲 曲 曲	91× 75× 80×	25.39 25.58 25.32		鍵末														
井 筒 欠	G 17 W 5 6		75×75 65×			鍵末 平末 ～鍵初	G 21 W 2 G 27 W 3 G 33 W 1		85×80 73×68 105×105	25.16 25.40		鍵前 鍵末		G 39 W 9		76×76	25.33	鍵前		



第29図 方形隅柱横枝式井戸図 (1:G 2 W 1 2:G 10 W 4)

ナデ、見込みにタテナデを加える。底面はオサエによる粗い調整にとどまる。口径11.0cmをはかる。

21~24は褐色の大皿。口縁端部をつまみ上げて上方に尖らせる。口縁部にヨコナデ、見込みにタテナデをみる。底面に指圧痕を残す。

22の底面に板状圧痕が残る。復原径13.0~14.0cmをはかる。

26~32は褐色の小皿。口縁端部は外面に稜をつくって上方に尖る。上げ底のものがある。口縁部にヨコナデを加える。口径8.5~9.0cmをはかる。28は口縁端部の処々が黒変しており、燈明皿に使ったことが知られる。

須恵器鉢（33～36）33～35はねり鉢。口縁端部が上方に突出する。なお細かくみると、口縁端部の稜がくの字に屈曲するものと、下方に肥厚するものとがある。灰色～灰黒色を呈し、口縁端部が帯状に黒変する。33は白色砂粒の混入がめだつ堅緻な須恵質であり、残る34～35は精良な胎土で、やや緻密さに欠ける。ともに神出・魚住窯系の製品であろう。36は、口縁端部が円帯状に突出する。砂粒の混入が著しい。堅緻な須恵質。

磁器碗（39・40）39は白磁碗。玉縁状の口縁で、外面に稜をつくる。削り込みの浅い輪高台で、乳白色の釉は口縁部上半にとどまる。胎土は精良で白色を呈する。40は青磁碗。青白色の釉が高台外面に及ぶ。削り出しの輪高台である。胎土は灰色を示す。見込みは段をつくって隆起し、口縁部内面には笠と櫛を併用して草花文を描く。外面には削り出した堅い稜線と櫛による堅条線とを交互に配する。

青磁皿（37・38）37は、褐色がかった鉄色の釉が厚くかかる。底面及びその外辺部は露胎をなす。見込みに櫛と笠とによる文様を有する。胎土は淡褐色を呈する。38は、青灰色の釉色を示す。口縁部と底面との境に稜を有する。底面中央の凹部は露胎をなす。胎土は灰褐色を呈する。見込みに櫛目文様をつける。釉色、形態の点で37と相違がある。

G27W 1 の年代は、12世紀と13世紀との交に比定しうる。

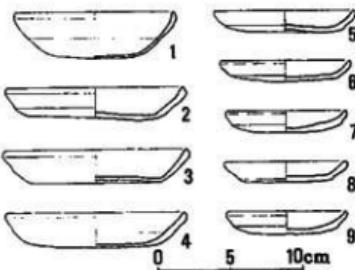
G17BW 6 出土品（第30図、図版28）

土師器皿（1～9）1は白色の碗形品。口縁端部を内寄気味につまみ上げる。底面に圧痕を残す。口径11.0cmをはかる。

2～4は褐色大皿。口縁端部は、外面に稜をつくって上方に尖らせる。見込み外周に指痕の凹凸を残し、底面に板状圧痕をみる。胎土中に砂粒の混入が少ない。口径12.15～13.0cmをはかる。

5～9は褐色小皿。口縁端部がつまみ上げて尖るものと、丸く終るものとがある。6は、口縁部のヨコナデ方向が逆時計回りで、通常の方向に反する。底面に板状圧痕を残すものがある。5は口径9.5cm、6～7は口径8.5cm前後をはかる。

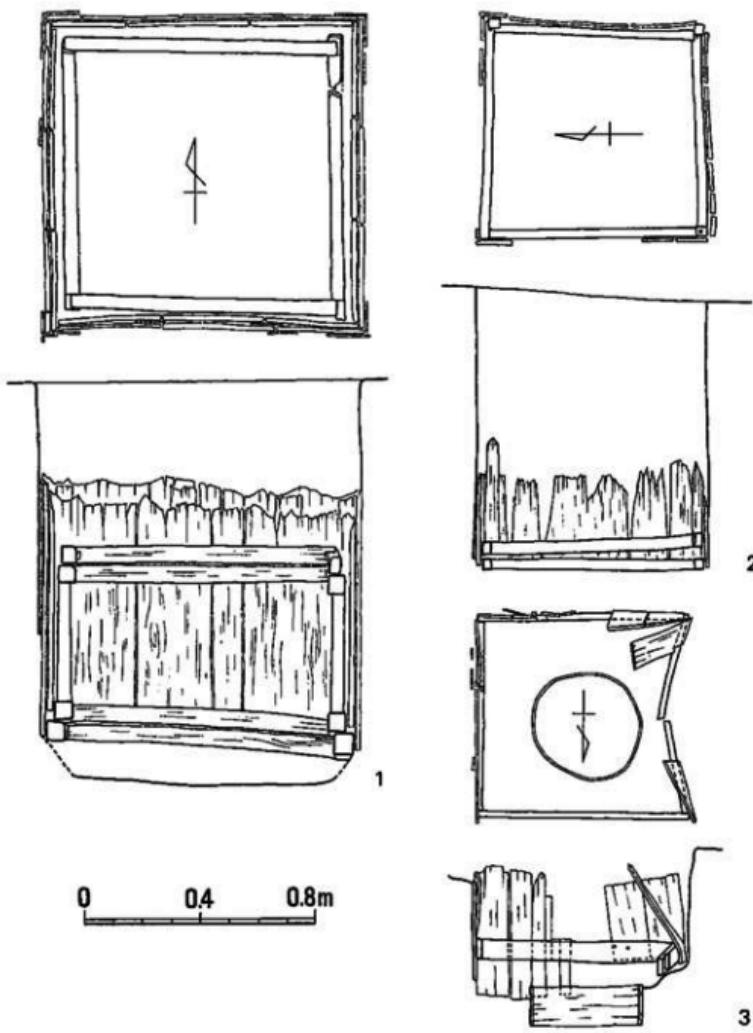
G17BW 6 の年代は、13世紀中葉ないしその前後に比定しうる。



第30図 G17BW 6出土土器

第5節 方形横桟式井戸

下底に角材で方形の木組みをし、側板をたてならべて、側板の崩壊を上部に計けた別の方形木組みで支える。そして、隅には束木を配して上部の方形木組の落下をうける形式（第5表第30図、図版11下・12）。遺存状態のよいG30W 2でみると、合わせ目に裏板を添えた側板が



第31図 方形横桟式井戸図 (1;G30W2 2;G45W1 3;G18BW1)

2重にめぐり、きわめて丁寧な作りであることが知られる。井筒を有するものと欠くものがあり、井筒には、曲物と桶がある。また判明した木組み構造は、ことごとく口であり、この点が方形木組式との相違として注意される。時代は鎌倉時代前期を中心とする。なお、G28W1、G30W2は底面高24.8m前後をはかり、特に深い。

第5表 方形横桟式井戸一覧表

	北 区				中 区				南 区						
	井戸名	筒	規cm	模底cm高	时期	井戸名	筒	規cm	模底cm高	时期	井戸名	筒	規cm	模底cm高	时期
井 筒 有 G1BW1	G 9 W 6	曲	80×80	25.26	鎌末～南北	G21W3	曲	93×92	25.34	平末	G47W1	曲	87×85		鎌前
	W 7	曲		25.42											
	G17W2	桶	117×110	25.53	平後										
	G18BW1	曲	73×71	25.34	鎌前										
井 筒 欠	G1BW1		78×78		鎌前	G27W2		73×64	25.53	平末～鎌前	G44W1		93×87	25.14	鎌前
	G 9 W 3		61×59	25.44	平末	G28W1		104×96	24.84	鎌前	G45W1		78×78	25.43	鎌前
	G10W1			25.33	平末	G30W2		105×101	24.76	鎌前	W 2		75×73	25.76	鎌前
											W 5		56×55	25.56	鎌前
											G46W1		79×76	25.27	鎌末
											W 3		90×90	25.15	鎌前
											G48W1		101×98	25.50	平末

第6節 多角形堅板側式井戸と出土品

側板を多角形に組んだ井戸（第6表 第32図、図版13）。六角形、七角形、八角形、十角形の各種がある。八角形、十角形の井戸には、稜角部に裏材をあて、六角形、七角形の井戸には裏材を欠く傾向がみられる。稜角部を鉄釘で結合するばいがあつたらしく、G 8 W 2 に結合の鉄釘が遺存する。時代は鎌倉時代をさかのぼらない。なお板材をたてて円形にめぐらせたG 1 W 2、G51W1は、多角形式の1種とし、後述の円形桶側式とは分離しておきたい。

第6表 多角形堅板側式井戸一覧表

	北 区				中 区				南 区						
	井戸名	筒	規cm	模底cm高	时期	井戸名	筒	規cm	模底cm高	时期	井戸名	筒	規cm	模底cm高	时期
井 筒 欠	G 1 W 2					G23W1		86×	25.22	鎌前	G37W1		54×54	25.43	鎌
	G 8 W 2		61×59	25.31	鎌						G38W1		45×	25.40	鎌後
	G16W2		74×70	25.40	鎌末						W 2		48×48	25.48	平末
	W 3		85×	25.35	鎌末						W 4		75×	25.38	鎌初
											G46W2		64×61	25.15	鎌後
											G51W1		70×69	25.43	室町

G51W1 出土品（第43図、図版33）

土師器皿（55～59）55は淡褐色を呈する。長い口縁部が低く斜上方に開く。端部を軽くつまみ上げる。内面のヨコナデが見込みに及ぶ。外面はオサエで丁寧に整えられている。砂粒をほとんど含まない精良な胎土である。口径12.8cmをはかる。

56は褐色大皿。口縁部が外反して開き、口縁部外面下半及び底面にオサエの凹凸が著しい。底面にわずかに板状圧痕をとどめる。砂粒を多く含む。口径10.4cmをはかり、G 3 P 1 の同系品（第43図）よりも小型である。

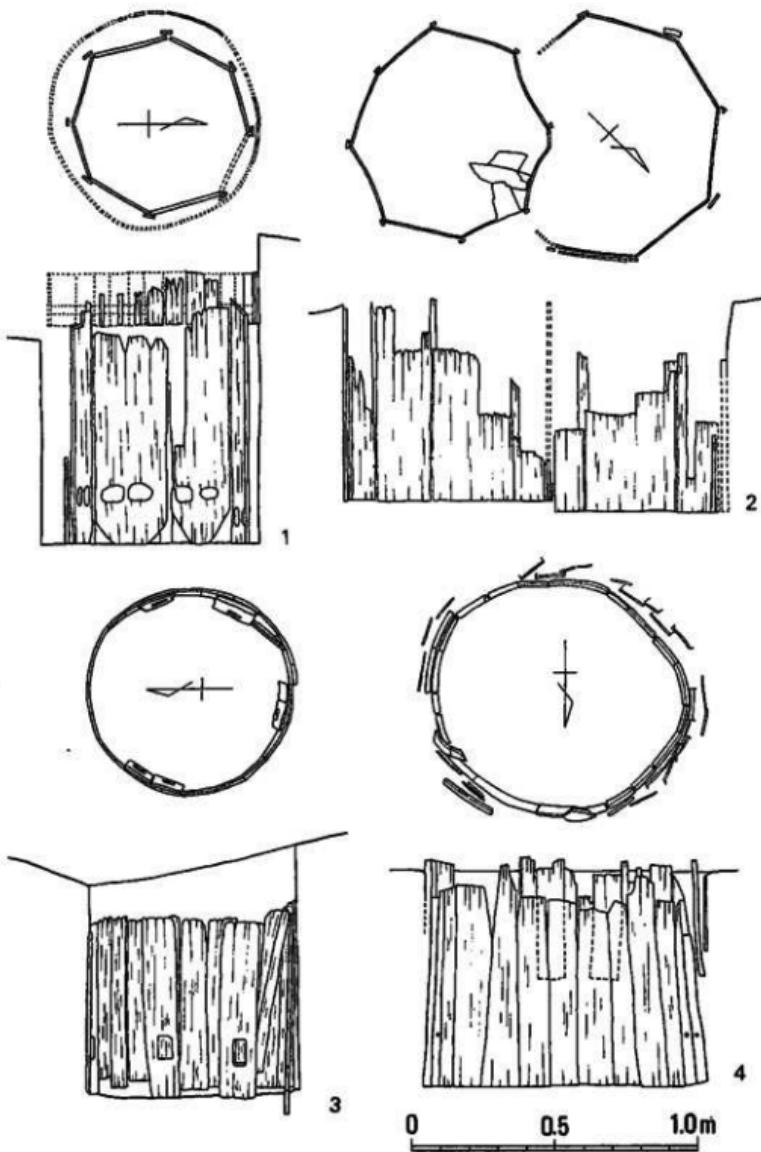
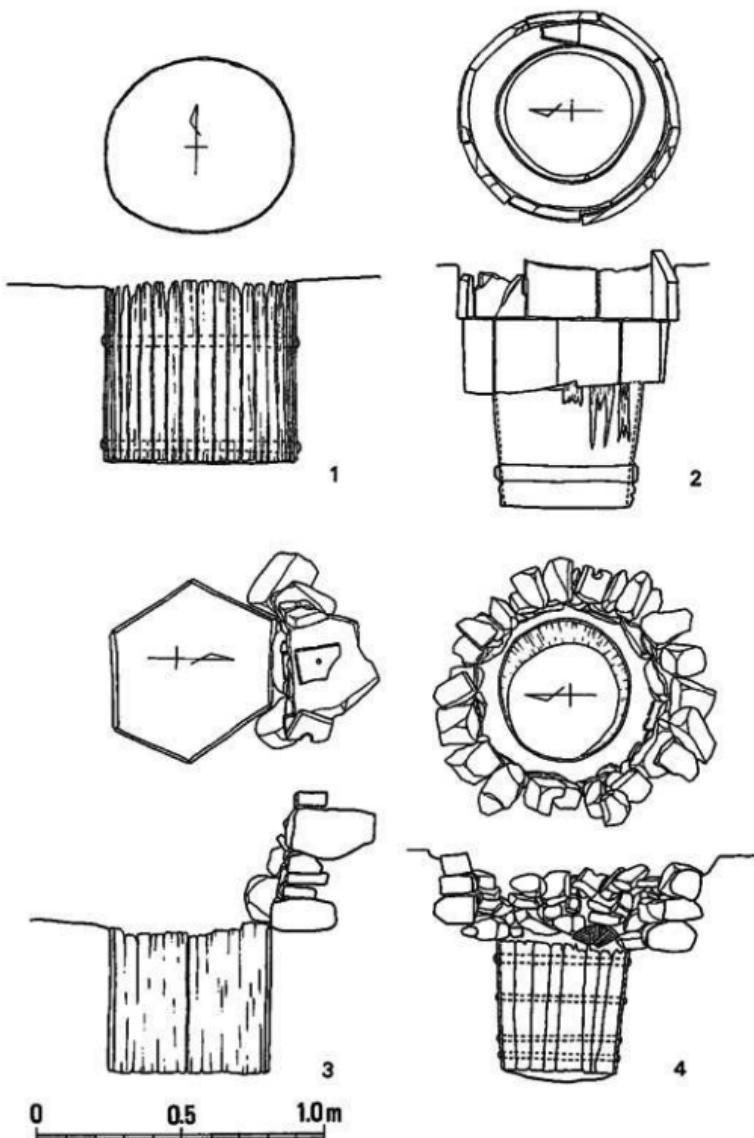


図32 四 多角形堅板側式井戸図 (1:G 8 W2 2:G16W2・3 3:G51W1 4:G 1 W2)



第33図 円形桶側式（1;G38W3），円形瓦側式（2;G52W1），
石組側式（3;G17W7，4;G37W3）の各井戸図

57~59は褐色小皿。底面及び外面下半に指痕の凹凸が著しい。砂粒を多く含む。口径 8.0cm 前後をはかる。なお、57は、ヨコナデの方向が通常と相違して逆時計回りである。工人が左利きのせいであろう。

G51W1 の年代は、15世紀前半に比定したい。

第7節 円形桶側式井戸

井戸の側部に桶を利用した形式（第7表 第33図、図版14）。G9W10、G38W3の2基を確認した。G9W10は直径82cmをはかり、鎌倉時代後期に、G38W3は直径62cmをはかり、南北朝時代にそれぞれ比定できる。

第7表 円形桶側式井戸一覧表

北 区				中 区				南 区				
井戸名	筒	規cm	模底cm高	井戸名	筒	規cm	模底cm高	井戸名	筒	規cm	模底cm高	時期
筒欠	G9W10	/	85×80	25.43	鎌後	/	/	/	G38W3	/	64×60	25.53 室町

第8節 円形瓦側式井戸

側部に平瓦を利用した円形井戸で、桶の井筒をそなえる（第8表 第33図、図版14下）。G52W1は直径70cmをはかる。出土遺物から時期を判定するに至らないが、近世に入るものであろう。

第8表 円形瓦側式井戸一覧表

北 区				中 区				南 区				
井戸名	筒	規cm	模底cm高	井戸名	筒	規cm	模底cm高	井戸名	筒	規cm	模底cm高	時期
筒欠		/			/			G52W1	/	70×70	25.55	

第9節 石組側式井戸

側部を石組みした形式（第9表 第33図、図版15上）。下部に井筒をそなえ、井筒には桶などを利用している。G1AW1、G32W2、G37W3などがこの形式にあたり、G1AW1は、鎌倉時代中期に、G37W2は同前半に、G37W3は南北朝時代にあたる。なお、G17W7は井筒として六角形木組みをそなえ、桶井筒のものと相違する。

第9表 石組側式井戸一覧表

北 区				中 区				南 区					
井戸名	筒	規cm	模底cm高	井戸名	筒	規cm	模底cm高	井戸名	筒	規cm	模底cm高	時期	
筒有	G1AW1	桶	75	25.77	鎌中	G17W7	板		25.40	鎌?	G37W2	桶	25.68 鎌前
								W3		65×65	25.54 室町		

第5章 ピットの調査

第1節 G10P 6 の調査と出土品

G10内の北西よりに位置し、灰色砂質土層を掘り込んだ円形ピット。直径1.3m、深さ20cmをはかる。瓦、土師皿、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、炭などが出土。

土師器（第25図、図版26）

皿（1・2）口縁端部が弯曲し、やや肥厚する。外面のナデは端部のヨコナデにとどまる。口縁部下半に右上りの粘土紐痕を残す。胎土中に赤色粒をほとんどみない。

壺（3）低い高台をもつ内黒土器である。口縁部内面にヨコミガキを加える。外面の調整は粗いが、軽いケズリがみえる。

壺（8）内黒の壺。口縁端部がわずかに肥厚する。口縁部内面にヨコハケ、胴部内外面にナデを加えて調整している。

須恵器（同上）

鉢（7）口縁端部を外方に折りかえす。わずかに残る底面に糸切り痕がみえる。灰色の須恵質であるが緻密さにやや欠ける。

壺（9）肩部に細かい平行タタキ、内面に無文の当て具痕が残る。灰褐色の緻密な胎土である。

緑釉陶器（同上）

碗（4）堅い土師質で、緑色の釉がかかる。釉に淡緑の斑点を含む。

皿（7）須恵質で暗灰色を呈する胎土に、淡緑色の釉がかかる。底面は露胎をなし、糸切り痕が残る。

灰釉陶器（同上）

碗（5）残存部の外面及び見込みに釉を欠いている。付け高台はいくぶん内湾して尖る。底面は同心円状ケズリ。

皿（6）口縁部上半の内外面に白濁の釉がかかる。付け高台は先端が丸い。口径12.6cmをはかる。

G10P 6 の年代は、10世紀前葉～中葉に比定しうる。

第2節 G3P4の調査と出土品

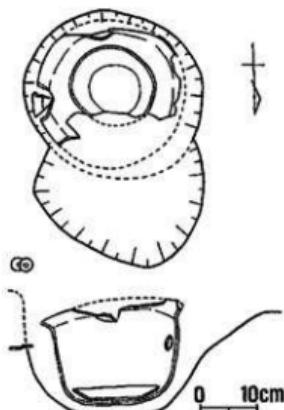
灰色砂質土層を掘り込んで土師器甕が正位の状態に据えられていた（第34図、図版16）。横は平面、断面ともに、甕の形状に合わせて掘られ、平面は直径30cmのほぼ円形である。甕の内底には土師皿が一枚正位に置かれていた。これの下部には僅かの炭が検出されている。甕の北東20cmのところに、陸平永寶鏡が二枚出土しているが、この甕と関連するものかどうか判らない。もっともこの甕の北側が後世の積によって破壊されているので、その際に取り出された可能性もある。その外には、甕底部に砂利や人骨は確認できなかつた。

土師器（第25図、図版19）

皿（17）口縁端部が屈曲する皿。外面の調整は端部のヨコナデにとどまる。口径14.0cmをはかり、G17BW3品（第25図）よりやや小さい。口縁端部の屈曲からみても、G17BW3の皿よりも時期のやや降ることを思わせる。口縁端部に2ヶ所の黒変部が残り、燈明皿としての用途を示唆する。

甕（18）半球形の胴部から、口縁部が外方に開く。小孔3個を等間隔に胴部に配する。穿孔が焼成前の作業であるので、仮器として作られたことが製作上からも知られる。内面にヨコハケ、外面に不定方向のハケを加える。

G3P4の年代は、10世紀中葉～後葉に比定しうる。



第34図 G3P4 造形図

第3節 G16BP1の調査と出土品

直径0.8m、深さ0.25mをはかる円形のピット。灰色砂質土層の上面で検出。瓦、土師皿、綠釉陶器、灰釉陶器などが出土。

土師器（第24図、図版26）

皿（3）口縁端部が弯曲する。ヨコナデが縁部内外面に及ぶ。口径11.1cm。

瓦器（同上）

甕（2）須恵器の小型甕を模したものであろう。内外面にヨコナデを加える。底面に糸切り痕を残す。

須恵器（同前）

壺（1）明灰色で、緻密さに欠ける。瓦質に近い。内外面をヨコナデ。底面に糸切り痕を残す。水びきで器体を作ったらしく、底部内面の中央に、水びき時の残土をみる。

灰釉陶器（同上）

皿（4）遺存部に釉の付着をみない。厚い底面に、断面三角形の高台がつく。
G16B P 1 の年代は、11世紀中葉～後葉に比定しうる。

第4節 G21P11の調査と出土品

G21からG27にまたがってひろがる不整形のピット。3.0m×2.7m、深さ0.6mをはかる。灰色砂質土層の上面で検出。土師皿、羽釜、瓦器、ねり鉢、中国陶磁器、金銅製ピン、刀装具鉄型、坩埚、櫛口、炭片などを検出した。とりわけ鉄鋼関係の出土品が多い点で注目される遺構である。

土師器（第35図、図版27）

皿（1～7）1～5は口縁部が内弯する皿。口縁端部に2～3段のナデ、見込みにタテナデを加える。底面に多数の指圧痕を残す。溝出土の坏皿類のばあい、外面に粘土紐痕を残すものが少なくないのに対し、外面にその痕跡をみない。成形は粗づくりでなく、円盤づくりによるのであろう。口径14.5～15.0cm前後をはかる。

6～11は小型の皿。口縁部外面に上下2段のナデをみとめる。見込みにタテナデを加える。底面に指圧痕をとどめる。口径9.5～10.0cmをはかる。

12は大型の皿。口縁部外面に2段のナデを加える。底面に指痕による凹凸が著しい。

13～17は、口縁部が内屈する小型品。

須恵器（同上）

鉢（19・20）内外面をヨコナデで整える。白色砂粒の混入がめだつが、胎土は緻密である。20は片口で、内面に磨減痕を残す。

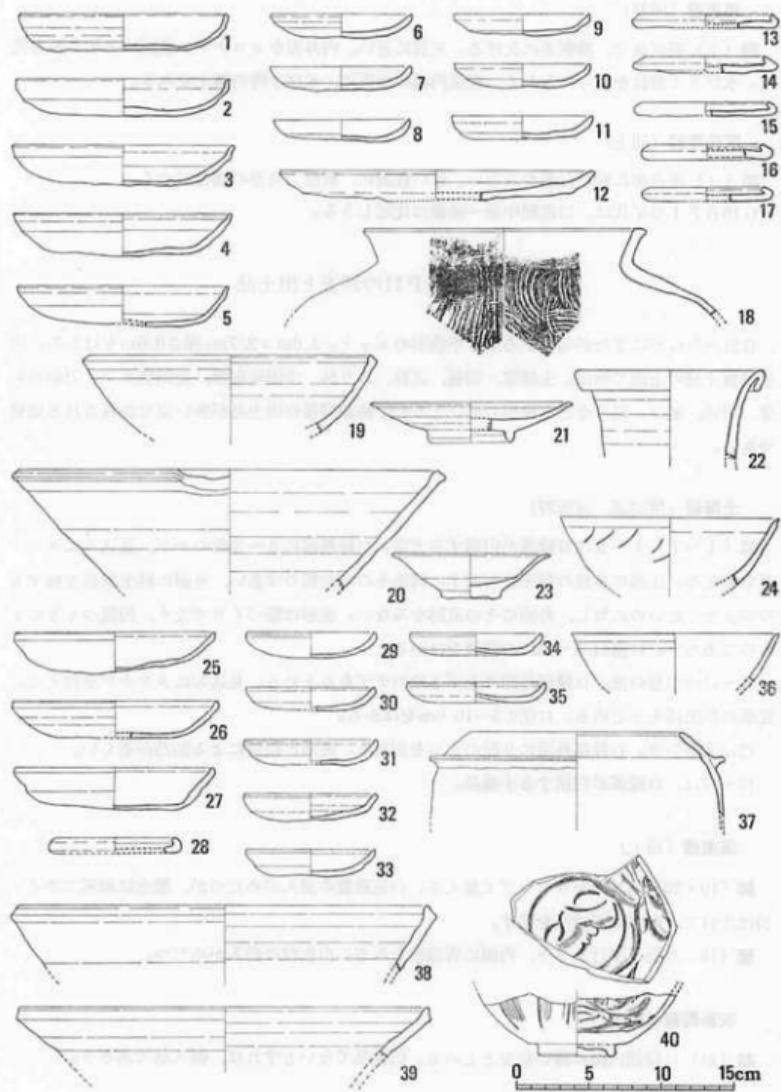
甕（18）外面に平行タキ、内面に青海波をみる。白色粒の混入がめだつ。

灰釉陶器（同上）

皿（21）口縁部内面に薄い釉をとどめる。伝世品でないとすれば、混入品であろう。

中国磁器（同上）

四耳壺（22）青白磁。口縁端部が下方に垂下する。水注かもしれない。



第35図 G21P11出土土器 (1~23),
G7P11出土土器 (24~39)

碗 (23・24) 23は小型の白磁碗。口縁端部が外反し、見込みを画する段がある。削り込みの浅い輪高台がつく。やや褐色がかった釉が高台近くに及ぶ。胎土は白色で、砂粒が混入する。24は、褐色がかった釉色の白磁碗。端部が斜上方に尖る。外面に文様があり、口縁端部に横走の沈線、その下部に斜行する幅広刻文がみえる。

金属器 (第50図、図版37)

金銅ピン (17) 銅製のピンで、表面を鍍金で飾る。断面円形。

G21 P11の年代は、12世紀前半または中葉前後に比定しうる。

第5節 G7 P11の調査と出土品

直径約100cm、深さ25cmの平面偏円形横で、下半分は粘質土層が堆積していた(第36図、図版16下)。この粘質土層に限って遺物が出土し、土師皿、青磁碗のほか多量の木炭片、焼土塊が検出された。

土師器 (第35図、図版27)

皿 (25~35) 25~27は褐色の大皿。G21 P11の1~5に較べ、口縁部が直線的に開く。先端をつまみ上げて面取りする。この先端のナデを含め、上下2段のナデをもつ。見込みにタテナデを加える。底面に指圧痕が多数残るが、27のはあい、さらに板状压痕を見る。口径13.5~14.0cmをはかる。

29~35は褐色の小皿。口縁端部をつまみ上げ、先端部が上方に尖る。上げ底のものがある。口径9.0~10.0cmをはかる。

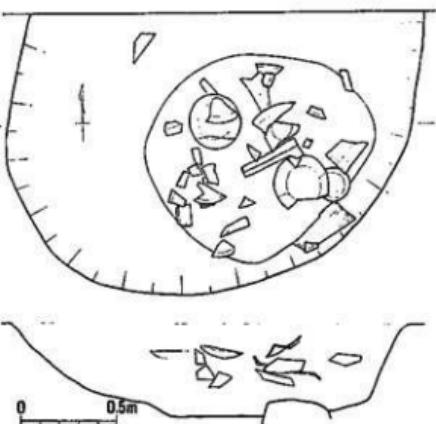
28は、口縁部が内屈する。

瓦器 (同上)

羽釜 (37) 口縁部が内傾する。口縁外面をヨコナデ、内面をヨコハケで調整。三脚がつくのであろう。

国産陶器 (同上)

鉢 (38~39) ねり鉢。須恵質で堅緻さにやや欠ける。黒色粒の混入がめだつ。神出・魚住窯



第36図 G7 P11遺構図

系の製品であろう。

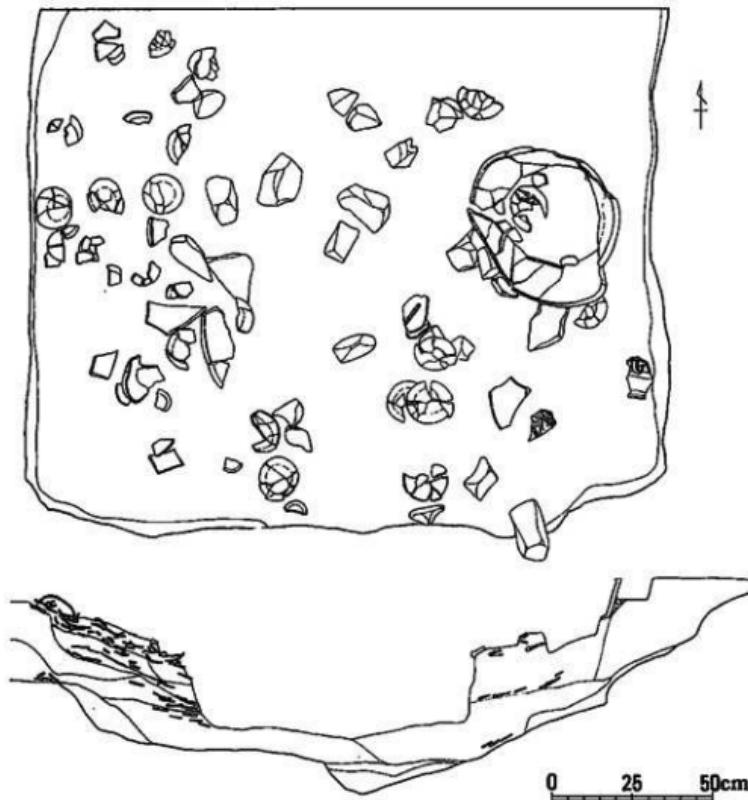
中國磁器（同前）

塊（36・40）36は白磁碗。40は、背磁碗で、褐色がかかった粘色を示す。櫛・笠をたくみに使って、口縁部内面には片彫りの草花文、外面には堅柔線文をみる。削り出しの輪高台で、釉が高台外面に及ぶ。高台の露胎部は乳褐色を呈し、胎土は緻密で淡灰色を示す。

G 7 P11の年代は、12世紀後半に比定しうる。

第6節 G 4 P19の調査と出土品

径 2×2 m、深さ 48cm の方形土壙（第37図、図版17上）。上面は、北側をのぞいてやや削ら



第37図 G 4 P19遺構図

れているが、ほぼ正方形を呈する。底部は不整形な三角形を呈し、北側の側壁をのぞいてすり鉢状に傾斜している。北側は、一度造形上面からほぼ垂直に6cmほど下り、さらに底部に向かって傾斜を強める。底部は15cm前後の河原石が多數混入した暗灰色粘質土を若干掘り込んだ状態である。

ピット内の堆積土は上下2層に分かれ相互に時間的な差異はない。上層は木炭をはじめワラ等の炭化物が多量に混入した搅乱土で、色調は一定しない。この層から多量の土器皿が出土した。いずれもピット中央に向かって折り重なり、完形のものが多い。また同じ層からは底部を欠いた火鉢が、置かれたような状態で検出された。近接して青磁の水注片や瓦等も出土した。

下層は灰色粘土層からなる。この層全体に木材片がみられ、一部は底部の暗灰色粘土層中にまで達していた。炭化したものはなく、成形された幅10cm、厚み1~2mm程度の薄い板状のものであった。出土状態に一定の規格性はみられず、投棄時の人為的な方向性も確認できなかった。この層からは、土器皿も数多く出土したが、ガラス小片を数点検出した。また黒漆の他に朱漆で梅花文を配した漆器も出土している。

底部を形成する暗灰色粘土層中から河原石に混って須恵器の二面鏡を検出した。この遺品は土壌に伴うものではない。

土器（第38図、図版28・29）

皿（1~37）1~6は白色碗形品。口径12.5~13.0cmをはかるものと、やや小型で10.5cm前後をはかるものがある。口縁部が斜上方に開き、G27W1の同系品（第27図）ほど内斎しない。端部は、外面に軽い棱をつくって、上方に尖る。底面は凹凸が少なく、褐色大皿の底面に較べ、円滑である。板状の押圧痕をとどめるものがある。

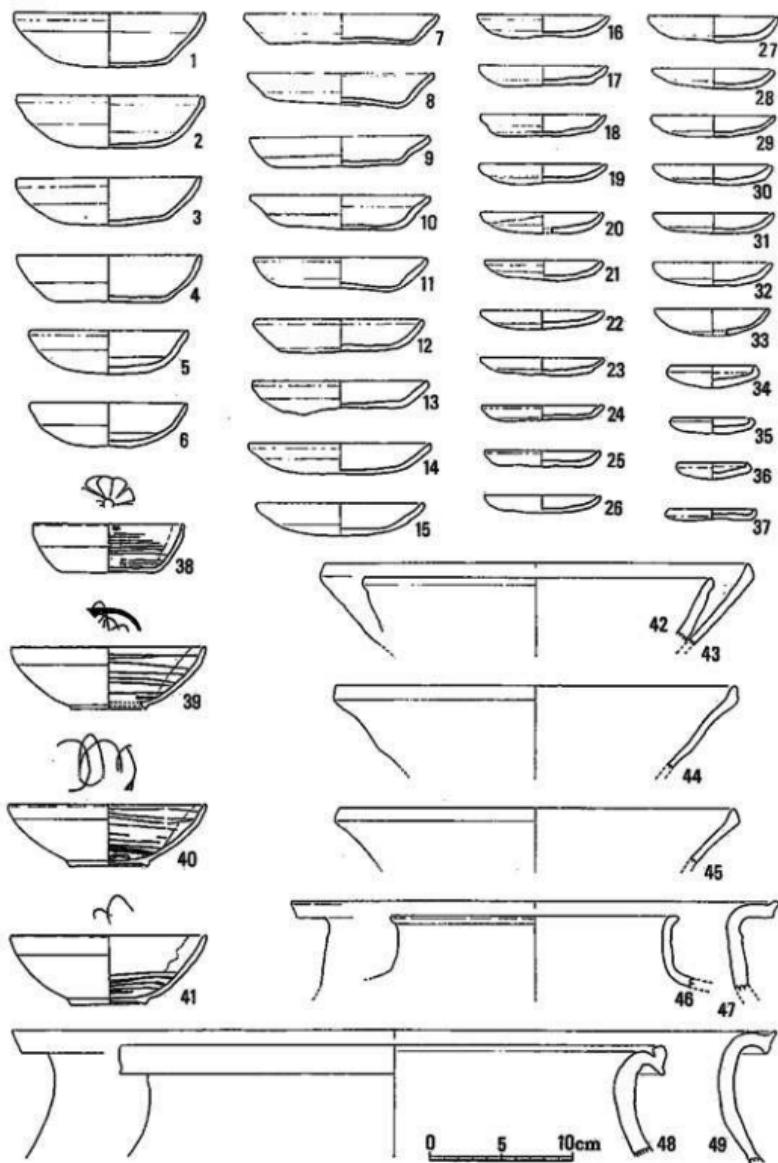
7~15は、褐色の大皿。口縁端部は、軽くつまみあげて、上方に尖る。口径12.5cm前後をはかる。G27W1の同系品に較べ、小型で、端部の突出が小さい。また、縦じて粗製である。底面に凹凸が著しく、板状圧痕を残すものがある。

16~33は小型品。口径8.9~9.0cmをはかる。口縁端部は尖るものと、丸く終るものとがある。稜は鋭い。上げ底のものはない。個体別の色調は一様でなく、16~20は白色品である。白色品は縦じて深い。G27W1の同系品に較べて粗造である。底面に板状の圧痕を残すものがある。

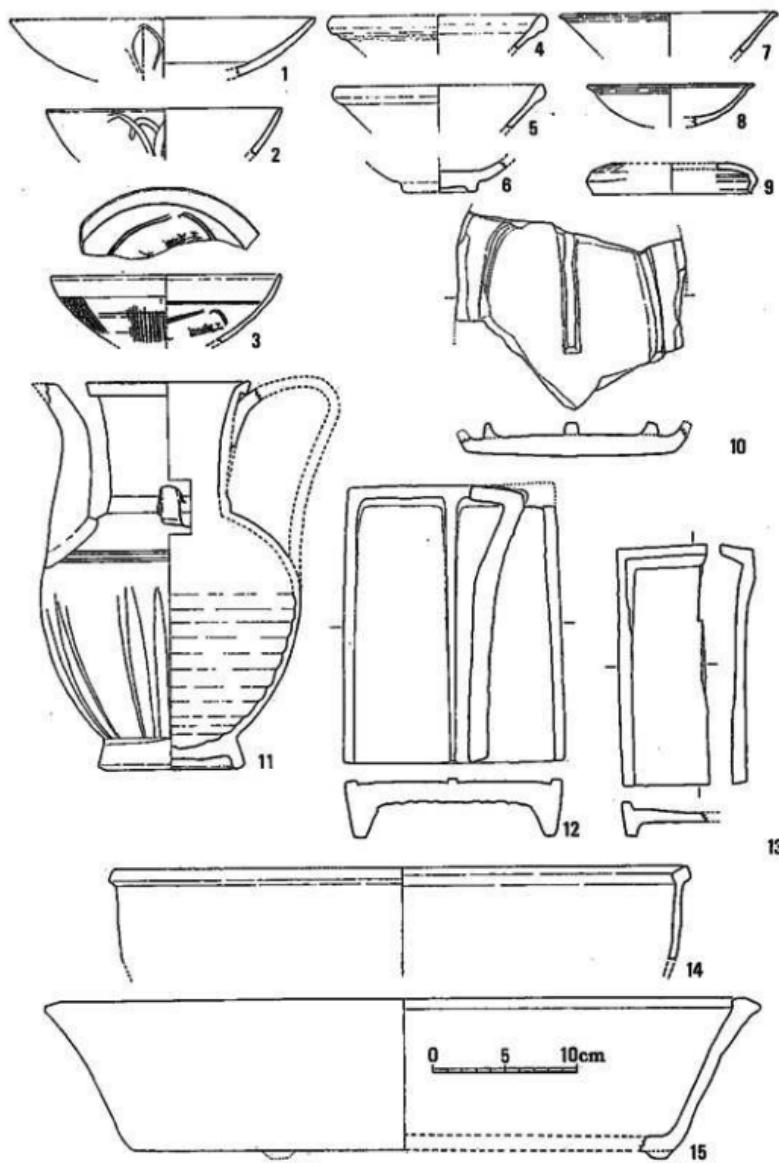
34~37は、口縁部の内屈する小型品。いずれも白色で、碗形品に近い色調を呈する。

瓦器（同上、図版29）

碗（38~41）有高台品（39~41）と無高台品（38）とがある。いずれも外面にミガキを欠く。38は、口縁部内面にヨコミガキ、見込みに花弁風の暗文を加える。39~40は、口縁部内面に筋状のヨコミガキ、見込みに連続円文を加える。41は、口縁部内面上半に文様を欠く。張りつけの低い高台がつく。口径13.5cm前後をはかる。和泉型であろう。



第38図 G 4 P19出土の土器類（1～37）
瓦器（38～41），陶器類（42～49）



第39図 G 4 P 19出土の中国陶磁（1～9・11～14），
陶器（10），石器（12・13），火鉢（15）

國產陶器（同前）

鉢（42～45）ねり鉢。43・44は、口縁端部外面の釉が薄く、胎土の緻密さに欠ける。口縁端部が灰黒色、他は灰色を呈する。45は、端部が鋭く屈折し、堅緻な須恵質である。43～45は神出・魚住窯系の製品であろう。

甕（46～49）47は、端部が斜上方に突出し、外面に自然釉がかかる。茶褐色を呈する。48・49は、端部が上下に広がり、黒褐色を呈する。いずれも常滑窯の製品。

中國陶磁器（第39図、図版29）

碗（2～8）1～3・6は青磁、4・5・7・8は白磁。2は外面に鶴蓮弁文を割り出す。褐色釉。3は、外面に堅い柳目文、内面に笠と櫛による文様をついている。白色の透明な釉色を示す。4・5は玉縁口縁で淡褐色の釉がかかる。7・8は端部が外反し、7は灰白色、8は乳白色の釉色をみせる。6は、青緑色の釉が高台外面に及ぶ。底面の露胎部は灰褐色を示す。口縁部外面に、割り出しの蓮弁文がつくのである。

皿（1）青緑色の大皿。外面に割り出しの鶴蓮弁文がつく。

蓋（9）不透明で軟調な青灰白色釉がかかる。胎土は灰色を呈する。合子の蓋であろう。上面に刻線花文の一部が残る。

水注（11）双耳がつく青磁の水注。淡い灰褐色の透明灰釉がかかり、貫入をみる。高台は露胎をなす。露胎部も同色である。胸部に浅い割り出しの蓮弁文がつき、肩部に凹線がめぐる。

盤（14）角形の口縁端部をもち、端部に釉を欠く。内外面に褐色の釉がかかる。胎土に砂粒の混入が著しく、釉調もまた滑らかさに乏しい。

土製品・石製品（同上、図版30）

硯（10・12・13）10は須恵質の風字二面硯。海・陸を弧状の突帯で区画する。縁部が区画の突帯より低い。縁外面をケズリで整える。本造形には伴なわないようである。陸に磨滅痕が残る。12は、2連の長方形の二面硯。緻密な砂岩質。底面に加工のノミ痕が鮮明に残り、職人足跡に描かれたノミを使う硯士の作業とよく符合する（第75図）。13は長方硯の断片。粘板岩質。陸に使用の磨滅痕をみる。外面は丁寧に磨かれ、工具痕をとどめない。

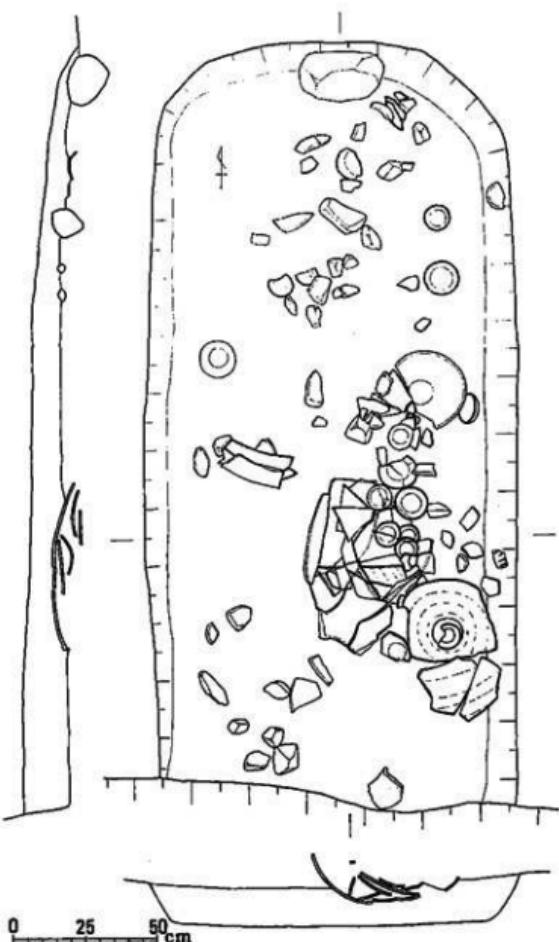
火鉢（15）口縁部がやや外反して開き、底部に低い三足がつく。土師質で暗褐色を呈する。内面及び口縁部上端付近を丁寧なヨコナデで仕上げる。底面にワラ、モミの圧痕が多数印されている。

G4P19の年代は、13世紀中葉およびその前後に比定しうる。

第7節 G40P 4の調査と出土品

幅1.3m、深さ0.2mの隅丸長方形を呈する平底のピット（第40図、図版17下）。南端が別のビ

トで切断されており、
遺存長2.7mをはかる。
ピット内の東部から中
国陶器の大型四耳壺が
その付近から、ねり鉢、
中国陶磁が出土し、土
師皿の出土もまたここ
に集中する。ピット全
域に握拳大の石が散乱
する。大型四耳壺は、
口縁部の大型破片が倒
立し、下半部が圧せら
れた状態で検出され、
正立して埋置したこと
が知られる。ねり鉢は
正立状態で出土し、土
師皿もまた、内面を上
にむけた状態のものが
多い。ピット内の下層
は炭泥りの粘質土層か
らなり、遺物の出土は
この層の上面にはとん
ど限られる。遺構の性
格はあきらかでない。



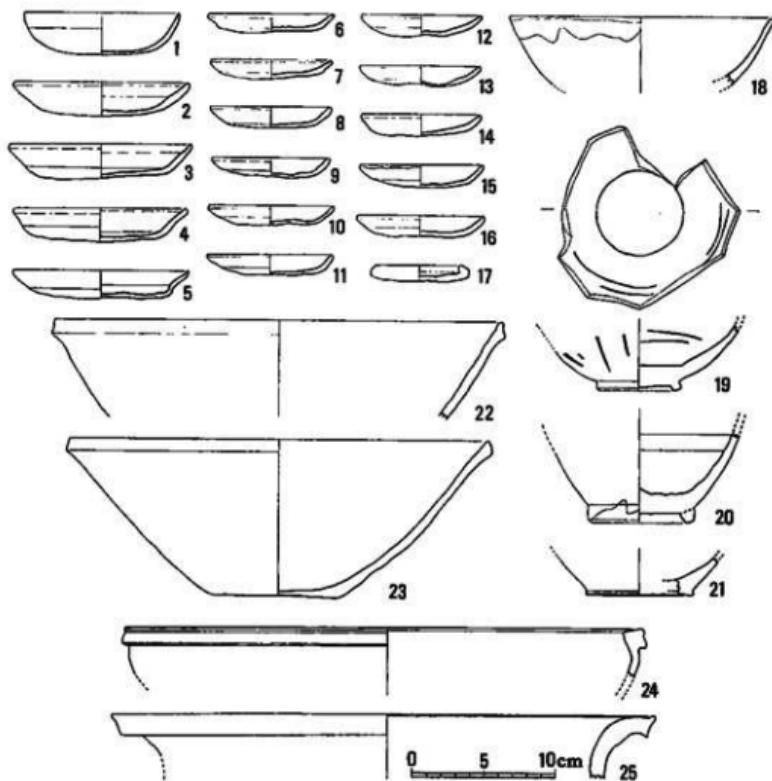
土師器（第41図、
図版30）

皿（1～17）1は白
色の碗形品。口縁端部
は内湾気味に尖る。口
径10.7cmをはかる。底面に凹凸が少ない。これは、板状品に押しつけたせいであろう。胎土は
きわめてよい。

2～5は褐色の大皿。口縁端部は、つまみ上げによって三角形状に尖る。口縁部円外面にロ
コナデ、見込みにタテナデを加える。粗い調整にとどまる底面に、板状压痕を残すものがあ
る。口径12.0～13.0cmをはかる。砂粒の混入をみる。

6～16は褐色小皿。G 4 P 19にあった白色品をみない。口径8.0～9.0cmをはかる。口縁端部

第40図 G40P 4 造跡図



第41図 G40P 4 出土の土器部（1～17）、国産陶器（22・23・25）、
中国陶器（18～21・24）

が上方に尖るものと、丸く終るものとがある。口縁部のヨコナデがことごとく、内面の見込み外周にも及ぶ。この点で、ナデが口縁部にとどまるものが多いG 4 P 19の同系品と相違する。見込みの調整と口縁部の調整との区別があいまいになったせいであろう。いずれも胎土に砂粒が混入する粗製品である。

17は口縁部が内傾する小皿。白色で、胎土は精良である。内面全体をヨコナデで整える。

国産陶器（同前）

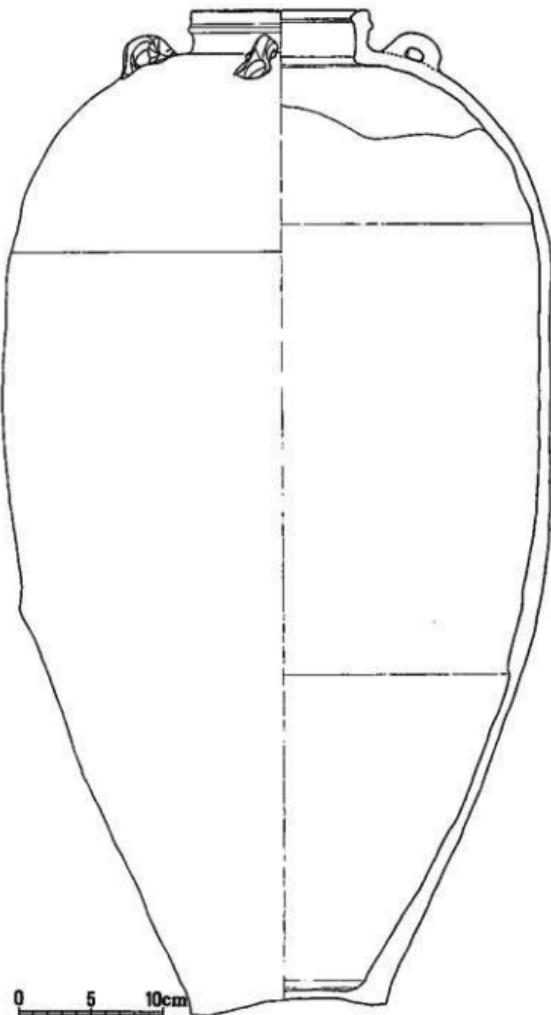
鉢（22・23）いずれもねり鉢である。22は、多孔質で胎土の緻密さに欠ける。灰白色を呈し、口縁端部外面は帯状に黒変する。23は、須恵質で灰色を呈する。口縁端部外面に帯状の自然釉がめぐる。内外面をヨコナデで仕上げ、底面に糸切り痕を残す。ともに神出・魚住窯系の製品であろう。

甕 (25) 口縁端部が斜上方に尖り、外面に鋸い面取りを有する。厚手で、砂粒の混入が著しい。常滑窯系。

中国陶磁器(第41・42図、図版30・31)

碗 (第41図18・19・21) 18は、明るい灰褐色で、不透明な釉調を示す。口縁部外面に釉の垂下を見る。胎土は精良で灰色を呈する。内外面とも文様を欠く。19は、明褐色で透明な釉調をみせ、胎土もまた同色である。削り高台は露胎をなす。外面に模を欠く蓮弁風文様が残る。斜めからケズリおとしてつけた堅の筋目によって蓮弁を表現する。

壺 (第41図20・第42図) 第41図20は外面に不透明な淡灰色釉がかかり、高台は露胎をなす。内面に起伏の大きいクロ口目を残す。胎土は精良で、明灰色を



第42図 G40P4出土の中国陶器

呈する。四耳壺または水注の底部であろう。第42図は大型の陶質四耳壺。短い口縁部が直立し、端部に隆起がある。肩部上半に環状の粗雑な把手がついて、長い胴部が続く。外面に茶褐色の薄い釉がかかる。白色の飛沫が斑点状に付着し、釉調の乱れが著しい。内面をナデで整えているが、粘土の隆起から、底部、腹部、肩部の三段階に成形したことが知られる。

G 40 P 4 の年代は、13世紀後半に比定しうる。

第8節 G 8 P 2 の調査と出土品

直径 1 m 前後、深さ 0.3m をはかるやや梢円形を呈するピット。褐色土層の下部で検出。土師皿、羽釜、陶器片、坩堝一片などが出土。

土師器（第43図、図版31）

皿（1～23）1～7は白色の碗形品。口径12.0cm前後をはかる。口縁部が直線的に斜上方に開く。端部に再度ヨコナデを加え、上方につまみあげる。器壁が薄い。底面に押圧痕をとどめるものがある。

8～12はヘソ皿。白色～淡褐色を呈する。底面に指のオサエを加え、滑らかに突出させる。突出度に若干の相違がある。口縁部内面及び端部外面にヨコナデを加える。器壁が薄い。口径7.0～7.5cmをはかる。

13は、口縁端部が内傾する白色品。

14～18は褐色大皿。斜上方に開く口縁部は、丸く終る傾向があり、端部のつまみ上げがほとんど行なわれない。G 4 P 19やG 40 P 4 の同系品（第38・41図）に較べ、器壁が薄く、胎土中に砂粒の混入が著しい。口縁部内面及び端部外面にヨコナデを加えて調整しているが、丁寧さを欠くため、凹凸がはなはだしい。底面に板状压痕を見る。口径11.0～12.0cmをはかる。

19～23は褐色の小皿。口縁端部が丸く終る。内面のヨコナデが見込みの外周にも及ぶ。砂粒が多く混入する。作りに丁寧さを欠く。口径8.0～8.5cmをはかる。

瓦器（同上）

羽釜（24・25）口縁端部が内に尖り、上面が傾斜する。24は端部外面に凹線がめぐる。

鍋（26）口縁端部が、大きく上方に尖り、外面に幅広の面をつくる。

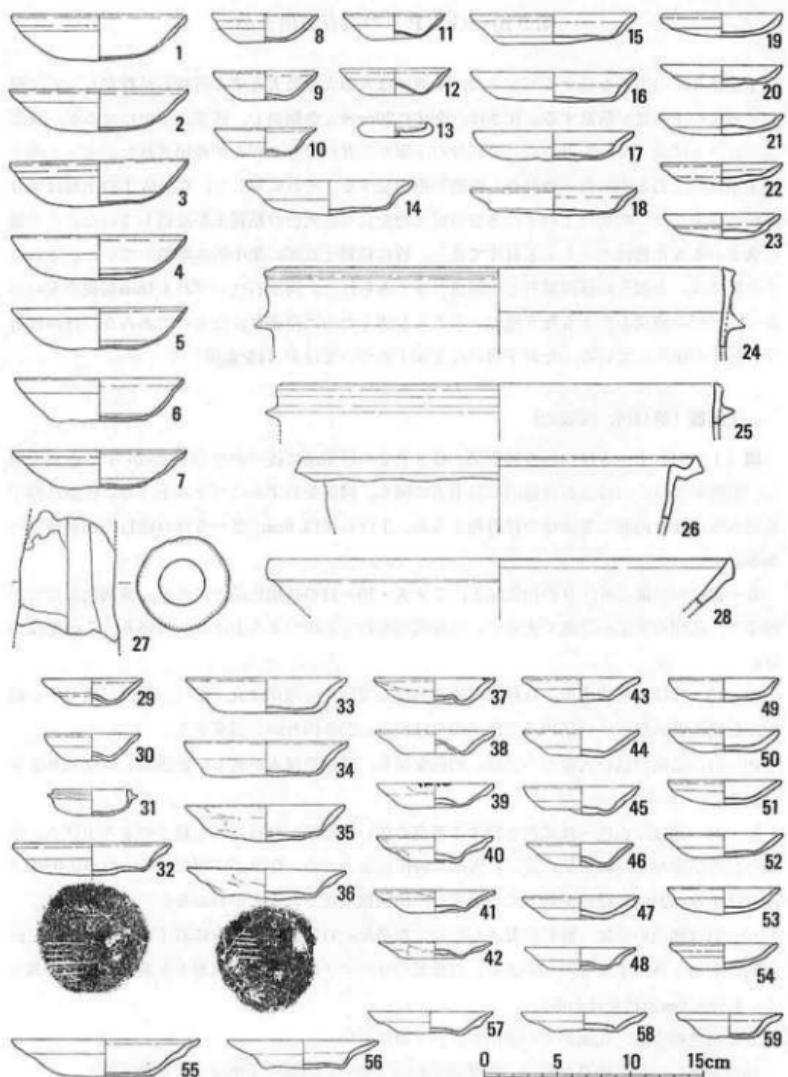
國産陶器（同上）

鉢（28）魚住窯系のねり鉢。口縁端部が外面に肥厚してやや垂下し、上方に尖る。

土製品（同上）

輪口（27）糀や茎や砂粒を多量に混入した粗い土を使い、外面に精選した土を塗って手づくねで仕上げる。

G 8 P 2 の年代は、14世紀前半に比定しうる。



第43図 G8P2出土の土器（1～26・28），縁口（27），
G3P1出土の土器（29～54），G51W1出土の
土器（55～59）

第9節 G 2 P 1 の調査と出土品

1辺 2.3m の方形を呈するピットで、上面には人頭大を最大とする河原石が群在し、石に混って多量の土師皿が散乱する。深さは、全体に20cmほど急傾斜し、底部は平坦になるが、東北部ではさらに深く65cmを計る。この部分の下層から井戸のG 2 W 1が検出された。ピット埋土の上層は河原石と土師皿との混合した暗褐色を呈する。それに対して、G 2 W 1の上部はすり鉢状に深くなり、暗褐色土の下に多量の炭化物を含む暗灰色の粘質土が堆積していた。この層に含まれる炭化物は主として木材片であり、特に粘質土底部に集中的に堆積していた。さらにこの層には、上層と同様河原石と土師皿が多くみられた。河原石はいずれも18cm前後のものが多く、井戸の埋戻しにともなう地盤のゆるみを防ぐために投棄されたものであろう。ほかに若干の鉄片が出土している。なお下層のG 2 W 1についてはP. 44を参照。

土師器（第44図、図版32）

皿（1～34）1～5は白色の碗形品。G 8 P 2の同系品に較べやや褐色がかった色調を呈し、器壁が厚い。口縁部が直線的に斜上方に開く。端部をわずかにつまみ上げる。底面に押圧痕をみる。4は内面に黒漆様の付着物をみる。1は口径13.8cm、2～5は口径11.5cm前後をはかる。

6～11はヘソ皿。6・9の白色品と、7・8・10・11の淡褐色品とがあり、淡褐色品の方が厚手で、底面の突出が急激で大きい。口縁端部をわずかにつまみ上げる。口径6～7cmをはかる。

12～15・23は褐色の大皿。口縁部がやや外反して開く。端部は丸く終り、凹凸が著しい。底面に板状圧痕が残る。口径10.5～11.0cmをはかる。23の内外面が黒変する。

19～21は器高の低い大型のヘソ皿。褐色を呈し、砂粒の混入が著しい粗造品。口径8.0cmをはかる。

22・24～26は、白色～淡褐色を呈する器高の低い皿形品。口縁端部を軽くつまみ上げる。砂粒の混入が少なく、碗形品に近い。底面に押圧痕をとどめ、作りが丁寧である。口径9.0～9.5cmをはかる。24の口縁部が処どころ黒変し、燈明皿に使ったことがわかる。

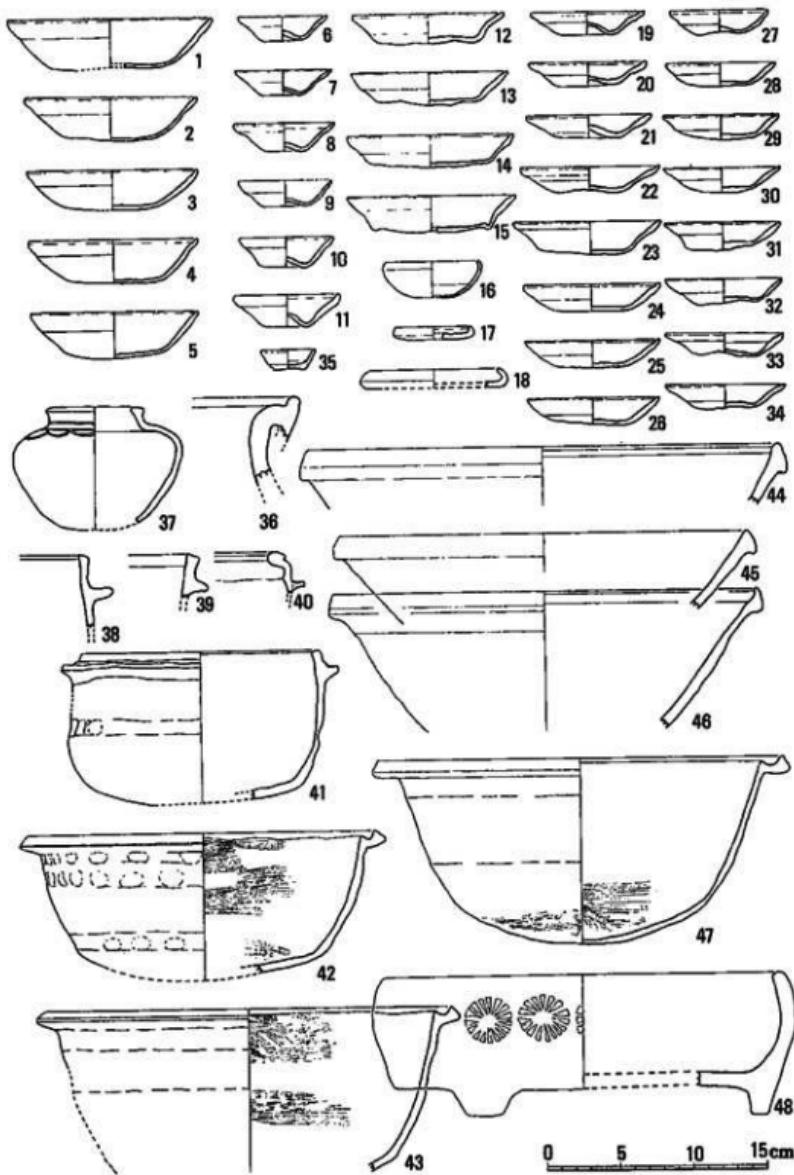
28～34は褐色の小皿。砂粒の混入がめだつ粗造品。口縁部の開き方に若干の相違があり、直線的なものと外反するものとがある。口縁部のヨコナデは、調整と成形とを兼ねた技法であろう。口径8.0cm前後をはかる。

27は白色の小皿。底面がやや突出し、ヘソ皿に近い。

16は碗形の小品。精良な胎土で器壁がきわめて薄い。内面に丁寧なナデを加える。

17・18は、口縁端部が内傾する。17は小型で、灰白色を呈し、須恵質に近い。18は大型品で、褐色を呈し、土師質である。砂粒が混入する。

羽釜（38～41）38・39は、口縁端部内側を上方につまみあげている。内面にナデをみる。41



第44図 G 2 P 1 出土の土器（1～34, 38～43, 47），瓦器（37），
国産陶器（35・36・44～46），火鉢（48）

は口縁直下に低い鉤がつく。土師質に近い。口部縁・鉤部にヨコナデ、胴部内面に斜行の細かいハケを施す。内面の調整は丁寧であるが、胴部外面及び底面の調整は粗雑で、オサエの凹凸が著しい。底面及びその外周にケズリを加えているのは、凹凸を整えるためであろう。底面に煮沸痕が残る。40は、内窓した口縁端部を外面に折りかえしている。小ぶりな鉤がつく。大和系統の製品であろう。

鍋 (42・43・47) 口縁端部が三角形を呈する。G 8 P 2 の同形品と較べ、口縁部が短く、端部の外面の内傾度が大きい。調部内面に細かいヨコハケを加えて丁寧に調整し、外面にオサエの凹凸を残す。底面にケズリを加えて器壁を整える。土師質に近く、瓦器特有の焼け焼きを行なっていない。内外面に煮沸痕をとどめる。

瓦器（同前）

壺 (37) 短頸壺、暗文があり、頸部に2本の横走する直線文、肩部に連弧の花文をつける。口縁部内外面にヨコナデを加えて整える。外面の胴部下半に多数の指痕が残る。

国産陶器（同上）

鉢 (44~46) 魚住窯系のねり鉢。口縁端部が垂下するもの (44・45) と、上方に強く尖るもの (46) がある。44・46は、やや褐色がかった灰黒色を呈し、砂粒の混入が著しい。45は灰黒色を呈し、砂粒の混入が少なく緻密である。44・45は、口縁端部外面が帯状に黒変する。

甌 (36) 常滑焼。口縁端部が上下に突出し、N字口縁をなす。内外面が赤黒色を呈する。

小型土器 (35) 鉢形品。底面にケズリをみる。やや褐色がかった明灰色を呈する。

土製品（同上）

尖鉢 (48) 円形で胴張り。底面に角形の脚がつく。内面をヨコナデ、外面をミガキで調整し、底面にもナデを加える。胴部を3個1組の印花文で飾る。土師質で、焼け焼きによって円外面とも黒色を呈する。

G 2 P 1 の年代は、14世紀中葉または後半に比定しうる。

第10節 G 3 P 1 の調査と出土品

褐色土層を掘り込み、50枚以上の土師皿を集積させた土器集積壙(第45図、図版18上)。平面80×85cmの偏円形で、断面、深さ12cmの逆台形をなす。この壙内に、完形の土師皿が多くは正位に、重なりあって、密集した状態で出土した。この状態は、底部より上端まで同じであるが、上部の土師皿は中央側に傾斜する。底部に棒状鉄器1が検出されているが、この壙の性格と共にその用途は明確でない。

土師器（第
43図、図版
33）

皿（29～54）

29・30は、白色
のヘソ皿。口縁
部がわずかに内
湾し、底面の突
出がゆるやかで
ある。口径6.5cm
前後をはかる。

32～36は、褐
色の大皿。口縁
部がやや外反し
て開き、端部は
丸く終る。ただ
し、32の端部
は、つまみ上げ
ている。底面に

板状圧痕を残す。底面の一部が突出する。これは口縁部にヨコナデを加えるさいに土器をもつ
指で底面を支えたための指痕である。口径11.0cm前後をはかる。胎土中に砂粒がめだつ。

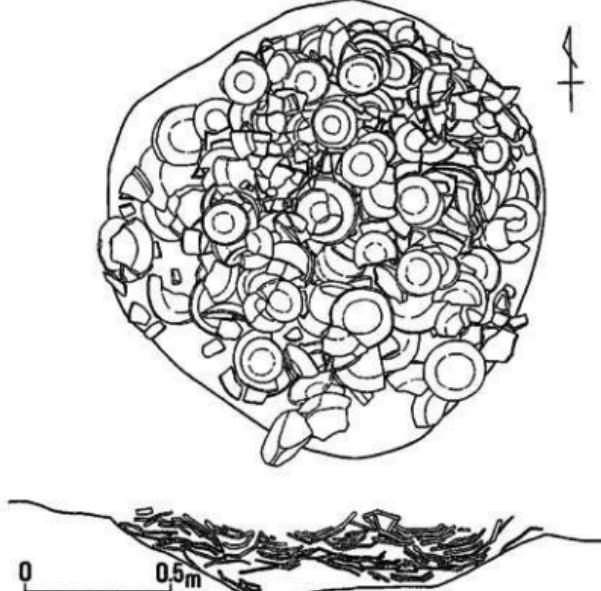
37～54は褐色の小皿。形態上に若干の相違がある。口縁部が外反するものには、底面の突出
する傾向がある。この突出は、褐色大皿の突出と同じ技術的な理由による。口縁部にヨコナデ
を加えるために、いきおい土器をもつ指に強く底面が押しつけられるのであろう。口径8.0cm
前後をはかる。

31は羽釜形の精製品。

G 3 P 1 の年代は、14世紀後葉に比定しうる。

第11節 G 15 P 1 の調査と出土品

G 15の南東隅で、褐色土層の上面で検出（図版18）。発掘区域外にのびる。深さ0.3mをはかる
浅い集石遺構で、出土品は羽釜を主体とし、ほかに、軒丸瓦、土師皿、中国陶磁器などがある。
羽釜の底に焼成後の穿孔をみるとこらから、蔵骨器への転用品と思われる。したがって、
この集石遺構は墓としての性格をもつと推測される。



第45図 G 3 P 1 造樹図

土師器（第46・47図、図版33・34）

皿（1～18）1～8は大皿。淡褐色（亜白色）を呈する。長い口縁部が外反気味に開く。端部をつまみあげるものと、丸く終るものがある。つまみ上げ口縁のものには、製作時のひずみが著しい。底面に圧痕を残す。口縁部内面のヨコナデが見込み外半に及び、外面のヨコナデが端部にとどまる。胎土は精良である。1は口径14.8cm、2～8は口径11.0～12.0cmをはかる。

9～13はヘソ皿。口縁部が外反気味に開く。端部が上方に突出するものと、丸く終るものがある。底面の突出は急激である。内面のヨコナデは見込みの突出部まで及び、外面のナデはわずかに端部にとどまる。淡褐色（亜白色）を呈し、精良な胎土である。器壁が厚い。口径6.5～7.0cmをはかる。

14～18は褐色小皿。口縁部が外反気味に開く。粗製品で、ひずみや凹凸を整える配慮に欠ける。底面に圧痕を残す。胎土に砂粒の混入が著しい。14・15は口径8.0cm、16～18は口径7.0cm前後をはかる。

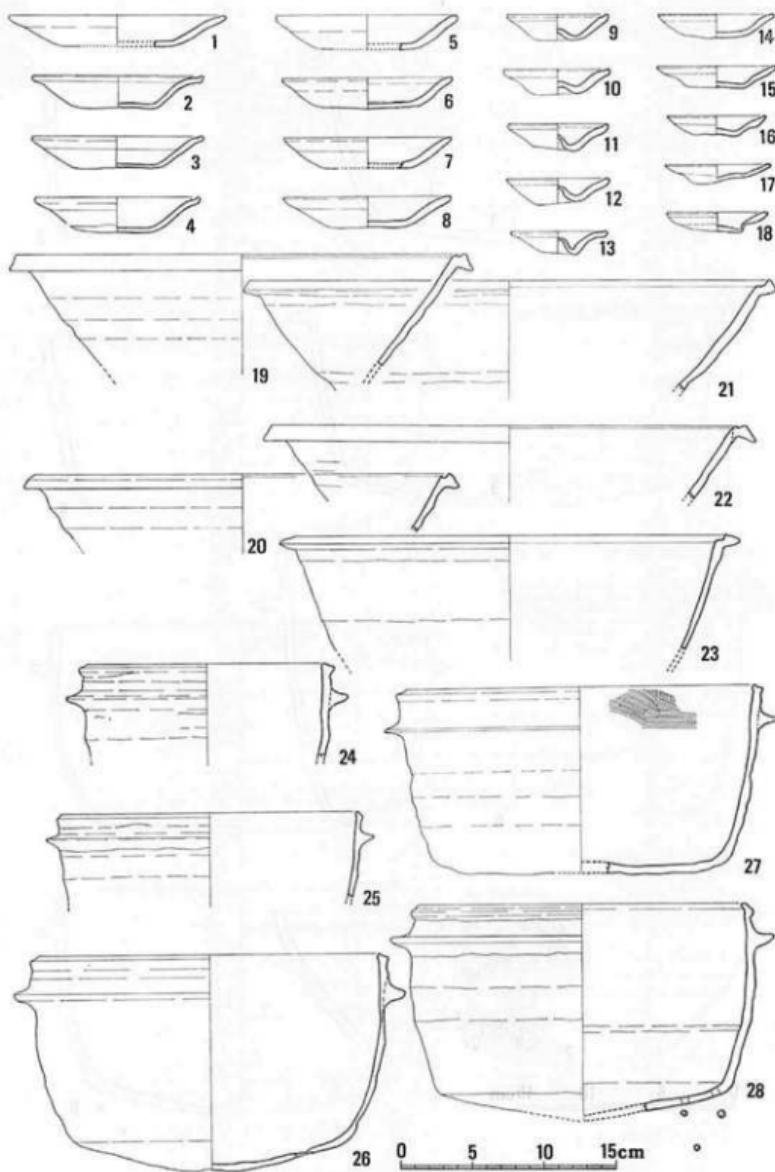
羽釜（第46図24～28、第47図1～6、8）口径17.5cmをはかる小型品から、口径33.0cmをはかる大型品まである。口径24.0～27.0cmのものがもっとも多い。口縁端部はつまみ上げによって内上方から上方に尖り、外面に張り出るものが多い。しかし、なお細差がある。ヨコナデかヨコハケのいずれかによって内面を調整する。外面はオサエの粗調整にとどまり、著しい凹凸を残す。火をうける底面はオサエによって平滑にととのえている。外周にケズリを加えたものがある。第47図8の底面にハケメが残る。なお、表面に煮沸痕をとどめ、底面のよく遺存するものをみると、外周に3孔を穿っている。焼成後の穿孔なので、羽釜が藏骨器に転用されたことを物語る。概ね瓦質に近いが、外面は乳白色～灰色を呈する。充分な煙焼を行なっていない。胎土中に砂粒の混入がほとんどなく、精良である。なお、28は容量4600cc、29は4774cc、第47図5は14084cc、同8は5200ccをはかる。

鉢（第46図19～23）口縁端部は外面に突出し、幅広い斜面をつくる。外面はオサエによる著しい凹凸をとどめ、内面はヨコハケで丁寧に整えている。煙焼による炭素の吸着が充分でなく、吸着作業も外面に限られる。口径30.0～37.0cmをはかる。なお、21は容量4200ccをはかる。

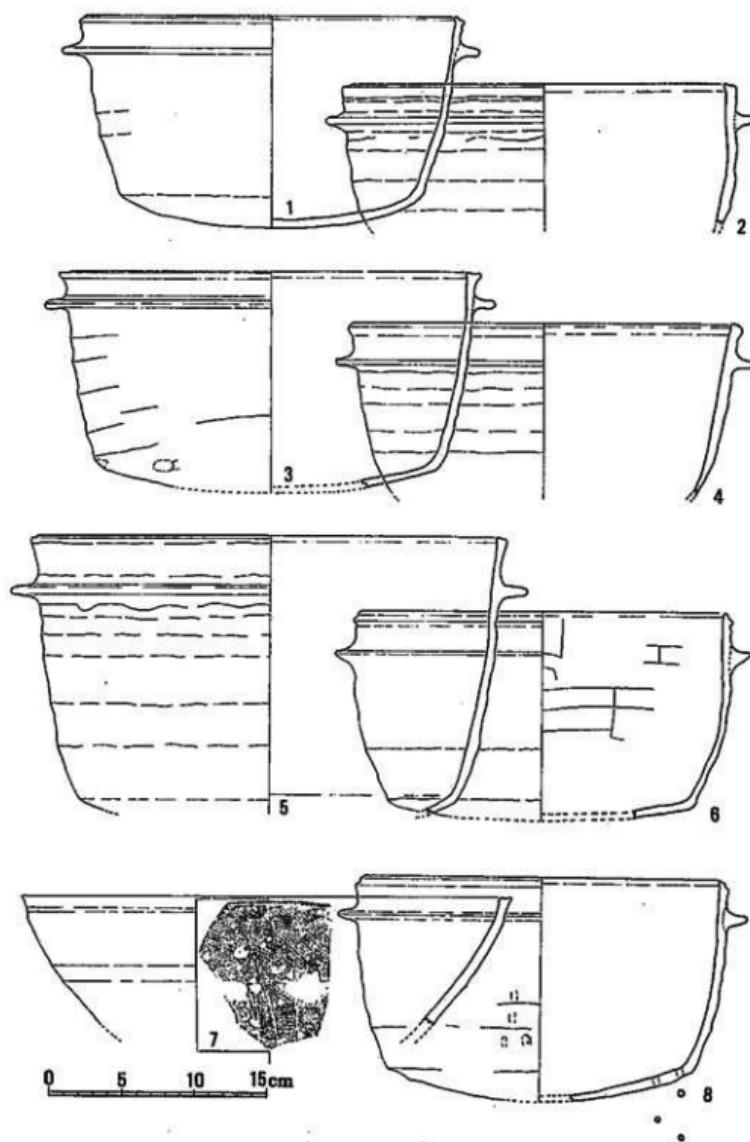
鉢（第47図7）内面に堅の沈線を刻むすり鉢。内面に密度の粗いナナメハケ、外面上半にオサエ、下半にヨコケズリを施して整える。内面のナナメハケが粗いのは、すり鉢の機能にふさわしい。内外面とも黒色を呈する。

圓窓陶器（第48図、図版34）

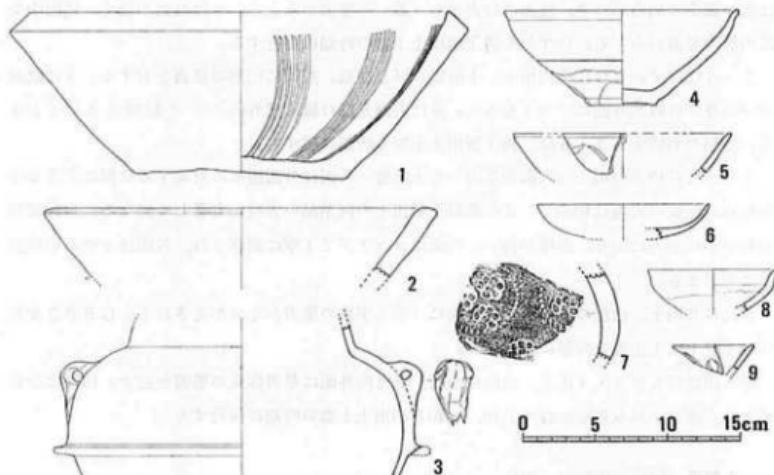
鉢（1・2）1は備前焼のすり鉢。口縁端部が外傾し、斜上方にやや突出する。内面に6本1組の柳状工具で堅の条線をついている。内外面ともヨコナデで調整。底面はオサエの粗調整にとどまる。内面下半にすり痕の磨滅を見る。表面は赤褐色を呈し、胎土中に粗砂の混入が著しく、また備前特有の褐色斑をみる。2はねり鉢かすり鉢。口縁端部が丸く終る。表面が赤褐



第46図 G15P 1出土の土師器



第47図 G15P 1出土の土器



第48図 G15P1出土の国産陶器（1～4・7・8）、
中国陶磁（5・6・9）

色を呈する。

碗（4・8）4は瀬戸・美濃系の天目茶碗。緑褐色の透明釉が外面下半に及ぶ。露胎をなす高台の削り込みは浅い。釉着部の外周は赤褐色を呈する。8は、鉄釉がかかり、茶褐色を呈する。瀬戸・美濃系の小型の天目茶碗と思われる。

釜（3）須恵質の茶釜形品。砂っぽい胎土で、多孔質。灰色を呈する。肩部に環状把手がつき、腹部に鋤がつく。外面上半及び内面をヨコナデ、外面下半をヨコケズリで調整する。外面に煤が付着し、煮沸に使用したことが知られる。

その他（7）外面に团花文を押す。砂っぽい胎土で、灰白色を呈する。

中国磁器（同前）

碗（5・6・9）5・9は外面に蓮弁を削り出した青磁碗。混入品または伝世品とみられる。6は乳白色を呈する磁器。

G15P1の年代は、15世紀前半または中葉に比定しうる。

第12節 その他の出土品

土師器（第49図、図版35）

墨書き器（1～10）1・2はG12溝内出土。須恵器坏。やや多孔質で緻密さに欠ける。1に

は低い幅広の高台がつき、底面に行書体の「器」の墨書きがみえる。2は高台が無く、底面中央に円形の墨書きがみえる。いずれも溝下層出土土器の時期に併行する。

3～6はいすれもG12溝内出土。土師器の环及び皿。底面に円形の墨書きを有する。3は底面の一部及び口縁部外面にケズリをみる。6は内面及び口縁端部外面にナデを加えるにとどまる。器形の判明する3・6は、溝下層出土土器の時期に属する。

7もまたG12溝内出土。人面を墨書きした土師器。人面は外面腹部の対峙する位置に大きく描かれる。顔貌の表現は相違し、また溝最下層出土の同系品の表現とも著しく異なる。口縁端部がわずかに上方に尖り、器壁が薄い。内面はヨコナデで丁寧に調整され、外面はオサエの粗調整にとどまる。

8はG2出土。白色の碗形品。内外面に「乃」字風の墨書きがくりかえされる。G8P2またはG2P1出土土器の時期に併行する。

9・10はG8P3・4出土。白色の小皿。9は内外面に草書体風の墨書きを記す。10にはひらがなの「あ」字がみえる。G4P19、G40P40出土土器の時期に併行する。

土製品（同前、図版35・36）

ミニチュア土器（11～14）11・12はG15B P14出土。円錐形を呈する土師質品。外面に掌痕を残すが、11は内面ヨコハケ、12は内面ヨコナデで調整している。13・14のカマド形品と組みあわせる、煮沸用壺形土製品であろう。13・14はG5溝内出土。土師質のカマド形品。飲み口の鋸部はつくりつけである。外面に掌痕、内面に粘土紐痕を残す。11は飲み口部、底面ともケズリ、12は飲み口部、底面ともに糸切り痕をみる。

硯（20）G8出土。猿面硯。須恵質。底面に平行タタキ、上面に細かい青海波が残る。側面は焼成前に削り離している。上面に使用の磨滅痕をとどめる。平安時代の遺品であろう。

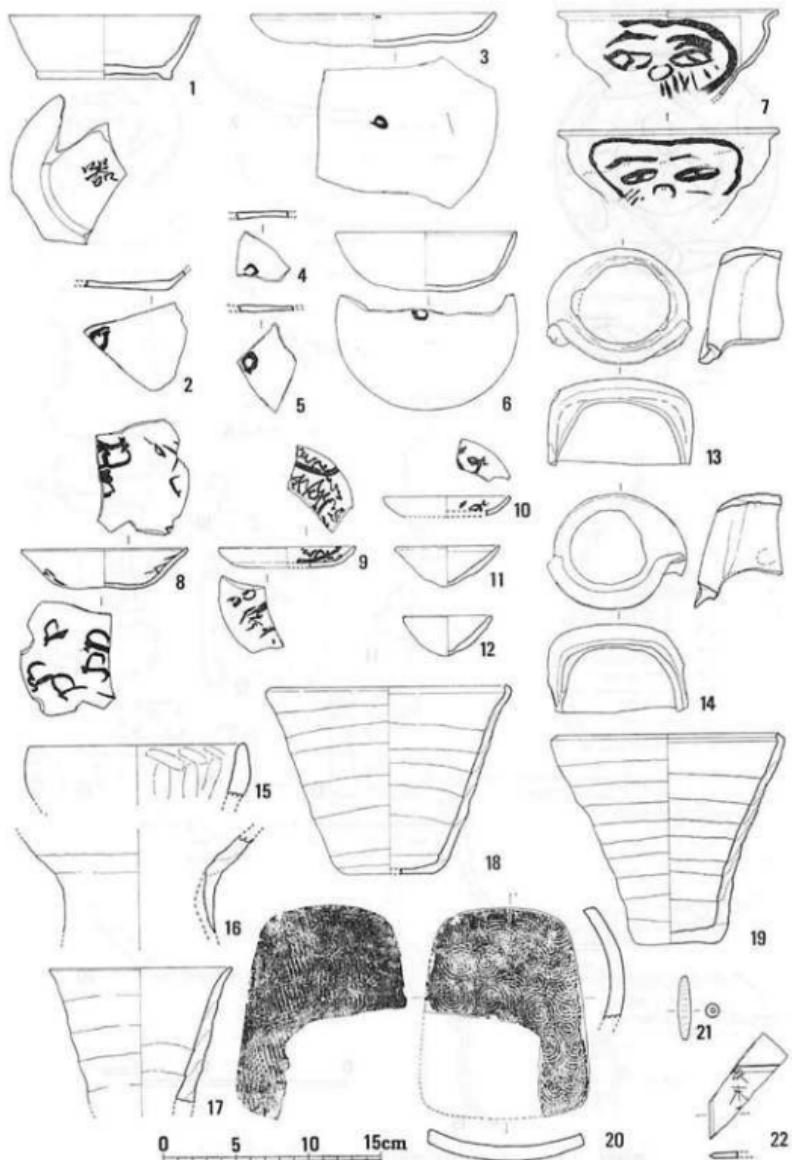
土鉢（21）G9出土。土師質で葉巻形をなす。黒色～黒褐色を呈する。長さ4.4cm、外径9.5mm、孔径2.5mm、重さ4g。

製塙土器（15～19）15・16はp.30参照。

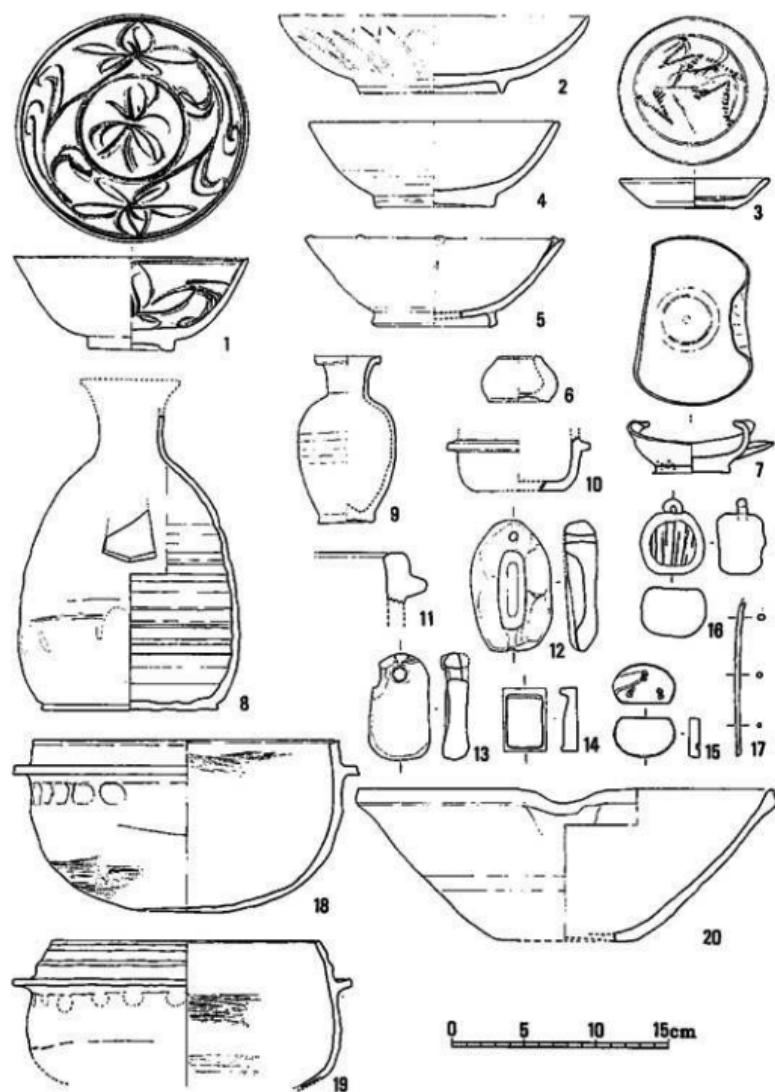
17は、G27P18出土。斜上方に開くコップ形。外面に粘土紐痕を明瞭に残し、内面をヨコハケで整える。煮沸痕を欠く。

18・19はG27P18出土。平底から外反気味に開き、口縁端部が内屈する。粘土紐痕をよく残す。底部を円盤状につくり、粘土紐を反時計回りに巻き上げている。外面をオサエ、内面をナメナデで整えている。端部にヨコナデを加える。砂粒の混入がほとんどない精良な胎土で、焼成も良好である。淡褐色を呈する。19の外面にわずかに煤が付着する程度で、煮沸痕を欠く。なお、18は容量1125cc、19は1000ccをはかる。

不明品（22）G9出土。瓦質。端部を両面から面取りしている。よく研磨された黒色の表面に、文字を刻している。焼成後の印刻であるため、文字は芯の灰色として露われる。上部に太細各一条の封線がみえ、「末」字が読みとれる。



第49図 その他の出土品 墓書土器（1～10）、土製品（11～14・20～22）、
製瓶土器（15～19）、不明品（22）



第56図 その他の出土品 中國陶磁（1～3）、銅軸陶器（4～7）、
灰釉陶器（8）、須恵器（9・20）、瓦器（18・19）、
石製品（10～16）、金銀製品（17）

中国青磁（第50図、図版36）

碗（1）G 8 P 3出土。内面に笠描きで流麗な草花文を片彫りした青磁碗。透明な灰褐色釉が外面全体に及び、削り込みの浅い高台は露胎をなす。

皿（2・3）2はG23出土。外面に笠蓮弁を刻した青磁大皿。青灰色で半透明な釉調を呈し、部分的に貫入をみる。釉が底面にも及び、高台端部は露胎をなす。3はG52出土。見込みに笠及び横による文様をついた青磁小皿。淡褐色の透明な釉調を呈する。底面の露胎部は、釉をかけたのち削りおとしている。

綠釉陶器（同上、図版37）

碗（4・5）4はG29出土。土師質の淡褐色を呈する。胎土に、淡緑褐色の釉が薄く全面をおおう。よく精選された胎土中にわずかに茶褐色粒を含む。口縁部内外面をヨコナデ、輪高台及びその外周をケズリで仕上げる。5はG12出土。口縁部は輪花をなす。底面に細長い高台をはりつけている。明緑褐色の釉が高台端を除く全面に厚くかかり、胎土は灰白色の須恵質を呈する。

壺（6）G17 BW 2出土の葵臺形小壺。器壁は厚い。明褐色を呈する堅緻な須恵質の胎土に、明緑色の釉が内外面・底面にかかる。ただし、口縁端部上面に釉を欠く。

灰釉陶器（同上）

壺（8）G29出土。胴部下半が大きく膨らむ把手付壺。把手の下端が遺存する。胴部をヨコケズリのちヨコナデで整え、わずかに突出した底面をナデで調整している。底部を円盤状につくり、そのうえに胴部を巻きあげている。内面にヨコナデの凹凸を残す。明灰色の胎土で、緑褐色の釉が胴部上半をおおう。溝上層出土土器の時期に併行する。

須恵器（同上）

壺（9）G29出土の小型壺。砂粒のきわめて少ない精良な胎土で、灰色を呈する。内外面をヨコナデで調整し、ナデの凹凸を残す。底面に糸切り痕をみる。

鉢（20）G 8 P 15出土。神出・魚住窯系の片口ねり鉢。灰白色で砂粒の混入が著しい。多孔質で堅緻さに欠ける。口縁端部は上方に突出し、帯状に黒変する。18・19の羽釜と併出した。G 4 P 19出土土器の時期よりやや新しく位置づけられよう。

瓦器（同上）

羽釜（18・19）ともにG 8 P 15出土。18は口縁端部外面をつまみ上げて斜上方に鋭く尖らせ、端部内面にも同じ処置を加えている。胴部内面を丁寧にヨコナデする。胴部外面上半は凹凸の著しいオサエの粗調整にとどまり、底面外周にケズリを加えて整える。底面はオサエ・ナデで平滑にする。外面に煮沸痕をみる。19は、内傾する口縁部の外面に、ナデで3条の凹線を

ついている。内面をヨコハケで仕上げ、外面をオサエにとどめる。外面に煙焼の黒変が著しい。形態の酷似した鉄鋼製品が中国の金代にあり、わが国の羽釜の祖型とみられる。容量は2800ccをはかる。

石製品（同前）

石鍋（10・11）G35P1出土。10は小型、11は大型の羽釜形品。11は滑石質の石材で、10は滑石質とするには疑問を残す。

石鍤（13・16）13はG40出土。滑石質の石材。銀灰色を呈し、1孔を有する。穿孔を有する面は、いずれも内弯するが、一方の面の内弯度が大きい。上下幅7.1cmをはかる。一部を欠くが、重さ98.5gをはかる。

16はG11P14出土。砂岩質の赤みがかかった石材を使い、頂部に鉄製の円環を打ちこんで釣手とする。1面に細い擦過痕をつけ、他面は磨いている。石造部は幅4.2cm、厚さ3.1cmをはかり、全重量は95.5gをはかる。

その他（12・14・15）12はG40出土。滑石質の船形品。中心が長円形に丸く窪み、頂部に1孔がある。底面は平らで、1端が斜面をなす。中央の窪み部のみ黒変する。

14はG45出土。粘板岩質の小型長方硯。表面を丁寧に研磨し、稜に軽い面取りをつける。海陸がわずかに赤変するので、朱筆用と思われる。

15はG9出土。黒色粘板岩質の石帶。全体を研磨している。とくに表面は光沢を有する。稜を面取りし、裏面に装着用の3孔を穿つ。

その他（同上）

金銅製品（17）P.55参照。

第6章 遺物各説

第1節 鋳銅関係遺物

刀装具鋲型（第51～53図 第10表 図版40・41・42）

佩表側兜金の鋲型（第53図1）G 27 W 1出土。縦5.4cm、横6.7cm、厚2.2cm。総じていたみがひどく、ひびが丸々に入る。型内は黒色を呈し、文様部の縁廻りの型どりも鮮明さを欠く。棟方に1個、先端に2個、刃方に1個の三角形突起、下に長方形突起の型合せがある。2と表裏一对をなす。なお、會は合い印、會は湯口の位置を示す。以下同じ。

佩表側兜金の鋲型（同2）G 27 W 1出土。縦4.4cm、横6.6cm、厚2.0cm。大破し縦に大きくひびが入る。型内は焦げた黒色を呈する。この型は1と一对をなす。先端部に2個の三角形突起、下に長方形突起の型合せがあり、先端部の後を立てたところに湯口がある。

佩表側兜金の鋲型（同3）G 22 P 11出土。縦5.85cm、横6.20cm、厚1.85cm。兜金先端から棟方にかけて2片に割れ、棟方に湯口と思われる凹部がある。型面は赤褐色を呈し、小さな雲母片が目立つ。

佩表側兜金の鋲型（同4）G 12 P 22出土。縦6.20cm、横7.15cm、厚2.50cm。総じて灰色を呈し、型面には雲母微片が多く付着する。棟方に2ヶ所、刃方に1ヶ所、上部に2ヶ所の三角形突起の型合せを付し、刃方型合せ横に湯口がある。型面は細かな真土を用いてなめらかに仕上げ、背面は偏平につくり、砂分を多く含む。

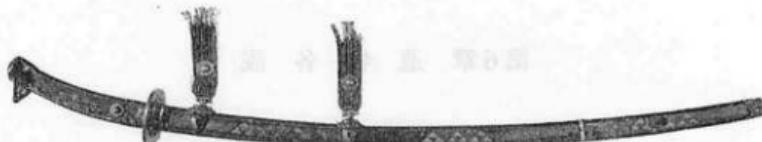
佩表側兜金の鋲型（同5）G 27 W 1出土。縦5.6cm、横5.6cm、厚2.5cm。型面は褐色を呈し、雲母小片が認められ、棟方及び兜金先端部に三角形、下に矢筈形の型合せを付している。刃方縁に欠損がある。背面はやや丸く、砂を多く含む。

佩表側兜金の鋲型（同6）G 21 P 11出土。縦5.6cm、横5.7cm、厚2.4cm。鋲型面の縁廻りがかなり破損している。鋲土は他と同様である。背面は偏平に作り、やや粗い砂が多く混じる。型面は赤褐色を呈し、雲母の微細片が多く認められる。

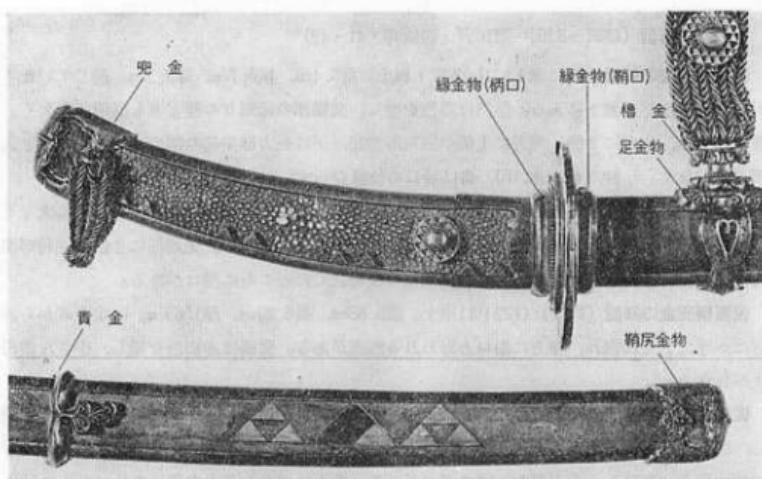
佩表側鞘尻の鋲型（同7）G 21 P 11出土。縦5.05cm、横5.0cm、厚2.2cm。完全か鞘尻か見分けにくいものであるが、型の大きさ、型に握手を付すための孔をつけていない点から鞘尻と思われる。型内部縁にそってひびが入る。棟方に三角形、下に長円形の型合せをつける。

佩表側鞘尻の鋲型（同9）G 27 W 1出土。縦4.7cm、横4.0cm、厚2.2cm。鋲型は他と同様で、背面は偏平に作っている。金具内に木瓜形を表し、刃方に三角形、下に矢筈形の型合せをもうけている。刃方型合せの下に湯口がある。

鍔金具の鋲型（同10）G 27 W 1出土。縦6.6cm、横4.1cm、厚2.75cm。柄の縁あるいは鞘金具の鋲型で、鏡を立てた1cm幅の製品ができる。型の上下に三角形突起、右に正方形突起の型合



第51図 三觸文兵庫鎮太刀（東京国立博物館蔵）〔鎌倉時代13世紀中頃〕



第52図 同太刀の細部

せがあり、型内に雲母微片がみられる。

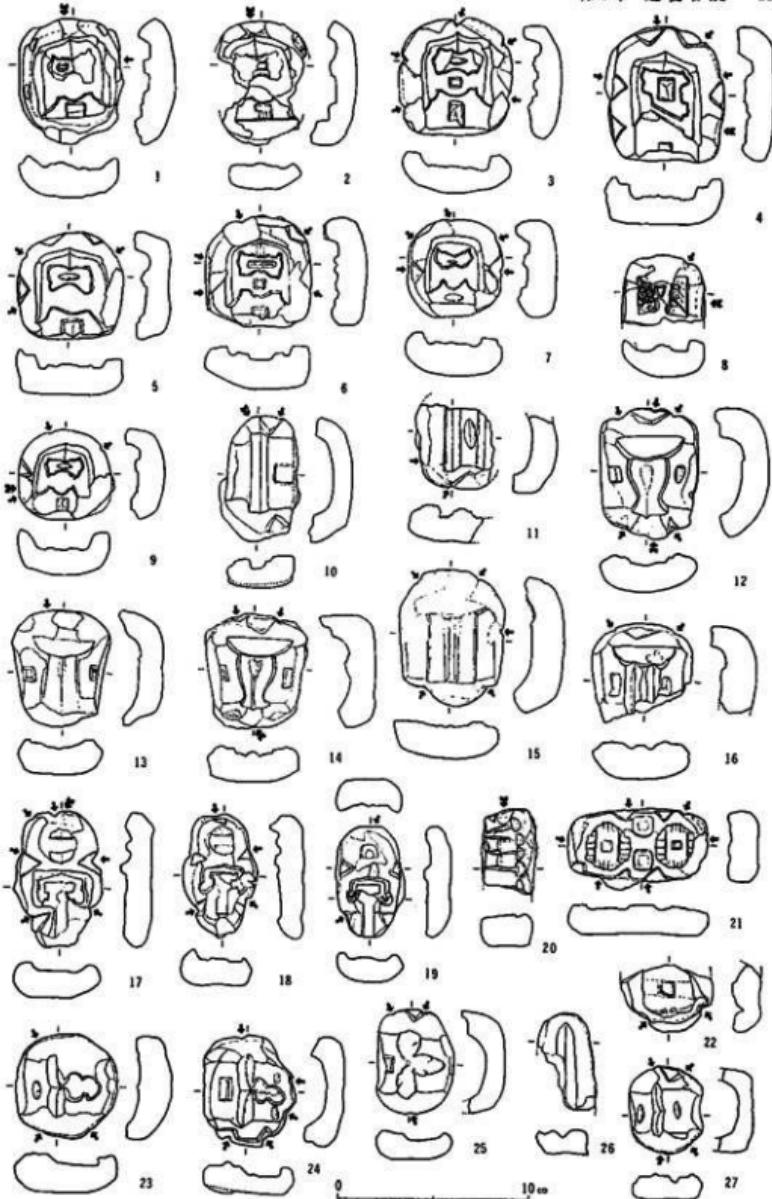
緑金物の鋳型（同11）G 21 P11出土。縦4.4cm、横3.0cm、厚2.7cm。2個分の型を彫り込む。

緑金物の鋳型（第54図1）縦6.0cm、横3.7cm、厚2.0cm。文様が表現されているが、何を示しているか不明である。

足金物の鋳型（第53図12）G 21 南西部出土。縦6.9cm、横5.7cm、厚2.85～2.9cm。瓶子形猪目透。鋳型面は細かくなめらかに仕上げ、背面は丸く、やや粗い砂を多く含む。型の左右及び上部に突起の型合せをつける。型内は灰色を呈し、雲母微片が付着する。

足金物の鋳型（同13）G 21 P11出土。縦6.2cm、横5.05cm、厚2.4cm。笠全部五稜形の足金物。足部は単脚で、鎬を立てるために中央を溝状に深く彫り込み、さらに脚中央には縦に米粒状の彫りがある。右に矢筈状、左に台形状突起の型合せを付す。鎬土は他の鋳型と同じで、背面は偏平である。

足金物の鋳型（同14）G 21 P11出土。縦6.0cm、横5.15cm、厚2.7cm。瓶子形猪目透。鎬土は12と同様であり、上部に三角形、左右に長方形の型合せがつく。型内は製品の縁及び猪目下に鎬をたてるためやや深く彫り込んでいる。上部は灰色、猪目の廻りは黄色を呈し、とくに微細



第53図 太刀装具などの铸型 完金(1~7), 稼尻(9), 緑金具(10・11), 足金物(12~26),
椿金(17~19), 柄(20), 座金具(21・22), 貢金(23~25・27), 不明品(8・26)

な銀母片が付着する。

足金物の鋳型（同15）G 21 西側畔出土。縦7.3cm、横5.6cm、厚2.2cm。左右に幅0.8~0.9cmの足とその間に細い足を入れた足金物である。笠金部は破損し、粗穢の痕がみえる。この粗穢は鋳型を作る塵土に混入したものと思われる。

足金物の鋳型（同16）G 27 W 1出土。縦5.2cm、横5.2cm、厚2.4cm。双脚式。足先部が欠損している。笠金部は五花形にし、駿手風な文様を彫っている。脚部は鎬を立てるため中央部を深く彫り込む。型面はなめらかな土で銀母微片が多い。型の左に△形突起、右に□形突起の型合せがある。背面はやや丸く、砂を多く含む。

檐金の鋳型（同17）G 21 東部土器群出土。縦7.2cm、横4.4cm、厚1.8cm。帶軌を結ぶ檐金の鋳型。上部に径1.2cm程の2個の笠形鉢があるが、これは何の用途か明らかでない。型内の凸部は欠損し、型自体かなりいたむ。

檐金の鋳型（同18）G 21 東部土器群出土。縦6.6cm、横3.9cm、厚1.8cm。17と同形の檐金の

第10表 銅銅関係品出土遺物一覧表

遺 墓	時 期	出 土 品
G 4 B P 2		足金物
P 8	平	不明鋳型（仏具？）
G 7 棕色土		坩埚
G 8 P 2	鎌末	羽口
G 10 P 1	平	羽口
P 4	鎌前	坩埚
G 11 B P 9	平・鎌	資金
G 16 西畔		円盤・坩埚
G 17 BW 4	平・鎌	円盤・坩埚
W 6	平末～鎌初	円盤・不明品（極筒蓋？）
G 21 東部		檐金・座金具・資金
南西部		足金物・不明鋳型
西畔		兜金（轆轤？）・足金物
灰色砂質土		縁金物・資金・不明鋳型・坩埚
P 11	平後	兜金・縁金物・足金物・座金具・資金・坩埚・羽口
G 22 南畔		不明鋳型（花瓶？・燭台？）
P 12	平末～鎌初	兜金・足金物・座金具・不明鋳型・坩埚
G 27 灰色砂質土		鉢
W 1	平末～鎌初	兜金・足金物・座金具・资金・轆轤・坩埚
G 28 B P 5		坩埚
G 33 棕色土		縁金物・円盤
灰色砂質土		資金
G 41 棕色砂		鉢
G 44 P 2		円盤・不明鋳型
P 10		円盤・坩埚・羽口
G 45 W 5・6	鎌前	坩埚
褐色砂		坩埚
G 46 棕色土		坩埚・羽口
G 51 W 1	鎌後～南北	円盤・羽口

鉄型で、これも上部に2個の笠鉢状の型がある。左上部から右中程へ斜めにひびが入っているが、型は17に比べ鮮明である。鉢部と槽金部の間左右に、三角形突起の型合せがある。背面はことに偏平に作っている。

槽金の鉄型（同19）G 27 W 1 出土。縦6.0cm、横4.2cm、厚2.0cm。左右に三角形突起の型合せがある。槽金の両端に文様をみる。

座金物の鉄型（同21）G 27 W 1 出土。縦最大幅4.2cm、横最大幅7.4cm、厚1.7cm。径2.1cm前後の菊花形小緑の円形金具型を左右に配し、その間に径1.2cm程の菊小緑の型を彫った4部品の鉄型である。それぞれの中央に孔用の四角の突起をつけているところから、足金物と槽金を結ぶところの二重の座金物か、あるいは獣手の座金物かと思われる。型内の鉄土はなめらかであるが、緑は荒れ、ぬき破損する。

座金物の鉄型（同22）G 21 東部土器群出土。縦3.6cm、横4.65cm、厚1.7cm。長円形の皿状の金具型で中央に孔用の突起をつけており、足金物と槽金を結ぶ座金物と思われる。型の縁に一部欠損があり、外側は偏平につくる。

佩裏側資金の鉄型（同23）G 21 P 11 出土。縦5.5cm、横5.7cm、厚2.2cm。柏葉を表している。型の文様も明瞭で、資金の左側に梢円形の型合せ突起がある。

佩裏側資金の鉄型（同24）G 21 東部土器群。型の文様が明瞭な鉄型で、柏葉を表している。型面の鉄型も細かくなめらかで、柏葉の上下に四角形、資金の左側に台形突起の型合せをもうけている。資金上方の破損しているところが湯口と思われる。背面は偏平で、砂を多く含む。

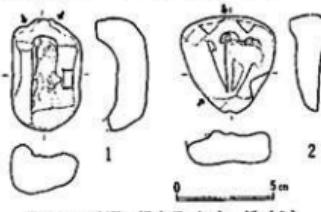
佩裏側資金の鉄型（同25）G 21 灰色砂質土、G 11 H 1 出土。縦5.5cm、横4.05cm、厚2.2cm。三枚の柏葉文で資金をつくる。型中央に横一字に大きくひびが入り、左に正方形、上に三角形凸形の型合せが残る。

佩裏側資金の鉄型（同27）G 33 灰色砂質土出土。縦4.5cm、横3.95cm、厚2.7cm。鉄土は他の鉄型と型面は細かな土で、上部に三角形、型の左右に小判形の型合せがある。外側は偏平で、砂を多く含む。

不明品（第53図8・20・26、第54図2、第55図、図版40・42・43）

第53図8は、G 22 P 12出土。縦3.6cm、横4.2cm、厚1.8cm。型面は上下に弯曲し、溝文をみる。中央に三角形の型合せ突起が残る。右に湯口を設けている。他の鉄型に較べ、胎土が精良である。20は、G 21 灰色砂質土層出土。縦4.4cm、横2.9cm、厚1.6cm。4個の鉢型が完存する。4個の三角形型合せが残る。上部に湯口が残り、湯道が上下に通る。第54図2はG 41褐色砂層出土。鉢の鉄型である。3個の鉢型が湯口を共有する。3個の三角形型合せがみえる。両鉄型の鉢とも、刀装具の把部の模様とは考えにくい。

第53図26は、G 4 P 8出土。縦4.5cm、横3.7cm、厚2.2cmをはかる。鉄型の中央に錠をたて、製品の



第54図 鉄型 緑金具(1)、鉢(2)

横断面は三角形を呈する。

第55図1はG22南畔出土。縦10.1cm、横10.1cm、高4.6cm。下部を欠く。型面は黒変し花瓶形を呈する。裏面は舟底状をなし、5個の深い指頭痕をみる。表面に真土、芯に糊を混入した粗い土を使う。花瓶の鉄型と思われる。

第55図2もG22南畔出土。上、下部を欠き、残部は縦14.8cm、横8.2cm、高4.2cmをはかる。型面は、連珠状をなす。舟底状を呈する底部には、深い指頭痕が残る。燭台の鉄型であろうという（東京藝術大学中野政樹先生御教示）。

第56図1はG16西畔出土。直径13.4cm、厚3.0cm。糊を含む粗い土のいわゆる糊土に真土の突帯がめぐり、中心に孔がある。孔の一部を真土でふさぐ。この孔は、引型の中心孔であろう。あるいは湯口を兼ねていたかもしれない。型面には、糊を含む粗い土があらわれているが、この部分も真土で覆われていたのである。

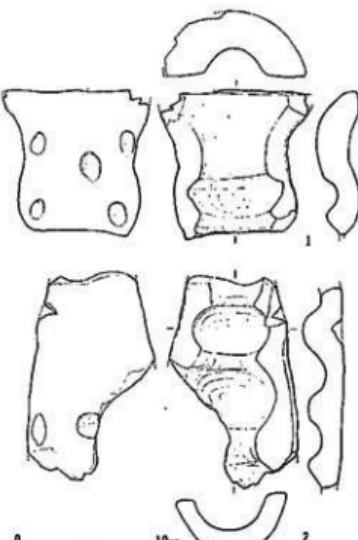
和鏡や蓋に類する円盤形器物の鉄型であろう。同図2は、G16西畔出土。直径14.0cm、厚2.0cm。糊土の円盤をなす。中心に孔を有するらしく同種の製品であろう。

第56図3は、G16西畔およびG17BW6出土。直径15.5cm、高5.3cm、糊土を外郭とし、内部の型面は、きわめて精良な真土を引型で仕上げる。型面の一部に黒色の有機物や雲母が付着する。これは、それぞれ型面を平滑にする黒味、白味といわれるものかもしれない。型は、裾の開く碗形を呈する。底部に稜がめぐり、裾端に段がある。経筒の蓋であろうか。

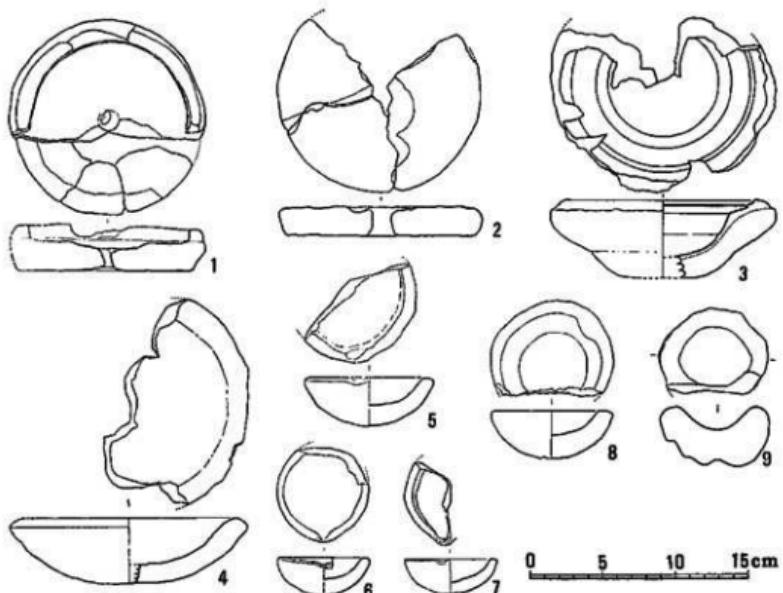
鍛錬具（第56図、図版43）

第43図27はG8P2出土。鞘の羽口片である。上下両端を欠く。糊土を使い、外面に埴汁を塗って平滑に仕上げる。内孔径3.0～3.7cmをはかる。

第56図4～9は培壙。4はG7褐色土層。5はG27W1、6はG21灰色砂質土、7はG27W1からそれぞれ出土した。4は大型、5～8は小型の土製品で、9は小型の石製品である。4は復原径16.3cm、5は9.0cm、6は6.2cm、7は6.4cm、8は8.5cm、9は7.4cmをそれぞれはかる。5～7に、注口の遺存をみる。土製品は砂粒のない糊土に埴汁を塗って仕上げたものである。



第55図 仮具鉄型 花瓶(1), 燭台(2)



第56図 鋳型および鋳作具 不明鋳型（1～3），埴堀（4～9）

第2節 瓦および磚

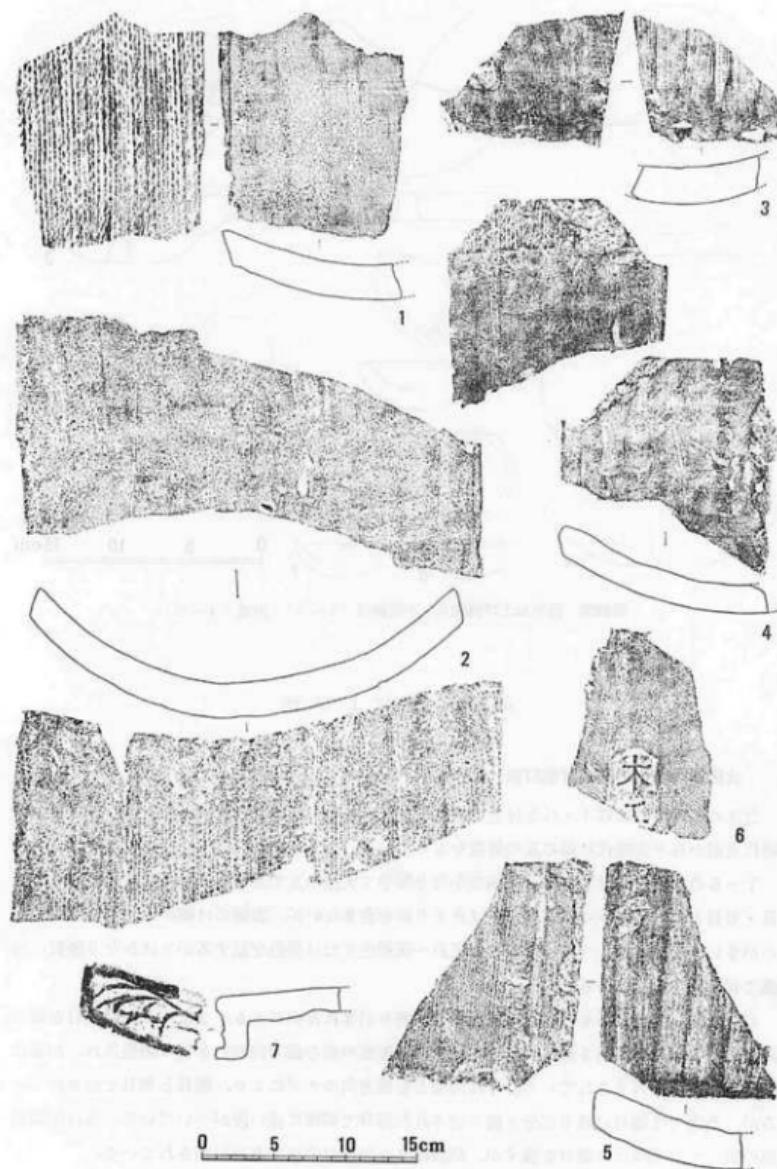
北区溝内出土の瓦類（第57図）

北区の溝内、特にG 4・G 5付近で平瓦・丸瓦が集中して出土した。これらはいずれも奈良時代末期から平安時代初期の瓦の特徴をもっている。

1～5の平瓦は、厚さ2.2～2.6cmのかなり厚手で大型の瓦である。成形は比較的丁寧で、繩目・布目とも乱れは少ない。胎土にはあまり砂を含まないが、表面には細かい砂粒の目立つものが多い。焼成は紙してやや硬質で、灰白～灰褐色または黒色を呈するが2はかなり硬質の焼成で青灰色を呈している。

この中で注目されるものに、繩目と布目が磨り消された例がある。3は、凸面の繩目を横方向のナデにより磨り消されている。凹面は2cm程度の幅の縦方向のハケ目で調整され、端部は横方向にヘラケズリされている。4は両面とも横方向のナデにより、繩目と布目を消されていて、凸面では繩目の残る部分と磨り消された部分で明瞭に段がついている。5は広端角部の破片で、凸面には繩目を残すが、凹面は3と同様の手法で布目が消されている。

丸瓦は全形を復原できるものはなかったが、いずれも玉縁付の丸瓦である。玉縁長は6～8



第67図 北区溝出土の瓦

cm、瓦の怪は、約16cmのものと20cm前後のものがある。成形は平瓦と同じく、比較的丁寧である。

この溝の上層からは平安時代中期以降の瓦も出土している。6は中期に属する平瓦で、凹面に『木工』鉢の刻印がある。胎土には砂を混じえ、硬質の焼成で灰色を呈している。厚さは1.8cm。凹面・凸面とも糸切り痕が残っている。凸面は指圧痕が顕著で、一部に縦目も見える。『木工』印の外形は小判形を呈し、文字は裏字になっている。印は木製と見られ、木理痕も認められる。

7は後期の軒平瓦で、瓦当部は平瓦端を折り曲げてつくられている。瓦当面には平瓦部凹面から連続する布目が残り、凸面では縦方向の縞目が瓦当裏面まで連続している。胎土にはあまり砂を含まない。軟質の焼成で灰白色を呈している。

追拂出土の瓦類（第58図、図版38）

1は東寺系の複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、範傷より東寺出土例と同様かと見られる。瓦当裏面はナデにより、全体に丸味をもって仕上げられている。胎土にはあまり砂を含まない。硬質の焼成で、灰色を呈している。造瓦技法や類例の出土から、12世紀末～13世紀にかけての頃、播磨地方でつくられたものと見られる。G12ピット17出土。

2は一庇、八葉の蓮華文を表した軒丸瓦であるが、その文様はかなり抽象的になっている。瓦当面には割れを補修したような指ナデがある。全体の仕上げはやや雑なナデを基調としている。丸瓦部の布目は比較的粗い。胎土にはあまり砂を含まない。やや硬質の焼成で、表面は黒色、内部は灰白色を呈している。平安時代末開頭のものと思われる。G4ピット12出土。

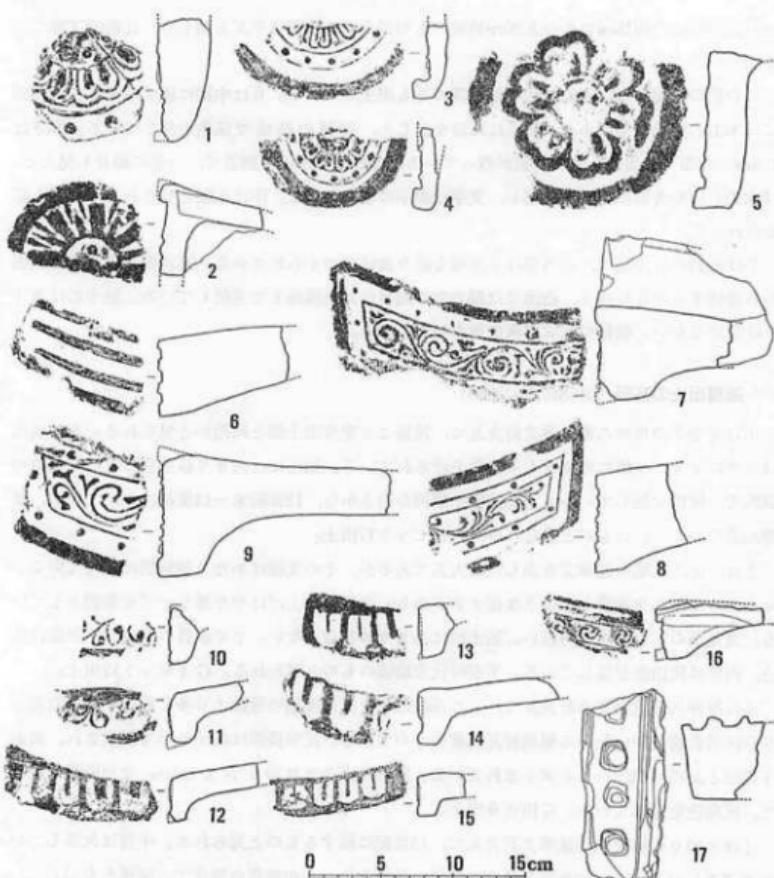
3は複弁八葉蓮華文の軒丸瓦で、この系統は平安時代後期の遺跡より多く出土する、京都市左京区岩倉幡枝のいわゆる栗栖野瓦窯のものである。瓦当裏面は指オサエで調整され、裏面下端部と瓦当外周はヘラケズリされている。胎土にはあまり砂を含まない。やや硬質の焼成で、灰黒色を呈している。G10W6出土。

4は小振りの複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、13世紀に属するものと見られる。中房は欠落しているが『卍』があるものである。胎土には粗い砂を含み、やや軟質の焼成で、灰黒色を呈している。G3ピット5出土。

5は複弁六葉の蓮華文軒丸瓦で、中房には左巻きの二つ巴文を入れている。瓦当は厚く、全体にナデを基調とした丁寧なつくりである。中房部分に巴文を入れた蓮華文軒丸瓦は12世紀から13世紀頃の主として畿内諸寺院でも類例があるが、5は大阪府八尾市の中山瓦窯出土例に近いものである。G21ピット8出土。

6は難波宮6573型式と思われる重弧文軒平瓦である。直線彫で、凸面は粗く縦方向にヘラケズリされ、凹面も瓦当面近くは広くヘラナデされている。胎土にはあまり砂を含まない。硬質の焼成で灰色を呈している。G5溝出土。

7は東大寺式の文様系統をひく、平安時代前期の西寺系均整唐草文軒平瓦である。ただし、西寺跡より多く出土するこの系統の文様では、中央部から左右に向かう第1転目の唐草の巻き



第58図 遺構出土の瓦

込みから分離して中央を向く小葉は2つに分枝することが特徴になる。これに対し、7ではこの小葉は分枝していない。7と同範例は今のところ西寺跡からの出土は報告されていない。この文様に最も近い例は、京都市北区松ヶ崎の芝本瓦窯跡より採集されている。全体の成形は比較的丁寧である。胎土にはあまり砂を含まず、やや軟質の焼成で、灰色を呈している。G3ビット23出土。

8は東寺から出土する均整唐草文軒平瓦と同じものと見られる。東寺出土例によると、中心節として長方形の枠の中に『左寺』銘を入れている。この文字には数種類あるようで、8がそのいずれに当るかはわからない。頭部はわずかに曲線頭を呈している。成形は丁寧で、瓦当文様も鮮明である。胎土には長石粒の目立つ砂を含む。きわめて硬質の焼成で、青灰色を呈して

いる。平安時代前期に属する。G 8 W 4 (ピット5) 出土。

9は平安時代中期の軒平瓦で、かなり大型の瓦である。凸面は額部から平瓦部にかけて大きくヘラケズリされている。凹面の布目は粗いが乱れてはいない。胎土には粗い砂を含み、やや軟質の焼成で、表面は黒～灰褐色、内部は灰白色を呈している。なお平安宮朝堂院跡出土の同範例には緑釉を施したものもある。G 10 ピット1出土。

10・11は平安時代後期の唐草文軒平瓦である。瓦当は、10は半折り曲げ、11は折り曲げの手法で形成されている。10はG 52 ピット4、11はG 47 ピット1出土。

12～15は12世紀末から13世紀にかけてのものと見られる小型の剣頭文軒平瓦である。いずれも瓦当は折り曲げの手法でつくられている。14は中央に巴文を入れている。巴は右巻きの二つ巴らしい。15も中央に三葉の花文状の文様を入れている。12はG 1 W 2、13はG 2 ピット1、14はG 1 ピット33、15はG 1 ピット41出土。

17は鬼瓦の周縁部の破片である。珠文と界線の一部が残るが、面貌はわからない。文様は型造りによっており、部分的に指ナデで補修されている。裏面と側面はナデとヘラケズリで仕上げられている。胎土には砂を含むあまり多くはない。硬質の焼成で、表面は灰黒色、内部は灰色を呈している。G 4 ピット14出土。

その他の瓦類（第59図、図版39）

1は西寺跡より出土する、平安時代前期の東大寺系複弁八葉蓮華文軒丸瓦と同文であるが、磨滅のため同范を確認できない。胎土には長石粒や水晶粒が目立つ。この胎土は、西寺の瓦窯と見られる大阪府枚方市の坂瓦窯製品の胎土と同様である。火を受けたものか色調は黒～灰褐色を呈している。G 14出土。

2は弁間に大きな撥形の弁間文を配する複弁四葉蓮華文軒丸瓦である。文様は鮮明で整っている。9世紀後半代の、複弁四葉蓮華文系の中では比較的早い時期のものと思われる。胎土にはあまり砂を含まず、やや硬質の焼成で灰褐色を呈している。G 10出土。

3は六勝寺跡など平安京内外の平安時代後期の遺跡に多く見られる、栗柄野瓦窯産の単弁十葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏面の調整は指オサエを基調とし、下端部はヘラケズリされている。胎土にはあまり砂を含まない。やや硬質の焼成で、灰褐色を呈している。G 38出土。他にG 48からも同范品が出土している。

4は木瓜文状の四葉花文の軒丸瓦である。この文様はかなり抽象化されているが、宝相華文の系統をひくものと思われる。調整はナデおよび指オサエを基調とする。胎土には砂を多く含み、やや軟質の焼成で灰色を呈している。造瓦技法などから鎌倉期のものと推定される。G 1出土。

5は第58図4と同范であるが、文様は范傷から見て天地逆につくられている。突出した中房には『己』が表出されている。調整はナデと指オサエを基調とし、全体のつくりは4にも類似する。G 15出土。

6は西寺跡をはじめ、平安宮跡からも比較的多く見られる。平安時代前期の均整唐草文軒平



第59図 その他の瓦

瓦で、同範例によると、右下の珠文帯中に小さな『西』銘がある。焼成は硬質で青灰色を呈している。G 2出土。同範品がG 3でも出土している。

7は第58図7と同範である。つくりや焼成等もほぼ等しい。G 3出土。G 3ではもう1点同範品が出土している。

8は第58図9と同範であり、つくりもほとんど同様である。G 10出土。

9は第58図10と同範で、その中央部にあたる。焼成はやや硬質で、表面は黒色、内部は灰白色を呈している。G 37出土。

10の文様は横向きのC字を4つ連結させたような状態であるが、連結部分は草花をたばねたように表現され、本来この部分が単位になるものと思われる。文様には範ズレが認められる

が、全体のつくりは丁寧である。瓦当は厚目の平瓦の一端に粘土を付け足して形成され、その部分は横方向にナゲつけられ、平瓦部分は縦方向のナゲ調整になっている。凹面には亂れの少ない布目が全面に見られる。胎土には細砂を多く含む。焼成はやや軟質で、表面は黒色、内部は灰白色を呈する。造瓦技法などから平安時代後期の奈良地方産のものかと見られる。G14出土。なお、この文様の上下逆になった例がG17BW4から出土している。これは造瓦技法から、京都付近の産と見られる。

11はかなり退化した唐草文の軒平瓦である。瓦当面には離れ砂の細砂が目立つ。凹面の布目は比較的細かい。瓦当周囲と頸部はヘラで調整されている。胎土には砂を含み、やや硬質の焼成で、灰色を呈している。13世紀代のものと思われる。G2出土。

12~14は劍頭文の軒平瓦である。瓦当は、12は9などと同様の半折り曲げ、13・14は折り曲げないし平瓦端を押しつぶすようにして形成されている。12・13はG1、14はG38出土。

この他、北区東部より劍頭文軒平瓦が7点と巴文の軒丸瓦も出土している。

磚類（第60~63図）

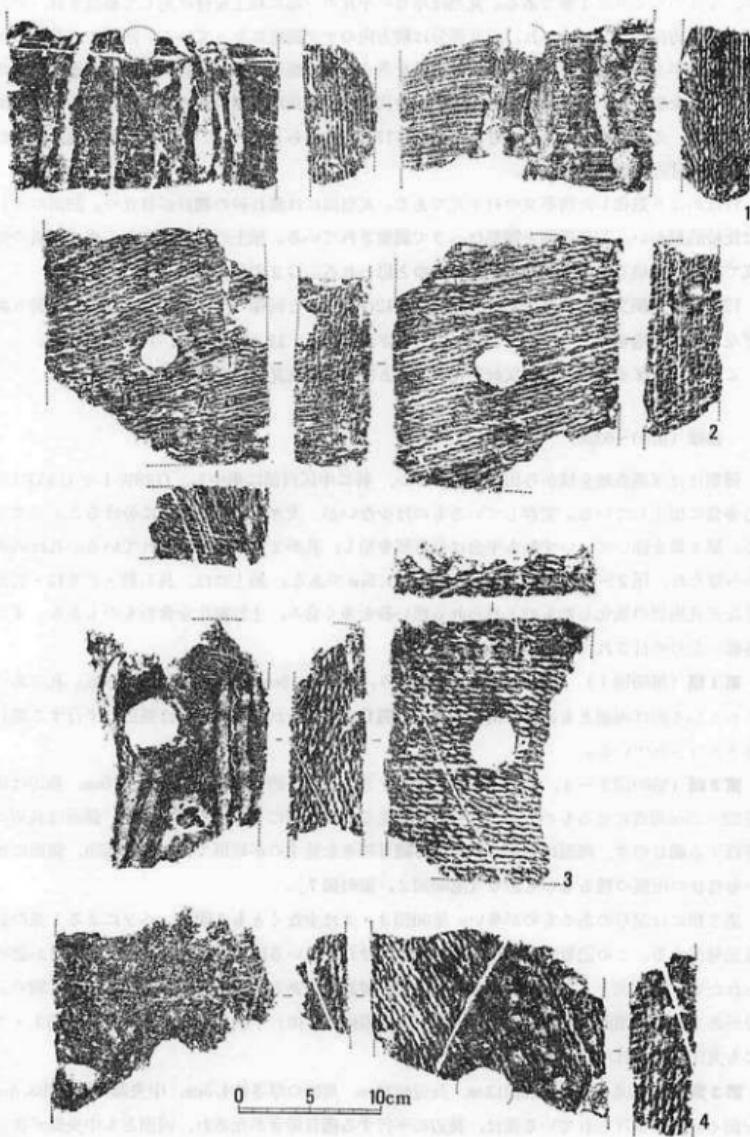
磚類はほぼ調査地全域から出土しているが、特に中区西部に集中し、G28W1やG35P1から多量に出土している。完存しているものは少ないが、大きさから5種類に分けることができる。第5類を除いて、いずれも平面は長方形を呈し、孔が2個所にあけられている。孔は両面から穿たれ、径2~3cm、最も狭い所で1~1.5cmである。胎土には、長石粒・石英粒・雲母片など花崗岩の風化したものと見られる粗い砂を多く含み、土器細片を含むものもある。また各種の記号が付されているものもある。

第1類（第60図1） 少なくとも1孔があり、短辺約19cm、厚さ約5.5cmである。孔のあけられている面は両面とも糸切り痕が顕著で、繩目は認められない。側面は長辺に平行する繩目叩きがなされている。

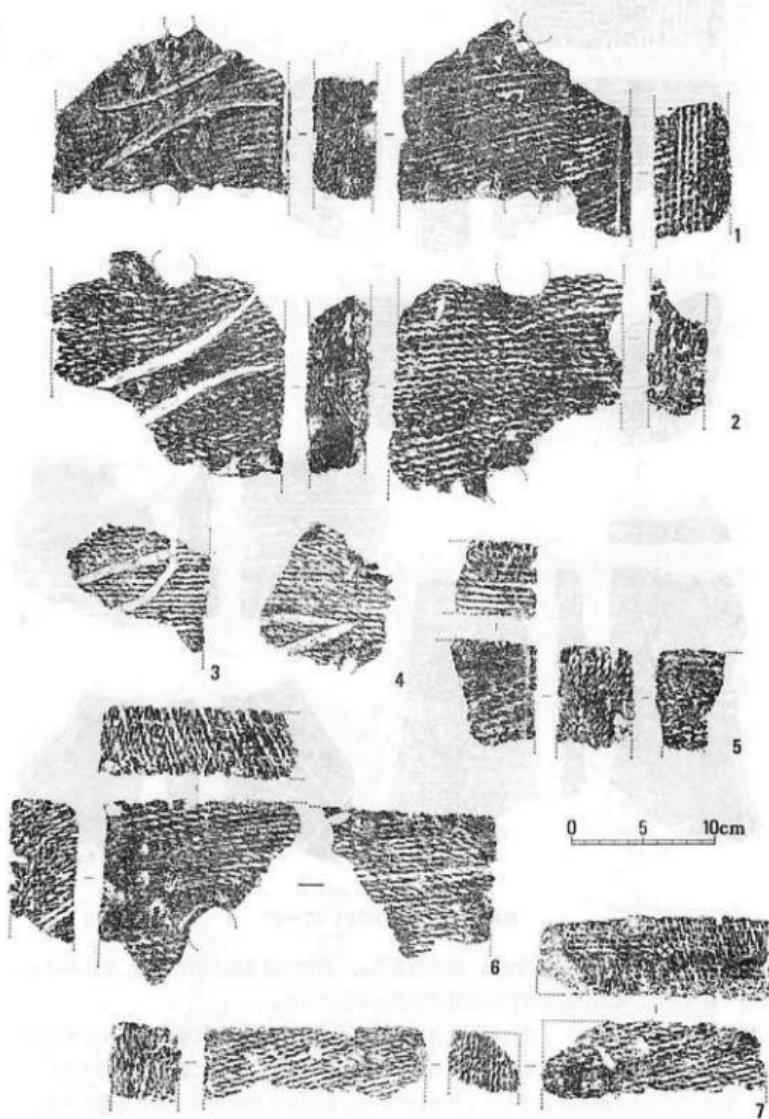
第2類（第60図2~4、第61図、第62図1・2） 厚さ約5.5cm、短辺15~16cm、長辺は推定32~33cm程度になるものと思われる。孔のある面は短辺に平行する繩目叩き、側面は長辺に平行する繩目叩き、端面は短辺に平行する繩目叩きを施すのが原則であろう。端面、側面に粗い布目状の圧痕の残るものもある（第60図2、第61図7）。

第2類には記号のあるものが多い。第60図3・4は少なくとも3面に、ヘラによる1条の斜線記号がある。この記号をもつ磚では、孔のあけられている面で記号のない面には繩目が認められない。第61図1・2は指先による2条の弧線記号がある。同3・4にも同様にして別の記号がある。5は端面に菊花文状の、同6・7も端面に『田』字状の刻印があり、第62図1・2にも丸印が押されている。

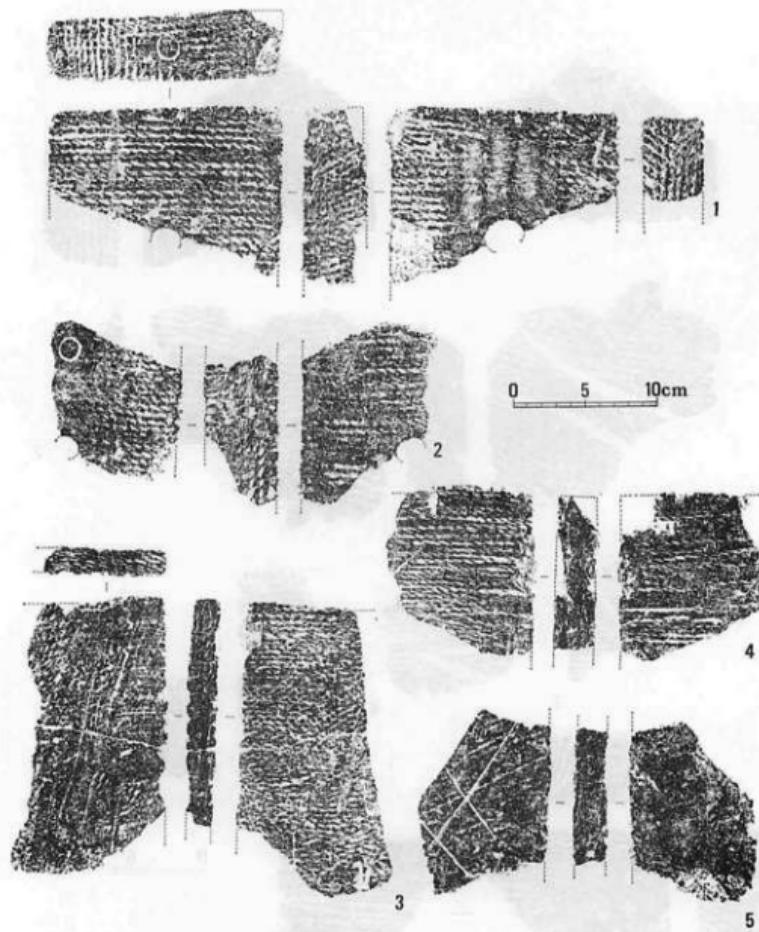
第3類（第63図1） 短辺約13cm、長辺約33cm、周囲の厚さ約4.5cm、中央部の厚さ約3.5cmを測る。孔のあけられている面は、長辺に平行する繩目叩きがなされ、両面とも中央部が窪められており、片面に指による斜線記号がある。側面は長辺平行、端面は短辺平行の繩目叩きがなされている。なおこの磚の重量は2.6kgである。



第60図 出土磚 G5溝上部(1), G35P1(2~4)



第61図「出土品 G35 P1 (1~7)

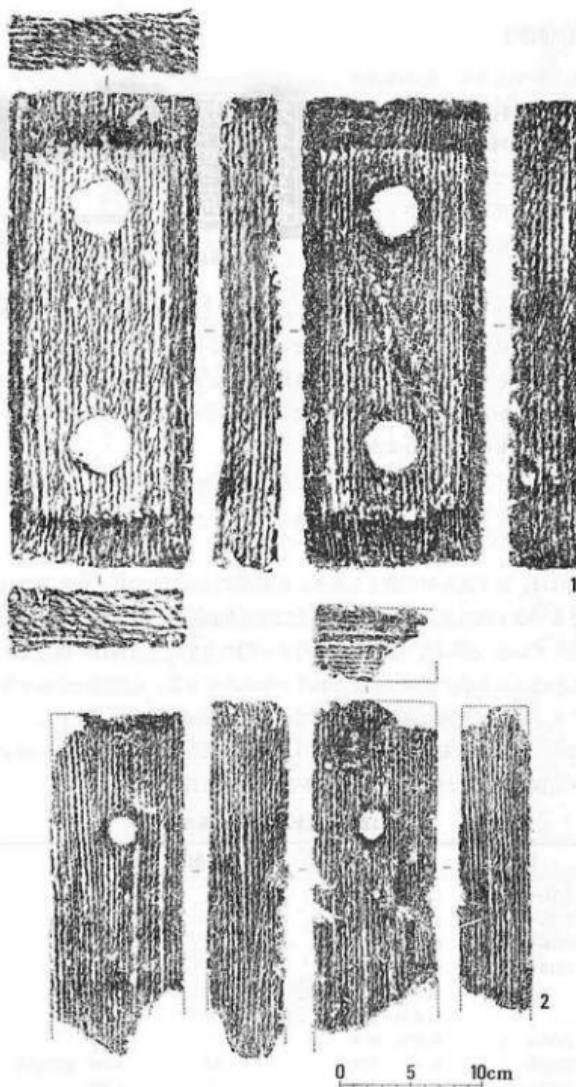


第62図 出土磚 G35P1 (1~5)

第4類（第63図2） 短辺約9cm, 厚さ約5.5cm, 長辺の長さは不明である。孔のある面と側面は長辺平行, 端面は短辺平行の繩目叩きがなされている。

第5類（第62図3～5） 全体の形状は不明であるが, 厚さから見て敷瓦のような正方形のものになるかと思われる。厚さは2.5～3cmで, 他の磚と同様, 各面に繩目叩きがなされている。またヘラによる記号のあるものも含まれている。第62図3は側面に2条の割線がある。

上記のような磚, 特に第3類に近い例は京都市内の各所で出土しているが, いずれも遊離した状態であり, 今回の調査でも, その本来の使用状態が判明するものはなかった。

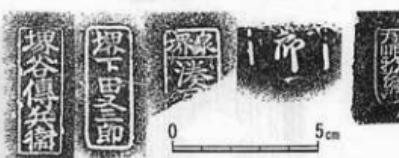


第63図 出土磚 G10W2 (1), G35P1 (2)

刻印瓦（第64図）

江戸時代のものであるが、瓦の流通を知る上で興味深い資料である。この刻印瓦はG34付近で、杭列に添って土止めのように敷き並べられていた瓦の中に混在していた。いずれも平瓦で、厚さ2~3cmのかなり厚手のものである。銘は左の例から『界谷傳兵衛』、『堀下田又三郎』。

『泉撰渾』、『二郎』、『瓦師新右衛門』となっている。『新右衛門』銘は小判形の枠に囲まれており、押された部位も平瓦端面で、他と異なっており、これは京都産であるかも知れない。他は平瓦凸面のおそらく中央に、縦位置で押されており、銘は堀の町名を冠した人名で、瓦の生産者を表したものかと見られる。ことに中央の例は、字の配置や書体が焼塙壺の刻印を思わせ、年代的にも古いものと見られよう。



第64図 G34出土瓦の刻印拓影

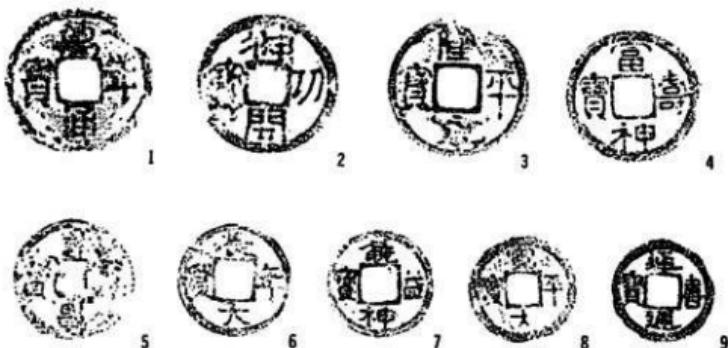
第3節 錢 貨

出土の古銭には、日本銭と中国銭がある。日本銭には皇朝十二銭と寛永通宝（G9褐色土層、G40P2より各1枚出土）があり、皇朝十二銭は和銅開延、貞觀永寶、乾元大寶を欠く以外は全て出土している（第65図、図版44上）。G5P33の長年大寶は11枚が接着して重なって出土したが、これはこより状の紙紐で結んでいたものである。皇朝銭は27枚を数え、G1, 3, 4, 5, 8, 17など北区に限って分布している（第68図、図版44下・45）。

中国銭には唐、北宋、南宋、明のものがあり、総数41枚を数える。全区にわたって出土している（第66・67図）。詳細は付表のとおりである（第11・12表）。

第11表 皇朝十二銭出土一覧表

銭 名	出 土 位 置	枚 数	直 径 cm	備 考
萬年通寶（760~）	G5 b 大溝中	1	2.55	第65図 1
神功開寶（765~）	G5 溝上部	1	2.40	2
隆平永寶（796~）	G3 P4	2	2.45	3
富壽神寶（818~）	G1 P33	3	残片2	
	G8 b 灰色砂質土	1	2.30	4
	G8 b 灰色砂質土下層	2	2.30と残片	
承和昌寶（835~）	G17 b W6	1	2.10	5
長年大寶（848~）	G5 P33	11	1.95 結び紙紐	6
乾益神寶（859~）	G1 P22	1	1.83	7
	G5 褐色土層	1	1.83	
寛平大寶（890~）	G4 溝上層	1	1.87	
	G8 A P17	1	1.83	8
延喜通寶（907~）	G5 P34	1	1.78	9

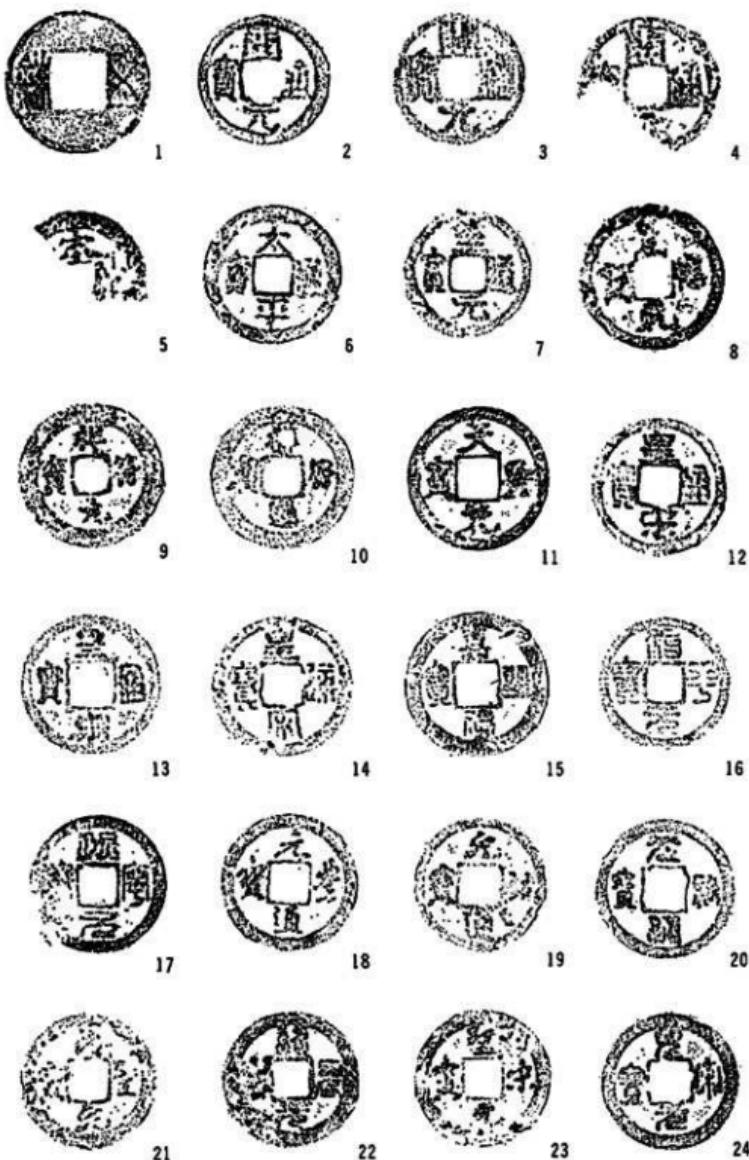


第66図 出土の皇朝十二錢拓影

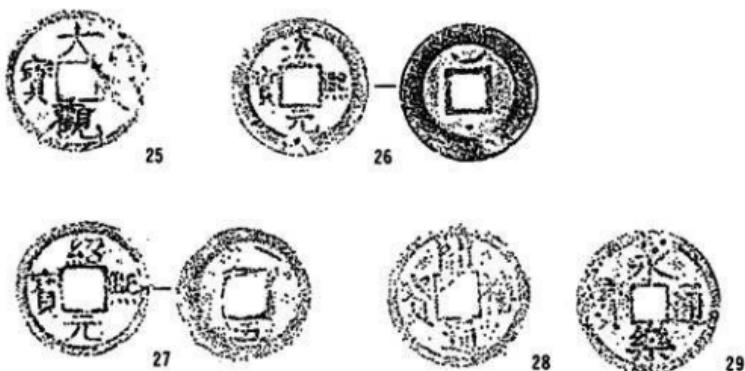
第12表 中國古錢出土一覽表

古 錢 名	時 代	初 鑄 年	出 土 地 点	備 考
五 銖			G10 W2	第66図 1
開元通寶 (氣 背)	唐	武德四年以後 621	G1 P44	2
今			G38 波唇下部	3
宋 通 園 園	北宋	建隆元年 960	G4 溝下唇	5
太平通寶		太平興國元年 976	G1 P1	6
至道元寶		至道年間 995~997	G9 褐色土層	7
景德元寶		景德2年 1005	G1 P18	
今			G41 P1	8
祥符元寶		大中祥符元年 1008	G1 P1	9
祥符通寶		大中祥符元年 1008	G1 P1	10
天聖元寶		天聖元年 1023	G1 P1	11
皇宋通寶		寶元元年 1038	G1 P22	
今			G1 P27	
今			G9 灰色砂層	12
今			G9 P31	
今			G35B P2付近	

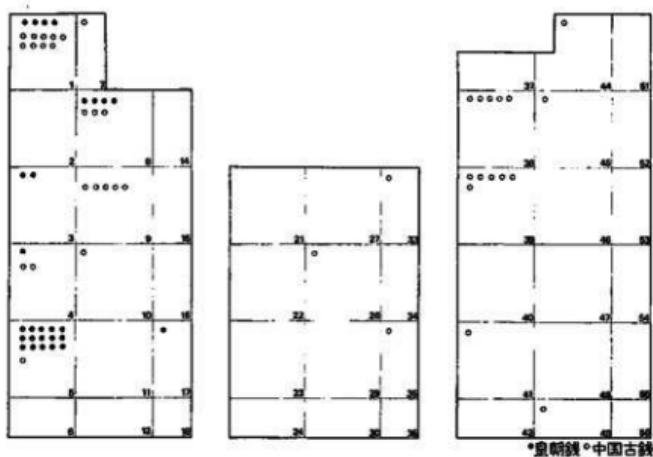
古 錢 名	時 代	初 鑄 年		出 土 地 点	備 考
皇宋通寶	北宋	寶元元年 1038	G38	褐色砂層	13
夕			G44	表層下部	14
嘉祐通寶		嘉祐年間 1056~63	G8	P3	15
治平元寶		治平年間 1064~67	G38	褐色砂層	16
熙寧元寶		熙寧元年 1068	G7	褐色土層	17
夕			G38	褐色砂層	
元豐通寶		元豐元年 1078	G8	P3	18
夕			G39	P6+7	
元祐通寶		元祐元年 1086	G39	W2	19
夕			G39	W2	20
紹聖元寶		紹聖元年 1094	G1	P34	21
夕			G5B	P27	22
聖宋元寶		建中靖國元年 1101	G39	P6+7	23
夕			G49	P5	24
大觀通寶		大觀元年 1107	G4	P8	25
淳熙元寶	南宋	淳熙元年頃 1174 (背上に月文、背下に星文)	G39	P6+7	26
紹熙元寶		紹熙5年 1194 (背右肩に月文、背下に五)	G28	W1	27
開禧通寶		開禧年間 1205~07	G38	褐色砂層	28
永樂通寶	明	永樂6年	G9	褐色土層	29
夕			G33	褐色土層	
□□元寶			G9	西側面	
不明			G8	P2	



第66図 出土の中国銭貨拓影



第67図 出土の中国錢貨拓影



第68図 出土錢貨の分布図

第7章 後 論

第1節 土器の年代および土師皿の法量変化

1. 土器の年代

溝出土の土器

層位的に一括品として分離しうるのは、最下層とその直上との出土品であり、溝上層および下層の出土品には、新旧がかなり混在する。まず最下層出土の土器からとりあげる。壺・皿類には、外面の調整として、口縁端部をヨコナデで仕上げるe手法と、口縁端部までケズリを加えるc手法がある。そのほか、ケズリが端部にまでは及ばず、ヨコナデが残る手法、あるいは、ケズリが浅いためにオサエ痕を残す手法がある。これをケズリ技法の衰退とするならば、この傾向は特に皿において著しい。

c手法品とe手法品とは、比率のうえではほぼあい半ばする。c手法品に対するe手法品の増加が、奈良時代末から平安時代前期にかけての手法の傾向の変化であることが指摘されているが、この点からすれば、溝最下層出土土器は、平城京 S D650 B¹⁾に近いといえる。

ただし、S D650 B出土土器には、口縁端部が弯曲する皿が伴うのに対し、本造構品には、この類をほとんど含まないという相違がある。この点で、S D650 B出土土器よりは古い特徴をそなえている。S D650 B出土品の高台付壺がe手法であり、いっぽう本造構の同系品がc手法であることもまた、この推測をさまたげない。

いっぽう須恵器みると、壺・皿のばあい底面に笠切りといわれる粘土紐状のラセン状痕を残すものと、さらにナデを加えて調整したものとにとどまり、ケズリのものはみられない。ケズリ技法の退潮が技法変化のひとつの傾向であり、かつ粗雑化への動きであるとするならば、最下層出土の壺・皿は、なおケズリ技法品を含むS D650 A²⁾のそれよりも新しく、S D650 B品の時期に近いといえる。なお、鉄鉢形品の底部が丸底であるのは、8世紀以降の尖底の伝統を失ったことになる。

つぎに、最下層直上出土の土器に移ると、土師器の壺・皿は、外面のナデ調整を口縁端部にとどめるe手法品ばかりであり、しかも、口縁端部の屈曲するものが多い。e手法に限られる点からすれば、S D650 B出土の同系品よりも新しくまた壺部の屈曲度からすればS D650 B出土のそれに近い時期が与えられる。低い方形の貧弱な高台がつく須恵器壺は、S D650 B出土の同系品よりも退化しており、須恵器系食器の衰退を、形態上からもうかがわせる。

以上述べた点からみて、最下層出土土器の年代はS D650 B出土土器の年代より若干古く、

最下層出土土器の年代はそれよりいくぶん新しいことが知られる。SD650B出土土器の年代を西暦900年前後とするならば、最下層出土土器は9世紀後葉、最下層直上出土土器は10世紀前葉にそれぞれ比定しうるであろう。

G10P6, G17BW3, G3P4出土土器

G10P6出土土器のはい、土師皿の口縁端部の屈曲が、溝最下層直上の同系品に近い。また、折りかえし口縁をもつ須恵器鉢は、亀岡市猿町前山2・3号窯の出土品¹²⁾に同系品があり、また大型品が平城京 SD650B出土品中にもある。出土した2点の灰釉陶器は、黒竪90号窯式¹³⁾にあたるようである。G17BW3の土師皿は、G10P6の同系品よりやや小型で、端部の屈曲度がいくぶん大きい。この点で若干の時間の下降を思わせ、薬師寺西僧房の出土品¹⁴⁾に近い。併出した須恵器の小型壺は、陶邑TK230-I号窯（V型式第2段階）¹⁵⁾の出土品に類似がみられる。なお、G3P4出土の土師皿は、G17BW3と口径は近いが、端部の屈曲に若干の相違がある。

これらの点で、G10P6, G17BW3, G3P4の出土土器は、10世紀前葉～中葉に比定しうると思う。

G16BP1, G29W1出土土器

G16BP1出土の土師皿は、「寛治五年」(1091)銘の墨書須恵器が出土した平安京左京四条一坊SE8¹⁶⁾の同系品よりも、形態上先行し、平安京内膳町SD41A¹⁷⁾のものに近い。内膳町SD41Aからは、G16BP1と同類の須恵器小型壺が出土している点でも、時間の併行をうかがわせる。灰釉陶器は、折戸53号窯式かと思われる。内膳町SD41A出土土器は、11世紀中葉～後葉に中心を置くとされており、その年代比定に従っておきたい。なお、瓦質の小型壺は、形態・技法ともに須恵器の小型壺に類似している。瓦器出現の事情の一端を知るうえで興味深い。

G29W1出土土器のうち、土師皿の形態は、平安京左京四条一坊SE8出土の同系品に近似する。灰釉皿2点はともに黒竪90号窯式にあたるようあり、同式の年代を10世紀に求めるなら、土師皿が示す11世紀末の年代観とくいちがうことになる。玉縁が鋭く尖った白磁碗は11世紀に入れてよからう。

G21P11出土土器

口縁部を2段にナデた大皿は口径14.5～15.0cm、小皿は口径9.5～10.0cmをはかり、内膳町SE176下層または同SE288上層品の口径に近い。神戸市神出窯系のねり鉢は、12世紀後半とされる平安京左京四条一坊SK10¹⁸⁾出土の同系品より古い形態をそなえている。中国陶磁が青白磁および白磁に限られ、青磁を欠く。これらの点で、G21P11出土土器は、12世紀前半または中葉前後に比定しうると思う。

G 7 P11・G 18W1・G 27W1 出土土器

3 遺構出土の褐色大皿は、口縁端部をつまみあげている点で、前述の G 21 P11 に後続する。そのなかでは、G 18W1 の褐色大皿の口径がもっとも大きく、G 7 P11 品、G 27W1 の順になる。褐色大皿の口径が小型化する傾向は、12世紀後半から著しくなる。G 18W1 出土瓦器碗は、白石編年¹³⁾の第 5 型式に近い。第 5 型式の使用時期の一点は 12世紀中葉にあるといふ。

神出・魚住窯系のねり鉢の形態もまた、G 21 P11 品より形態上新しく、しかも、G 7 P11 品よりも、G 27W1 品の方が、口縁端部の肥厚が進んでいる点で、新しい傾向にある。この推移は、褐色大皿の知見とも一致する。

青磁の碗・皿類が加わるのは、12世紀中葉からはじまる現象であり、しかも 13世紀中葉から出現するとされるケズリ出し鎬蓮弁碗を含まず、G 18W1、G 27W1 にお白磁碗をみる。輸入陶磁に関する森田編年¹⁴⁾によれば、Ⅲ期 1 小期にあたり、12世紀中葉から 13世紀初頭に比定されている。

これらの点で、G 18W1、G 7 P11、G 27W1 出土土器には、12世紀後半から 13世紀初頭に至る年代が与えられ、3 遺構品間の細差はこの間の時間差を示しているものと思う。

G 17BW6、G 4 P19、G 40P4 出土土器

3 遺構出土品に共通する褐色大皿で口径の平均をはかると、G 17BW6 品では 12.7cm、G 4 P19 品では 12.6cm、G 40P4 品では 12.2cm をはかる。いずれも口径 13.0cm に満たない点で、口径 13.5cm を平均とする G 27W1 品よりは新しいことが知られる。そのなかで、口径の平均がほぼ等しい G 17BW6 品と G 4 P19 品とは時間が接近し、小型の G 40P4 品はやや後出であることが知られる。

G 4 P19 出土の瓦器碗は、白石編年の第 6 または第 7 型式にあたる。同編年によれば、第 7 型式の存続年代の一点が 13世紀前半に求められるといふ。

G 4 P19 および G 40P4 出土の神出・魚住窯系のねり鉢は、G 27W1 の同系品に較べて口縁端部の鋭さを欠く点で、新しく位置づけられる。G 4 P19 出土の常滑窯大甕は、赤羽編年¹⁵⁾のⅡ期後半からⅢ期に該当する。Ⅱ期後半からⅢ期に対し、13世紀から 14世紀前半の年代が与えられている。

いっぽう、中国陶磁器をみると、青磁碗は削り出し鎬蓮弁文碗と、いわゆる同安窯系碗とに限られ、細蓮弁碗を含まない。また、白磁には口禿の類をみない。これらの点で、森田編年のⅢ期第 2 小期にあたると思われる。Ⅲ期第 2 小期は 13世紀中葉に比定されている。なお、G 40 P4 出土の大型壺は、佐賀県神崎郡東脊振村坂本靈仙寺跡¹⁶⁾、福岡市博多区冷泉町¹⁷⁾などの類品と較べ、特に大型の部類に属する。

これらの点で、G 17BW6 および G 4 P19 の出土品は 13世紀中葉およびその前後、G 40P4 出土品は、それよりやや降る頃に比定しておきたい。

G 8 P 2 出土土器

褐色大皿は口径11.3cmを平均とする。初期のヘソ皿が含まれ、また、白色大皿の器壁がきわめて薄い。これらの点は、平安京左京内膳町 S E 255、吉田近衛町 S K 02¹⁵⁾、京大医学部構内 S K 10¹⁶⁾、平安京左京五条三坊十五町土壙 B¹⁷⁾の土器皿に近く、同志社大学構内地下鉄烏丸線今出川駅地点 S K 202¹⁸⁾の土器皿よりやや古い特徴をそなえる。

鍋の口縁端部の形態は、時間差をよく反映しているが、これによると、G 8 P 2 出土の鍋は、吉田近衛町 S K 02出土品に類似をみる。また、神出・魚住窯系ねり鉢は、左京内膳町 S K 154出土品に近い。

左京内膳町 S K 255出土品は、14世紀中頃を中心とする時期とされており、同 S K 154出土品はそれに先行するとされている。そこで、G 8 P 2 出土品は、14世紀前半に比定しておきたい。

G 2 P 1 出土土器

白色陶のなかに亜白色土のものを含み、G 8 P 2 の同系品に較べ、器壁が厚い。この変化はヘソ皿についてもいえる。白色陶およびヘソ皿の器壁が薄くなるのは、白色の色調を呈する胎土が欠乏する事態に直面した苦肉の策であり、再び厚手になるのは、次時期において焼成後の色調をやや犠牲にしても、別種の土を加える工夫を行なったと解することもできる。褐色大皿の口径は平均11.3cmをはかり、G 8 P 2 の同系品の平均口径よりやや小さい。

瓦器の小型壺は、左京内膳町 S E 255、常盤井殿町遺跡 S K 244品¹⁹⁾があり、口縁端部を折りかえした鍋もまた前者の遺構から出土している。この種の鍋は、奈良市古市南町古市城址城山地区²⁰⁾の報告書でいう土器器羽釜 B、奈良県宇陀郡櫻原町大王山遺跡²¹⁾および元興寺極楽坊出土藏骨器²²⁾の一部に近い。平安京城での出土例は稀であり、和泉出土の羽釜とともに時期による形態の相違がみられるようであり、G 2 P 1 出土品は、康永元年（1342）の紀年墨書きをもつ元興寺極楽坊出土品に近い。

魚住窯系のねり鉢は、G 8 P 2 出土の同系品より後出の特徴をもつ。14世紀末葉に比定されている左京内膳町 S E 372、吉田近衛町遺跡 S K 01に、口縁端部の肥大したねり鉢の類品をみる。それより若干古く位置づけうるかもしれない。常滑焼の大甕は赤羽綱年の第IV期にあたり、同期には14世紀後半～15世紀中葉の年代が与えられている。

以上、類例の検索の結果によれば、G 2 P 1 出土品にはなお若干の時間の幅がみとめられ、したがって、14世紀中葉または後半とするのが穏当なところであろう。

G 3 P 1, G 51 W 1 出土土器

褐色大皿の口径は、11.1cmを平均とする。この平均値は、G 2 P 1 の同系品のそれよりわずかに小さい。精製の小型羽釜形品は、左京内膳町 S E 372、常盤井殿町遺跡 S K 306に類品をみ

る。これらの点で、G 3 P 1 の出土品は14世紀後葉に比定しておきたい。

G 51W 1 の褐色大皿は、口径11.0cmに満たず、G 3 P 1 の同系品より後出であることが知られる。亜白色の大皿が加わるのは、左京内膳町遺跡のばあい、15世紀前半とされるSK 386からであり、京大構内遺跡の編年によれば、15世紀とされる「中世京都Ⅲ期」²²⁾からである。ひとまず15世紀前半に比定しておきたい。

G 15 P 1 出土土器

亜白色の大皿は、G 51W 1 の同系品に較べ器高を減じ、偏平である点で、新しい傾向をもつ。15世紀後半に比定されている左京内膳町SK 142、15世紀前半に推定されている同志社女子大学図書館建設地SK 340²³⁾出土のものに近い。

備前焼のすり鉢は、口縁端部の発達が少なく、間壁編年²⁴⁾のⅡ期末またはⅣ期初にあたると思われる。Ⅲ期とⅣ期との交には、1400年前後の年代が与えられている。美濃系の灰釉平碗は、美濃窯の編年²⁵⁾を採用すれば、施釉陶Ⅲの形態に似る。施釉陶Ⅲは15世紀の第3四半期に比定されている。

備前のすり鉢には使用痕が著しいので、放棄に至るまでの使用期間の存在を想定すると、G 15 P 1 出土品は、15世紀前半または中葉に比定しうると思う。

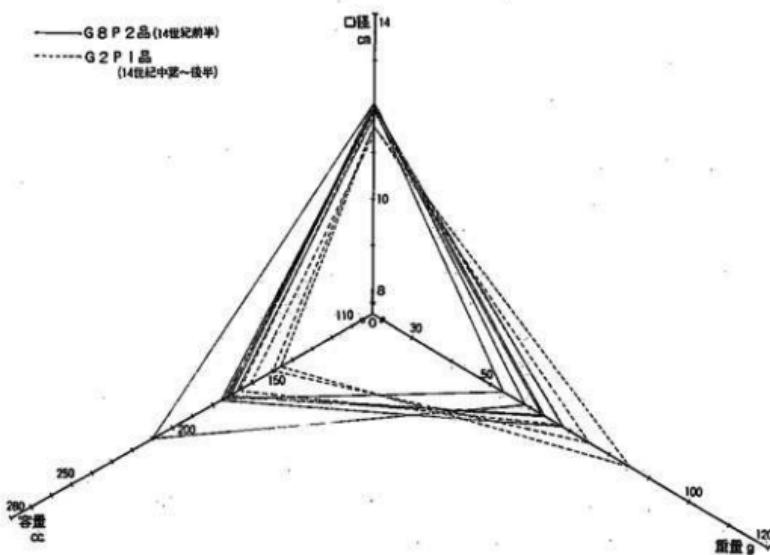
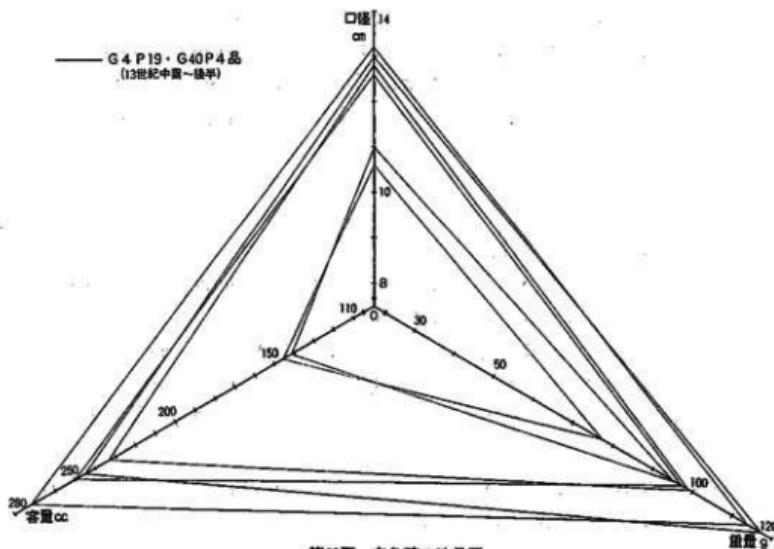
2. 土師皿の法量変化

白色碗の法量（第13表、第69・70図） 13世紀中葉ないし後半の白色碗を、G 4 P 19およびG 40 P 4 の出土品で代表させる。これらを口径の大きさで2群に大別すると、口径12.6～13.2cmをはかる大型の4個は、容量233～272cc、重量97.7～117.8gをはかり、口径10.6cmおよび11.0cmをはかる中型の2個は、それぞれ容量141ccと146cc、重量77.4gと95.4gをはかる。これら2群が正しく分離しうるかどうかは、なお他遺跡での検討を俟たねばならないが、もし分離できれば、大型品と中型品との容量の比がおよそ2：1となる点に、両品の製作時の約束を察知することができる。

ついで、14世紀前半の白色碗をG 8 P 2品、同中葉ないし後半のものをG 2 P 1品でそれぞれ代表させる。法量をみると、G 8 P 2の6個では、口径11.6～12.2cm、容量168～176cc、重量53.0～68.6gをはかる。ただし、210ccをはかる容量のやや大きいものが1個ある。また、G 2 P 1の4個では、口径11.4～11.8cm、容量

第13表 白色碗の法量一覧表

出土地・面番号	口径 cm	容量 cc	重量 g
G 4 P 19・第38面 (13世紀中葉)	1	13.2	272
	2	13.0	245
	3	12.8	233
	4	12.6	250
	5	11.0	141
G 40 P 4・第41面 (13世紀後半)	1	10.6	146
G 8 P 2・第43面 (14世紀前半)	1	12.0	174
	2	12.2	171
	3	12.2	210
	4	12.0	176
	5	12.0	173
	6	11.6	168
G 2 P 1・第44面 (14世紀中葉 ～後半)	2	11.8	167
	3	11.6	150
	4	11.6	146
	5	11.4	161



146~167CC、重量86.0~85.0gをはかる。すなわち、2群に分離できるG 4 P19・G 40 P 4品に対し、G 8 P 2品およびG 2 P 1品では、それぞれ単一の群を形成しているわけである。なお、法量の計測に至らないが、口径13.9cmをはかる大型品がある(第44図1)。ただし、出土量は少ない。

13世紀から14世紀に至る変化の内容は、むろん群形成の相違だけにとどまらない。G 4 P19品の大型の1群をとりあげて、14世紀前半のG 8 P 2品と法量の比較を試みると、口径、容量、重量とも劣ることが知られる。この傾向はとりわけ重量において著しく、減少が約4%に達する。このことは、G 4 P 9品1個の土量で、

G 8 P 2品ではほぼ2個の製作が可能であったことを物語っている。

1個あたりの使用土量の著しい減少に較べれば、口径、容量の減少幅は大きくない。あるいはまた、G 8 P 2品を今度はG 4 P19・G 40 P 4の中型品と比較してみると、G 8 P 2品が口径、容量でまさり、重量で劣ることがわかる。これらの点からみて、1個あたりの使用土量の減少は、器体を小型化するよりも、器壁を薄くすることで解決をはかったことが推測される。

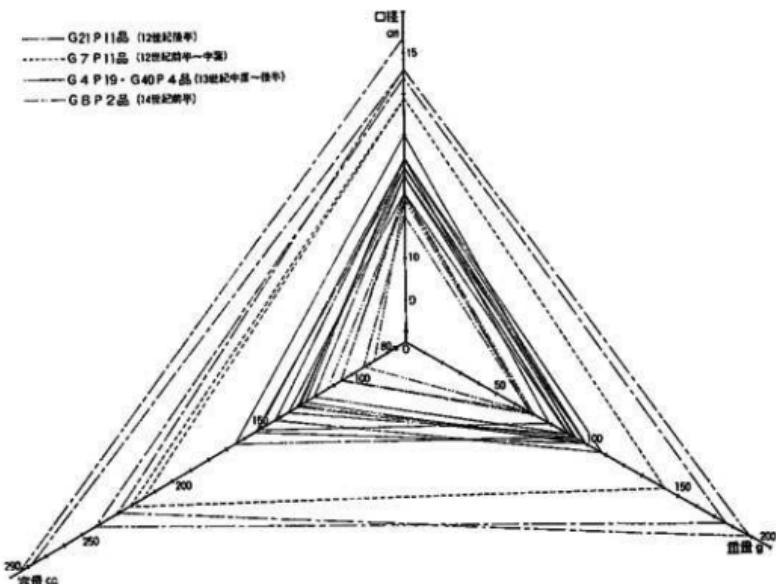
ところが、14世紀中葉ないし後半のG 2 P 1品になると、G 8 P 2品に較べて、口径、容量とも劣るけれども、重量でいくぶんまさっている。このことは、先に指摘した、G 2 P 1品における器厚の増加を裏づける。

1個あたりの使用土量の減少は、発色の美しい白色土の不足によるとも、少ない土量で生産量の増加をはかる功利的な意図に出るとも考えられるが、前者の状況をあえて主張したいのは、G 2 P 1品において、白色土以外の発色が劣る土を混ぜ、焼きあがりの色調をやや犠牲にして器厚の増加をはかった形跡がみられるからである。

褐色大皿の法量(第14表 第71図) 12世紀前半ないし中葉の褐色大皿をG 21 P 11品、12世紀後半のものをG 7 P 11品、13世紀中葉ないし後半のものをG 4 P 19・G 40 P 4品、14世紀前半のものをG 8 P 2品、14世紀中葉ないし後半

第14表 褐色大皿の法量一覧表

出報地・図面番号	口径 cm	容量 cc	重量 g
G 21 P 11・第35図 1 (12世紀前半 ~中葉)	14.4	242	176.5
	14.6	230	189.4
	15.3	284	
	14.6	278	
G 7 P 11・第25図 24 (12世紀後半)	13.8	224	143.3
	13.8	217	
G 4 P 19・第38図 8 (13世紀中葉)	13.0	165	92.3
	12.4	152	79.1
	12.2	129	93.6
	11.6	136	89.4
	12.4	124	98.3
	12.2	154	99.4
G 40 P 4・第41図 3 (13世紀後半)	12.4	143	108.2
	12.0	130	96.8
	12.0	121	88.1
G 8 P 2・第43図 14 (14世紀前半)	11.6	106	69.9
	11.4	106	68.8
	11.4	113	
	11.0	93	68.5
	11.4	87	
G 2 P 1・第44図 12 (14世紀中葉 ~後半)	10.6	89	
	10.8	96	
	10.2	89	56.0
G 3 P 1・第43図 33 (14世紀後半)	11.2	132	78.5
	10.7	108	67.0
	11.1	125	62.0
	11.0	120	69.0
	11.1	115	73.3
	10.8	110	65.5
	10.9	104	69.5
	11.2	125	67.3
34	11.4	129	71.2
	11.1	124	75.5
	11.5	130	68.2



第71図 棕色大皿の法量図

のものをG2 P1・G3 P1品でそれぞれ代表させることにする。ただし、表示の資料数は遺構ごとで多寡がある。その点で、G7 P11の2個の法量を12世紀後半の代表とできるかどうか、他遺跡での検討を俟たねばならない。

まず口径の変化をみると、平均14.7cmをはかる12世紀前半ないし中葉のG21 P11品から、平均11.4cmをはかる14世紀前半のG8 P2品に至る間で、減少する傾向が看取できる。ところが、14世紀のなかでは、顕著な減少の傾向がみられず、しかも、口径11.0～11.5cmのものももっとも多い。

容量や口径の変化についても同様のことがいえる。すなわち、平均258.5ccをはかるG21 P11品の容量が、平均139.3ccをはかる13世紀中葉ないし後半のG4 P19・G40 P4品に至って半減し、さらに、14世紀前半のG8 P2品で若干の減少をみる。また、重量の点でも、平均183gをはかるG21 P11品の重量が、平均94gをはかるG4 P19・G40 P4品で半減し、さらに、G8 P2品でやや減少している。それに対し、14世紀を構成するG8 P2品、G2 P1品、G3 P1品には、時間差があるけれども、容量、重量とも目立った変化はみいだせない。

容量の半減が用途の変化を物語るかどうかはともかく、重量の半減は、G21 P11品1個分の土量でG4 P19・G40 P4品2個の製作が可能であったことを示している。また、この間に、褐色大皿は粗造になる。これらの点からみて、生産効率を念頭においた量産化のはかられたことが知られる。法量に著しい変化のない14世紀は、その動きの到達点であったのである。

ちなみに、褐色小皿の重量をはかり、造構別に平均値を求めるとき、それぞれ、G21P11品およびG7P11品では66g、G4P19・G40P4品では45g、G8P2品では31g、G2P1品では42g、G3P1品では36gをはかる。そこで、各造構の褐色大皿の重量と比較してみると、それぞれ、G21P11品で約14、G7P11品で約14、G4P19・G40P4品で約14となり、G8P2品などの14世紀のものでも約14の値は変わらない。すなわち、褐色皿の大小間における土量の比率は、12世紀と13・14世紀との間で差がみられるわけである。

第2節 輸入陶磁について

本遺跡の最古の時期である北区溝最下層には、青磁、白磁の磁器類は1点も出土していない。

青磁が出現するのは、上述溝の上層からで越州窯青磁碗が1点のみ出土した。ほぼ10世紀後半から11世紀にかかる時期の包含層である。この青磁は胎土が緻密な灰茶色で、焼成は堅板である。釉は墨付を除き、外底部の内面までの内外両面に及び、A類といわれる¹⁷⁾精製品である。通常の碗に比べ、器体の起ち上がりが強く、高台はきわめて低い。目痕が内底と墨付に付着している。

11世紀中葉から後半の時期にかけての造構（たとえばG3P4タイプの土師皿を出土する造構）からは、本遺跡では陶磁器は出土していない。しかし、この時期に平安京で陶磁器が伴うことは、平安京左京の三条西殿（京都市左京区三条烏丸西北角）の三条大路側溝の出土遺物によって確かめられる。この溝中からは第一に越州窯青磁碗、皿、水注が出土している¹⁸⁾。これらは、内外全釉で緻密な胎土をもつ精製品で、從来言われているように、11世紀代まで越州窯青磁が存することを示している。

第二に白磁の出土が顕著になり、量的には青磁や他の陶磁を抜いて、最大の占有率を占めるようになる。これらには、碗、皿、水注があり、碗には太目の玉縁口縁や高い輪状高台を持つものも含んでいて、平安京西寺出土の邢窑白磁¹⁹⁾と異なった第2期的白磁²⁰⁾の特徴を示している。このほか、青白磁（袋物飾）や褐釉物も伴っている。

11世紀末になると、越州窯青磁は姿を消し白磁が主体となってくる。京都市壬生車庫出土の寛治五（1091）年墨書銘のある須恵器に共伴した土師皿は本遺跡のG29W1出土のそれと同形であり、これには白磁碗が1点出土した。この碗は薄くて幅広の玉縁口縁を有し、灰白色の素地とそれを受けた灰白色的釉色を発している。G29W1とはほぼ同時期である平安京左京五条三坊十五町の井戸Dでは、有高台玉縁や有高台素縁の白磁碗、皿、青白磁合子身、褐釉四耳壺が出土し²¹⁾、この期の輸入陶磁器の内容をG29W1を補って示している。

そしてこの組合せは11世紀後半のそれを引きついだものもある。

この次に現れるのは、G21P11である。G29W1より後出する土師皿を出土し、土師皿の順列よりして、12世紀初頭から前葉の頃が考えられる。これには、白磁碗、皿、青白磁水注が伴っている。碗は内口縁をわずかに外反させた直口口縁で、体部外面に片影による斜行線をめぐ

	青 磁	白 磁	そ の 他
溝上 層	29		
G29 W1		8	
G21 P11		23 24 25 26 27 28 29 30	22
G7 P11	40		35
G18 W1	1 19	17 18	15 16
G27 W1	40	28	
	37 38		
G4 P19	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11		
	2	14	
G40 P4	19 18	24	20

第72図 出土中国陶磁の変遷図

らせている。皿は浅い輪高台に、外体部の中位で段をつくり、その上部を外反させた通有のものであり、前述した左京五条三坊十五町の井戸C, Dに出土している。青白磁水注としたものは、四耳蓋の可能性もあるが、口径が13.2cmとやや広く、頸部も6cm以上で、この期の四耳蓋よりも長いので水注と考えた。しかし、このような外反度の弱い口縁部と折り返しの強い口縁部を持った水注は管見に触れないようなので、器種の決定も含めて今後の類例の増加を待ちたい。

こうした白磁、青白磁に次いで出現するのが、G 7 P 11出土の竜泉窯系の青磁である。

出土の碗は厚い器肉で高台外面にまで灰緑色の厚い釉がかけられ、内面には劃花文が片彫りで表現されている。さらに体部外面には片彫りによる直線文が縱方向に彫られ、それに沿って櫛目文が同方向に付されている。

浙江省竜泉県道太区大白岸一帯の竜泉東区窯址では最下層の10層、9層に内面に劃花文、外面に片彫の斜直線文を持つ青磁碗が出土し、その上層の7~9層には外面は素文で内面には劃花文を持つ青磁碗が出土し、両者に先後関係があることを示している²²⁾。

本品は外面に文様を持つ点で、竜泉東区窯の下層出土品と共通しており、竜泉窯青磁の中で古期に位置づけられるものである。竜泉窯の報告書では、第10層をおおよそ北宋末期、9~7層を南宋早中期に推定しており、これによれば、外面に文様を付すものには、おおよそ12世紀の前半から中頃にかけての時間的位置が与えられる。本品に即座にその時間的位置を与えるかどうか問題を残すが、12世紀中葉以前の時期においても、土師皿の順列とは矛盾しないものである。これに並行して白磁碗も使われている。

G 18W 1, G 27W 1には、いわゆる同安窯系皿と白磁碗が伴っている。これに伴う土師皿はG 7 P 11より後出し、鎬蓮弁碗に伴う次期の土師皿よりも古いので、この間に伴い、おおよそ12世紀の後半期に置くことができる。G 7 P 11出土と同例の竜泉窯碗はG 27W 1にも出土しているが、G 8 単独出土の完器の竜泉窯碗はG 7 P 11出土のそれに後続して出土するものである。すなわち、片彫で碗内面にのみ劃花文を付す例で、竜泉窯東区窯址で、外面文様を持つ碗の上層に出土したものである。この碗類は同報告書ではV~VI類に分けられ、後出と考えられるVI類に伴う“淳熙”銘(1174~1189)の長頸蓋及びそれと共に輪花と五条の白痕を有する碗と同一の“慶戊年”(南宋紹熙元年)銘(1190)の碗を出土した安徽省宋墓から、12世紀後期後葉の時期に年代の一点を与えることができる。したがってG 8 単独出土の竜泉窯碗はG 8 W 1, G 27W 1と併行期に置いて大過ないであろう。

これらの次期に現れるのがG 4 P 19の出土品で、同安窯系碗、皿、竜泉窯青磁碗、白磁碗、皿、水注、黄釉盤である。同安窯系碗皿は前代から出土する品で、新期に現れるのは運弁を持った碗である。その一つは厚い器肉に厚い釉がかかり、青緑色を発する。体部外面には鎬蓮弁が巡る。他は、運弁が巡るが、器肉はやや薄く、釉は黄緑色に発している。

水注は高台に特徴があり、特に高台外側は2.0cmと高く、強調された高台になっている。これは前代の低高台より、後出した特徴を示すものである。

盤は多量の砂粒を含む、白灰色の粗い胎土で、釉は内面と外面口縁下部3.5cmまでに釉がかけ

られ、黄色に発している。盤の口縁は小形方形の玉縁状になっている。福岡市京ノ隈1号經塚の外容器蓋に使われていた12世紀前半代と考えられる黄釉大盤³³⁾は、外折口縁となって古い様相を示しており、玉縁口縁の盤は後出のものと考えることができる。

福岡県大宰府史蹟 S D 605 出土の陶磁器は蓮弁を有する竈泉窯碗と三彩盤とからなっていて³⁴⁾、この G 4 P19 と同様の組合せを示している。盤は三彩であるが、暗灰色で、粗い砂をまじえる胎土で、口縁は玉縁状となり、本遺構出土の盤と共通の特色を示している。

北区より採集された三彩盤底部も暗灰色で砂まじりの胎土をしており、同様の品と考えられる。

竈泉東区窯址では、鍋蓮弁を有する碗の時期を南宋中晚期とし、大宰府 S D 605 では貞応3(1224)年銘木札を出土しているので、この G 4 P19 はおおよそ13世紀の前半代の時期を考えることができる。

G 40 P 4 には竈泉窯碗二点、褐釉四耳壺、白磁水注、黄緑釉盤が出土している。水注は高台の作り出しは小さく、G 4 P19 に先だって出現するもので、12世紀後半に出現するものである。盤は黒灰色の砂粒を含む胎土で、口縁が大きめの方形につくられたもので、G 4 P19 と同系と考えられる。褐釉四耳壺は時期幅があり、それ自体では特定できず、13世紀を中心において、その前後に位置づけられるものである。

第3節 瓦について

今回の調査で出土した瓦類は、奈良時代後期から江戸時代のものまでを含んでいるが、量的には多いものではない。これらの瓦類の特徴および問題点は次のようになろう。

まず、北区 G 4・G 5 付近の溝内から出土した瓦類。特に平瓦について見ると、いずれも平安時代前期ないしそれ以前のものと見られる点が注意される。まだ平瓦について充分な年代観ができるといえないが、第57図 1～5 の平瓦は、平安時代前期の代表的な官窯である西賀茂瓦窯産の平瓦やそれ以後のものと比べると古式を呈するものである。すなわち、西賀茂産の平瓦では、厚さ 2 cm を越えるものは少なく、胎土には砂を多く含み、かなり軟質の焼成のものが大半で、成形もやや粗雑である³⁵⁾。これに対し、今回出土の平瓦は、成形技法や焼成の点でも優っている。さらに第57図 3～5 のように、布目や繩目を磨り消す技法は恭仁宮出土瓦に多く認められるもの³⁶⁾、平安京においてはほとんど見ることがない。

このような瓦が出土することは、ただちにこの場所に平安時代以前より瓦葺きの建物が存在していたことにはならず、平安宮跡より前代の宮型式瓦が出土するように、再利用の可能性もあり、今後別記の蔵のあり方とも関連づけて検討したい。

次に平安時代初期の瓦では西寺系瓦に関する問題がある。西寺系としたものは蓮華文軒丸瓦 1種（第59図 1）と唐草文軒平瓦 2種（第58図 7、第59図 6・7）である。この内、第58図 7、第59図 7 は西寺跡からの確実な同形例が見あたらず、第59図 6 は西寺跡だけではなく、平安宮跡や北白川院寺などからも出土し、前期の官窯製品と同じような分布が見られる。したが

って、これら西寺系の瓦が直接に西寺と関係するものかどうかはわからない。ただ、今回の調査地の北に隣接する、京都市埋蔵文化財研究所による八条三坊一町東南部の調査でも西寺系の軒瓦が出土しており、この付近に西寺系瓦を用いた平安時代初期の何らかの建築物が存在した可能性もある。

これに対し、東寺系の瓦については次のようなことが考えられる。東寺系の瓦として2種類（第58図1・8）がある³⁷⁾。1の軒丸瓦は同文例が大阪四天王寺からも出土しているが本来東寺用の瓦と見られ、8の軒平瓦は『左寺』銘をもつことからも、東寺用に限られた瓦といえよう。そして、軒平瓦は平安時代前期、1の軒丸瓦は鎌倉時代の文覚上人による東寺再興時頃の年代が与えられており、時期を異にする。この2種の瓦が元からこの場所で用いられていたとすると、平安時代前期より鎌倉時代頃まで続いている。しかも東寺と密接な関係にある何らかの施設を想定しなければならない。その場合には、前期のある時点では上記の西寺系瓦と並んで使用されていた可能性も出てくる。しかし、東寺と西寺では共通する瓦は少なく、その系統を全く異にしている。このことからも東寺系の瓦は、元からこの場所で用いられていたことは考えがたい。したがって東寺系の瓦は、軒丸瓦の示す年代以降に、東寺より運ばれてきたことを考える方が妥当と思われる。なお東寺との関係については、同じ八条三坊内の八条院町が、正和二年（1313）、東寺に寄進されていることも考慮されよう。

最後に、平安時代末期から鎌倉時代頃の瓦については次のことがあげられる。まずその出土個所を見ると、ほぼ北区に集中し、南区にも若干分布している。特に北区東部では、剣頭文軒平瓦をはじめとした小振りの瓦がまとまって出土している。このような状態は平安京内の、平安時代後期から鎌倉時代以降に続く遺跡にしばしば認められるものである。遺構の上からは検出されていないが、出土瓦から見る限り、北区東部付近にこの時期何らかの建物が存在していたことが考えられる。ただし軒瓦は棟の飾りに用いられたと思われる小型品が多く、丸・平瓦の出土も少ないため、全面瓦葺きのものとは見られない。

第4節 刀装具について

今回出土した刀装金具の鉄型は兜金6個、鞘尻2個、兜金あるいは鞘尻と思われるもの2個、足金物8個、襷金5個、緑金物7個、資金6個、座金物4個を数え、刀装に用いる金具のすべてにわたっている。このほかどの部分か分からぬ小破片も含めば、かなりの点数になると思われる。

これらの鉄型類は型の表面や破損した部分の表面観察上では、同じような鉄土で同じような製作方法をとったものと考えられる。この出土鉄型類から製作方法を推測すると、もとになる原型を用意し、これに粒子の細かい真土を塗り、次に植物繊維を混ぜた土、さらに砂を多く含む土を塗り、固まった後、中の原型を2つに割って取り出し外型にしたと思われる。植物繊維は鉄型を作る際、鉄土の密着をよくするために混入するもので、出土鉄型にも肉眼で観察できる。また背面にみる砂は湯（溶かした金属）を流した時、ガスが外によく通りぬけるようにす

るために含ませたもので鉄型を作る場合の一般的な手法である。また型内に雲母の微細粉がはとんどの出土鉄型に認められるが、これは湯を流した後、製品を型から取り出すのを容易にする為の離型剤として型内に貼付したその滓である。中型は刀装金具の厚みがせいぜい1mm前後であることを考えると、蜜蠟を用いる方法か削り中型の方法をとったのであろう。

出土鉄型内側は灰白色、赤褐色、さらに黒く焼焦げたものが多く、これはとりもなおさず実際に湯が流され製品化されたことを物語っている。しかしながら、これらの鉄型によって生産された金具は現存する刀装金具類には確認出来なかった。製作年代は刀装金具の基本的な形が時代により変化することが余りなく、明らかにしがたいが、これらの中では比較的年代のおさえられる型として特徴あるものに11、12、13、14、15の瓶子形猪目透の足金物があげられる。これは無文で金具の縁を立て、足上部中央に大きく猪目を透し、その下部に鏽を立てた形状を示す。現存作の中では、〔a〕亀甲文銀銅蛭巻太刀（和歌山・丹生都比売神社）、〔b〕草手絵兵庫鎖太刀（和歌山・丹生都比売神社）、〔c〕金梨子地鷹子文毛抜形太刀（奈良・春日大社）、〔d〕金沃懸地群鳥文兵庫鎖太刀（東京国立博物館）、〔e〕三鱗紋兵庫鎖太刀（東京国立博物館）などが足部のみに限定していえば、これと同型式の金具を用いている。このうち〔a〕は平安末期、〔b〕・〔c〕は鎌倉初期、〔d〕・〔e〕は鎌倉中期の製作と比定されており、鑄造によるか、鍛造によるか判別できず、その問題も残るが、これらの鉄型も鎌倉中期を下らない時期とみて差支えないであろう。しかし上限に関してはこれらを遡る資料がなく明示しがたい。

刀装具の鉄型は青森県南津軽郡の浪岡城址から室町時代の鏃の鉄型が1例報告されている³⁰⁾ほか例がなく、また明らかに鑄造による作品は江戸時代の鏃があるにすぎない。武家の出現とともに大量に生産、消費された武器類の金具は鑄造によって量産されたものが含まれても何ら奇異ではなく、その点これほど大量の鉄型類が出土したことは刀装金工史上極めて重要な意義をもつ。

今後は刀装金具の製作方法の再考と、より慎重な表面観察、X線やγ線照射による科学的調査も必要となろう。

第5章 文献にみる遺跡周辺の様相

1

発掘地（以下、当該地とする）は、塩小路と町尻小路（現在の新町通り）が交叉する西南で、平安京の地点標示で表わせば左京八条三坊二町内の東北部分ということになる。慶滋保胤の『池亭記』によれば、人家も四条以北に比べてそり混雜していないし、地価も安かったという。10世紀終りの状況である。当該地が歴史上、脚光をうけるようになるのは、平安時代末期から鎌倉時代にかけていわゆる「七条町」が成立するようになってからのことであるが、これとの関わりにおいて注目されることは、平安京創設と同時に設営された官設市場である。そのうち、東市は当該地と2町ほどしか隔っていない。慶滋保胤の指摘のように、左京の四条と

くに六条以南は、確かに著名な邸宅も少なく閑散としていたような印象を与えるが、詳細にみていくと必ずしもそうではなく、また市を中心に消費経済の拠点であったところから貴賤の往来もはげしく庶民的な雰囲気が漂い、活況を呈していた地域であった。

2

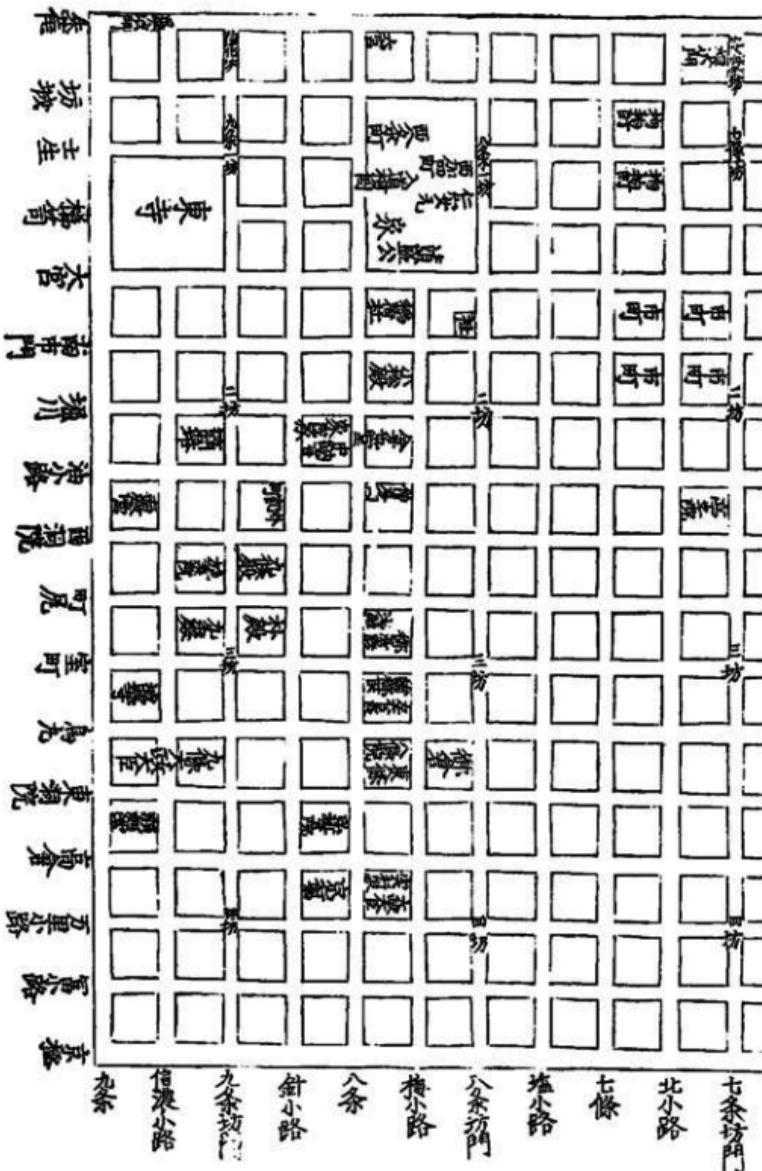
平安遷都に先立つこと4ヶ月にして「遷東西市於新京、且造廊舎、且遷市人」³⁹⁾と、長岡京から東西の市を遷し、廊舎を造って市人を移籍している事実が注目される。宅造とともに早い時期において市を設置していることは、都市として出発する際して、交易の場としての市の占める重要性を物語るものであろう。その場所は、いうまでもなく朱雀大路をはさんで七条の北に東西対称の位置を占めていた。当初においては、月の前半が東市、後半が西市と交互に開かれ、扱う商品も両市共通のものと専用品とに分かれていた。面積は、両市ともに4町四方の広さを有し、加えて、10世紀ごろまでには、その東西南北にそれぞれ2町の外町を形成していくから、そうだとすると合わせて12町に及んだことになる。『池亭記』の指摘のように、10世紀後半には右京の荒廃が目立ってきており、それに伴って西市も機能を失い消滅していったものと考えられる⁴⁰⁾。

その結果、平安京の消費経済は、専ら東市によって支えられることとなり、発掘当該地は、平安京発足当初から市民の往来で賑う地区に属していたといえる。そして、平安時代末期から鎌倉時代にかけて東市の近く七条大路と町小路の交、つまり七条町に市が出現し、商工業者が集住するようになって新たな展開を遂げるようになると、町の景観が著しく変容することになる。その辺りのことは後に述べることにして、当該地周辺にみる平安時代の居住状況について一瞥しておこう。

3

『池亭記』にも述べられているように、確かにこの地区的居住密度は四条以北に比較すれば薄いが、文献から知られる限りでも有力貴族の邸宅が何軒か存在していた。その中でも広大な面積を誇っていたのが、平清盛の西八条第である。平氏の邸としては六波羅館が有名で、この方は清盛の祖父、正盛のときからであるが、西八条第は清盛のときから始まったとされている。しかし、父の忠盛に八条邸があり、かの西行法師が「八条の泉」を尋ねて歌を詠んでいるので、あるいは、この家が西八条第の前身である可能性が高い。もし、そうだとすれば子の代で一大発展したことになる。

清盛の西八条第は、『拾芥抄』以下の平安京図によると五・六・十一・十二・十三・十四の計6町分を占める広さであったが、この敷地全面に邸宅が建っていたとは考えられない。それは、平氏の全盛を反映して「玉をみがき金銀をちりばめ」（『平家物語』）の豪華な建物ではあったが、他の一般的な例と同様に1町を一郭とした中に殿舎が建てられていたと想定すべきであろう。そのことは、十一町と十四町にそれぞれ独立の殿舎が存在したことを窺わせる記事によつてわかる。治承四年の春から夏にかけて、十一町は安徳天皇の里内裏、十四町は高倉上皇



第73図 慶長古活字本「拾芥抄」京極図にみる発掘地近傍図

の御所に當てられ、東西に並んでいるところから、前者を「西町」、後者を「東第」とも称した⁴¹⁾。この時期には、清盛は出家して福原におり、事が起ると上洛するといった形で⁴²⁾、邸宅の呼称も「八条二品亭」と妻の時子（二位尼）の名を冠して呼ばれることが多い。

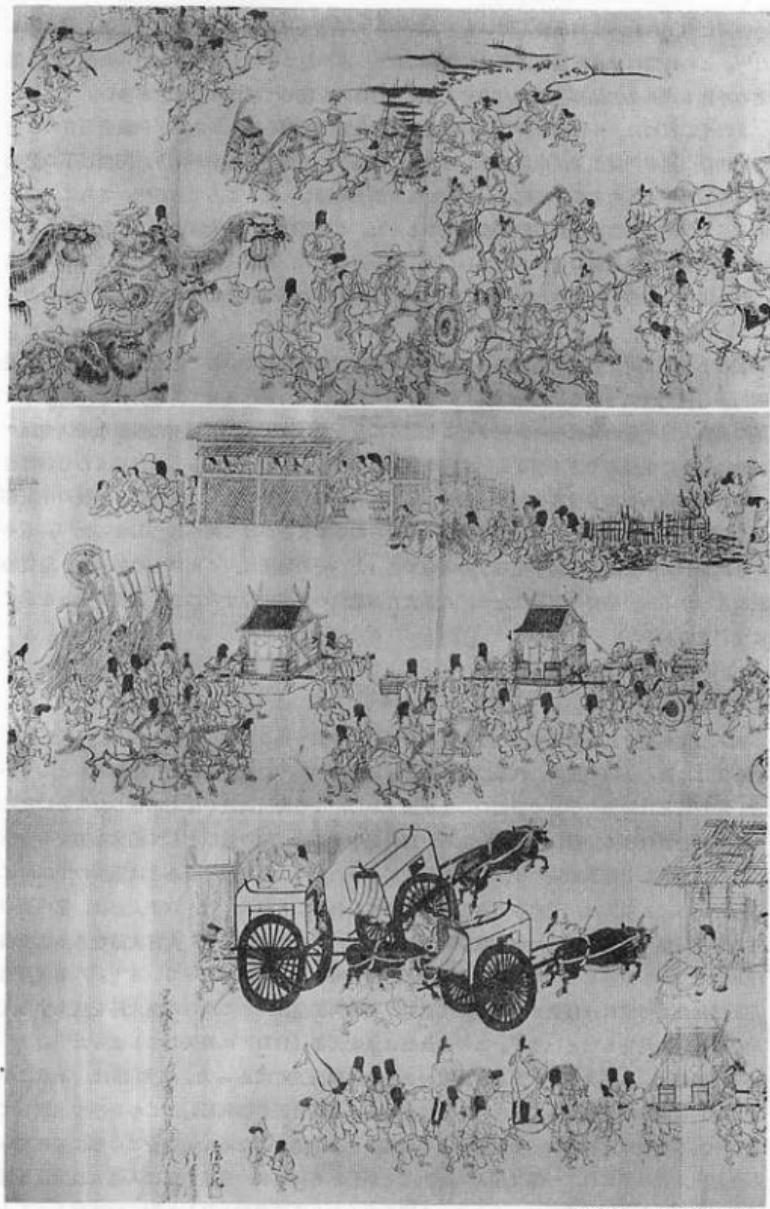
また十二町には、平清盛の妻時子が供養した八条堂（光明心院）があり、供養会当日には後白河法皇、建春門院滋子、中宮徳子、白川殿（平盛子）と身内の臨幸があり、関白以下の公卿が列席した⁴³⁾。この東の十三町は白川殿の御所に一時期なったところである⁴⁴⁾。さらに、同じ場所が半世紀ほど前には藤原頼頼の邸宅であった。この邸は、八条大宮水閣との称があるよう、池泉に恵まれた景勝の地であったらしく、ある夏の1日、白河法皇、鳥羽上皇はここへ御幸になり田植見物の興を催された⁴⁵⁾。この邸がのちに平家の邸に取りこまれることになったのである。

このように6町に及ぶ清盛の西八条第は、町単位で使用されていることを知るのである。安芸国から伊都伎絹（駁島）内侍（巫女）を呼んで、唐装束を着けさせて舞を舞わせ、清盛は女婿の高倉天皇や後白河法皇と観覧すること度々に及んでいる⁴⁶⁾。こういった優雅な遊びや鹿ヶ谷陰謀事件の主謀者である西光法師を庭に引き出して裁き、斬首に至らしめた忌まわしい舞台にもなった西八条第も清盛の死後、数日にして何者かの放火で焼失し、さらに2年後の平家都落ちに際して、残っていた舍屋すべてに平家自らの手で火をかけて焼かれてしまった⁴⁷⁾。華やかさに比べて、たかだか30年足らずの寿命であった。その場所は、こんにちの国鉄梅小路貨物駅に相当するが、昔日の面影はなく、八条大宮西北角の民家の片すみに立つ石標がそれを示すにすぎない。

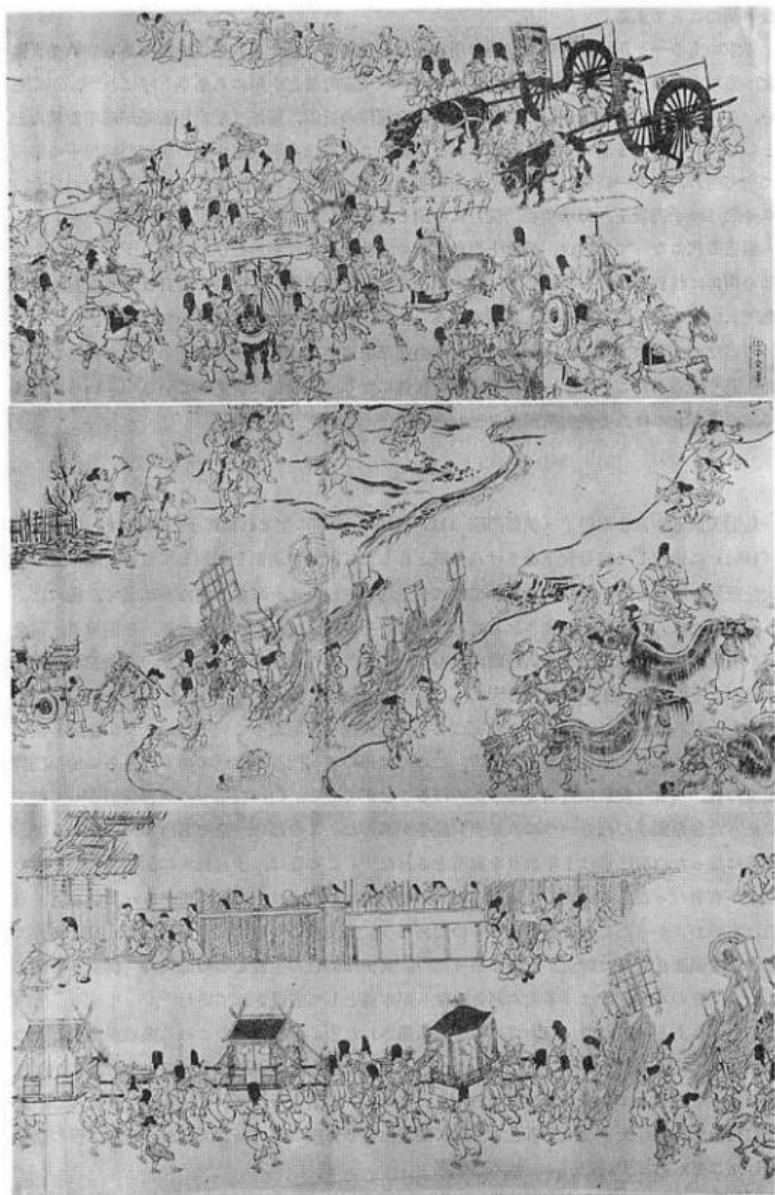
4

西八条第が営まれた關係で、八条大路に南面して平家一族の邸宅が數軒あった。『拾芥抄』京程図は、西八条第の東隣、八条二坊四町を「鴨荷社」、その東の五町を「小松殿」としている。小松殿とは清盛の子息の重盛のことと指すから、この場所に彼の邸宅が存したことになるが、これを裏付ける文献はない。むしろ、12世紀中期には、院の近臣として絶大な力をもった「夜の関白」として藤原頼隆の子、頼長の邸宅があったが、火事で焼けたあと東隣の十二町に移っている。この方は、天皇の方違え行幸に當てられることが多く⁴⁸⁾、六条天皇は、里内裏の五条東洞院第（藤原邦綱邸）から東洞院大路を南下、六条大路を西行、大宮大路を八条まで南行し、そこから東進して堀河小路を北に折れ、頼長邸には西門から入っている⁴⁹⁾。八条堀河家とよばれたこの家には棟敷がしつらえてあり、後白河法皇は、ここから八条大路を往来する人々を珍しげに見物したという⁵⁰⁾。この頼長邸は承安元年（1171）に焼失してしまった⁵¹⁾。

平宗盛邸は、八条大路北、高倉小路東つまり八条四坊五町にあった。この邸は、治承二年（1178）の直前に新造なったもので、夏に妻の清子（高倉天皇御乳母）がこの新亭で出家しており⁵²⁾、5年後に、彼らの子の清宗が、平頼盛の女と結婚するため、新妻をこの邸に迎えているなど⁵³⁾、この家には、一家で住んでいたことがわかる。なお、宗盛の前は入道太政大臣藤原実行の邸宅であり⁵⁴⁾、実行は、のちにこの家を寺となして蓮華院と号した⁵⁵⁾。宗盛邸となる十



第74図 『年中行事絵巻』



卷12 推定蘿荷祭行列圖

数年前のことである。

平家のもう一ヶ所は頼盛邸で、その所在地は発掘場所の属する八条三坊内である。八条大路北、室町小路西つまり五町に存したこの邸は、八条室町第とか単に八条亭と呼ばれ⁶⁰⁾、がんらい、この場所は“夜の閑白”的異名をとった白河院の近臣、藤原（葉室）頭脳が邸宅を営んだところで、それは子息の頭能に伝承され、平治のころには鳥羽天皇中宮の美福門院得子の御所に当てられ、また一時期、二条天皇の里内裏ともなったところで、頼盛が、鳥羽天皇の皇女、八条院（暁子内親王、母は美福門院）に申請して新造したものである⁶¹⁾。

頼盛の代になってからは、高倉上皇の御幸や安徳天皇の行幸がたびたびあり⁶²⁾、また、この邸の南には棧敷が設けられていて、後白河法皇は、その場所から攝政の春日社参詣を見物された⁶³⁾。以上のほかに平知盛にも八条亭があったが、具体的な位置は明らかでない⁶⁴⁾。

頼盛邸の西隣の四町には、知足院こと閑白藤原忠実が建立した一間四面の堂舎があったが、30年近く経過したことによって破壊寸前の状態になり、別の地に新造している⁶⁵⁾。いっぽう頼盛邸の東と北には八条院御所があった。

5

鳥羽天皇と中宮藤原得子（美福門院 1117～1160）の間に生まれた暁子内親王は、応保元年（1161）に出家して院号宣下をうけ八条院と称した。両親の遺領を伝承して数百ヶ所に及ぶ甚大な所領を所有したが、京内においては八条三坊の三保、4ヶ町を邸宅ほかに当て、後には、これを中心に八条院町が形成されることになる。その範囲は、東西が高倉東から瀬川東、南北が八条南から八条坊門北まで広範囲に及んでいるが、散在の形をとっており、八条三坊三保を中心に、その周囲に集中している⁶⁶⁾。

そもそも八条院（1136～1221）の御所として地点標示を明記しているのは、『山桙記』文治元年（1185）八月十四日条であるが⁶⁷⁾、この邸は母の美福門院の御所であり、さらに美福門院祖父の代、つまり院政期直前までさかのぼることができる。白河院第一の近習受領として勢力のあった藤原頭季の邸の一つに八条東洞院亭があった。この邸は、泉の名所であったようで、御幸になった白河法皇は1年余りを御所とされた⁶⁸⁾。この邸は、子息長実に伝承され、庭内の泉水が有名だったとみえて、7歳の鳥羽天皇の御體前のためにその水が用いられている⁶⁹⁾。当辺は水脈がよかったですと裏付けるものであろう。長実のこの邸には倉があって、父子2代で諸国の受領歴任で得た財宝が貯えてあった⁷⁰⁾。長実は59歳の生涯をこの邸内の「御堂」で閉じており、その八条堂には「半丈六阿弥陀像」が本尊として安置されていた⁷¹⁾。

長実なきあとは、女で鳥羽天皇の得子に伝承された⁷²⁾。頭季以来のこの八条殿が炎上したのは、仁平元年（1151）冬のことであったが、ときに崇徳上皇の御所になっていた⁷³⁾。しかし、翌年には早くも木作りのことが行なわれているから⁷⁴⁾、余り時をおかず再建なったらしい。その後の歴史的な大きな出来事としては、閑院内裏の修築の間、高倉天皇が一時期、仮の皇居としたことがある⁷⁵⁾。

12世紀の末葉、八条北の当辺一帯が火事になり、八条院御所も西の平光盛邸（かつての頼盛

から伝領した)などとともに被災している⁷³⁾。再建なった八条院御所には健寿御前、藤原定家姉弟もよく訪れ、後鳥羽上皇の御幸もあった⁷⁴⁾。

ところでこの八条院御所は、東殿と呼ばれることがあった。それは、当然のことながら西殿に対する呼称である。いっぽう西殿は、藤原(九条)兼実の子息の良輔が権中納言藤原信清の女婿となることによって一時期、通った家であった。この良輔は、誕生後、間もなく八条女院の養子となって⁷⁵⁾、十三町の八条院御所に居住していたが、結婚により西隣の十二町の家に通い出したのである。

婚姻のことを伝える『明月記』は、中将殿こと良輔が八条院御所の西門を出て「向殿」に入ったとする⁷⁶⁾。この向殿は西殿とも称し、これに対して八条院御所のことを八条殿、東殿などと呼んでいる⁷⁷⁾。この方は、八条女院の崩御後、遺領とともに猶子の春華門院こと昇子内親王(後鳥羽皇女、母は兼実の女任子)に伝領され⁷⁸⁾、十二町の方は、良輔薨去のあと後家に伝えられたらしい。そのことは、良輔の十三回忌に関する『明月記』の記事から察せられるのであって、邸宅を「烏丸旧宅」と記載している⁷⁹⁾。故良輔の追忌の日に、ここを訪れた藤原定家は、次のような述懐を日記に書きつづいている⁸⁰⁾。

今日故左相局御遠忌也、依懷旧之思、參八条旧跡之間、鐵門無人跡、八条院御所東已為民家、築垣之内或麥壠、或少屋、南山古松僅殘、窮老之病眼、真惻之思難禁、更題軒參東一條院。

かつては威容を誇った八条院御所も「八条旧跡」と称されるほどに昔日の面影はなく、荒れるにまかされており⁸¹⁾、東側の方は築垣も崩れ落ち、部分的に崩化し民家が存在したことを物語っている。

良輔邸の北隣の十一町は、美福門院の甥に当たる藤原俊盛とその子季能の邸宅があった。この邸には、後白河法皇が鳥羽殿から御幸されており、「八条坊門南烏丸西亭」との明記があり「八条院旧御所」ともある⁸²⁾。そして、これが、かつては八条院の御所であったことがわかり、美福門院の御所であったものが、八条院に伝えられたということになる⁸³⁾。これらは、女院御所跡(十三町)、女院府跡(十一町)、女院御倉跡(十四町)を中心に、中世には八条院領とか八条院町(十三ヶ所)として名を残すが、13世紀初頭には東寺に施入されている。その経緯については詳細な研究があるので省略にゆだねる⁸⁴⁾。なお、十五町も南側3分の1ほどが八条院町に含まれるが、12世紀後半には受領の藤原為保の邸宅があった⁸⁵⁾。

6

当該地と隣接(といって道路を隔てて)する町については、具体的に居住者個人を明記した文献は得られなかったが、仁平元年(1151)の西洞院大路を隔てた西の十五・十六町における焼亡記事⁸⁶⁾や治承二年(1178)のそれによって、人家がかなり多くあったことが推察できる。とりわけ、後者のそれは、西は朱雀大路から東は高倉小路、南は八条坊門小路から北は北小路辺りまでと広範囲に及んでおり、50町余が被災したという。世に次郎焼の名で知られる大火であった⁸⁷⁾。当該地も焼亡範囲に含まれるが、このとき、いかなる状態であったかは不明

である。しかし、次郎焼亡の2年後に起きた火災の記事は、その辺のところを示唆している⁴³⁾。

天晴、西刻許焼亡、火起、自八条坊門北、西洞院以東、左舍吾公清宅始也、至于六条町西洞院之辺、至八幡、別当遷了。

この火事の火元とみられる左衛門佐藤原公清⁴⁴⁾の邸宅は、八条坊門北で西洞院東つまり当該地にあった公算が大きく、彼は「八条」を号している⁴⁵⁾。

ところで、次郎焼亡で被害を蒙ったのは左京で七条大路をはさむ南と北であった。七条大路といえば、天皇の石清水八幡社行幸の折の通路となつたし⁴⁶⁾、また、都市民にとって年に一度の大きな楽しみの場でもあった。それは、稻荷祭の行列が通る道であったからである。一条大路が賀茂祭なら七条大路は稻荷祭と決っており、祇園祭は三・四条辺りといった具合に、平安京内の上、中、下それぞれに趣深い祭りの楽しみがあった。

平安時代後期には盛大をきわめていた稻荷祭は、三月の中の午の日に御輿迎えといつて稻荷社から御旅所⁴⁷⁾へ神幸があり、四月の上の卯の日に本社へ還幸するというもので、その祭列が七条大路を通ったのである。

賀茂祭や祇園祭などから知られるように年々、過差の傾向にあるのが祭の姿であって、その点で稻荷祭と例外ではない。平安時代中期の学者藤原明衡は、稻荷祭を七条大路の某所で見物し、馬長の衣装の度を過した華麗さ、祭列に参加した者同志の狼藉ぶりなどを『雲州消息』の中に記している。祭の当日ともなれば、棧敷が設営されたり、物見車が立てられたりで、賀茂祭の一条大路と同様な様相を呈したと察せられる。

後白河法皇は、永暦二年（1161）の祭列を七条大路に南面した東洞院東角の三河守藤原定隆邸から見物された⁴⁸⁾。また藤原資房は、長久元年（1040）におじの資額・資高とともに「七条堀河辺の小屋」（民家のこと）から祭列を見物したが、「慾過差不可云、尽狂乱之代也」と歎いている⁴⁹⁾。さらに「御倉小舎人」が祭使となったことを軽率と非難している。これらが、すべて四月の卯の日であるから、したがって還幸祭ということになる。そして、一般に稻荷祭と言った場合には、神幸還御、つまり還幸祭を指すらしい。

賀茂祭に比べて、稻荷祭の詳細に及んだ文献は皆無に近いが、神輿や馬長のほかに山鉢や風流傘などが加わるはずで、そのことも含めて祭の雰囲気を十分に伝えてくれるのは、『年中行事絵巻』の稻荷祭の光景である。賀茂祭の一条大路とちがって、この方からは庶民的な感じをうけるのは、下京の住民を基盤としているといったような地域差によるものであろうが、たしかに、七条大路には有力貴族の大邸宅は少なかった。その点、一条大路とは大きく異なるが、しかし、七条大路のそういういた庶民的な雰囲気の中から、やがて商工業地区として発展していくことになるのである。当該地は、その七条大路と1町しか隔っていないのである。

「ミヤコ」＝平安京から「マチ」＝中世京都への移行を示すもの、それは1町邸の消滅であり、いわゆる平安京の解体にはかならない、といった定義は、徐々に熟しつつある。

平安京を崩壊させた要因の一つは、横大路と町小路の交からくる呼称⁵⁰⁾、三条町、四条町、



第75図 職人尽絵などにみる職人図

七条町の出現で、これが從来の官設市場にあってかわって、京都における市場の働きをするようになつた。その辺の事情については、川嶋将生氏の簡潔な説明¹⁵³⁾によることにする。

……平安中期以降の都の経済は、きわめて困難な状況にあった。この状況の中へ、律令官制からはき出された手工業者が飛び込み、彼らが破綻した都の経済を、以後、実質的に背

負っていくことになる。このような状況が生み出された時、彼ら手工業者や商人らは、多くの南北に通じる町小路（現新町通）に沿って店舗を構え、ここが実質的に左京のみとなつた平安京の、朱雀大路に代わる新しいメインストリートとなつた。

当該地と至近にある七条町は、三条町、四条町よりやや遅れて繁栄するのであるが、かつての官設東市と2町余りしか離れていないこともあって、その伝統をうけついでいると見做される。11世紀前半に成立した『新猿楽記』に登場する金葉百成という人物は、七条以南の保長をつとめ、「銀治・鉢物師并に銀金の細工」の上手であり、種々の金属製品を作っていたといふ。この人物は架空ながら、ある僧が寝とった女性の夫は「七条町に江冠者が家のほ東にある鉢物師」であったといふ『宇治拾遺物語』の話¹⁰³や「七条の薄打」の話¹⁰⁴などから、七条町の周辺には金属工人たちが集住していたことが察せられる。さらには、保延六年（1140）冬の時点では塩小路北、町尻西、すなわち当該地と塩小路をはさんで北の1町には絹師が住んでいた¹⁰⁵。そのほか、『病草紙』に描寫された肥満体の女性は「七条わたり」に住む僧上（金融業者）であった。

ここで注目されるのは、当該地の発掘調査の結果、12世紀を通じて刀装具の鉢型や坩埚が出土したことである。また14世紀前半の不明円盤鉢型も出土している。これらは、七条町界隈に鉢物師・銀治師をはじめとする商工業者が生活していたことを裏付けるものである。

七条町およびその周辺が殷賤をきわめたのは、12世紀中ごろから14世紀前半で、鎌倉時代を通じてということになるが、そのことは、次に示す2件の焼亡記事からも類推できるのである。

その一つは、寛喜三年（1231）夏のこと、塩小路西洞院辺りから炎上し、室町小路に及んだらしいが、この辺りは「洞屋」であったといふ¹⁰⁶。もう1件は、3年後の火事で、藤原定家は『明月記』に次のように述べている¹⁰⁷。

一昨日火事実説、島丸西、油小路東、七条坊門南、八条坊門北、払地焼亡、土倉不知員数、商賈充満、海内之財貨只在其所云々、黄金之中務為其最、自翌日皆造作云々、商賈富有之同類相訪者如山岳額置。

これらによって繁栄ぶりが知られるというものであるが、鎌倉時代を過ぎて室町時代に入るころから、七条町界隈も衰退の一途を辿るようになり、下京における商業の中心は、北の四条から六条にかけての辺りにとってかわられることになるのである。なお、商工業ということでは七条仏所の存在¹⁰⁸も忘れるることはできない。

第6節 出土中国ガラスの ICP 分析

平安博物館より提供された中国のガラス数点について、その元素組成を知るためにプラズマ発光分光分析（ICP分析）により定量分析を行い、さらに比重の測定を行った。

ICP 分析

試料約20mgをとり、過塩素酸、硝酸、フッ化水素酸で処理し、10mlの溶液にして測定した。

測定した元素は以下の通りである。

Al, As, B, Ba, Be, Ca, Co, Cu, Fe, K, Li, Mg, Mo, Mn, Na, Ni, Pb, Sb, Sn, Sr, Ti, Zn, Zr, La, Y

処理などの都合上Siは測定していない。誤差は元素などにより異なるが約数%程度である。

測定試料

測定試料は平安博物館より提供された平安京八条三坊二町出土の中国のガラスで、13世紀鎌倉時代のものである。

以下に測定試料を示す。

N _o 001	グリッド4	ピット19	下層上部I-1	青色ガラス片
N _o 002A	グリッド4	ピット19	下層上部I-1	青色ガラス片
N _o 002B	グリッド4	ピット19	下層上部I-1	青色ガラス片
N _o 003A	グリッド35	ピット2	付近I-1	青色ガラス片
N _o 003B	グリッド35	ピット2	付近I-1	青色ガラス片
N _o 004	グリッド4	ピット19	下層上部I-1	青色ガラス片
N _o 005	グリッド4	ピット19	下層上部I-1	青色ガラス片

分析結果

ICPによる分析結果を表15に示す。第15表の数字はすべて重量%を、Traceは分析した結果微量が検出されたもの、N.D.は分析した結果検出されなかったものを示す。

鉛が多く含まれ、鉛ガラスであることがわかる。しかし、鉛ガラスとしては弥生時代、奈良時代のものに比べて鉛の含有量が少なく、20%~40%位であり、この差については山崎らも言及している¹⁰²⁾。

また、カリウムが非常に多いのが特徴で、多いものでは20%以上も含まれている。カリウムは弥生時代、奈良時代の鉛ガラスは余り含まれておらず、また筆者が分析した千葉県松戸市出土の室町時代の鉛ガラスでも少ししか含まれていないので、なお多くの分析を得たねばならないが、この時代の特徴と言い得るかも知れない。アルミニウム、鉄、カルシウムなどが比較的多く、全般に不純物が多いと言えるであろう。

青色の着色は銅によるもので0.5~1.5%位含まれている。試料は中国のものであるが、漢代のガラスにおけるバリウムのような指標となるような元素は見当らず、組成から中国のものか、日本のものかを決定するのは今のところ難しいと思われる。

また、鉛ガラスは一般に風化分解が激しく、この分析値も試料の現状での分析値であり、風化による白化のために、本来の値とは多少異なっているものと考えられる。

ICP分析の他に比重の測定を行った。その結果を見ると、いずれも鉛ガラスとしては値が低すぎるが、これは試料の風化による白化のためと試料中の気泡の存在のためであり、実際の値とはかなり差があると言わねばならない。

また、屈折率の測定も行ったが、やはり風化のために透明度が失われており、測定はできな

第15表 出土ガラスの成分表

	No.001	No.002A	No.002B	No.003A	No.003B	No.004	No.005
Al	0.483	0.594	0.341	0.318	0.330	0.319	0.283
As	0.454	0.464	0.316	0.308	0.281	0.415	0.384
B	0.032	0.023	0.009	0.013	0.011	0.043	0.107
Ba	0.085	0.082	0.046	0.044	0.040	0.064	0.045
Be	.0008	.0006	.0003	trace	.0003	trace	trace
Ca	3.986	4.623	2.908	2.251	2.396	3.397	3.152
Co	0.022	0.027	0.015	0.016	0.014	0.027	0.020
Cu	0.945	1.086	0.721	0.665	0.642	1.460	1.291
Fe	0.570	0.643	0.404	0.356	0.313	0.363	0.330
K	12.31	14.99	10.07	7.95	8.71	23.78	14.46
Li	trace	trace	trace	n.d.	trace	trace	n.d.
Mg	0.099	0.144	0.070	0.064	0.077	0.090	0.061
Mo	0.008	0.007	0.005	0.006	0.006	0.014	0.011
Mn	0.027	0.032	0.020	0.017	0.017	0.009	0.008
Na	0.202	0.244	0.135	0.128	0.127	0.215	0.153
Ni	0.016	0.022	0.010	0.011	0.008	0.027	0.016
Pb	31.33	46.26	34.75	25.46	27.67	31.30	24.96
Sb	0.086	0.093	0.054	0.051	0.047	0.083	0.060
Sn	0.495	0.102	0.033	0.303	0.032	0.300	0.224
Sr	0.003	0.003	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002
Ti	0.020	0.019	0.012	0.017	0.009	0.013	0.010
Zn	0.066	0.179	0.049	0.071	0.136	0.450	0.125
Zr	0.005	trace	n.d.	trace	trace	0.005	trace
La	0.008	0.009	0.005	n.d.	0.005	0.008	0.015
Y	0.001	0.002	.0005	n.d.	0.001	0.001	.0003

* 表中の数字はすべて酸化物としての重量%を示す。

かった。風化した部分のX線粉末回折分析の結果は全て無定形であったが、おそらく炭酸鉛が主であろう。

考 察

古代の日本のガラスにはアルカリ石灰ガラスと鉛ガラスとの2種類が存在するが、須久や立岩などの鉛ガラス^[12]のようにバリウムを含むものは戦国時代、漢代の中国の鉛ガラスと考えてよい。しかし中国の鉛ガラスにもバリウムを含まないものも存在するので、バリウムが含まれていない鉛ガラスについては化学分析だけによってその製作地を決めるのは難しい。

また、これらより時代の新しい正倉院の鉛ガラス^[13]では、バリウムだけではなくアルカリ元素、アルミニウム、鉄などが多くなっており、逆に鉛が70%前後と多くなっている。

しかし、今回分析した鎌倉時代の鉛ガラスはこれらのいずれとも異なっているようである。

1. PbOが比較的少なく、20~40%位であること。

2. K_2O が多く含まれ、多いものでは20%以上もあること。

3. CaO など他の成分が比較的多くなっていること。

これらの特徴は容易に他の時代の船ガラスと区別できるものであるが、分析試料の数がまだ少ないので、さらに多くの分析数が揃わなければ上記の1~3が鎌倉時代の船ガラスの特徴であるとは言いきれないであろう。

古代のガラスについての問題点として、原料の产地、ガラス自体の製作地、製品の製作地、製作年代、製作技術などを挙げることができる。

これらのうち現在までに明らかになっていることは少なく、ガラスの組成分析によっては例えば製品の製作地などは明らかにし難い問題であろう。しかしながら、原料の产地、製品の製作地、製作年代などはこれからその由来がはっきりわかっている試料を多く分析し、その組成を詳しく調べることによって、詳細不明のものについても明らかにし得る時が必ずやって来るであろう。

第16表 立岩・須玖・長沙出土のガラス成分表

成 分	出土地および遺物名	唐立	管須	歌長
		杆岩	玉玖	蟹沙
二 酸 硅 素 SiO_2		37	38	36
一 酸 化 鉛 PbO		40.8	38.5	46.1
酸 化 バリウム BeO		16	14	14
酸化アルミニウム Al_2O_3		0.52	0.35	0.36
酸 化 鉄 Fe_2O_3		0.14	0.29	0.13
酸化カルシウム CaO		0.50	1.1	1.6
酸化マグネシウム MgO		0.20	0.15	0.16
酸 化 銅 CuO		0.76	0.78	0.88
酸 化 銀 Ag_2O		0.05	0.01	0.05
酸化ナトリウム Na_2O		2.65	3.9	1.65
酸 化 カリウム K_2O		0.50	0.19	0.26
合 計		99	97	100

・立岩造営調査委員会『立岩造営』より

第17表 正倉院のガラスの組成

ガラス試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
色	黄	褐	赤褐	淡綠	淡褐	褐色部分 白色部分	白	無	綠	淡綠	青(煙)
見かけの密度	5.2	5.3	5.3	5.3	5.3	5.3	4.4	4.2	5.2	4.6	2.4
二酸化珪素 SiO ₂	24.1	23.7	24.8	24.7	23.9	23.5	31.0	32.8	23.0	24.9	30.6
一酸化鉛 PbO	73.6	72.6	73.6	71.9	73.3	72.6	67.4	66.0	72.4	70.5	68.5
酸化アルミニウム Al ₂ O ₃	0.06	0.13	0.30	0.31	0.16	0.15	0.24	0.19	0.47	0.66	0.12
酸化鉄 Fe ₂ O ₃	0.14	0.97	0.69	1.08	2.02	1.15	0.17	tr	0.73	0.27	0.08
酸化カルシウム CaO	0.39	0.26	0.26	0.71	0.38	0.34	0.15	tr	tr	0.39	0.05
酸化マグネシウム MgO	0.27	0.57	0.36	0.06	0.14	0.15	0.53	tr	0.21	0.37	0.08
酸化銅 CuO	0.16	0.19	Cu ₂ O 0.55	1.44	0.39	1.36	0.42	0.35	1.99	1.58	0.15
酸化ナトリウム Na ₂ O	0.22	0.10	0.11	0.12	0.07	0.15	0.20	0.19	0.28	0.49	0.11
酸化カリウム K ₂ O	0.08	0.18	0.10	0.09	0.07	0.13	0.12	0.19	0.25	0.32	0.24
磷 P ₂ O ₅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.03
三酸化硫黄 SO ₃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.28
合計	99.0%	98.7	100.7	100.4	100.4	99.5	100.2	99.7	99.3	99.4	99.3
上記成分以外に分光 分析法により検出さ れた微量成分	硫酸 ビスマス アンチモ ニウム チタン アントモ	同左	同左	同左	同左	同左	同左	同左	同左	同左	同左
											銀 マンガン ニブナル 錫 チタン等

漫反射法により測定した試料11の屈折率は1.52であるが、他の試料はすべて船ガラスであるため高く、1.70よりも大きい。表中の「は痕跡を」一項は未測定を意味する。成分を陽離子の形で表現するのは化学の習慣であるが、実際のガラス中ではこれらの成分は化合物として複雑な硅酸塩になっていることは言うまでもない。検出された微量成分の種類は試料1-10番についてほぼ同じであるが、その含有量は同じではない。たとえば2番は砒素をやや多く含み、その量は放射分析によれば0.2%に達する(註10)。

*『正倉院のガラス』より

第8章 まとめ

9～10世紀にかけて、遺跡地の北部（北区）を大溝が東から西に流れていた。溝は幅7～11m、深さ50～60cmで、傾斜は緩慢であり、流速の遅いものであった。その方向は、東北東から西南西に向かうもので、条坊の方向とは一致せず、この溝は自然流路と考えられるものである。

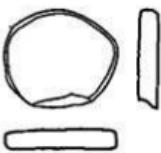
溝の上流は、北側に抜けており、ただちに平安京塙小路通り（現木津屋橋通り）と交錯することになるが、塙小路通りを切って、北方向から流れてきた可能性が強い。発掘地と木津屋橋通りを挟んで北側に存する京都第3タワーホテル建設地の発掘調査では、平安後期の淡い黄褐色泥砂層の下層に、古墳時代から平安時代までの遺物を包含する赤褐色、灰褐色の砂疊層が検出されており、これは河川の流域に関連するものと同報告書で述べているのは¹⁰⁸⁾、この溝が北に延びている可能性と関連するものかもしれない。

本遺跡の真東200mの現新阪急ホテル建設地では、幅約10.5m、深さ最深80cmの大溝（SD29）が出土している。この溝は、地勢に従って南北に流れていた。しかし、その方向は平安京の南北の条坊と方位を異にするものであり、また初現期（下層）の段階は「人手の加えられた痕跡は認められない」ものであることから¹⁰⁹⁾、自然流路と考えられている。こうした地勢に応じて流れた自然流路の在り方は本遺跡も同様であり、しかも、下層出土の土器は9世紀～10世紀というのであるから、本溝と併行する時期でもあり、こうした時期には、平安京の条坊とは無関係に、平安京左京八条三坊付近に、溝幅10m前後の自然流路が地勢に即して幾筋か走っていたものと思われる。

このような流路の発生源は地下水の湧出によるのか、洪水等に起因するのか明らかではないが、平安時代の前期には、これらの河川は埋め立てられることなく、自然の流れにまかされていた。そればかりか、流路は祭祀の対象地として利用されていたのである。

溝下層から出土した祭器には人面墨書き土器4点、土馬2点（最下層）、壺、瓶のミニチュア製品、土器片利用の土製円盤、馬歯がある。人面墨書き土器は、特製の土器をつくり、これに胡人一荒ぶる神一を描き、壺中に息を吹き込むことによって身中より祿氣。罪気を祓い、水に流す祓除の一手段として使われたものと考えられる¹¹⁰⁾。その祓所としてこの溝は使われている。また馬は水神である竜の化身であり、土馬を祭ることによって、雨を乞い、晴を願ったものである。先記の左京八条三坊七町（新阪急ビル）の溝では200本以上の馬の白歯、24個の土馬など多量の祭器を出土し、雨乞いの祭がこうした溝を利用して頻繁に行なわれていたことを示している。

近時、平城京では、人面墨書き土器の出土地点は限定されたものであり、それが大祓と関係するものとの指摘があるが、本例がそうした地



第76図 北区G5溝最下層出土の土製円盤（縮尺3分の1）

点に該当するかどうか、基幹溝とはいえない自然流路からの出土でもあり、今後の検討をまちたい。

この段階の造構はほぼこの溝中とその周囲に限られており、南への広がりは顕著でない。

10世紀末から11世紀にかけては、溝の埋土によって流れが停止し、そこに生じた窪地（溝内上層）に灰色砂の包含層が形成される。この包含層には、流れが停止しているので、下層に出土したような各種の祭器は伴わない。

そのほか溝の南縁付近には、曲物2つが設置されると共に、木枠とその内部に曲物を持った井戸が設けられるが、その密集度は疎の状態にある。もっとも生活利用範囲は拡大し、北区から中区の北部（例えばG30）に及ぶようになる。

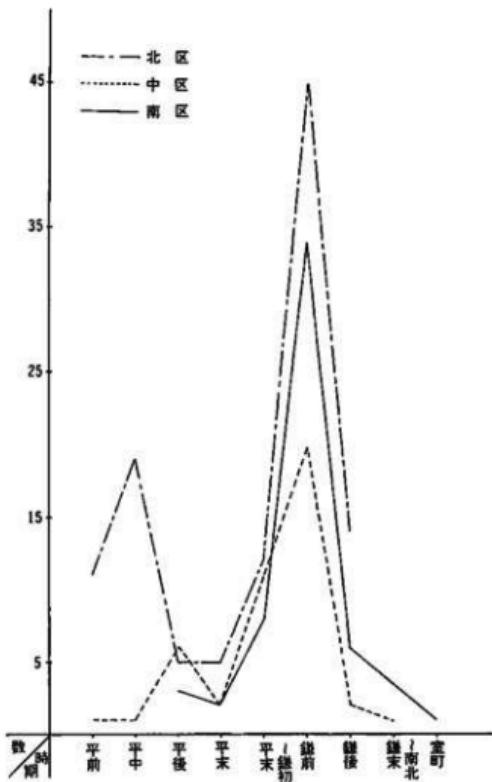
ここで、ピットと井戸から、この期以降の本遺跡の盛衰をみてみよう（第77・78図）。

まずピットからみると、北区では、それ以前の遺跡を繼承し、平安後期にも存続するが、数量が5個と一旦減少を示す。

これが平安末から鎌倉初頭になると増量し、12個に及ぶようになる。さらに13世紀前半から鎌倉前半期になると一挙に45個となり、本遺跡のピークをむかえるようになる。これが鎌倉後半期になると減少を示はじめ、14個となり、これ以後は数を減じて、15世紀まで存続する。

中区では、平安中期には1～2個程度で、出土量は散々たるものであるが、平安後期に至ると増量し始め6個になる。これが平安末～鎌倉初頭になると14個と躍進し、鎌倉時代前半になると20個とピークに達する。これが、鎌倉時代後半期になると2個に減少し、以後細々と続く。

南区では平安中期にはほとんど現れず、平安後期になって出現する。それ以後は、平安末～鎌倉初頭に急増し（8



第77図 ピット数の変遷図

個), 鎌倉前半期に頂点に達し(34個), 鎌倉後半期には減少し(6個), 以後室町時代までかすかに存続するのは、前二者と同じである。

以上を概観すると北区は平安前期以来、早くに始まり、中区は中期にかすかに現れ、南区は遅れて平安後期にいたって始まるように、平安時代の中・後期において、北から南への開発がみられるが、平安後期以後になると、三区とも歩調を揃えて増大し、ことに平安末から鎌倉初頭が飛躍の画期となり、鎌倉時代前半に頂点に達す。以後、各区とも鎌倉時代後半期は減少し、室町時代には終結をむかえるのである。

一方井戸においても、北区において、平安時代中期の井戸5個が後期には3個に減少し、平安末から鎌倉初頭に増加し始め(6個), 鎌倉

代前半期には8個と頂点に達し、同後半期には6個と減少する。この動向はピットの増減傾向と全く軌を一にしているが、鎌倉時代後半期のそれはピットほど激減せず、漸減状態である。

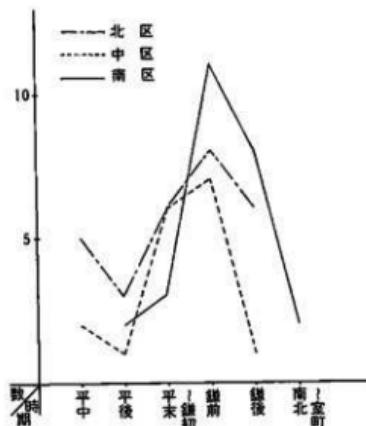
中区はピットと同じように平安中期に現れ(2個), 後期に減少するが、平安末～鎌倉初には6個に増大する。さらに鎌倉前半期には7個に増え、後半には1個と減少し、ピットと同じ動向を示している。南区はピットと同様に平安後期に現れ(2個), 平安末～鎌倉初にはやや増大し(3個), 鎌倉前半には一挙に11個となり、同後半期には再び減少し始め(8個), 南北朝から室町時代にわずかに存続する(2個)。

以上の両者を比べると、鎌倉後半期の衰退の程度にピット、井戸の間に若干の違いがあるが、各区における初現の時期、その後の展開動向は両者共に軌を一にしており、本遺跡の盛衰の傾向を端的に表現しているものといえる。

再述すれば、平安中期に遺跡は中区にまで拡大し、後期には南区にまで広がる。しかしこの段階までは、その後の発展のための準備期といったもので、その数は多量ではない。これが平安末～鎌倉初頭になると急激に飛躍し始め、鎌倉前半期になると一挙にピークに達する。鎌倉後半期になると退潮傾向をたどり、以後、南北朝、室町には細々と存続し続けるといった粗筋をたどることができる。

遺跡直北の京都第3タワーホテルでも12世紀後半期に属すと思われる井戸跡15、掘立柱建物跡、常滑製大甕、皇朝十二鏡が出土しており、本遺跡の北方では同期がやや早い時期にすでに本遺跡と同様の展開をみせている。そしてまた、鎌倉時代後半から南北朝の頃までに墓地に転換し¹⁰³、生活地としての生命は終えてしまうのである。本遺跡の北区に土師器集積層が出現するのは、14世紀中頃であり、互いに関連するものとみられる。

こうした展開の中で、井戸やピットに関連するものに青銅器鋳造工人の存在がある(第10表)



第78図 井戸数の変遷図

参照)。

全区にわたって各種鋳型、青銅滓が付着した坩埚、礎羽口が出土している。これをもう少し詳細にみると、北区では時期細分の不明な平安時代のビット3個(G4P8, G10P1, 同5)から繋、坩埚が出土し、初現を平安中期におくG11B9から刀装具鋳型が出土する。これらを噴矢として平安末～鎌倉初期(G1P5, G17W6), 鎌倉前半期(G45W5・6)にも鋳型、坩埚が存続し、最後は鎌倉末期にまで続いている(G8P2)。G16西のあぜ出土の多数の円形鋳型、礎羽口も同型品を出土したG51W1の時期からみて、鎌倉後半から南北朝に存するものである。中区では平安後期前葉から始まり(G21P11一刀装具鋳型), 同後半(G27W1一刀装具鋳型), 同末～鎌倉初期(G22P12一刀装具鋳型, 坩埚), 鎌倉前半(G28B9P5一坩埚)に鋳型および铸造関連具がみられる。

南区は井戸やビットと同じように北、中区より遅れ鎌倉前半に現れ(G45W5, 6一坩埚、羽口), 鎌倉後半から南北朝(G51W1一円形鋳型、礎羽口)にまで多量に出土している。

以上から判するように、北・中区では平安中期か確実には後期の前葉に青銅器铸造が開始され14世紀前半まで存続している。この中で鎌倉時代前半までには刀装具鋳型が目立ち同後半期のものには用途不明の円形鋳型が主流となり、製作品の転換が行なわれている。花瓶などの仏具もあるが共伴の時期は明らかでない。

鋳型の出土遺構の数は、鎌倉時代前半期までのものが11個所、同後半期のものは2個所で、前者が圧倒的に多い。これはまた井戸やビットの動向と軌を一にしたもので、両者の密接な関連、さらにいえば、青銅器铸造工人の進出が井戸やビットの拡大、増大の起因になったものといえる。

後者は鋳型出土遺構の数は少ないが、一遺構からの出土数は比較的多量である。

時期不明のものを加えると铸造関連具を出土した遺構の数は北区12、中区3、南区7の計24の多数にのぼり、平安後期以降、この地は铸造工場地としての性格を持って生き続けたものということができる。

周辺に眼を転じると、直北の京都第3タワーホテル用地では、鎌倉時代前半に伴って焼土の溜り、その中あるいは付近から坩埚、鋳型が出土しており、北方の地においても铸造工業が展開されていたことが判り、平安京八条三坊一町、二町近辺は铸造をその生業の大きな種としていたことが理解できよう。

『京都町の研究』によれば、火災による町の焼亡の頻度数から、11世紀末から13世紀前半における七条界隈の町の様子を三期に分けて展開している¹⁰³⁾。第1期は寛治元年(1087)～保元二年(1136)の11世紀末から12世紀前半で、火災は全左京に平均的に分布し、町屋商業が展開しあらわす準備期とし、第2期は保延三年(1137)～文治二年(1186)の12世紀前半から12世紀後半の時期で、火災は左京の上辺に減少し、東市の東辺の七条界隈に火災が多くなってくる。七条界隈の火災は第1期に比較すると大きな増加をみせ人家の稠密度が上がっていることを示し、ことに町通り七条界隈は忽つく暇もない程火災が続発し、町通り七条界隈の人家の稠密度を示している。こうした人家の密集は条坊制を解体し、平安京を終焉させ中世都市京都へ

の転換を促したものとされている。

第3期は文治三年(1187)～嘉承二年(1236)の12世紀末葉から13世紀前葉で、東市を含めた七条を南北に挟んで、東辺はなわち町通りを中心において、東は島丸、西は油小路、北は七条坊門、南は八条坊門の枠内に大火が相ついで発生し、家屋の稠密性を伺わせている。そしてこの地域は「土倉不知員數、商賈充満、海内之財貨只在其所」といわれるような豪商の軒を並べた殷賑の商業区と指摘されている。

町通りと塩小路通りが交界する左京八条三坊のこの遺跡地は上記範囲の中央やや南辺にすっぽり納まり、11世紀後葉以後に徐々に形成されてきた商業区の中に位置しているのである。

前述の『京都町の研究』と本遺跡を比較してみると、本遺跡では12世紀には南北も含めた全域にピットや井戸が広がる。そして北区や中区ではその前葉の時期にはすでに青銅器鑄造が開始され工業地的様相を示している。しかしこの段階では井戸、ピット、鑄造関連具出土遺構の数は多くなく、のちの展開のための準備的段階といえ、1期から2期の段階に相当するといえる。

12世紀末から13世紀前半の段階になると、井戸、ピット、鑄造関連具出土遺構は爆発的に増大し、鎌倉前半期にはピークに達する。これは前書の2期の後半から3期に相当し、飛躍拡大期とするのに符合している。

こうした情況は東市とその近辺の官制商業地としての繁栄がすたれ、新たに12～13世紀には、市の東方、すなわち本遺跡を含む町屋商業としての「七条町」の形成に起因したものと考えられる。この商業地は「土倉不知員數、商賈充満」の活況を示していたのであるが、それの支えとして、不分離な関係で工業地でもあったのである¹¹⁰⁾。もとより工業地としては各種の品が製作されたであろうが、平安時代後期といわれる文献にも「七条町の鉄物師」「七条町の箔打¹¹¹⁾」とでるように金属工業も有力な生産活動であったと考えられる。その中にあって、本遺跡は「七条町の鉄物師」として青銅器鑄造地として栄えたものということができよう。それはまた、中世的町屋商業への脱皮、まさにその転換期の様相を本遺跡は体現しているということができるよう。

中国船載の竜泉窯碗、同安窯系皿、黄釉盤、水注あるいはG4P19出土のガラス器などの珍貴の文物は、こうした商工人層の手中にあったものとみることができる。

鎌倉前半期をピークとして、鎌倉後半期になると、ピット、井戸は減少傾向をみせ始める。しかし一方では刀装具鑄造から用途不明の円形鑄型による鑄造に変わって存続するが、それの遺構の数はやはり減じて行く。

そしてこの転換に併行して、13世紀後半にはG40P4のように基とみられる遺構があらわれ始め、14世紀後半以後から15世紀にかけては、土師皿集積壙や集石にみられるように祭祀や墳墓地に転換して行く。

本遺跡の北方では、鎌倉時代後半から南北期にかけて墳墓地へ転換して行っているのは先述のとおりである。

一方、本遺跡の東方200mの新阪急ホテル用地では13世紀後半にいたって錢、釘、水瓶、篠

金具などの鋳型が出現し¹¹²⁾、本遺跡と併行して鋳造が行なわれていたことを示している。

以後、いつの時代か特定できないが、鋳造工場や墓地を含んだ包含層は削平、整地され東西に二分された耕地に転換され明治時代までそうした状況は続くのである。

註

- 1) 奈良國立文化財研究所『平城京発掘調査報告』VI(『奈良國立文化財研究所学報』第23冊所収、奈良、昭和49年)。
- 2) 同上。
- 3) 安藤信策ほか『篠山跡群昭和55年度発掘調査概要』(京都府『埋蔵文化財発掘調査概報(1981)』第2分冊所収、京都、昭和56年)。
- 4) 伊藤稔ほか編『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』I(名古屋、昭和55年)。
- 5) 愛知県陶磁資料館『シンボリウム平安時代の土器・陶器—各地域の窯様相と今後の課題—』発表者資料編(瀬戸、昭和56年)。
- 6) 大阪府立泉北資料館編『陶邑』V(『大阪府文化財調査報告書』第33輯、大阪、昭和55年)。
- 7) 平安京調査会編『平安京跡発掘調査報告—左京四条一坊—』(京都、昭和50年)。
- 8) 平良泰久はか『平安京(左京内膳町) 昭和54年度発掘調査概要』(京都府『埋蔵文化財発掘調査概報(1980)』第3分冊所収、京都、昭和55年)。
- 9) 註7に同じ。
- 10) 白石太一郎『いわゆる瓦器に関する二・三の問題—古代末～中世初頭における土器の生産と流通に関する一考察—』(『古代学研究』第54号掲載、大阪、昭和44年)。
- 11) 横田質次郎・森田勉『大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と耀年を中心として—』(『九州歴史資料館研究論集』4掲載、福岡、昭和53年)。
- 12) 赤羽一郎『常滑・知多半岛古窯址群』(『世界陶磁全集』第3巻所収、東京、昭和52年)。
- 13) 直原員幸はか『靈仙寺跡』(『東齊振村文化財調査報告書』第4集、佐賀、昭和55年)。
- 14) 森本朝子はか編『博歩』II(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第86集、福岡、昭和57年)。
- 15) 平良泰久はか『吉田近衛町造跡発掘調査概要』(京都府『埋蔵文化財発掘調査概要(1978)』所収、京都、昭和53年)。
- 16) 京都大学埋蔵文化財センター『京都大学埋蔵文化財調査報告』第2冊(京都、昭和56年)。
- 17) 佐々木英夫編『平安京左京五条三坊十五町の発掘調査』(『平安京跡研究調査報告』第5輯、京都、昭和56年)。
- 18) 鈴木重治編『同志社校内地下鉄烏丸線今出川駅地点の発掘調査』(京都、昭和56年)。
- 19) 鈴木重治ほか『常盤井殿町造跡発掘調査板報』(京都、昭和53年)。
- 20) 寺下忠介編『古市城跡発掘調査報告』(『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和55年度所収、奈良、昭和56年)。
- 21) 伊藤勇輔編『奈良県宇陀郡大王山遺跡』(奈良、昭和52年)。
- 22) 元興寺佛教民俗資料研究所編『日本佛教民俗基礎資料集成』第1巻 元興寺極楽坊藏骨器(東京、昭和51年)。
- 23) 註16に同じ。
- 24) 鈴木重治ほか編『同志社キャンパス内出土の遺構と造物』(『同志社校内埋蔵文化財調査報告資料編』II所収、京都、昭和53年)。
- 25) 間壁忠志『衛前』(『世界陶磁全集』第3巻所収、東京、昭和53年)。
- 26) 美濃古窯研究会編『美濃の古陶』(京都、昭和51年)。
- 27) 亀井明徳『日本出土の越州窯陶磁器の諸問題』(『九州歴史資料館研究論集』1掲載、福岡、昭和51年)。
- 28) 昭和56年3～5月に平安博物館が調査したもので、近々に報告書が刊行される予定である。
- 29) 寺島孝一・百瀬正恒・堀内明博『唐代邢窑の発見と日本出土の白磁』(『古代文化』第34卷11号掲載、京都、昭和57年)。
- 30) 亀井明徳『宋代の輸出陶磁』(『世界陶磁全集』第12巻所収、東京、昭和52年)。
- 31) 寺島孝一・佐々木英夫・横田洋三『平安京五条三坊十五町の発掘調査』(『平安京跡研究調査報告』第5輯、京都、昭和56年)。
- 32) 黒水灘工程考古隊浙江組『山頭廬と大白岸一電気東区窯址発掘報告書之一』(『浙江省文物考古所学刊』掲載、北京、昭和56年)。
- 33) 山崎純男『京ノ殿遺跡』(福岡、昭和51年)。
- 34) 『福岡県大宰府遺跡』(福岡、昭和53年)。
- 35) 近藤青一編『西賀茂瓦窯跡』(『平安京跡研究調査報告』第4集、京都、昭和53年)。
- 36) 中谷雅治・上原真人・大槻真純『恭仁宮跡昭和52年度発掘調査概要』(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報(1978)』所収、京都、昭和53年)。
- 37) 東寺境内発掘調査団編『洛南高等学校新築体育館用地埋蔵文化財調査報告』(京都、昭和56年)。

- 38) 工藤清泰編『浪岡城跡』IV(浪岡町教育委員会『昭和55年度浪岡城跡発掘調査報告書』、浪岡町、昭和57年)。
- 39) 『日本紀略』延暦十三年七月一日条。
- 40) 平安京の西市の荒廃については、早く承和八年の時点で、太政官処分として西市の東北角の空閑地十五丈四方を「右坊城出舉戸所」としていることが知られる(『続日本後紀』二月廿五日条)。翌年の時点では「百姓悉遷於東、交易什物、市廬既空、公事關惣者」が指摘されている(同、十月廿日条)。これは、度滋保原の指摘より一世紀も前のことであり、かなり早くに衰退していったことが知られる。さらには曾仁親王(安徳天皇)の百日儀で、その祝膳を市で賄入するについて、月の後半は西市のを使用することになっていて、このときはそれに該当していたが、「件市無」き状態であったため東市で求めたとあるから(『山橈記』治承三年二月廿二日条)。平安時代末期には完全に閉鎖されていたことを知る。
- 41) 『山橈記』、『玉葉』『明月記』によると治承四年三月十七日に新院、高倉上皇は土御門殿から八条二品亭(八条坊門南、櫛笥西、つまり十一町で八条坊門櫛笥亭とも)に渡御し、五月廿二日には安徳天皇が内裏より行幸になり、このため高倉上皇は、御所としていた十一町を子の天皇の御在所とし、自らは東の十四町(八条坊門南、大宮西、八条坊門大宮亭とも)に移御された。
- 42) 例えば、後白河法皇が、故内大臣(清盛息女の重盛)の越前国への遣置を取り上げたり、白川殿(清盛息女の盛子)の所領を召し上げるといった行動に出たとき、清盛は福原から上洛して西八条第に入り、岡白塗房をやめさせて基通に替え、公卿ら39人を解官するといったことを断行している(『山橈記』『玉葉』治承三年十一月十四~十七日条)。
- 43) 『玉葉』承安五年三月九日条。藤原兼実は、供養会の仰々しさに「今日事、希代又希代、珍重又珍重也。末世之事、每事可彈指、莫貴々々」と批判的である。なお『百鍊抄』当日条には時子供養の堂を「八条朱雀堂」としているが、朱雀大路には接していない。
- 44) 『清顯記抄』所引の『後清記記』治承二年四月廿四日条で、次郎撫尾を述べたうりで「予馳參八条太政入殿御所、參入人済々。(中略)且所彼參白河殿御所 八条本・大」とある。白河殿こと盛子は治承三年六月十六日に西八条第から白川へ帰っているが、彼女は「不例」つまり病気を理由にこの2,3年、白川を避けて西八条第に渡っていた(『山橈記』同日条)。
- 45) 『百鍊抄』大治三年五月十一日条。そのほか鳥羽上皇、侍賀門院聰子夫妻が様って方達御幸をしている(『中右記』長景二年六月一日条)。『台記』保延五年六月廿七日条ほか。
- 46) 『山橈記』『百鍊抄』治承三年三月十八日条など。
- 47) 『百鍊抄』義和元年閏二月六日条、『玉葉』『吉記』寿永二年七月廿五日条、『平家物語』巻第六『飛鳥』『源平盛衰記』巻第二十六ほか。
- 48) 『本朝世紀』仁平元年六月二日条、『兵範記』仁安二年正月七日、四月廿三日、九月廿七日条など。
- 49) 『兵範記』仁安二年三月七日条。
- 50) 古活字本『平治物語』。
- 51) 『百鍊抄』承安元年十月三日条。
- 52) 『山橈記』治承二年閏六月十五日条。ときには33歳であったが1ヶ月後に死去している(『玉葉』同年七月十六日条)。
- 53) 『吉記』寿永二年二月廿一日条。
- 54) 『山橈記』永曆元年十二月四日条ほか。
- 55) 『帝王綱年記』永曆元年条。
- 56) 例えば『明月記』治承四年四月十一日条、『吉記』寿永二年十二月八日条以下。
- 57) 『百鍊抄』義和元年二月十七日条。頗る時代に「仙洞の如く飛泉浮舟」のこの家の鳥羽上皇は方達御幸されている(『中右記』大治二年五月十四日条)。
- 58) 『玉葉』治承五年六月十日条、『吉記』寿永二年十二月八日条など。
- 59) 『玉葉』元曆元年十二月十六日条。なお頼朝のちは八条院の女房となっていた後家。さらにその子光盛へと伝えられた(『明月記』建久七年四月廿一日、承元元年八月廿六日两条など)。
- 60) 『山橈記』治承三年六月十日条。
- 61) 『兵範記』仁安四年二月三日条。鎌倉時代に入ってのことであるが、この三坊四町のはば四分の一の地が、嘉禄元年(1225)に平助友から源國末に売却されたことが取地売券(『銀倉道文』3384号)によってわかる。
- 62) 八条町について仲村研『八条院町の成立と展開』『文化史学』第25号所収。京都、昭和44年、後に秋山園三・仲村研『京都「町」の研

- 究』(東京、昭和50年)に再録)および川嶋将生『東寺領八条院町の構造と生活』(日本史研究会史料研究部会編『中世の権力と民衆』所収、京都、昭和45年)に詳密な研究がある。
- 63) 「八条北、島丸東、八条院御所」とあって十三町を示している。
- 64) 『帥記』永保元年五月廿六日、『中右記』永長元年九月十八日、十一月卅日、『上皇御所移徙記』承徳元年十二月廿三日各条。
- 65) 『殿暦』天仁二年四月廿日、十一月十日两条。白河法皇は鳥羽天皇からの遷率の途次、八条亭に立ち寄って泉を見物している(『殿暦』永久三年五月四日、六月廿五日两条)。
- 66) このことは泥棒が入って種々のものが盗まれた事実から察せられる(『中右記』永久二年八月廿五日条)。
- 67) 『長秋記』長承二年八月十九日、同三年同日条。
- 68) 『兵苑記』保延七年二月廿五日条ほか。島羽皇子の近衛天皇は、この母の八条離宮へ行幸された(『台記』久安六年六月六日条)。
- 69) 『本朝世紀』『百錦抄』仁平元年十一月二日条。『百錦抄』によれば美福門院は、ここで誕生したといふ。
- 70) 『兵苑記』仁平二年六月廿七日条。この日記では八条東洞院泉亭といっている。
- 71) 『愚昧記』(内閣文庫本)治承元年十月五日、『玉葉』同年十一月十二日条など。『愚昧記』(十一月十二日)によると、この夜、高倉帝が修復なった閑院第に遅御されたのち、「本家賞」として八条院の甥の藤原実清が從三位に叙せられている。
- 72) 『仲資王記』『玉葉』建久五年八月十七日条。
- 73) 『明月記』正治元年六月廿日、七月十三日、同二年十月廿二日、元久元年正月五日条ほか。八条院新郎には東門、北門などがあり、前者が正式(晴)の門であったらしい。そのほか女院が御座所とした東御所や御堂があった(建仁二年二月四日条)。
- 74) 『玉葉』文治二年二月四日条。
- 75) 『明月記』建仁二年三月十一日条。
- 76) 『明月記』建仁二年三月十二日、四月十六日、五月十九日条ほか。
- 77) 『明月記』承元元年五月廿八日、『玉葉』建暦元年五月十日各条。
- 78) 『明月記』寛喜二年十一月十日条。この時点では、すでにすたれていた。なお『拾芥抄』東京図には十二町を「左大臣貞輔御所」としている。
- 79) 『明月記』嘉祥元年十一月十一日条。
- 80) 『明月記』建暦元年十一月廿七日条。
- 81) 『山機記』治承四年五月十四日条および『玉葉』『明月記』『吾妻鏡』同年五月十六日条。
- 82) 『平家物語』巻第四に「法皇をば鳥羽殿を出だし奉り、都へ御幸なし奉り、八条丸の美福門院の御所へ入れ奉る」とある。
- 83) 仲村・川嶋、前掲論文。
- 84) 『山機記』治承四年四月五日条。
- 85) 『本朝世紀』仁平元年三月六日条。なお、西の九町の油小路に面した四戸主分(約八分の一町)の土地は、12世紀前半から後半にかけて藤原經周、紀某、藤原為貞、同周光、同宗為といった具合に所有が転々と変っているが(『平安遺文』2301, 2738, 补340, 补373号文書)、民家があった証拠になる。さらには、寿永三年の七条室町東西が火元となった火事では、10余町が焼亡している例(『明月記』寿永三年二月二日条)もある。
- 86) 『玉葉』『百錦抄』『後清無記』『清無眼抄』所引)治承二年三月廿四日条。
- 87) 『後清無記』治承四年四月一日条。『玉葉』『吉記』『明月記』同日条も火事のことに関連しており、東は室町小路としているが、他の三方については焼亡範囲にいくらかのずれがある。この種の記事では大いにあり得ることである。
- 88) 『公卿補任』(第一・二編)によると、公卿は治承四年正月に左衛門佐に任せられ、承元三年には参議に至るが左衛門督になったことはない。
- 89) 『尊卑分脈』第一篇、公季公孫。
- 90) 例えば『玉葉』治承元年九月廿日条。
- 91) 平安時代から鎌倉時代にかけて知られる御旅所は、いずれも八条二坊に属している。一ヶ所は、嘉祥二年二月十三日に焼亡したので『百錦抄』に「午時稻荷上中岡社旅所八条坊焼亡、是大行事則正晴々、彼改易之間、則正慈照之余、參道下歎燒死云々、御神同燒失云々」がある。ここにいう上中岡社とは稻荷神三座のうちの上・中二神の社をいい、その御旅所が八条坊門猪熊にあったということであろう。場所については、そこを起点として周囲4町のどれかまでは知られない。しかし、『拾芥抄』東京図の八条

- 坊門南、猪飼西の二坊三町の東北部分に「社」という書き込みがあるが、おそらくこれが猪荷社の御旅所であろう。ここに二座祀られたのである。もう一座は、同じく『治芥抄』に示す八条北、猪飼西の場所、つまり四町の「猪荷社」が、それに当たるものであろうか。なお「油小路七条南」とする説（『雍州府志』）もあるが、平安・鎌倉期の記録には見られない。なお、次郎焼で焼失した「猪荷旅所」が、どれを指すのか明らかでない。
- 92) 『山桃記』永暦二年四月十三日条。
- 93) 『春記』長久元年四月十九日条。なお、猪荷祭や行幸のほかに、攝政忠実が、春日祭使の一行きを見物したのは七条朱雀辺であったし（『駿河』天仁元年十一月三日条）、中山（藤原）忠親が八十鳥使の下向を見物したのは七条室町の小屋であった（『山桃記』永暦元年十二月十五日条）。
- 94) その早い例として、12世紀中期の「八条坊門町火事」（『山桃記』保元三年九月五日条）を挙げ得るし、この例もそうであるが、三条・四条・七条に限ったことでないことは、『明月記』（建仁元年十一月廿九日条）の「火無程滅了、八条町ニ三家焼云々」からもわかる。
- 95) 『角川日本地名大辞典』26「京都府」下巻（東京、昭和57年）の「地誌編」の中の川嶋氏執筆の「京都市」。川嶋氏は「町」の変化について「三条町・四条町・七条町といったように「町」を付した名で呼ばれるようになった。「町」は從来、4本の道路によって囲まれた一区画を意味していたが、ここに出現した「何々町」は、二本の道路が交差する地一帯を意味し、ここに從来の「町」概念を否定する新しい形態が生み出されたのであった」と述べられている。
- 96) 『宇治拾遺物語』巻第一の五。
- 97) 『今昔物語集』巻第二十の六、『宇治拾遺物語』
- 卷第二の四。なお、官設市から私設の市町（三条町・四条町・七条町など）への移行および京内の経済生活については脇田晴子『王朝の経済生活』（『京都の歴史』1『平安の新京』〔京都、昭和45年〕第5章第4節）に詳しい。
- 98) 節節の要が、卷物二巻（そのうちの一巻は『白氏詩巻』で現在、国宝になっているもの）を売りに歩いたことを伝える文書である（『平安遺文』第1561号文書）。
- 99) 『民經記』寛喜三年六月三日条。
- 100) 『明月記』文治元年八月五日条。
- 101) 仏所のことについては毛利久『七条道場金光明寺と仏師たち』（同、『日本佛教雕刻史の研究』所収、京都、昭和45年）に詳しい。
- 102) 山崎一雄『ガラス』（三上次男・橋崎彰一編『日本の考古学』第6巻所収 歴史時代〔上〕、東京、昭和42年）。
- 103) 立岩遺跡調査委員会『立岩遺跡』（福岡、昭和52年）。
- 104) 原田淑人・岡田謙・山崎一雄・各務義三『正倉院ガラスの研究』（東京、昭和40年）。
- 105) 京都市埋蔵文化財研究所編『平安京八条三坊跡』（京都、昭和53年）。
- 106) 京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京八条三坊』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第6番、京都、昭和57年）。
- 107) 水野正好『人面墨唇土器—その世界—』（福岡市立歴史資料館開館10周年記念特設展『古代の顔』、福岡、昭和57年）。
- 108) 言105)。
- 109) 秋山国三『条坊制の「町」の変容過程—平安京から京都へ—』（秋山国三・仲村研、前掲書）。
- 110) 脇田晴子、前掲論文。
- 111) 『新猿楽記』
- 112) 言106)。

図 版

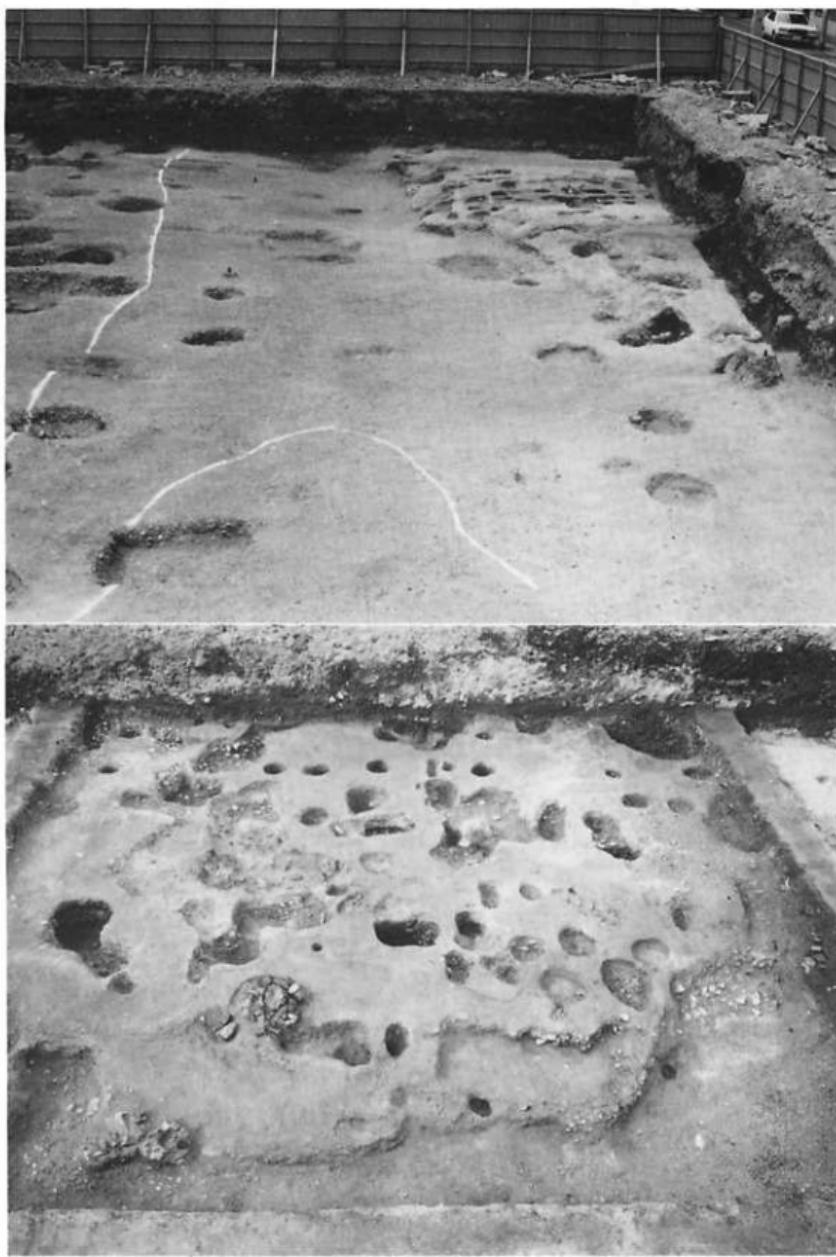


上：発掘前の遺跡全景。 下：北区表土除去後の歴造構

図版 2



上：北区発掘後全景， 下：北区の溝造構全景



上：北区の溝遺構、下：北区溝北岸遺構

図版4



上：中区発掘後全景，下：中区土留め遺構



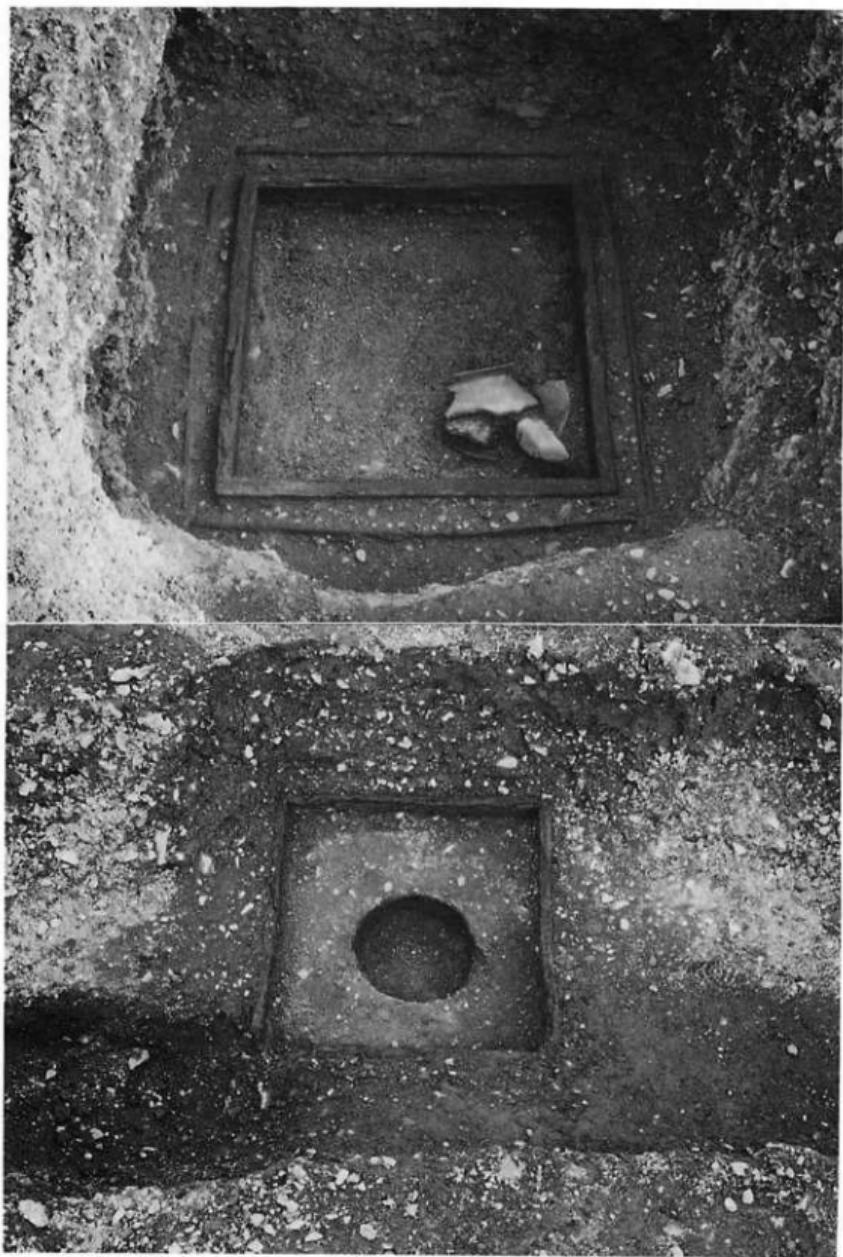
上：南区発掘後全景。 下左：南区東部遺構。 下右：南区中央部遺構



素掘り曲物式井戸 上：G11W1，下：G17W3



方形横板式井戸 上：G45W9，下：G18W1

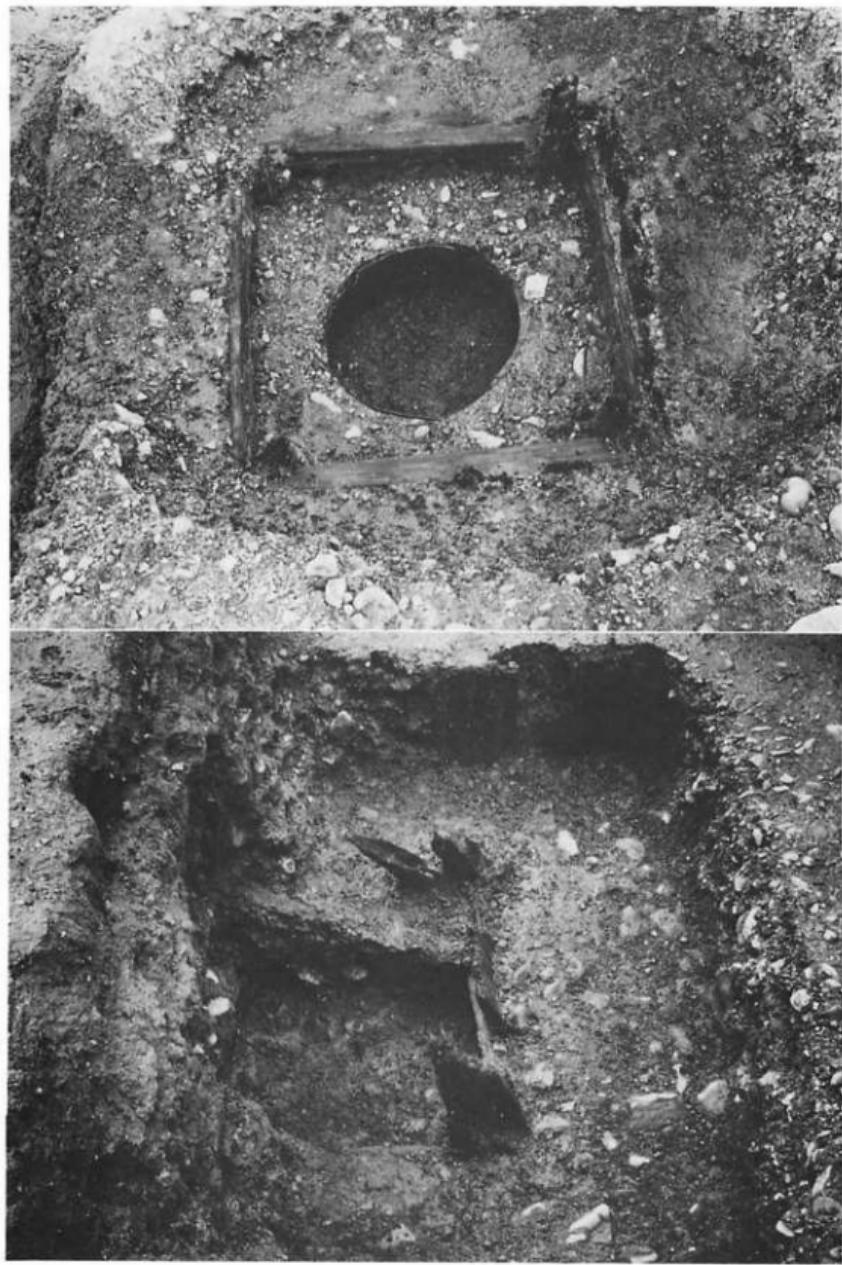


方形木組み式井戸 上: G35W1, 下: G18W2



上：方形木組み式井戸 G29W 2， 下：方形隅柱横桟式井戸 G27W 1

図版10



方形隅柱横棧式井戸 上：G10W 4、下：G17BW6



上：方形隅柱横棧式井戸 G2W1。 下：方形横棧式井戸 G18BW1



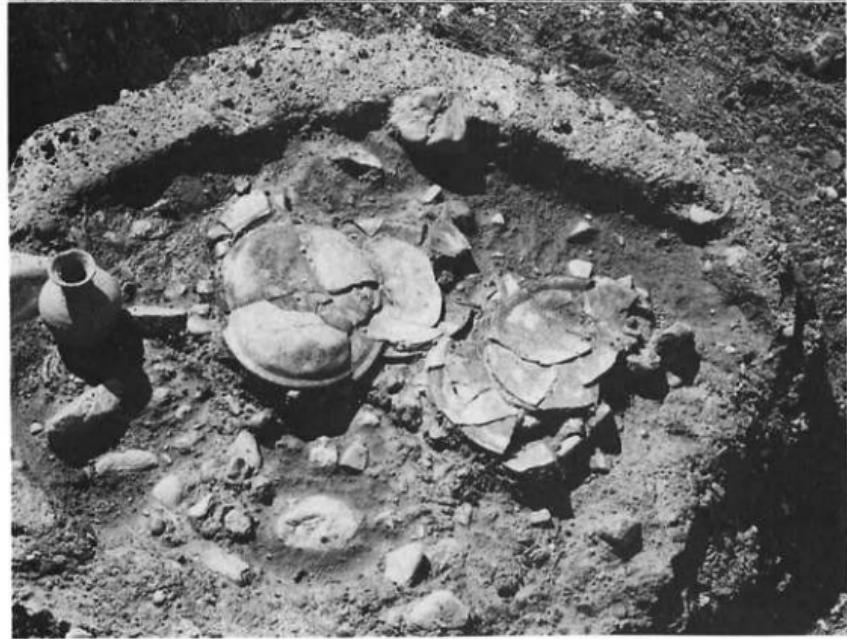
方形横桟式井戸 上：G30W2，下：G45W1



多角形堅板側式井戸 上：G37W I，下：G51W I



上：円形桶側式井戸 G1W2。 下：円形瓦側式井戸 G52W1

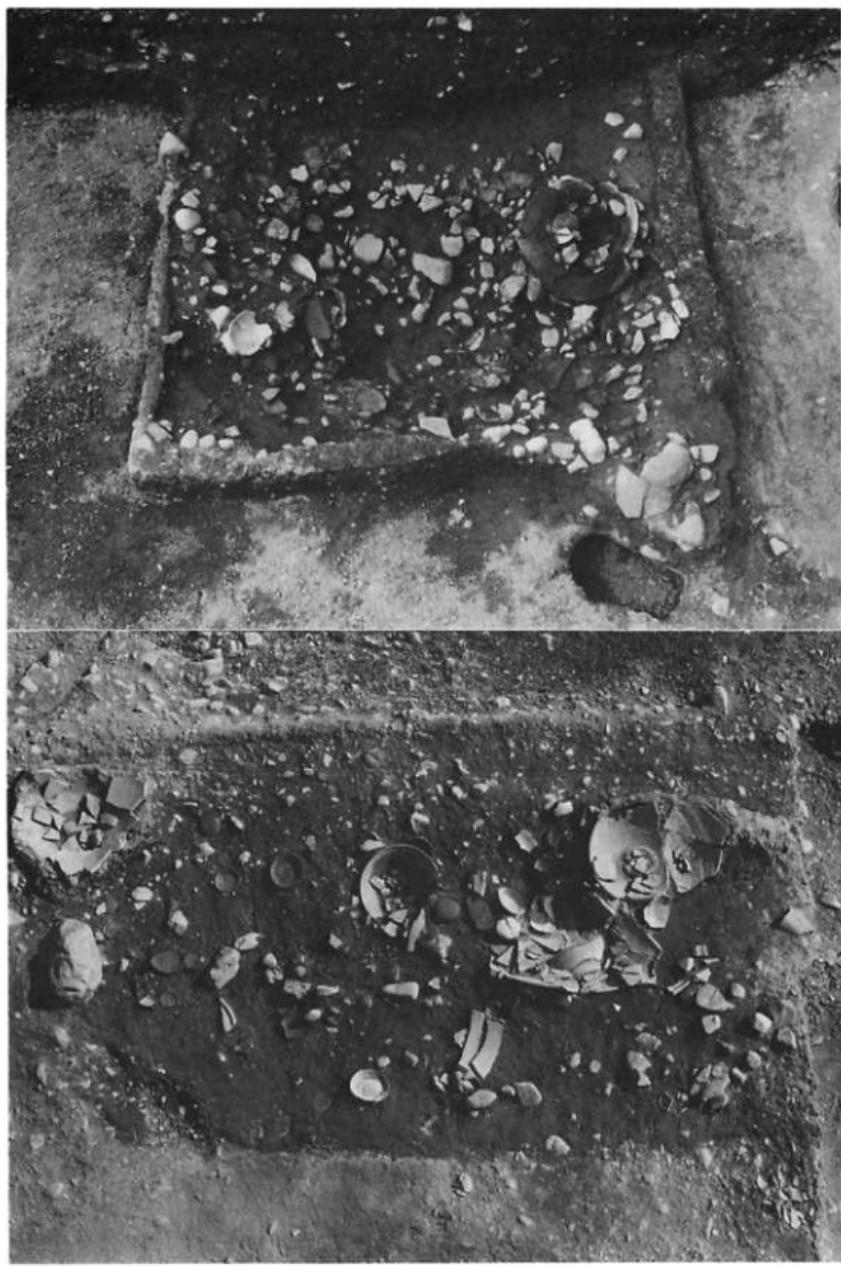


上：石組側式井戸 G37W 3， 下：G17BW 3 上部

圖版16



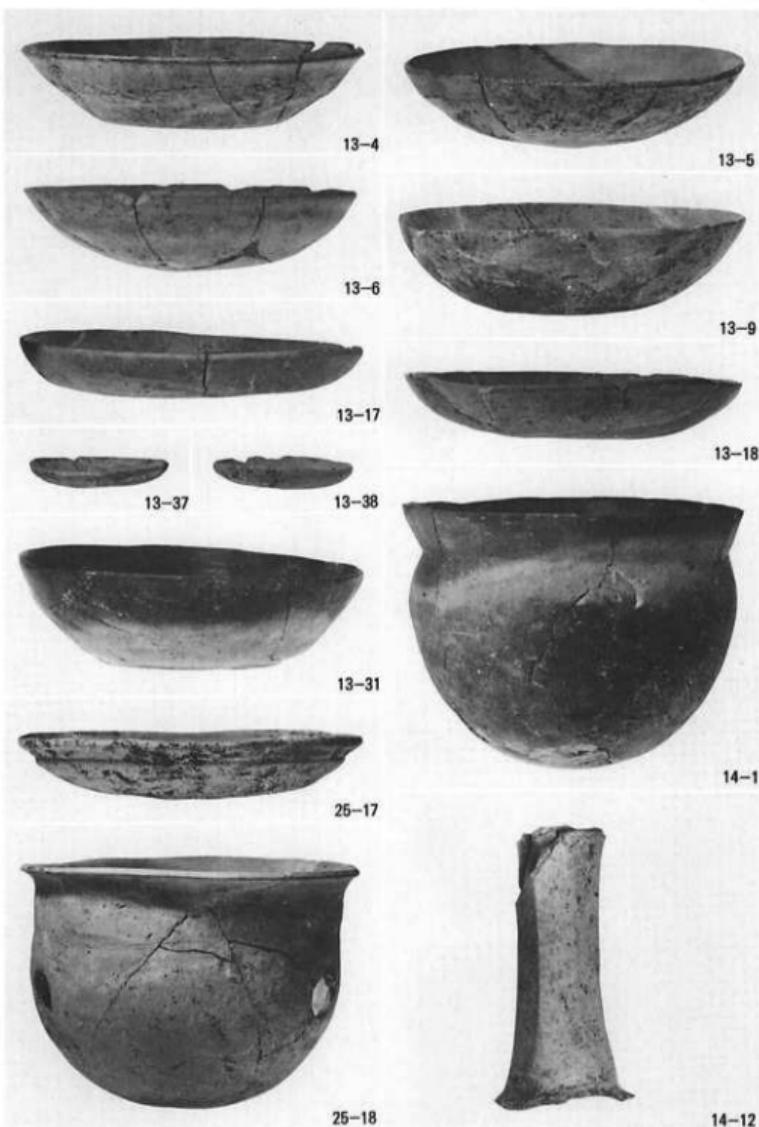
上: G3P4, 下: G7P11



上: G4P19. 下: G40P4



上: G3PI, 下: G15PI

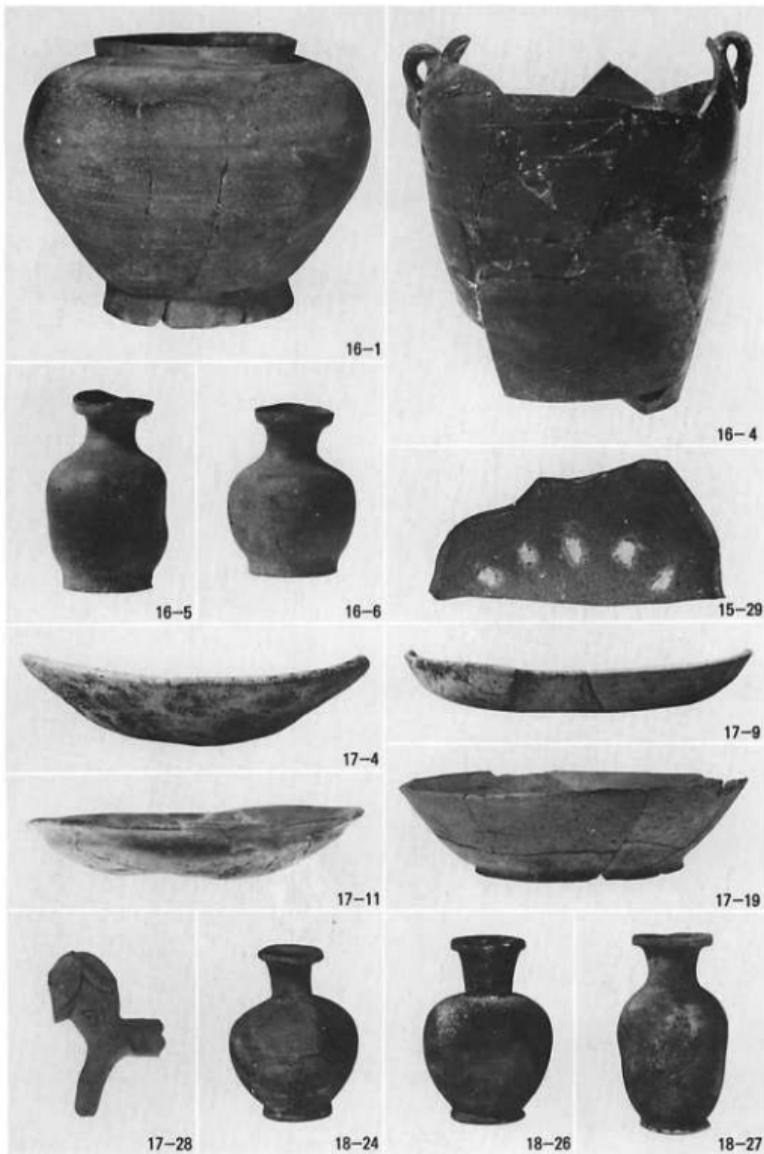


溝上層、G3 P4出土土器

図版20



溝上層出土土器

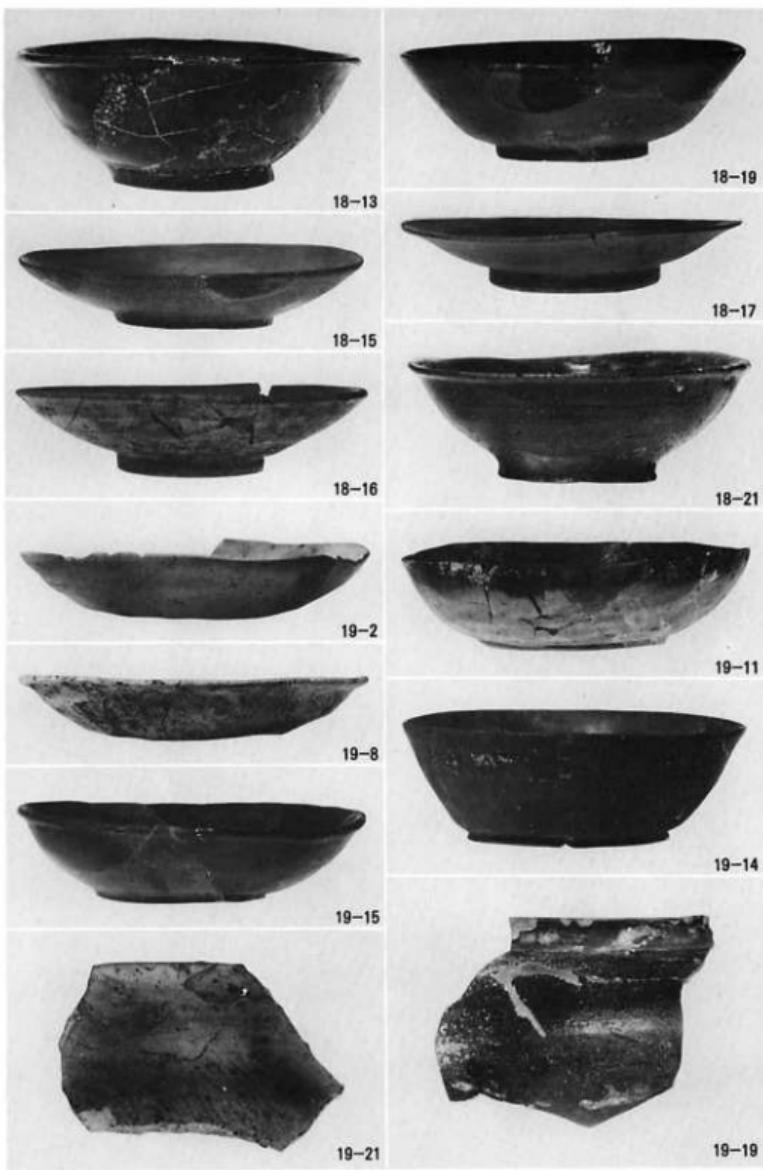


溝上層。下層出土土器および土製品

图版22

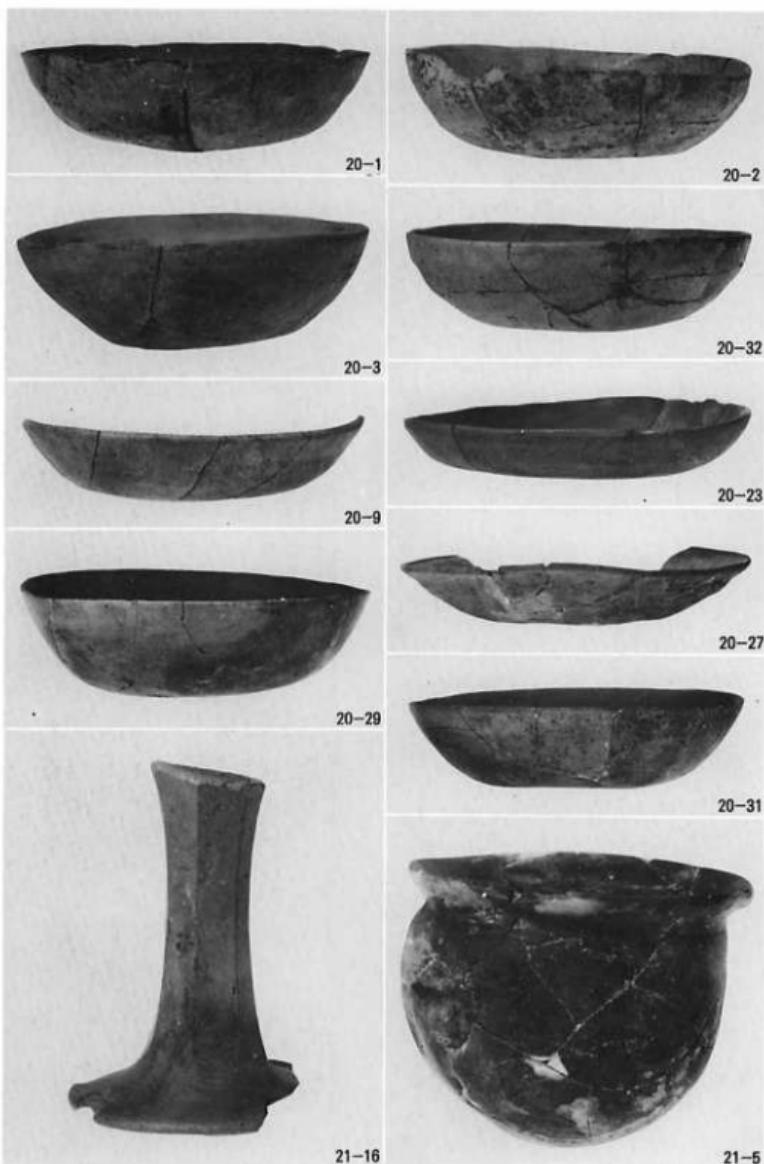


溝下層出土土器

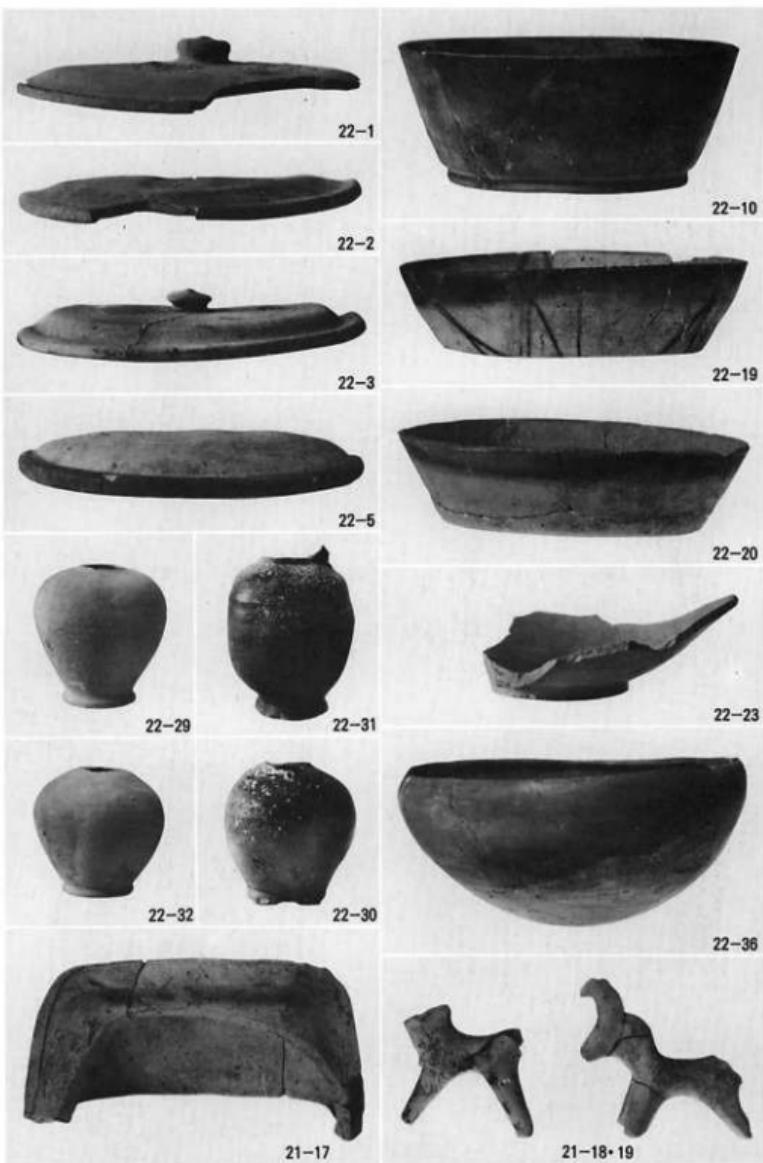


溝下層、最下層直上出土土器

図版24



溝最下層出土土器



溝最下層出土土器および土製品

図版26

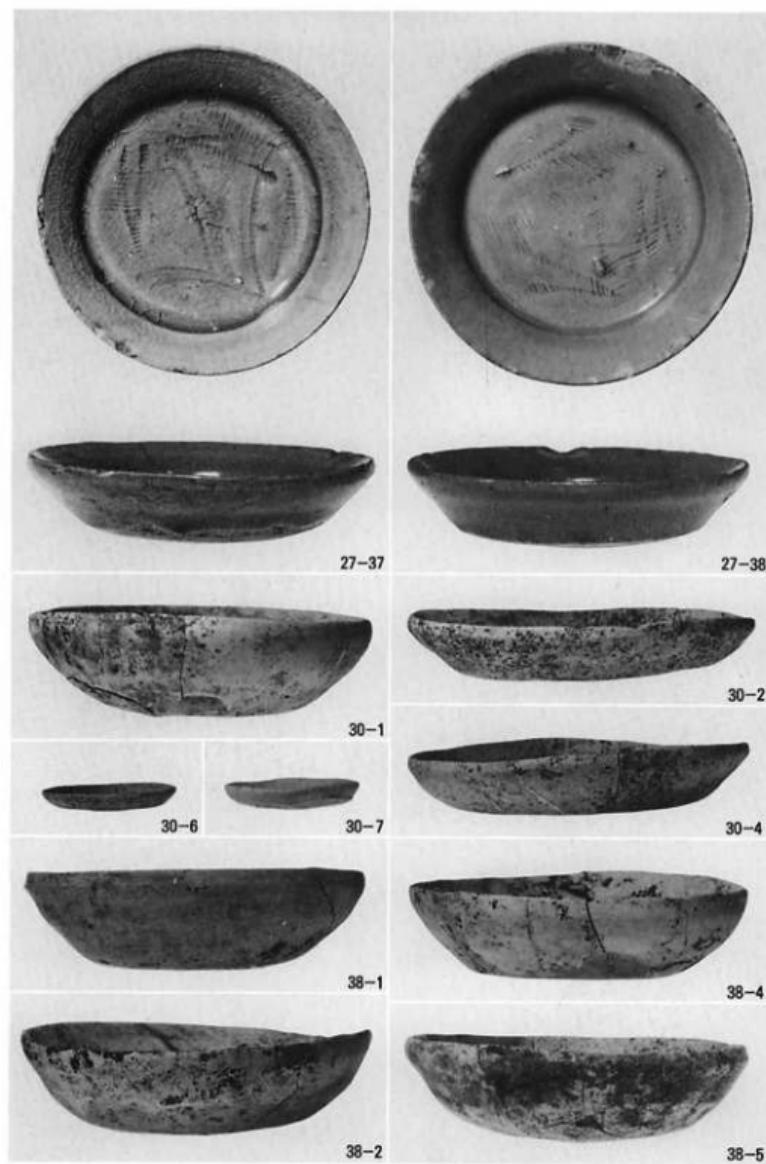


G10P6, G17BW3, G16BP1, G29W1出土土器

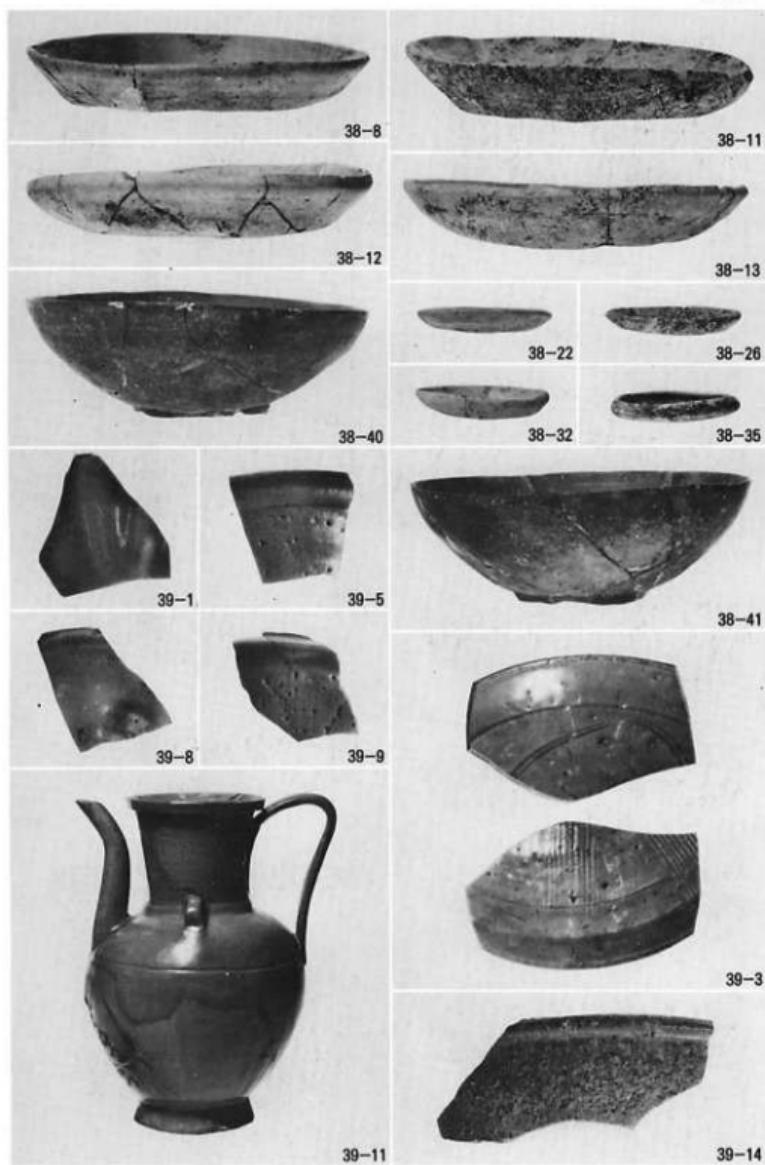


G21P11, G7P11, G27W1出土土器

図版28

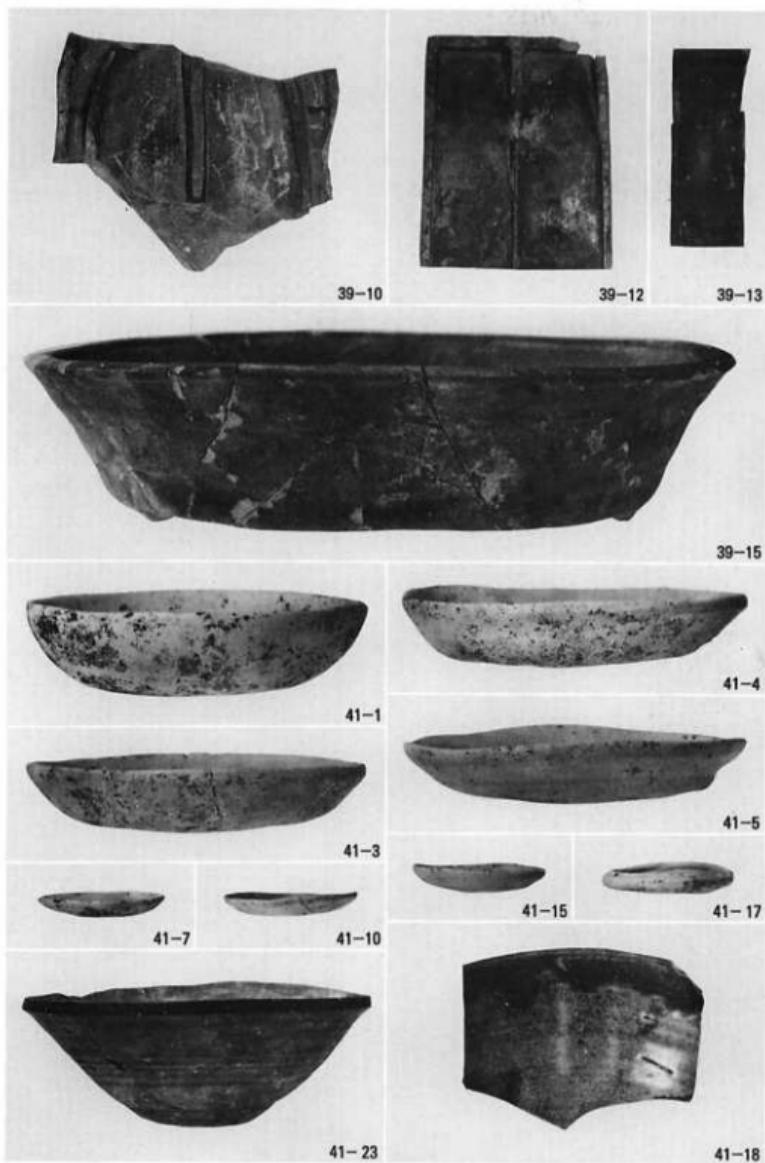


G27W1, G17BW6, G4 P19出土土器

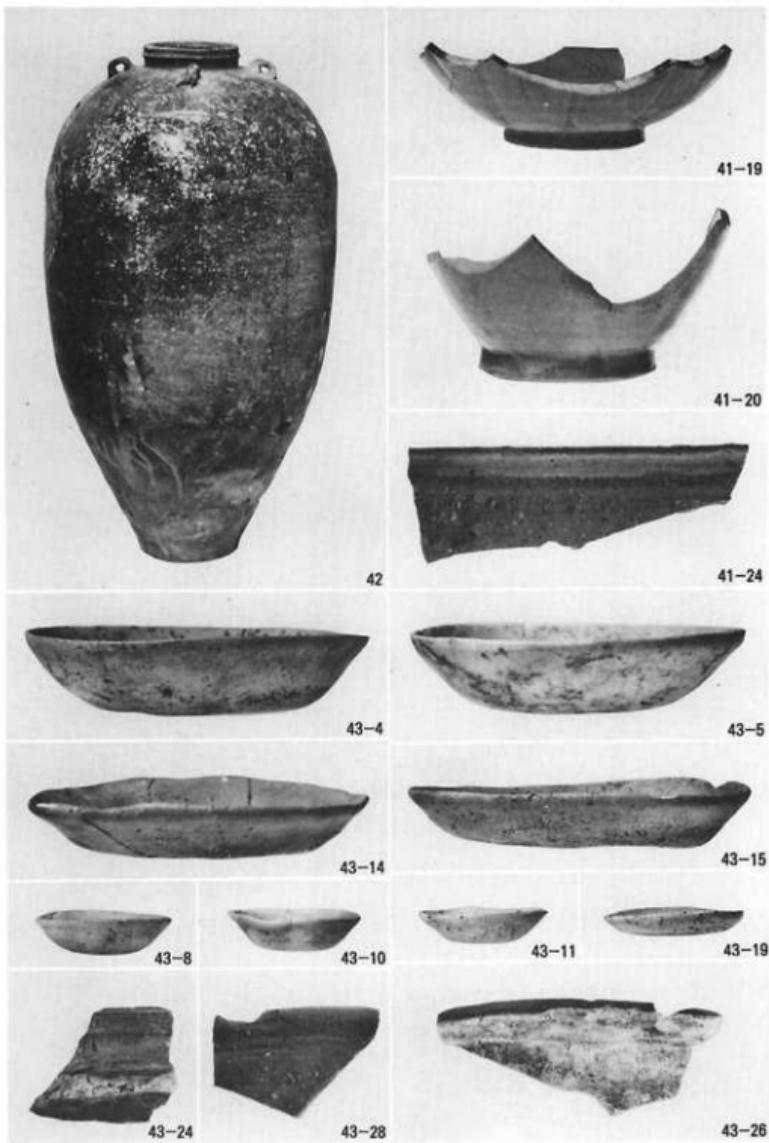


G 4 P19出土土器

図版30

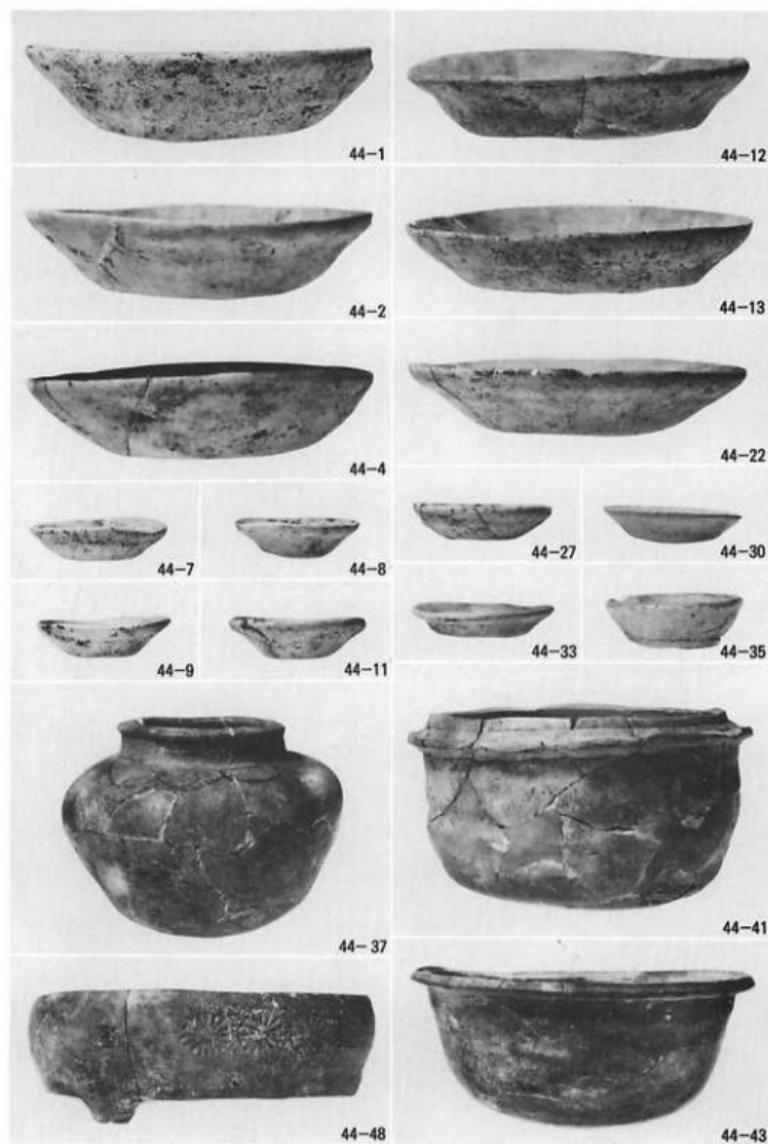


G 4 P19, G40P4 出土土器

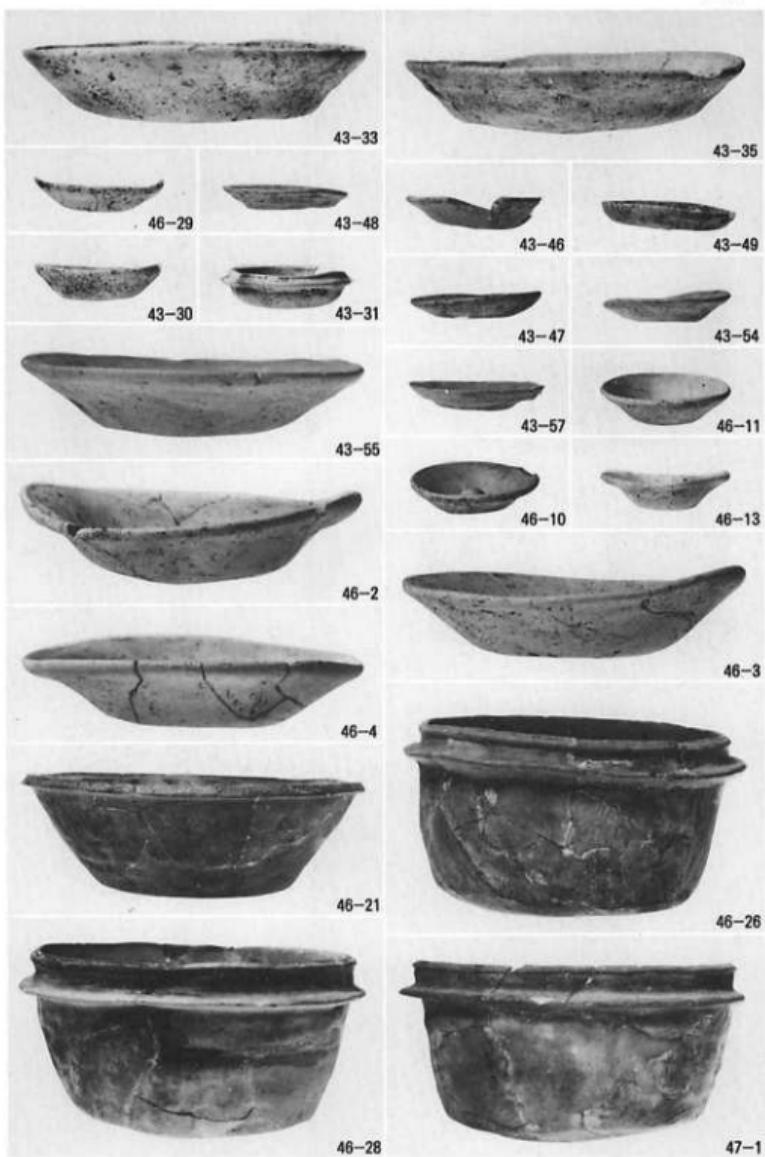


G40P4, G8 P2 出土土器

図版32



G 2 P1 出土土器

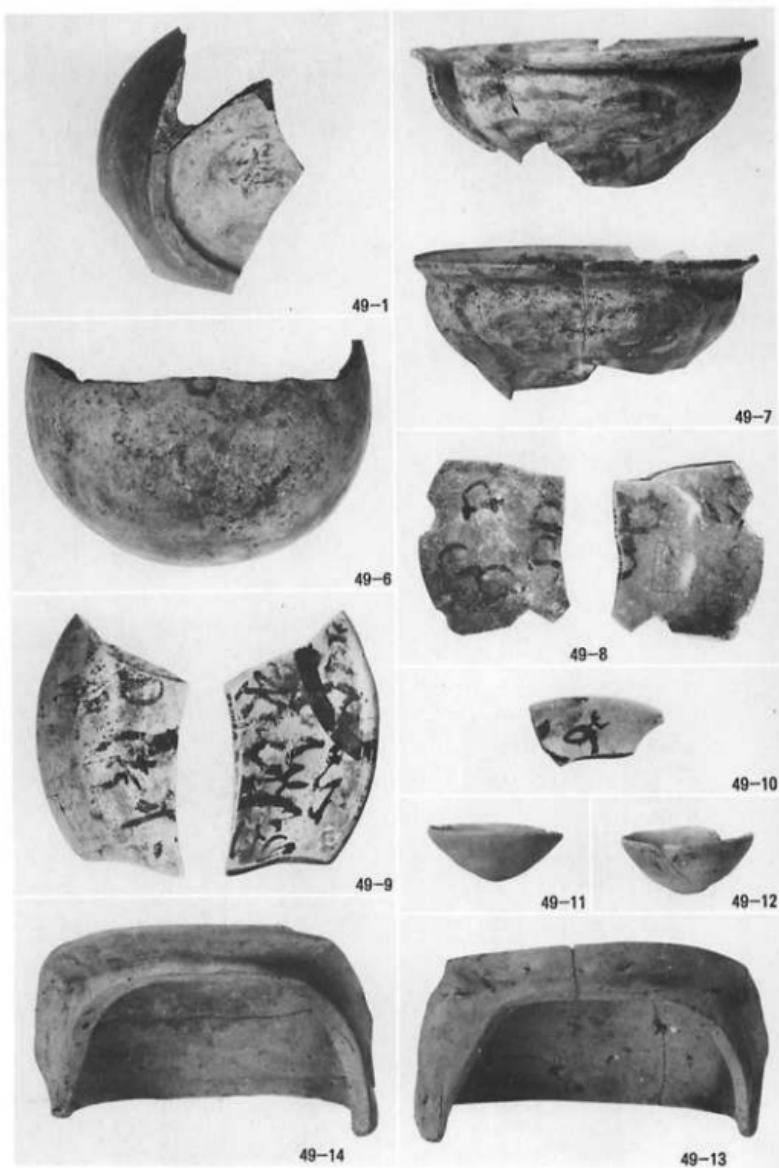


G3 P1, G51W1, G15P1出土土器

図版34

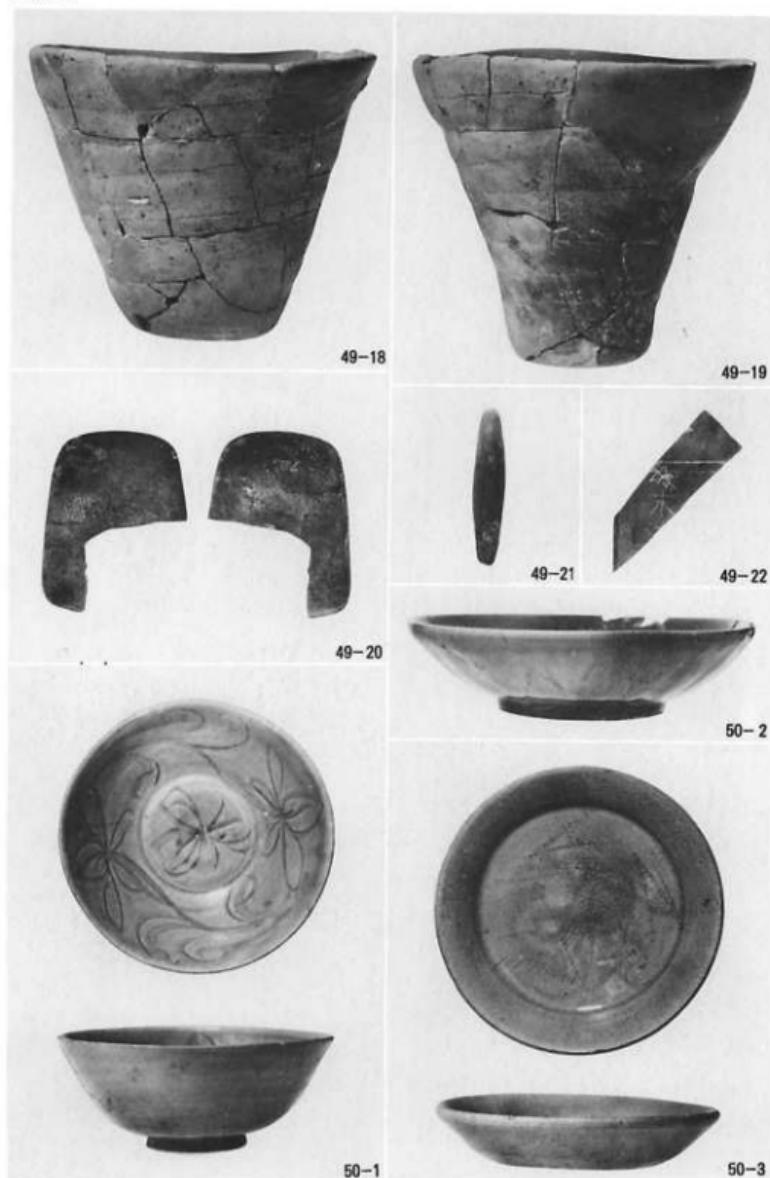


G15P1 出土土器

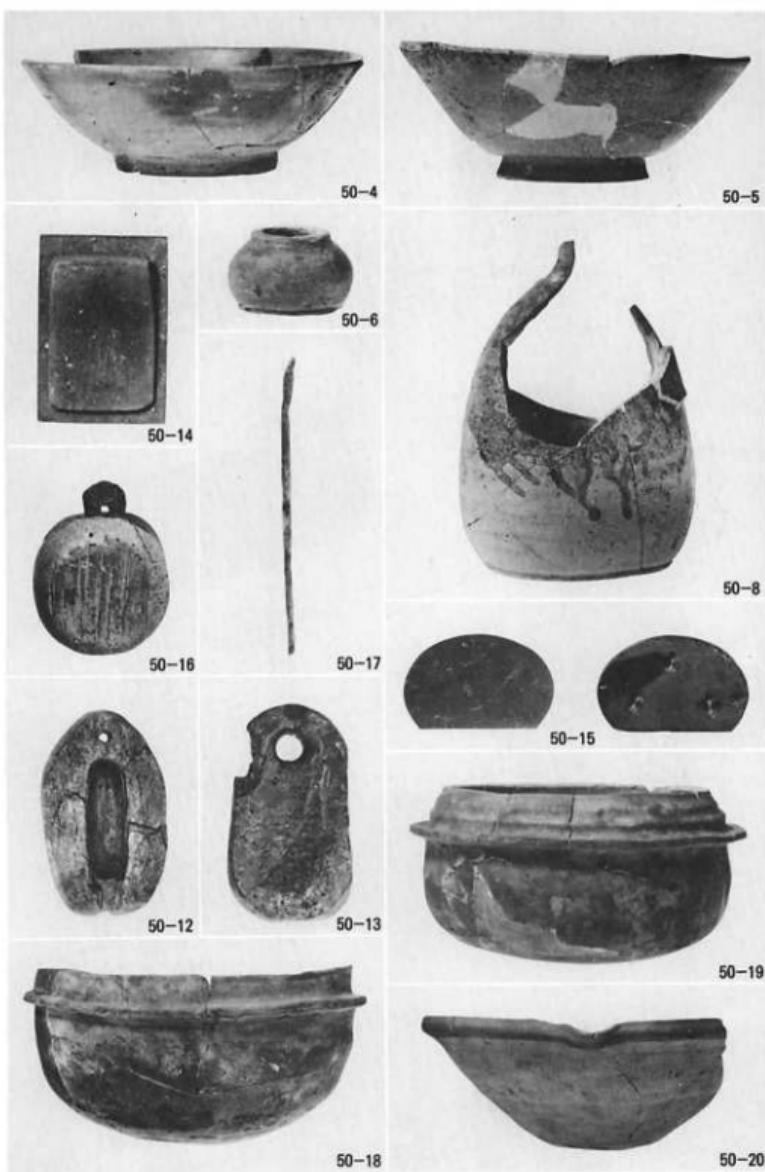


その他の出土品

図版36



その他の出土品

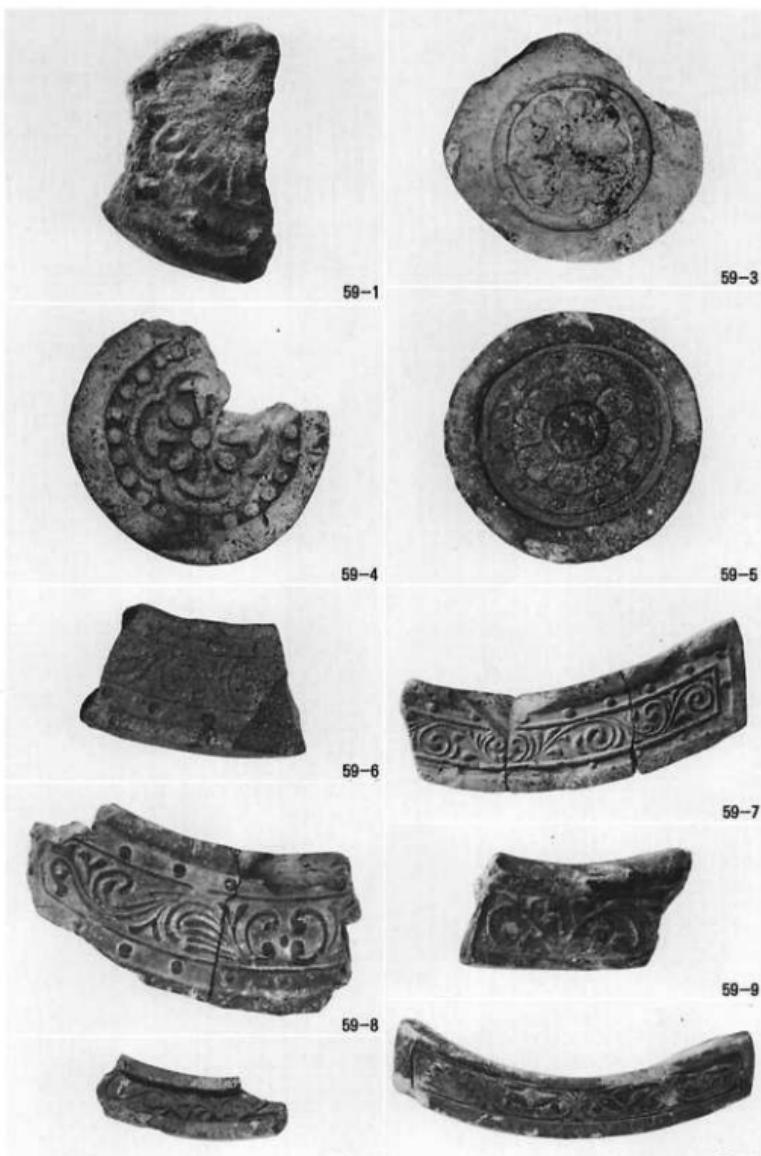


その他の出土品

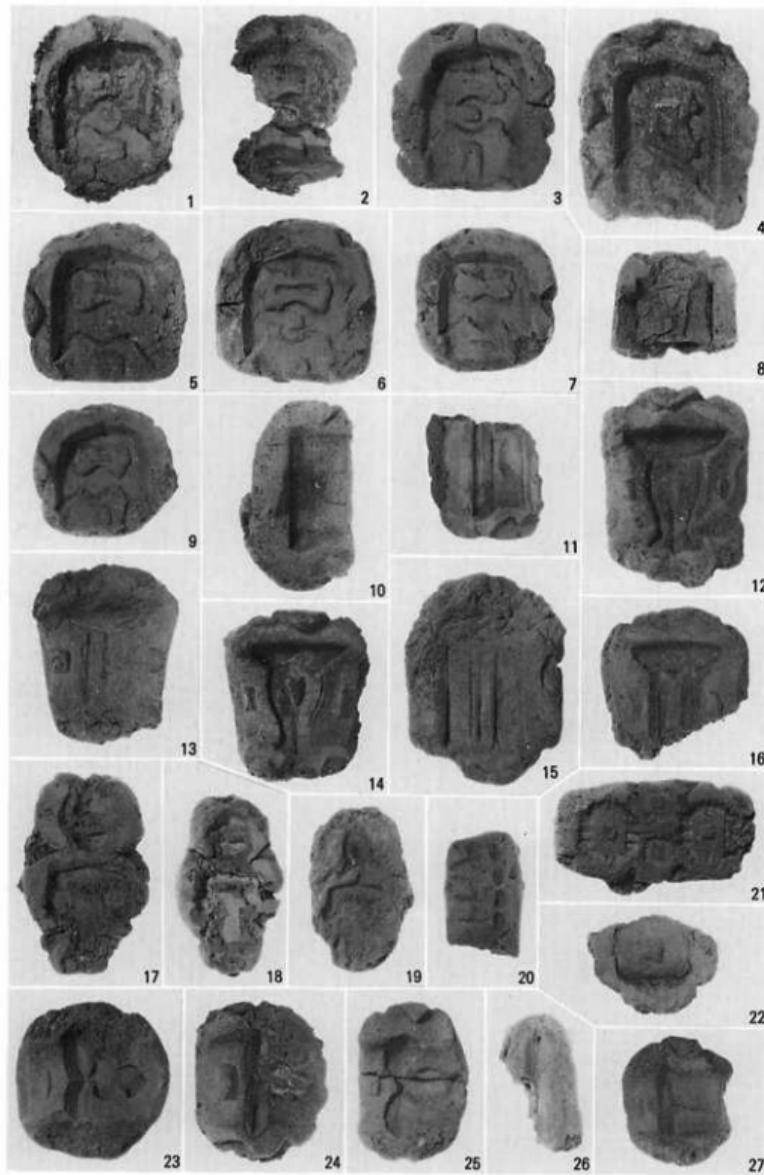
図版38



出土瓦



出土 瓦



刀具裝型

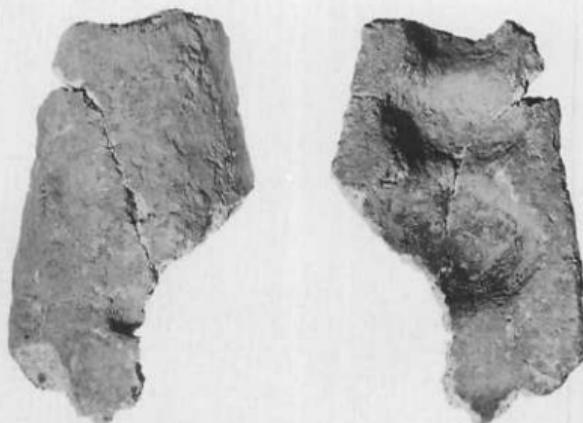


刀装具粘土型

図版42



55-1



55-2

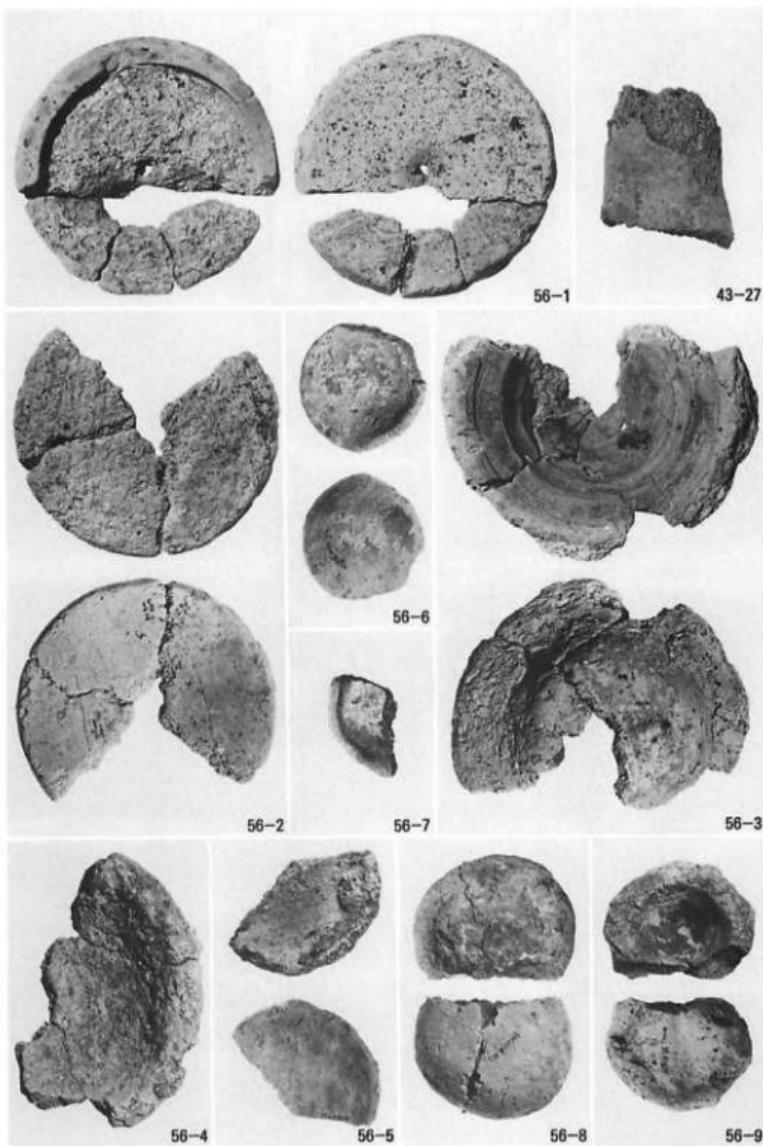


54-1

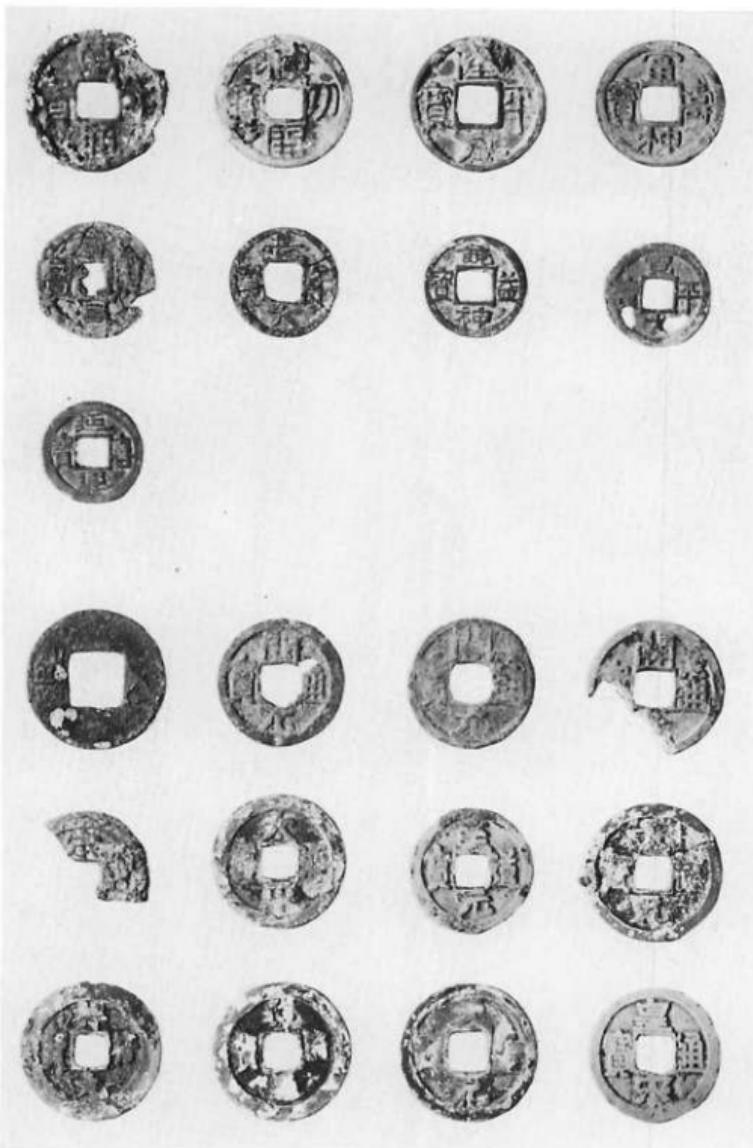


54-2

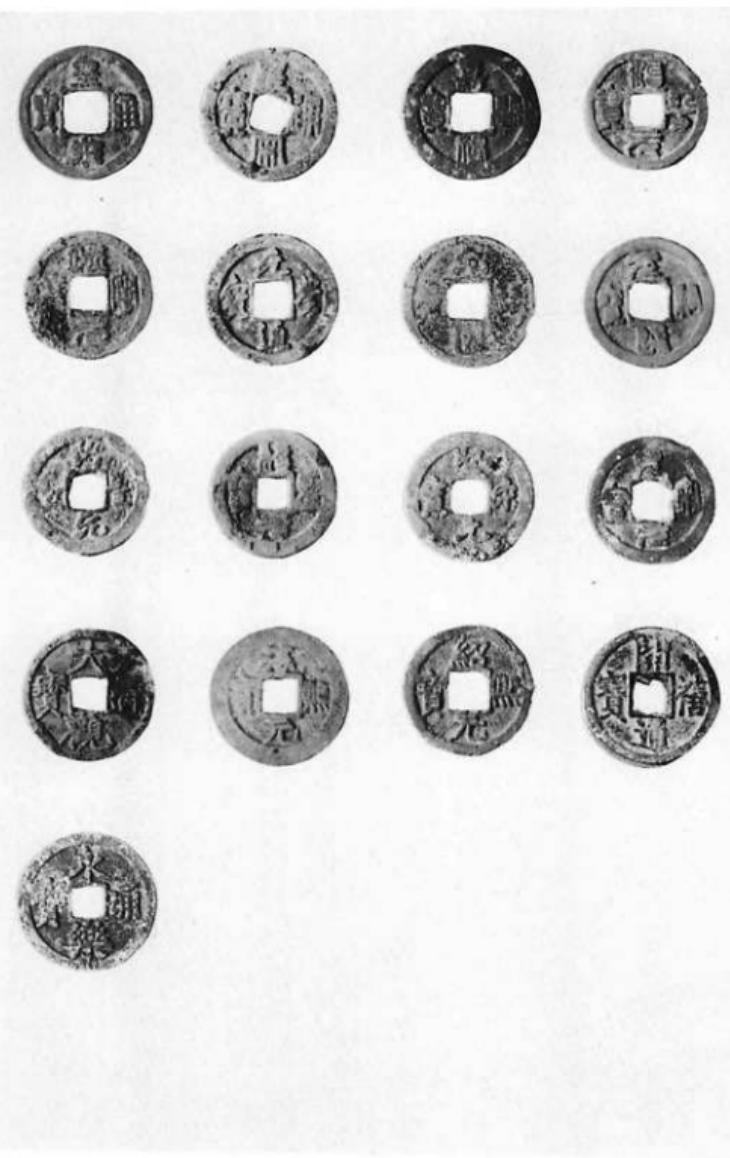
鉄型および粘土型



鋳型および鋳銅具



錢 貨



錢 貨

平安京跡研究調査報告 第6編
平安京左京八条三坊二町

発行日 昭和58年7月31日
編集 平安博物館考古学第3研究室
下條信行・川西宏幸
発行 財團法人 古代學協会
604 京都市中京区三条高倉上る
振替京都 8-250 委
TEL. 075 (222) 0888
制作 ビクトリース
604 京都市中京区油小路通上る
TEL. 075 (221) 1420

PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. VI

EXCAVATIONS AT THE SECOND INSULA, REGIO III,

DECUMANUS VIII IN THE PARS ORIENTALIS OF

THE CAPITAL HEIAN

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXXIII